九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

壱岐原の辻閨繰遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳 : 東亜考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書 I

宮本, 一夫
九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

辻田, 淳一郎
九州大学大学院人文科学研究院 : 准教授

齊藤, 希
奈良県立橿原考古学研究所

梶原, 慎司
高松市教育委員会

他

https://hdl.handle.net/2324/1924409

出版情報 : 2018-03-23. 九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
バージョン :
権利関係 :

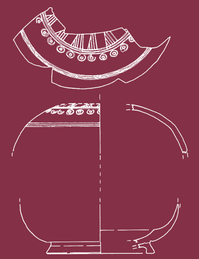
壱岐原の辻閏繰遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳　東亞考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅰ　宮本一夫編　二〇一八

壱岐原の辻閏繰遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳

ー東亞考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅰー

Harunotsuji Miyakuri Site, Myousenji Cemetery, Oninoiwaya Tumulus: The Report No. 1 of Excavations at Harunotsuji Site in Iki Island conducted by the Far Eastern Archeological Society

宮本一夫編　edited by MIYAMOTO Kazuo



2018. 3

九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

壱岐原の辻閏繰遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳

－東亜考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅰ－

Harunotsuji Miyakuri Site, Myousenji Cemetery, Oninoiwaya Tumulus: The Report No. 1 of Excavations at Harunotsuji Site in Iki Island conducted by the Far Eastern Archeological Society

宮本一夫編　edited by MIYAMOTO Kazuo

2018. 3
九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

序

東亜考古学会は戦前に遼東半島から旧満州さらに華北へと調査域を広げ、その調査地は貔子窩や赤峰紅山後などの先史時代から東京城や元上都など歴史時代の都城まで幅広いものであった。戦後、大陸での調査が不可能になった東亜考古学会は、その関心を大陸に接する対馬・壱岐・唐津と北海道に向け、前者が京都大学、後者が東京大学によってなされた。前者の対馬・壱岐・唐津での調査は、京都大学人文科学研究所の水野清一教授を中心とするグループによって実施された。対馬に関しては、文部省科学研究費補助金によって調査がなされ、1953年に『対馬－玄海における絶島、対馬の考古学的調査報告』（『東方考古学叢刊』乙種第６冊）という報告書が刊行された。一方、壱岐での調査は、1951年の原の辻遺跡に始まり、1952年のカラカミ遺跡、1953年の原の辻遺跡の調査から1961年まで５次に及ぶ継起的な原の辻遺跡の発掘調査が行われていたのにも係わらず、発掘成果の正式な報告書は刊行されていなかった。これらの調査に参加された九州大学の岡崎敬教授は、1982年に京都大学から壱岐・唐津の発掘資料を移管し、整理調査を計画されていた。唐津に関しては『末盧国』に一部が報告されたが、その他の壱岐の資料は、岡崎敬教授の退官に伴い未整理のまま九州大学考古学研究室に収蔵されていた。

九州大学考古学研究室では、東亜考古学会1952年調査のカラカミ遺跡資料の整理調査を始めるにあたって、2004年からカラカミ遺跡の再発掘調査を行い、2011年まで発掘調査を継続させた。その間、東亜考古学会のカラカミ遺跡資料を含め、４冊の報告書を通じてその成果を公開してきた。さらにカラカミ遺跡の再調査の終了に伴い、東亜考古学会による原の辻遺跡発掘資料の再整理に取りかかることとした。その中で、現在遺跡整備の為に進められている長崎県教育委員会や壱岐市教育委員会による原の辻遺跡調査において、調査されたことがない閏繰地区の墓地遺跡の整理調査をまず進めることとした。これは、原の辻遺跡第３次調査として、1954年の３月から４月にかけて東亜考古学会によって調査されたものである。また、原の辻遺跡資料の再整理調査を進める過程で、1953年の原の辻遺跡第２次調査と並行して実施された妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳の発掘資料が、本研究室に収蔵されていることが判明した。そこで、原の辻閏繰遺跡と妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳群の発掘調査報告をまとめて行うこととし、本報告書を『東亜考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅰ』として刊行することにした。なお、1982年の東亜考古学会発掘資料移管後も、妙泉寺古墳群や鬼の窟古墳などの調査実測図が、依然として京都大学人文科学研究所に収蔵されていた。これら資料を探し当て本研究室に移管していただいたのが、京都大学人文科学研究所の岡村秀典教授である。ここにその経緯を記し、感謝申し上げたい。

2017年12月30日

九州大学人文科学研究院考古学研究室
宮本一夫

例　　言

1　本書は、長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触に所在する原の辻閨繰遺跡、長崎県壱岐市芦辺町中野郷東触に所在する妙泉寺古墳群、ならびに長崎県壱岐市芦辺町国分本村触に所在する鬼の窟古墳の発掘調査報告書である。

2　本書の発掘調査は、1952年の東亜考古学会の壱岐島一般調査時に実施した妙泉寺古墳群ならびに鬼の窟古墳の発掘調査である。また、1954年に東亜考古学会によって実施された原の辻閨繰遺跡の発掘調査である。

3　本書における方位は磁北を示し、レベル高は海抜を表す。

4　遺構の略号は奈良国立文化財研究所の方式に従って、住居址：SB、土坑：SK のように表示し、通し番号を１から付した。

5　遺物にはすべてを一括して通し番号を１から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通して表示を統一した。

6　原則として遺構の実測図は縮尺1/20、出土石器の実測図は弥生土器、須恵器・土師器は縮尺1/4に統一した。遺構図・出土土器の実測図で、他の縮尺のものはそれぞれに縮尺を明記した。

7　注は各章ごとにまとめて章末に記載した。

8　遺構・遺物の実測と製図は宮本一夫・辻田淳一郎（九州大学大学院人文科学研究院）、柿添康平、戴玥、富宝財、齊藤希（人文科学府博士後期課程）、福永将大（地球社会統合科学府博士後期課程）、金子真夕、田中麻美、原梓、曹絲縈（人文科学府修士課程）、梶原慎司、末廣いづみ、萩原尚樹、久田真奈美、梶佐古幸謙、櫻木織部、舟木太郎、森大樹、吉田賢多郎、武下智美、中野瑞香、古田英彦、牧野朱莉、三浦萌、カルロス・ヴェレッキア、連景伊、平井貴大、岩田英信、新谷広大郎、田中利沙、長谷川桃子、藤尾徳馬、山下理呂（文学部）がおこなった（整理調査当時）。

9　遺構・人工遺物の写真撮影は宮本一夫・辻田淳一郎・齊藤希・福永将大が担当した。

10　本文は、宮本一夫・辻田淳一郎（九州大学大学院人文科学研究院）、齊藤希（橿原考古学研究所）、梶原慎司（高松市教育委員会）、福永将大（九州大学地球社会統合科学府）が分担執筆した。それぞれの執筆分担は目次と各章の初めに記し、必要に応じて節末に示した。

11　編集は宮本一夫がおこなった。

目　　次

第１章　原の辻閏繰遺跡の発掘調査……宮本一夫・梶原慎司・福永将大……　1
　第１節　閏繰遺跡の位置と環境……　1
　第２節　調査の目的と経過……　3
　第３節　遺構・層位と包含層出土遺物……　7
　第４節　出土甕棺……　12
　第５節　閏繰遺跡の調査の成果と課題……　29

第２章　妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳の発掘調査……辻田淳一郎・齊藤希・福永将大……　33
　第１節　東亜考古学会による壱岐島古墳調査の概要と本報告について……　33
　第２節　妙泉寺古墳群……　39
　第３節　鬼の窟古墳……　81
　第４節　帰属不明の遺物……　106
　第５節　まとめ……　112

第３章　東亜考古学会1953・1954年調査の意義……　宮本一夫……129
　第１節　東亜考古学会の原の辻遺跡発掘調査……　129
　第２節　原の辻閏繰遺跡の調査成果と意義……　131
　第３節　妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳の発掘調査の成果と意義……　132
　第４節　東亜考古学会の壱岐島調査の意義……　135

図版……　139

図　版　目　次

図版１	１	閨繰遺跡全景（南から）
	２	４号甕棺墓
	３	３号甕棺墓
	４	９～11号甕棺墓
図版２	１	９～13号甕棺墓
	２	６号石棺墓
図版３	１	６号石棺墓
	２	５号石棺墓
図版４	１	５号石棺墓と８号甕棺墓
	２	４号石棺墓と６号甕棺墓
図版５	１	４号・５号石棺墓
	２	11号甕棺墓
図版６	１	２号甕棺墓
	２	16号甕棺墓
図版７	１	13号甕棺墓
	２	４号甕棺墓
図版８	１	７号甕棺墓
	２	閨繰遺跡遠景（南西から）
図版９		出土甕棺①
図版10		出土甕棺②
図版11		出土甕棺③
図版12	１	妙泉寺古墳群遠景（東から・2014年）
	２	妙泉寺古墳群近景（東から・2014年）
図版13	１	妙泉寺１号墳（西から・2014年）
	２	妙泉寺７号墳（南から・2014年）
図版14	１	妙泉寺１号墳墓道（西から・1953年）
	２	妙泉寺１号墳墓道・羨道（西から・1953年）
図版15	１	妙泉寺１号墳羨道付近（東から・1953年）
	２	妙泉寺１号墳玄室奥壁付近（西から・1953年）
図版16	１	妙泉寺７号墳羨道付近遺物出土状況（南から・1953年）
	２	妙泉寺７号墳前室東壁・南寄り（上層）での遺物出土状況（西から・1953年）
図版17	１	妙泉寺７号墳前室閉塞部付近・復元前（南から・1953年）
	２	妙泉寺７号墳前室閉塞部付近・復元後（南から・1953年8月2日）
図版18	１	妙泉寺７号墳玄室床面・仕切石（南から・1953年）
	２	妙泉寺７号墳奥壁・床面付近（南から・1953年）
図版19	１	妙泉寺７号墳玄室から前室・羨道方向を見る（北から・1953年）
	２	妙泉寺７号墳前室床面（北から・2014年）

図版20　1　鬼の窟古墳（南から・2006年）
　　2　鬼の窟古墳羨道・閉塞石付近（南から・2004年）
図版21　1　鬼の窟古墳羨道・閉塞部付近（南から・1953年）
　　2　鬼の窟古墳羨道北西付近遺物出土状況（東から・1953年）
図版22　1　鬼の窟古墳羨道床面の状況（南から・1953年）
　　2　鬼の窟古墳中室床面・玄室方向（南から・1953年）
図版23　1　鬼の窟古墳玄室奥壁上部（西から・1953年）
　　2　鬼の窟古墳玄室奥壁付近（南から・2015年）
図版24　妙泉寺１号墳出土須恵器①
図版25　妙泉寺１号墳出土須恵器②
図版26　妙泉寺１号墳出土須恵器③
図版27　妙泉寺１号墳出土遺物
図版28　妙泉寺１号墳出土ガラス小玉
図版29　妙泉寺７号墳出土須恵器
図版30　妙泉寺７号墳出土遺物
図版31　妙泉寺７号墳出土鉄器①
図版32　妙泉寺７号墳出土鉄器②
図版33　妙泉寺７号墳出土鉄器③
図版34　妙泉寺７号墳出土鉄器④
図版35　妙泉寺７号墳出土鉄器⑤
図版36　妙泉寺７号墳出土鉄器⑥
図版37　鬼の窟古墳出土須恵器①
図版38　鬼の窟古墳出土須恵器②
図版39　鬼の窟古墳出土須恵器③
図版40　鬼の窟古墳出土須恵器④
図版41　鬼の窟古墳出土遺物
図版42　鬼の窟古墳出土鉄器①
図版43　鬼の窟古墳出土鉄器②
図版44　鬼の窟古墳出土鉄器③
図版45　鬼の窟古墳出土鉄器④
図版46　不明土器類①
図版47　不明土器類②
図版48　不明鉄器①
図版49　不明鉄器②
図版50　不明鉄器③

挿　図　目　次

図１　壱岐島の位置関係（壱岐市教育委員会2008、p.1より転載）…… 1
図２　閏繰遺跡の周辺地形図　S=1/50000（長崎県教育委員会2002、p.2より転載）…… 1
図３　壱岐島　弥生時代主要遺跡分布図…… 2
図４　調査日誌による閏繰遺跡の位置…… 3
図５　甕棺墓と箱式石棺墓の配置、縮尺1/150 …… 8
図６　閏繰遺跡の層位図…… 8
図７　閏繰遺跡包含層出土遺物、縮尺1/4 …… 11
図８　１号甕棺（14）、縮尺1/6と、２号甕棺（15・16）、縮尺1/4…… 13
図９　３号甕棺、縮尺1/4 …… 15
図10　４号甕棺、縮尺1/4 …… 16
図11　５号甕棺（21・22）と６号甕棺（23）、縮尺1/4…… 17
図12　７号甕棺、縮尺1/4 …… 18
図13　８号甕棺、縮尺1/4 …… 19
図14　９号甕棺、縮尺1/4 …… 20
図15　10号甕棺、縮尺1/4 …… 21
図16　11号甕棺（32・33）と12号甕棺、縮尺1/4 …… 22
図17　13号甕棺、縮尺1/4 …… 24
図18　15号甕棺（37）と16号甕棺（38・39）、縮尺1/4…… 25
図19　番号不明甕棺１、縮尺1/4 …… 26
図20　番号不明甕棺２、縮尺1/4 …… 27
図21　閏繰遺跡の発掘調査地点…… 29
図22　閏繰遺跡の墓葬の分布…… 30
図23　東亜考古学会調査区の墓地…… 31
図24　長崎県教育委員会調査区の墓地…… 31
図25　壱岐島における主要古墳分布図（壱岐市教育委員会2006より）…… 39
図26　妙泉寺古墳群と周辺の地形（長崎県教育委員会2000）…… 41
図27　妙泉寺古墳群の分布図（長崎県教育委員会2000）…… 43
図28-1　7/26：妙泉寺古墳群分布図…… 43
図28-2　7/31：１号墳墳丘トレンチ・石室の位置関係模式図…… 43
図28-3　7/31：１号墳出土塗金鉄製馬具…… 43
図28-4　8/1：１号墳石室内遺物出土状況略図 …… 43
図28-5　8/2：１号墳羨道部模式図 …… 43
図29　１号墳・墳丘測量図（東亜考古学会調査：縮尺1/500）…… 48
図30　１号墳・墳丘測量図（長崎県教育委員会調査：縮尺1/300）…… 48
図31　１号墳・墳丘トレンチ須恵器出土状況図（縮尺1/20）…… 49
図32　１号墳・石室実測図（長崎県教育委員会調査：縮尺1/100）…… 50
図33　１号墳・石室実測図（東亜考古学会調査：縮尺1/40）…… 51・52

図34　１号墳・出土遺物実測図①（東亜考古学会調査：縮尺1/4）…… 53
図35　１号墳・出土遺物実測図②（東亜考古学会調査：縮尺1/4・1/1）…… 54
図36　１号墳・出土遺物実測図③（長崎県教育委員会調査：縮尺1/6）…… 56
図37　１号墳・出土遺物実測図④（長崎県教育委員会調査：縮尺1/6）…… 56
図38-1　日誌・石室・遺物出土状況模式図（7/27）…… 59
図38-2　日誌・石室・遺物出土状況模式図（7/29）…… 59
図38-3　日誌・石室・遺物出土状況模式図（7/29）…… 59
図39　７号墳・墳丘測量図（東亜考古学会調査：縮尺1/400）…… 62
図40　７号墳・墳丘測量図（長崎県教育委員会調査：縮尺1/300）…… 62
図41　７号墳・石室実測図（東亜考古学会調査：縮尺1/60）…… 65・66
図42　羨道部前面・須恵器出土状況（東亜考古学会調査：縮尺1/20）…… 67
図43　前室遺物出土状況（東亜考古学会調査：縮尺1/20）…… 67
図44　７号墳・石室実測図（長崎県教育委員会調査：縮尺1/100）…… 69
図45　７号墳・出土遺物実測図①（縮尺1/4）…… 72
図46　７号墳・出土遺物実測図②（縮尺1/4）…… 73
図47　７号墳・出土遺物実測図③（縮尺1/2）…… 74
図48　７号墳・出土遺物実測図④（縮尺1/2）…… 75
図49　７号墳・出土遺物実測図⑤（縮尺1/2）…… 76
図50　７号墳・出土遺物実測図⑥（縮尺1/2）…… 77
図51　７号墳・出土遺物実測図⑦（縮尺1/2）…… 78
図52　７号墳・出土遺物実測図⑧（縮尺1/2）…… 79
図53　７号墳・出土遺物実測図⑨（縮尺1/2）…… 80
図54　７号墳・出土遺物実測図⑩（縮尺1/3）…… 80
図55　壱岐古墳群分布図（藤田1998）…… 81
図56　鬼の窟古墳周辺地形図（町報 Fig.6）…… 82
図57-1　日誌・石室の略称（8/6）…… 84
図57-2　日誌・第一・第二前室の閉塞石と梱石（8/7）…… 84
図57-3　日誌・須恵器出土状況（8/7）…… 84
図57-4　日誌・鉄鏃模式図（8/9）…… 84
図57-5　日誌・墳丘断面略測図（8/10）…… 84
図58　墳丘断面図（東亜考古学会調査：縮尺1/500）…… 88
図59　墳丘測量図（芦屋町教育委員会調査：縮尺1/500）県報 Fig.7…… 88
図60　石室実測図（東亜考古学会調査：縮尺1/80）…… 89・90
図61　石室実測図（長崎県教育委員会調査：縮尺1/200）…… 92
図62　羨道部遺物出土状況図（東亜考古学会調査：縮尺1/10）…… 93
図63　出土遺物実測図①（縮尺1/4）…… 96
図64　出土遺物実測図②（縮尺1/4）…… 97
図65　出土遺物実測図③（縮尺1/4、1/2）…… 98
図66　出土遺物実測図④（縮尺1/2）…… 99
図67　出土遺物実測図⑤（縮尺1/2）…… 100

図68　出土遺物実測図⑥（縮尺1/2）…… 101
図69　出土遺物実測図⑦（縮尺1/2）…… 102
図70　出土遺物実測図⑧（縮尺1/2）…… 105
図71　出土遺物実測図⑨（縮尺1/4）…… 105
図72　不明土器類（縮尺1/4）…… 107
図73　不明鉄器類（縮尺1/2）…… 109
図74　不明鉄器類（縮尺1/2）…… 110
図75　不明鉄器類（縮尺1/2）…… 111
図76　東亜考古学会による原の辻遺跡の調査地点…… 130
図77　原の辻遺跡概要図（宮崎2008を改変）…… 131
図78　鬼の窟古墳出土新羅土器・新羅系土器（縮尺1/4）…… 133

表　目　次

表１　閏繰遺跡出土土器観察表…… 28
表２　妙泉寺１号墳出土土器類観察表…… 121
表３　妙泉寺１号墳出土ガラス小玉観察表…… 122
表４　妙泉寺７号墳出土土器類観察表…… 123
表５　妙泉寺７号墳出土鉄器類観察表…… 124
表６　鬼の窟古墳出土土器類観察表…… 125
表７　鬼の窟古墳出土鉄器類観察表…… 126
表８　不明土器類観察表…… 127
表９　不明鉄器類観察表…… 128
表10　東亜考古学会の壱岐島調査…… 129
表11　原の辻遺跡における墓域の消長表（長崎県教育委員会2007を改変）…… 132
表12　壱岐所在古墳の変遷（小田・下原2006を改変）…… 134

第１章　原の辻閏繰遺跡の発掘調査

宮本一夫・梶原慎司・福永将大

第１節　閏繰遺跡の位置と環境

１．地理的環境

閏繰遺跡は壱岐市芦辺町深江鶴亀触ミヤクリに所在する。

壱岐島は、対馬海峡と玄界灘の間に位置しており、先史時代以来、大陸・半島と日本列島を往来する際の重要な通路・中継地としての役割を果たしてきた（図１）。島の規模は、東西約14.8km、南北約17.2km、面積138.12㎢で、楕円形を呈した本島と大小29の属島によって構成されている。

壱岐島の地形は、大半が玄武岩台地で比較的なだらかな地形である。全体的に標高100ｍを超える山は少なく、壱岐の最高峰は標高212.9

図１　壱岐島の位置関係
（壱岐市教育委員会2008、p.1より転載）

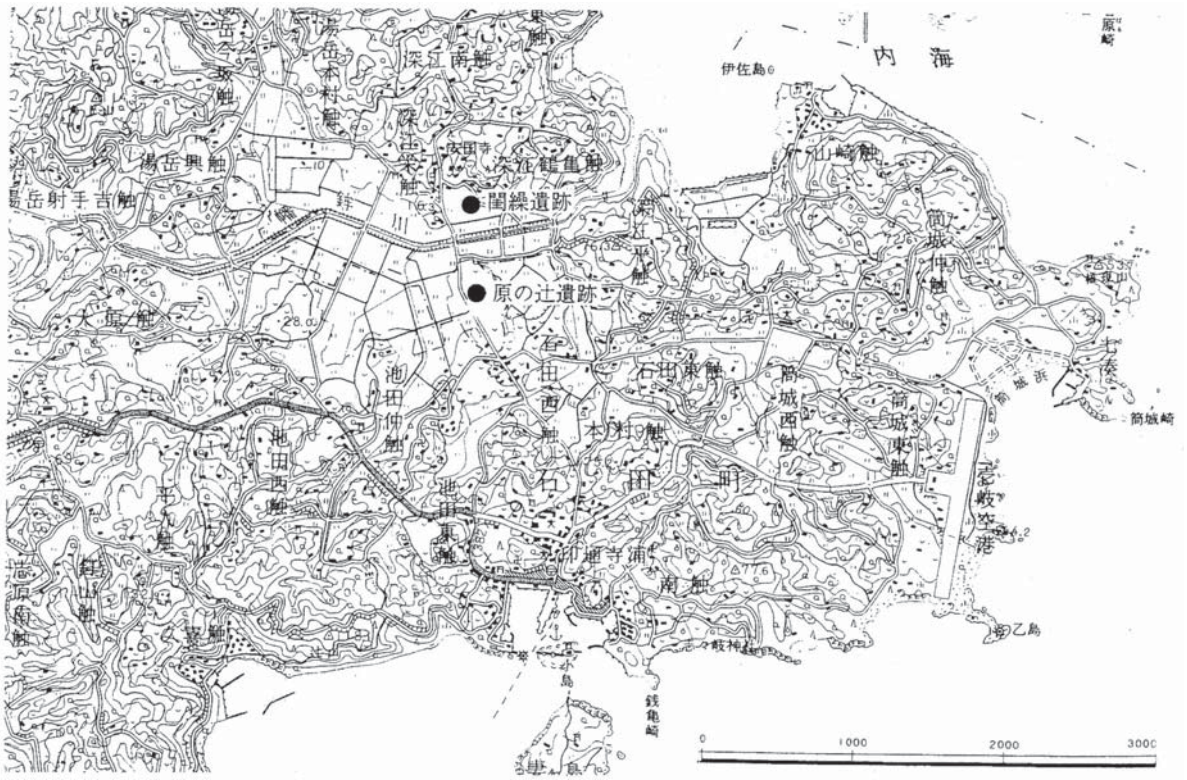


図２　閏繰遺跡の周辺地形図　S=1/50000
（長崎県教育委員会2002、p.2より転載）

mの岳ノ辻で、その頂上からは島のほぼ全域を見渡すことができる。海岸線は、西部にリアス式の海岸が発達し、東部はなだらかで海岸砂丘が見られる。

島の西から東へ向かって、島の最長河川である全長約９kmの幡鉾川が流れており、その下口付近には深江田原と呼ばれる沖積平野（約200ha）を形成し内海湾へと流れ込む。そのほかに谷江川と刈田院川という２つの河川があるが、それぞれの河口付近には海岸線が大きく入り込んだ湾が形成され、天然の良港となっている。

閨繰遺跡は、先に述べた深江田原という沖積平野北側にせり出している丘陵の南側先端部に位置する（図２）。遺跡の北側は丘陵が広がっており、北西の奥まったところには中世の安国寺がある。一方、遺跡の南側は沖積平野が広がり、幡鉾川が東西に流れている。幡鉾川を越えて南に約330mのところには原の辻遺跡が所在している。

２．弥生時代を中心とした歴史的環境

弥生時代の壱岐島は、有名な『魏志倭人伝』に「一支国」として登場する。現在約60ヶ所の弥生時代の遺跡が確認されているが、その中で中心をなす大規模拠点集落が原の辻遺跡である。遺構の規模や遺物の質・量において他を凌いでおり、『魏志倭人伝』に記載されている「一支国」の王都に特定されている。

原の辻遺跡は壱岐最大の穀倉地帯である「深江田原」に位置し、遺跡の規模は100haで、多重環濠をめぐらしており、環濠内北側からは住居群、中心部の高台からは掘立柱建物遺構などが検出されている。他にも、墓域、水田跡、道路状遺構、船着場など様々な遺構が検出されており、土器や石器はもちろん、多くの金属器、木製品、骨角器が出土している。土器は弥生時代前期後葉のものから、中期、後期のものが大量に出土しているほか、瓦質土器や無文土器など朝鮮半島系の土器や、北部九州系・山陰系・近畿系の土器も出土しており、大陸、半島、日本列島との盛んな交流が想定される。先に述べた船着場に近接する遺跡西北部低地（不條地区）で、朝鮮半島系無文土器や擬無文土器、五銖銭、三翼鏃など中国系の遺物が集中して出土することは、そうした交流のあり様を物語っている（長崎県教育委員会2005）。

1：閨繰遺跡　2：原の辻遺跡　3：車出遺跡
4：カラカミ遺跡　5：天ヶ原セジョウ遺跡

図３　壱岐島　弥生時代主要遺跡分布図

原の辻遺跡から、幡鉾川を越えて北に約330mのところに閨繰遺跡が所在する。甕棺墓、箱式石棺墓、土壙墓が多数検出されており、原の辻遺跡の石田大原地区とほぼ同時期に営まれた集団墓地と考えられる。しかし、原の辻遺跡石田大原地区に比べて際立った副葬品が見られないことは、両遺跡の関係を考える上で興味深い。

壱岐の弥生時代遺跡では、原の辻遺跡の他に、カラカミ遺跡と車出遺跡が有名である。

カラカミ遺跡は、複雑な起伏をもつ標高80mほどの玄武岩丘陵地帯に位置する環濠集落である。銛、ヤス、アワビオコシなどの漁撈関係遺物が多数出土しており、漁業的性格が窺われる遺跡である。沖積低地に位置する原の辻遺跡の農耕的性格とは古くから対比的に論じられてきた。近年の調査により、

鉄生産の痕跡が確認されており、鉄を介した半島、北部九州との長距離交易が行われていた可能性が指摘されている（宮本編2008・2009・2011・2013）。

車出遺跡は、幡鉾川上流に位置する弥生時代中期後半の遺跡である。その周辺には大谷遺跡、戸田遺跡、田上遺跡、鉢形遺跡など同時期の遺跡が集中しており、総称して車出遺跡群と呼ばれる。幡鉾川の５kmほど下流には原の辻遺跡が位置している。朝鮮半島系土器や山陰系の搬入土器、火を受けた方格規矩鏡、丹塗土器、卜骨など祭祀遺物も出土している。

壱岐島の最北端に位置する天ヶ原セジョウ神遺跡からは、中広形銅矛が３本並んだ状態で出土している。半島への公開の安全を祈念して埋納されたのであろうか（長崎県教育委員会1998）。

これら弥生時代の遺跡は、古墳時代に入るとその姿を消してしまう。繁栄を誇った一支国の王都・原の辻遺跡も４世紀中頃、古墳時代前期前葉には解体消滅する。その要因として、313年の楽浪郡、314年の帯方郡の相次ぐ滅亡という朝鮮半島における政治情勢、また、当該期の列島内における大和政権の動向が深く関わっていることが推測される。

（福永将大）

第２節　調査の目的と経過

１．東亞考古学会の調査

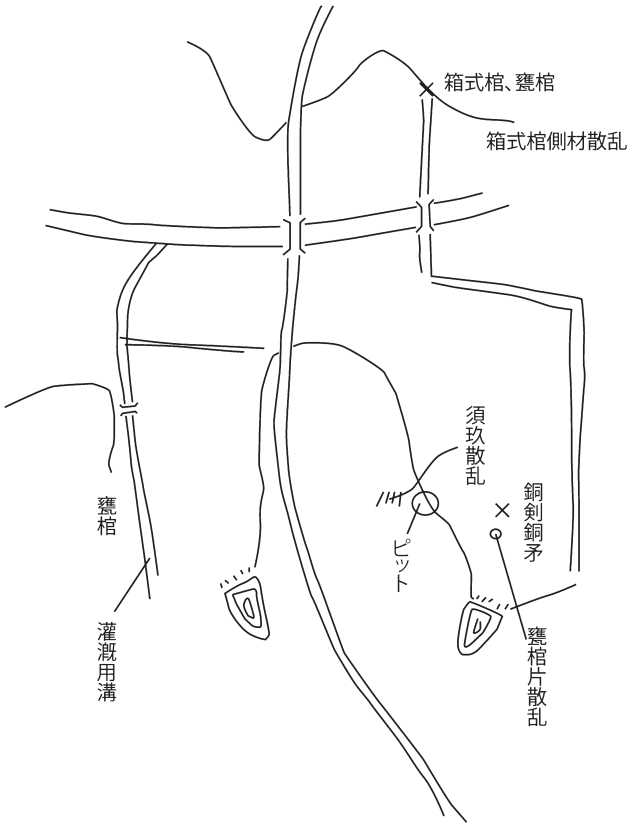


図４　調査日誌による閨繰遺跡の位置

原の辻閨繰遺跡の発掘調査は、1954年３月に土木工事に際して、原の辻遺跡から甕棺群とともに銅剣２点、銅矛１点が発見されたという知らせが京都大学の西谷（川端）眞治に届き、急遽、西谷が壱岐へ赴くことになって始まった。農地区画整理事業と水利事業による工事地区は、Ⅰ区から５区に分かれており、銅剣・銅矛の発見地点は石田地区のⅢ区に当たっていた（図４）。石田地区は箱式石棺墓や甕棺墓が広がる地域であり、その中の一角から銅剣・銅矛が出土したと想定される。また、Ⅳ区の閨繰地区では箱式石棺10基と甕棺５基が出土していた（図版８－２）。西谷は、工事を同年８月まで延期するように要請した後、３月24日～26日に急拠ＣⅠ～ＣⅢの石棺墓３基とP1～P5の５基の甕棺を発掘し、ひとまず緊急の調査を終え、帰京した。その後、４月に調査体制を整え、西谷眞治と金関恕、Kidderの３名で同年４月に再度壱岐に赴き、４月11日から４月20日まで閨繰遺跡の本調査を実施している。以下に、当時の発掘調査日誌（抄）を掲載する。

第１回調査日誌抄（西谷（川端）眞治）

1954（昭和29）年

３月21日（日）晴

原の辻遺跡より工事に伴い銅剣２、銅矛１が甕棺群とともに発見されたことを知り、西谷眞治が現地調査に赴くことになる。

大阪発「かもめ」に乗車、夕刻博多着。博多にて宿泊。夜、森貞次郎氏来訪され、現地の情報を提供される。

３月22日（月）晴一時曇

博多から壱岐勝本へ。長崎県庁による田河町・石田村など農地区画整理と水利事業に伴う工事現場を視察。工事地区はⅠ～Ⅴの５区に分かれ、原の辻遺跡関係は、Ⅰ、Ⅲ、Ⅴ区である（図４）。

Ⅰ区（原の辻丘陵の西北裾都の交点より西に延びる道路工事）からは壺１個が出土。

Ⅲ区（石田村西触、字高原）では、新道路の北側水田面より僅かに高いところから、合わせ口甕棺約10、南側に１を発見、同地区内に銅剣２、銅矛１が出土した。銅剣・銅矛と甕棺は直接関係なく、青銅器は単独出土らしい。

Ⅳ区（田河町深江鶴亀触閏繰895・896）では、河川の北岸の県道東側の地点で、丘陵の裾を削った際に、東西20mの範囲で箱式石棺10基、甕棺５基が出土。

３月23日（火）晴

午前、壱岐支庁の農地開拓課長に面会し、耕地整理工事を８月まで延期してもらうよう要請。明日、現場にて協議することを約する。

午後、公民館保管の甕棺１、高坏１を復元実測、写真撮影。石田小学校保管の銅剣２、銅矛１を借用。３本ともに甚だしく破損。銅剣、銅矛ともに細形である。

３月24日（水）晴

閏繰地区の箱式石棺の発掘を行う。ＣⅠ・ＣⅡの箱式石棺の全貌を出す。遺物なし。ＣⅠの南に破損した甕底部（P1）が残されていたが、これと石棺との間、および石棺の北側に合口甕棺（P2、P3）を発見。

３月25日（木）晴

閏繰地区のＣⅠ・ＣⅡ箱式石棺の内部清掃。CⅢ箱式石棺を発掘。さらにその南側から壺棺（合わせ口）を発見。これを P5とする。

３月26日（金）晴

引き続きCⅢ箱式石棺の実測後、内部の清掃。P5甕棺を実測後、取り上げる。一方、P4甕棺は一部を発掘したが、土取り場のえぐりが相当深くなり、このままでは崩壊の恐れがあるところから、中止する。

３月27日（土）晴

郷ノ浦へ行き、山口麻太郎氏に現地の監視、支庁との打ち合わせを依頼。勝本より乗船し、博多着。森貞次郎氏宅により、調査経過を報告。夕刻、博多発の汽車に乗車。

第２回閏繰箱式石棺・甕棺墓群調査日誌（西谷（川端）眞治・金関恕）

1954（昭和29）年

４月９日（金）晴

８時30分、京都発特急かもめに金関と Kidder が乗車、大阪から西谷が乗り込む。19時10分に博多

着。博多泊。
４月10日（土）晴
博多から乗船し、芦辺着。バスにて深江安国寺に至る。昼食後、発掘予定地を視察。発掘予定地は前回の調査終了時のままで、道路工事着工は１週間後の予定。前回発掘した箱式石棺３基は側石が倒れ、採集困難のためそのままにしていた甕棺 P4は、底部が盗掘されていた。また、第Ⅲ工区にて銅剣・銅矛出土地点付近で銅矛の破片１点を採集する。出土銅矛の一部と思われる。鬼ノ岩屋を見学する。19時帰宿。
４月11日（日）晴
発掘参加者：西谷眞治・金関恕・Kidder
人夫４名で発掘を開始する。前回土取りのために発見された箱式石棺・甕棺墓に隣接する空き地の一部の表土を剥がしたのみで作業を中止する。
４月12日（月）雨のち曇り小雨
雨天のため作業中止。
西谷以下３名はバスにて郷ノ浦へ行き、図書館の山口麻太郎氏を訪問。さらに壱岐高校校長鴇田忠正氏を訪問。
４月13日（火）小雨のち晴
発掘参加者：西谷眞治・金関恕・Kidder
雨が小降りになったので、人夫５名で一昨日に始めた空き地部分の発掘を続行する。前回の箱式石棺 CⅢに続き、その延長線上で箱式石棺 CⅣを発見。そして CⅣに隣接して箱式石棺 CⅤを発見。また、前回の調査で一部発掘した P4甕棺墓をすべて発掘する。
４月14日（水）晴
発掘参加者：西谷眞治・金関恕・Kidder
人夫５名で発掘。箱式石棺以外に、甕棺墓 P5～ P10の５基の甕棺墓を新たに発見し、調査する。
４月15日（木）曇のち晴
発掘参加者：西谷眞治・金関恕・Kidder
人夫４名で発掘区を拡張し、表土を剥がす。甕棺墓 P4・P6～ P8、箱式石棺 CⅣの実測を行い、甕棺墓 P6・P8の写真撮影を行う。
４月16日（金）晴
発掘参加者：西谷眞治・金関恕
人夫６名を使い、拡張区の発掘を進める。ここでは、箱式石棺 CⅥ、甕棺墓 P11～ P16の６基の甕棺墓を発見する。箱式石棺 CⅤ、甕棺墓 P8の実測、箱式石棺 CⅣ・CⅤ・甕棺墓 P8の写真撮影を行う。
４月17日（土）曇のち雨
発掘参加者：西谷眞治・金関恕
拡張区の掘り下げを人夫５名で続行する。甕棺墓 P13の実測。
午後、雨のため作業中止。
４月18日（日）曇のち晴
発掘参加者：西谷眞治・金関恕
拡張区の掘り下げを人夫６名で進め、地山に達する。甕棺墓 P10・P12の実測、箱式石棺 CⅣ・甕棺墓 P10・P12・P13の写真撮影を行う。
４月19日（月）曇

発掘参加者：西谷眞治

人夫１名を使い、発掘終了に伴い補足調査を行う。この過程で、箱式石棺ＣⅣ・ＣⅤから各１個ずつ碧玉製管玉が出土する。発掘区および箱式石棺・甕棺墓の分布図を平板にて縮尺50分の１で測量する。箱式石棺ＣⅣ・ＣⅤの断面実測、甕棺墓 P11・P14～ P16の実測を行う。また、箱式石棺ＣⅣおよび甕棺墓 P10・P11・P13の写真撮影、ならびに箱式石棺甕棺墓の全景写真を撮る。

４月20日（火）晴

発掘参加者：西谷眞治・金関恕

人夫２名を使い、箱式石棺ＣⅥの館内清掃を行うものの、遺物なし。甕棺墓 P8の上甕と下甕との合わせ口より碧玉製管玉２個が出土。箱式石棺ＣⅥ、甕棺墓 P6の実測終了。甕棺墓や甕棺墓 P8の管玉出土状況、ならびに遺跡の遠景などの写真撮影。また、甕棺はすべて包装し、安国寺物置に収納する。

西谷はバスにて武生水に行き、山口氏や支庁山下課長に調査終了の挨拶に赴く。夕方現場に戻り、人夫全員と記念撮影を撮る。

本日を以て、閏繰遺跡第２回発掘調査を終了する。

４月21日（水）晴

西谷と金関は９：00印通寺発唐津行きに乗船。西唐津到着後、東唐津から汽車で博多へ赴く。14：09博多着。博多泊。

４月22日（木）小雨、曇のち晴れ

10：00博多発かもめで京都へ。20：40京都到着。

２．整理調査の経過

東亜考古学会調査資料は、発掘終了後に京都大学に輸送され収蔵されていた。その後、1982年に故岡崎敬教授の依頼で、東亜考古学会が発掘した原の辻遺跡を含めたすべての壱岐関係の発掘資料が、九州大学考古学研究室に移管された。九州大学考古学研究室では、そのうち、まず壱岐カラカミ遺跡の調査資料の再整理と再調査を2004年から開始し、順次発掘報告書を刊行してきた（宮本編2008・2009・2011）。2011年には、カラカミ遺跡白川貝塚地区の再発掘調査を壱岐市教育委員会と共同して実施し、その整理調査を行い、カラカミ遺跡の最終報告書を刊行した（宮本編2013）。そこで、次に東亜考古学会が調査した原の辻遺跡の整理調査に移ることとした。まず2013年度には、原の辻閏繰遺跡の甕棺資料を再整理することとし、一部は洗浄から始め、接合や復元などを行い、実測・製図などの基礎作業を2013年度中に終えていた。その後、1953（昭和28）年の第２次原の辻調査に際して行われた壱岐島での一般調査において、妙泉寺古墳群や鬼の窟古墳の発掘が行われていたことが判明するとともに、それらの資料も九州大学考古学研究室に収蔵されていることを発見した。これらの資料も合わせて報告することとし、本発掘調査報告書の刊行を行ったところである。

2013年度の閏繰遺跡整理調査の参加者は以下の通りである（所属は当時）。なお、閏繰遺跡の遺物の写真撮影は宮本一夫が行った。また、閏繰遺跡の遺物はすべて2015年に壱岐市一支国博物館へ移管した。

【2013年度】柿添康平、金子真夕、田中麻美（人文科学府修士課程）、梶原慎司、末廣いづみ、萩原尚樹、久田真奈美、梶佐古幸謙、櫻木織部、舟木太郎、森大樹、吉田賢多郎、武下智美、中野瑞香、古田英彦、牧野朱莉、三浦萌、アリーン・ドレヘル、カルロス・ヴェレッキア（文学部）

（宮本一夫）

第３節　遺構・層位と包含層出土遺物

１．遺構と層位

丘陵南側斜面に、山裾に沿うようにほぼ一列に箱式石棺墓が５基配置されている（図５）。また、東端の箱式石棺ＣⅡの南側には隣接して箱式石棺ＣＩが配置されている。副葬小壺や副葬品がほとんどないところから、これら石棺墓の年代は不明である。しかし、周辺の小児棺の甕の年代は、弥生時代前期末から弥生時代前半に限られており、箱式石棺の年代もこの時期のものと考えられる。

閨繰遺跡は、北西から南東へ緩傾斜していく斜面部に位置していることが、発掘時の層位図によって判明している（図６）。厚さ約50～100cm の斜面表土の下に、厚さ約30～100cm の黒土土層が存在し、その下部が地山である。黒土土層は斜面の落ちる南東部に厚く堆積しているが、この部分に石棺墓が斜面に沿うように列状に配置されている（図５）。甕棺墓は石棺墓の列の南東側斜面に配置されているが、大きく２群に分かれる。P1～ P7の南東部側とその斜面上部である P8～ P16の北西部側である。それぞれの甕棺墓群内で弥生前期末から中期前半にかけて継起的に甕棺墓が造営されていったものと考えられる。石棺墓と甕棺墓は、黒土土層から地山にかけて掘り込まれていたと日誌からは読み取れる。なお、黒土土層が遺物包含層に相当する。

２．石棺墓

石棺墓は、北西から南東方向の斜面部に列状に配置されている（図５、図版１－１）。残念ながら、発掘調査時に記録された石棺墓の個々の図面は現存しておらず、石棺墓の正確な情況は不明である。

１号石棺墓

調査区の東端に位置し、他の石棺墓と同じ北西－南東を長軸にする。棺底には特別な施設はなく、僅かに粘土が地山上に置かれているのみである。側石は地山を僅かに掘り込んで立てている。出土遺物なし。

２号石棺墓

１号石棺墓の北東に位置し、他の石棺墓と同じ北西－南東を長軸にする。１号石棺墓より底面が高い。棺底には特別な施設はなく、僅かに粘土が地山上に置かれているのみである。側石は地山を僅かに掘り込んで立てている。出土遺物なし。

３号石棺墓（図版１－１）

２号石棺墓の北に位置し、他の石棺墓と同じ北西－南東を長軸にする。２号石棺墓より底面が僅かに高い。蓋石の大部分が棺内に落ち込んでいる。出土遺物なし。

4号石棺墓（図版４－２、５－１）

３号石棺墓の北に位置し、他の石棺墓と同じ北西－南東を長軸にする。側石と２枚の蓋石の内１枚は塊石で、他は板状の玄武岩である。玄武岩は破砕して棺内に落ち込んでいる。碧玉製管玉１点が東側壁寄りから出土した。管玉は現在所在不明である。

５号石棺墓（図版３－２、４－１、５－１）

４号石棺墓の北西に位置し、他の石棺墓と同じ北西－南東を長軸にする。玄武岩の板石が１枚傾斜している。碧玉製管玉１点が東側壁寄りから出土した。管玉は現在所在不明である。

６号石棺墓（図版２-２、３-１）

５号石棺墓の北に位置し、他の石棺墓と同じ北西－南東を長軸にする。側石と蓋石は全て塊石を使用している。蓋石の高さは４号石棺墓・５号石棺墓と同じである。６号石棺墓の南に大形の塊石２個が東西方向に発見された。石棺墓の蓋石と思われる。出土遺物なし。

３．甕棺墓

丘陵斜面部に沿って南東側と北東側に大きく２群の甕棺墓が集塊して配置されている（図５、図版２-１）。P1～ P7の南東群と P8～ P16の北西群である。甕棺墓も発掘時の検出状況図などが残っておらず、出土情況は明確ではない。

１号甕棺墓

調査区の南端、１号石棺墓の南に位置する。破損した状態で発見されたため単棺か合口甕棺かは不明である。時期は弥生時代前期末である。

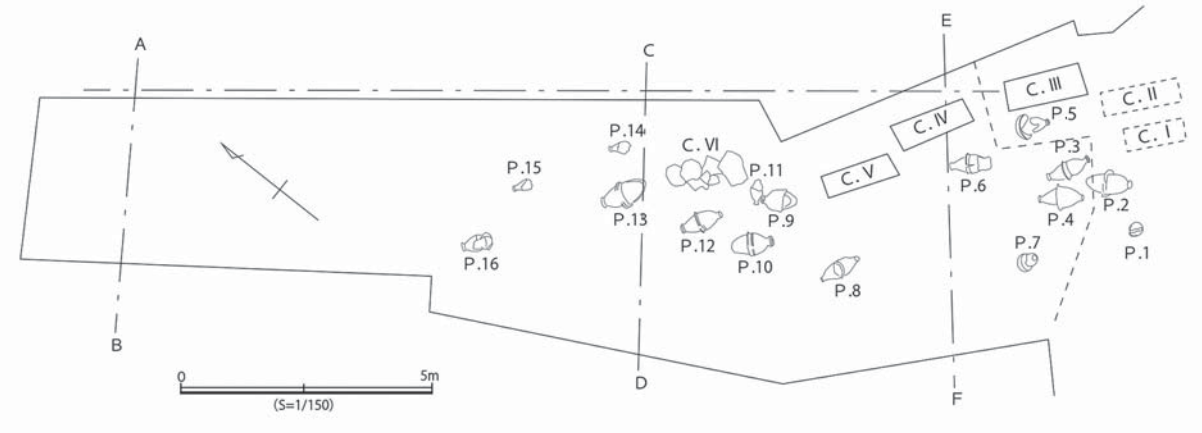


図５　甕棺墓と箱式石棺墓の配置、縮尺1/150

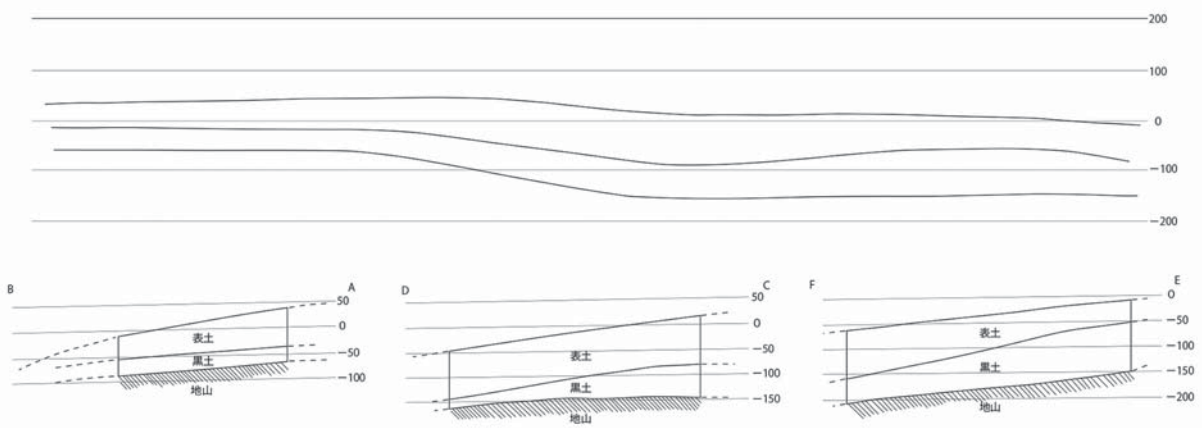


図６　閨繰遺跡の層位図

２号甕棺墓（図版６－１）

１号石棺墓と１号甕棺墓の間に位置する。石棺墓と同方向に長軸があり、下甕は東側のものとみられる。埋置角度は約30度である。時期は弥生時代中期初頭である。

３号甕棺墓（図版１－３）

１号石棺墓の北西に位置する。石棺墓と同方向に長軸があり、下甕は東側のものとみられる。埋置角度は水平である。時期は弥生時代前期末である。

４号甕棺墓（図版１－２、７－２）

３号甕棺墓の西に位置する。石棺墓と同方向に長軸があり、下甕は東側のものとみられる。埋置角度は水平である。時期は弥生時代前期末から中期初頭である。

５号甕棺墓

３号石棺墓の南に位置する。石棺墓と同方向に長軸があり、下甕は東側のものとみられる。埋置角度は約30度である。時期は弥生時代中期前半である。

６号甕棺墓

４号石棺墓の南に位置する。石棺墓と同方向に長軸があり、下甕は東側のものとみられる。埋置角度は不明である。時期は弥生時代中期初頭である。

７号甕棺墓（図版８－１）

４号甕棺墓の南に位置する。石棺墓と同方向に長軸があるが、どちらが下甕か不明である。埋置角度も不明である。時期は弥生時代中期前半と思われる。

８号甕棺墓

５号石棺墓の南に位置する。石棺墓と同方向に長軸があるが、どちらが下甕か不明である。埋置角度は不明である。碧玉製管玉２点が上甕と下甕の合わせ口から出土したようだが、所在は不明である。時期は弥生時代中期前半である。

９号甕棺墓（図版１－４）

５号石棺墓の北西に位置する。石棺墓と同方向に長軸があるが、どちらが下甕か不明である。埋置角度は不明である。時期は弥生時代前期末から中期初頭である。

10号甕棺墓（図版１－４）

９号甕棺墓の西に位置する。石棺墓と同方向に長軸があるが、どちらが下甕か不明である。埋置角度は不明である。時期は弥生時代中期初頭である。

11号甕棺墓（図版１－４、５－２）

６号石棺墓の南に位置する。この甕棺のみ他の甕棺と方位が異なり、東西を長軸にする。どちらが下甕かは不明である。６号石棺墓の蓋石上面の高さと同じで、近くの９号・10号・12号甕棺墓よりやや高い。埋置角度は不明である。時期は弥生時代中期前半である。

12号甕棺墓

６号石棺墓の西に位置する。石棺墓と同方向に長軸があるが、どちらが下甕かは不明である。埋置角度は不明である。時期は弥生時代前期末から中期初頭である。

13号甕棺墓（図版７－１）

６号石棺墓の北に位置する。石棺墓と同方向に長軸があるが、どちらが下甕か不明である。埋置角度は不明である。時期は弥生時代前期末である。

14号甕棺墓

13号甕棺墓の北に位置する。石棺墓と同方向に長軸があり、単棺と考えられる。甕棺自体は残って

いない。日誌から小型甕と思われる。時期は不明である。

15号甕棺墓

14号甕棺墓の北に位置する。石棺墓と同方向に長軸があり、単棺である。時期は弥生時代前期末と思われる。

16号甕棺墓（図版６－２）

15号甕棺墓の西に位置する。石棺墓と同方向に長軸があるが、どちらが下甕かは不明である。埋置角度は不明である。時期は弥生時代中期初頭である。

４．包含層出土遺物

遺物包含層である黒土土層からは、弥生中期を中心とする遺物が出土している（図７）。甕棺墓と同時期のものとともに、甕棺墓より新しい弥生中期後半の遺物も含んでいる。したがって、甕棺墓の掘り込み面は黒土土層の内部ないし下面であった可能性が想像される。

１は甕である。出土場所は不明である。口径は27.4cm（復元）である。口縁は鋤形で、外側に大きく張り出し内側に若干張り出す。口縁下に薄い断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。調整は、外面が刷毛目で内面がナデである。胎土は１mm 程度の砂粒を含む。色調は外面が浅黄橙色で、内面がにぶい黄褐色を呈する。焼成は良好である。時期は弥生時代中期後半で、遠賀川以西系の須玖Ⅱ式である。２は甕である。出土場所は不明である。口径は28.9cm（復元）である。口縁は鋤形で、外側に大きく張り出す。口縁下に薄い断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを強く施す。調整は内外面ともにナデである。胎土は１mm 程度の砂粒を含む。色調は外面がにぶい黄褐色で、内面が浅黄橙色を呈する。焼成は良好である。時期は弥生時代中期後半で、遠賀川以西系の須玖Ⅱ式である。３は甕である。出土場所は不明である。口径は21.4cm（復元）である。口縁は跳ね上げで、先端部が内側に弱く跳ね上げる。調整は内外面ともにナデである。胎土は１mm 程度の砂粒を含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。外面にスス痕が付着している。焼成は良好である。時期は弥生時代中期後半で、遠賀川以東系の須玖Ⅱ式である。

４は壺である。出土場所は不明であるが、８号甕棺下と書かれた段ボールに梱包されていた。口縁先端部を欠き、口縁から頸部まで残存する。頸部に薄い突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。調整は内外面ともにミガキで、外面は縦ミガキ、内面は横ミガキである。胎土は１～２mm 程度の砂粒を含む。色調は黄橙色を呈し、外面には黒色顔料が塗布されている。時期は弥生時代中期初頭で、城ノ越式である。５は壺である。出土場所は不明である。胴部最大径は29.6cm（復元）である。頸部から胴部にかけて残存する。内面の頸部下に指圧痕が観察される。調整は内外ともにナデである。胎土は１mm 程度の砂粒を含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。外面に一部丹塗りの痕がみられる。時期は弥生時代中期である。６は壺である。８号甕棺上の表土から出土した。胴部最大径は15.8cm（復元）で、底径は5.9cm（復元）である。胴部から底部にかけて残存する。胴部最大径の位置に薄い突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。調整は内外ともに磨滅のため不明である。胎土は１mm 程度の砂粒を含む。色調は内外面ともに黄橙色を呈する。時期は弥生時代中期である。

７は高坏である。出土場所は不明である。底径8.2cm（復元）である。脚部が残存する。底部付近の３ヶ所に円形の穿孔がなされている。調整は外面がナデで、内面がナデで一部刷毛目である。胎土は１mm 程度の砂粒を含む。色調は外面が橙色で、内面が浅黄橙色を呈する。武末純一氏による高坏の成形技法ＡⅡa 技法と考えられる（武末1987）。８は高坏である。出土場所は表土である。底径

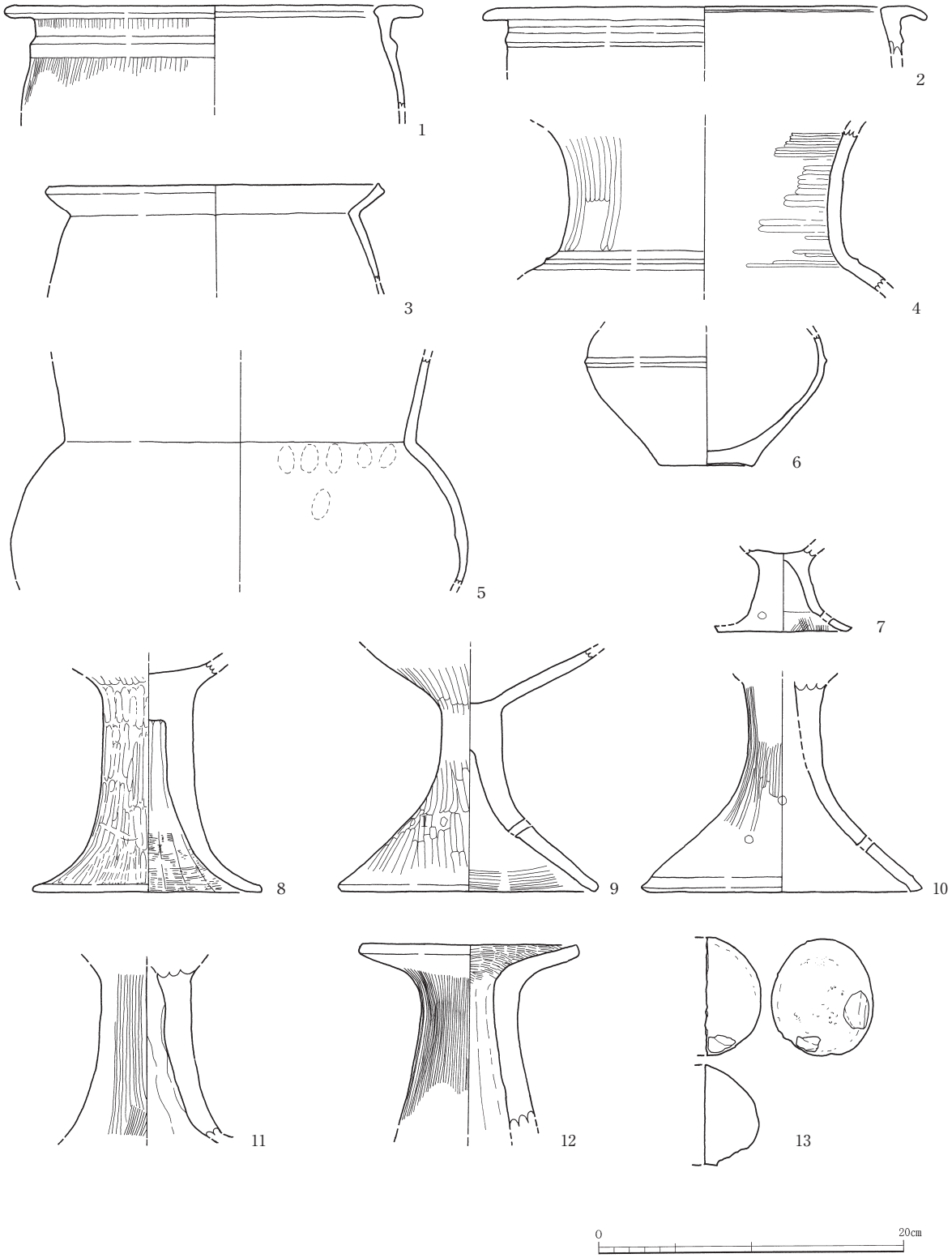


図７　閨繰遺跡包含層出土遺物、縮尺1/4

14.7cm（復元）である。脚部が残存する。調整は外面がミガキで、内面がナデである。胎土は１mm程度の砂粒を含む。色調は内外面ともに橙色を呈する。外面に丹塗りが施してある。脚部の内側に絞りがみられる。９は高坏である。出土場所は不明であるが、13号甕棺と同じ段ボールに梱包されていた。底径16.5cmである。坏部から脚部にかけて残存する。底部付近の６ヶ所に円形の穿孔がなされている。調整は外面がミガキで、内面がナデである。胎土は１mm程度の砂粒で、雲母を含む。色調は内外面ともに浅黄橙色を呈する。外面に丹が施されている。坏部の内面底部に黒斑がみられる。脚部の内側に絞りがみられる。10は高坏である。出土場所は不明である。底径18.4cmである。脚部が残存する。底部付近に３つの円形の穿孔が三角形をつくるような状態が２ヶ所あり、180度反対側に位置している。計６ヶ所穿孔されている。調整は外面がミガキで、内面がナデである。胎土は１～２mm程度の砂粒を含む。色調は淡黄色を呈する。外面の一部分に朱のようなものが付着している。11は高坏である。出土場所は８号甕棺上の表土である。脚部が残存する。調整は外面が刷毛目で、内面がナデである。胎土は１mm程度の砂粒を含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。武末純一氏による高坏の成形技法Ｂ技法と考えられる（武末1987）。脚部の内側に絞りがみられ、脚部の上端に接合痕がみられる。

12は器台である。出土場所は８号甕棺上の表土である。口径13.9cm（復元）である。口縁部から胴部にかけて残存する。調整は外面が刷毛目で、内面が刷毛目とナデである。胎土は１mm程度の砂粒を含む。色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈する。内面に絞り痕がみられる。

13は敲石・磨石である。出土場所は表土である。長さ7.7cm、厚さ6.6cm、重さ230.81gである。石材は玄武岩で多孔質である。色調は灰色で、中央部で破損がみられる。敲打痕はみられない。

（宮本一夫・梶原慎司）

第４節　出土甕棺

以下に、甕棺墓から出土した甕棺について記述する（図版９～10、表１）。

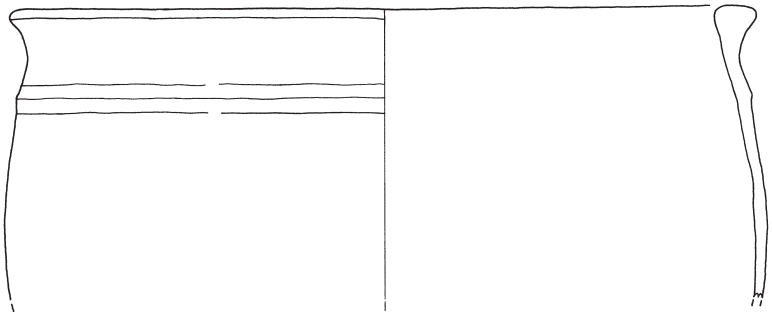
１号甕棺（図８）

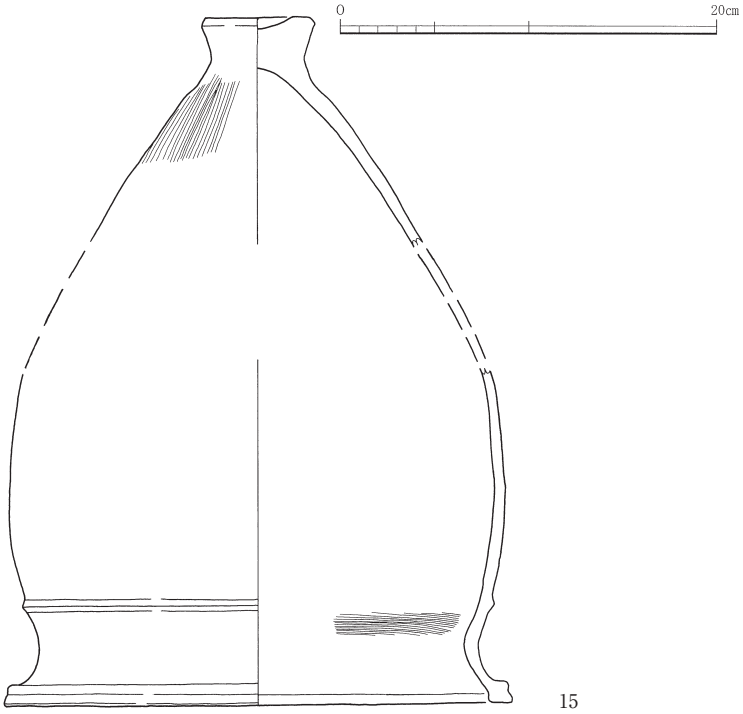
甕棺は口径38.2cm（復元）の甕（14）である。直立した口縁の外側に断面三角形の粘土を貼付し、逆Ｌ字状を呈する。口縁下に薄い断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。調整は、外面が風化しているため不明で内面がナデである。胴部下半は破片のため図化していないが、調整は、外面が刷毛目で内面がナデである。胎土は１～３mm程度の砂粒を含み、全体的に風化している。色調は、明黄褐色で一部明赤褐色を呈する。胴部上半の突帯付近に黒斑がみられる。

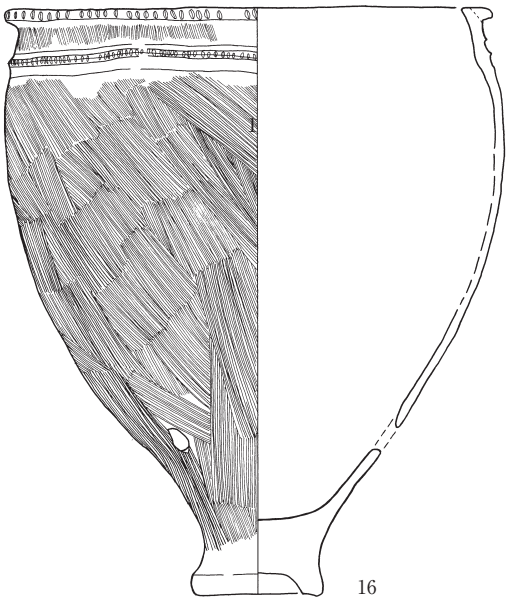
２号甕棺（図８）

上甕（15）は口径39.2cm（復元）、器高53.5cm（復元）、底径8.0cmの甕である。外反した口縁の上端に断面長方形の粘土を貼り付け、金海式の大型甕棺の口縁部形態を呈する。口縁下に薄い断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。底部は上げ底である。調整は内外面ともにナデで、一部刷毛目である。胎土は１～３mm程度の砂粒を含み、全体的に風化している。色調は外面が黄褐色で、内面が明黄褐色を呈する。胴部上半に黒斑がみられる。

下甕（16）は口径34.5cm、器高45.5cm、底径9.8cmの甕である。直立した口縁の外側に断面コ字の粘土を貼り付け逆Ｌ字状になり、外側端部に刻目を付ける。口縁下に薄い断面三角形の突帯を１条貼り付け、突帯頂部に刻目を付け、横ナデを施す。底部は上げ底である。調整は外面が刷毛目で、内面がナデである。胎土は１～３mm程度の砂粒を含み、全体的に風化している。色調は橙色を呈する。







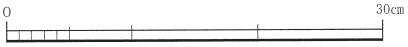


図８　１号甕棺（14）、縮尺1/6と、２号甕棺（15・16）、縮尺1/4

胴部上半に黒斑がみられ、胴部下半に穿孔がみられる。

３号甕棺（図９）

上甕（17）は口径36.2cm（復元）、器高45.5cm、底径10.0cm の甕である。外反した口縁の上端に断面長方形の粘土を貼り付け、上下端に刻目を施し、金海式の大型甕棺の口縁部形態を呈する。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、突帯頂部に刻目を付け、強い横ナデを施す。底部は上げ底である。調整は、内外面ともにナデで一部刷毛目である。胎土は１～２mm 程度の砂粒を含む。色調は橙色を呈する。胴部下半に黒斑がみられる。

下甕（18）は口径34.4cm、器高39.2cm、底径10.6cm の甕である。口縁は如意形で外反し、端部はコ字に仕上げられ、内側に刷毛目を施す。外面の口縁から突帯までの部分は、刷毛目の後丁寧にナデ消した痕跡がある。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。底部は上げ底の古い形態を呈している。調整は、外面が刷毛目で内面がナデである。胎土は１～２mm 程度の砂粒を含む。色調は、外面が黄橙色で内面が明黄褐色を呈する。胴部上半に黒斑がみられ、外面の胴部上半と口縁端部にスス痕跡、外面の胴部下半にスス酸化部、内面の底部付近にコゲ痕跡がみられる。

４号甕棺（図10）

上甕（19）は口径44.6cm（復元）の甕である。直立した口縁の外側に断面三角形の粘土を貼り付け、逆Ｌ字状を呈する。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。調整は外面が刷毛目で、内面がナデである。胎土は１～２mm 程度の砂粒で、金雲母を含む。色調は外面が明黄褐色で、内面が橙色を呈する。胴部上半に黒斑がみられる。

下甕（20）は口径32.7cm、器高44.2cm、底径10.9cm の甕である。口縁は外側に粘土を貼り付け逆Ｌ字状を呈すると考えられるが、外側の粘土を打ち欠いている。接合面が露出している箇所もみられる。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、突帯頂部に刻目を付け、横ナデを施す。底部は上げ底である。調整は外面が刷毛目で、内面がナデである。胎土は１～２mm 程度の砂粒を含む。色調は浅黄橙色を呈する。

５号甕棺（図11）

上甕（21）は口径29.9cm、器高32.5cm、底径6.9cm の甕である。口縁は鋤形で、平坦面が広く伸び、内側に小さく突出し、強くナデられる。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。底部は平底に近い上げ底である。調整は内外面ともにナデである。胎土は１～２mm 程度の砂粒を含む。色調は外面が橙色で、内面が黄橙色を呈する。

下甕（22）は胴部最大径47.7cm の壺である。胴部にM字状の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。調整は内外面ともにナデである。胎土は１～２mm 程度の砂粒を含む。色調はにぶい赤褐色を呈する。

６号甕棺（図11）

上甕（23）は口径39.2cm の甕である。口縁は鋤形で、平坦面が広く伸びる。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。突帯部の内側は、わずかに盛り上がる。調整は内外面ともにナデで、一部刷毛目である。胎土は１～３mm 程度の砂粒を含み、全体的に粗く、風化している。色調は橙色を呈する。胴部上半に黒斑がみられる。

下甕は存在しないが、日誌の略測図から甕と思われる。

７号甕棺（図12）

上甕（24）は底径7.7cm の甕である。底部は平底である。調整は内外面ともにナデである。胎土は１～２mm 程度の白色砂粒を含む。色調は外面が橙色で、内面がにぶい黄橙色を呈する。胴部下半と底部の２ヶ所に穿孔がみられる。

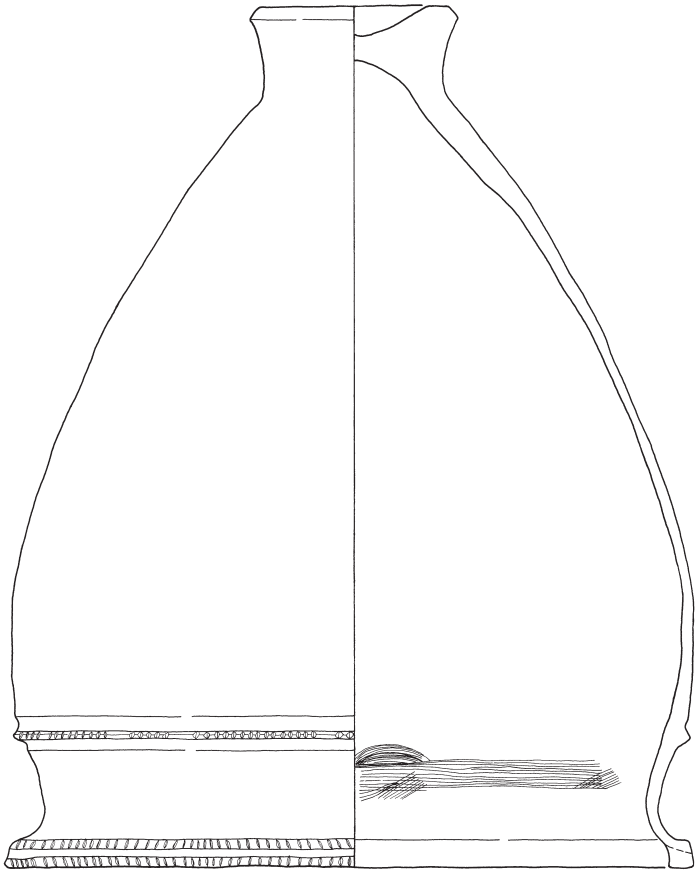


図９　３号甕棺、縮尺1/4

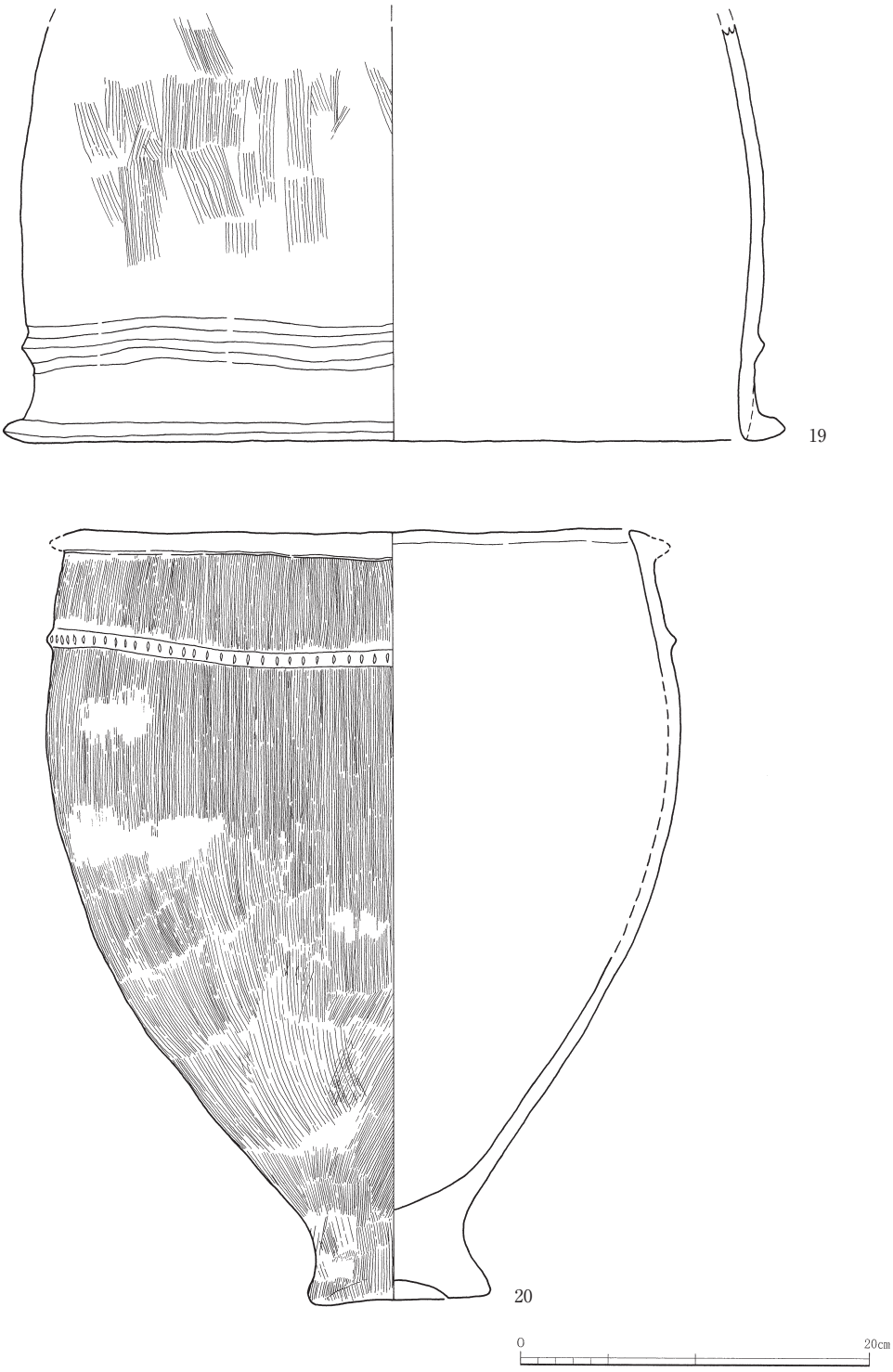


図10　４号甕棺、縮尺1/4

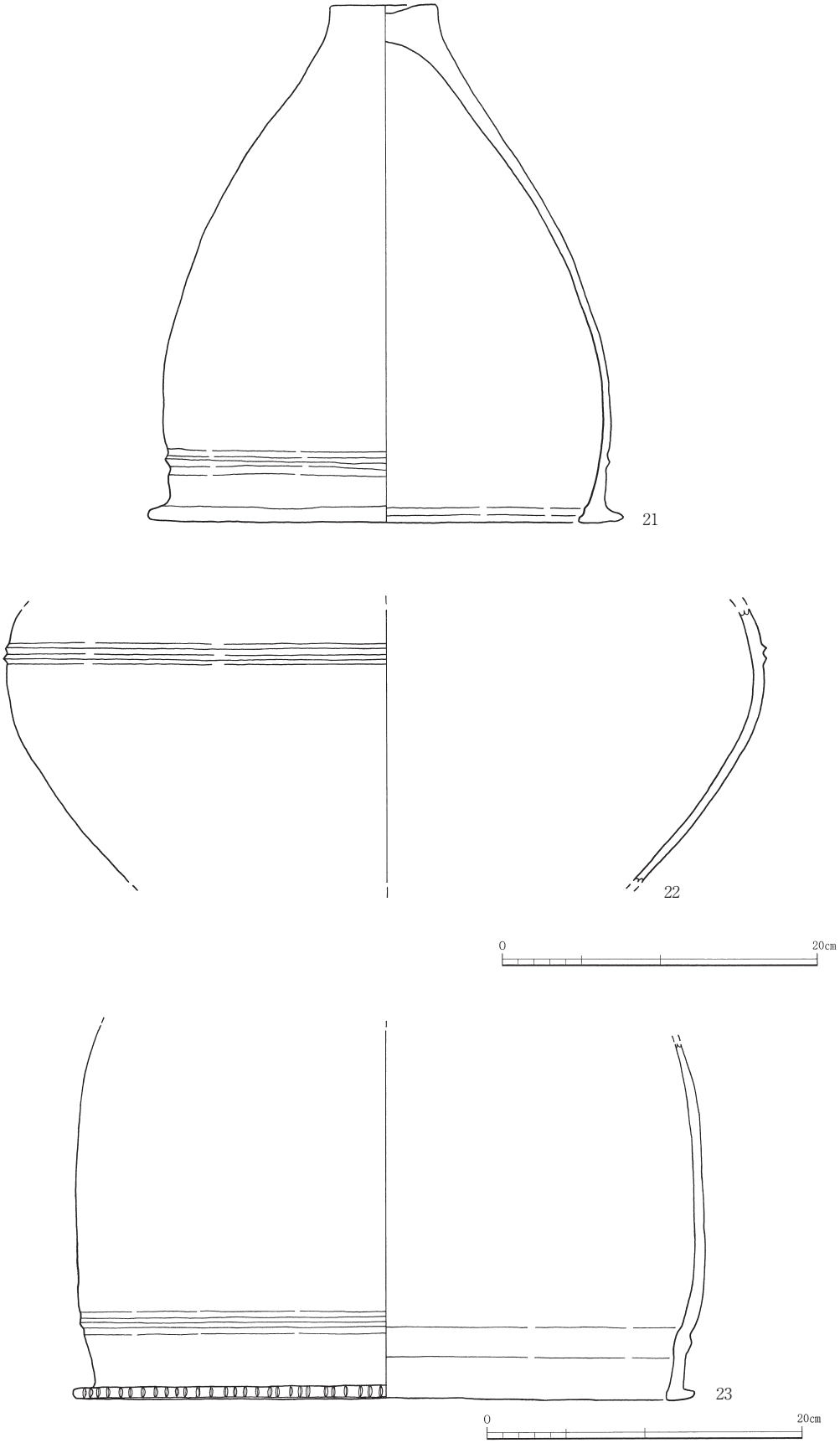


図11　５号甕棺（21・22）と６号甕棺（23）、縮尺1/4

下甕（25）は胴部最大径40.3cm の壺である。突帯部から頸部まで残存する。胴部に断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。調整は内外面ともにナデで、一部刷毛目である。胎土は１～２mm 程度の砂粒で、雲母を含む。色調は明赤褐色を呈する。胴部突帯付近に黒斑がみられる。

８号甕棺（図13）

上甕（26）は口径41.0cm（復元）の甕である。口縁は鋤形で、平坦面が広く伸びる。露出した接合面から、口縁は外側に粘土を貼り付けていたことがわかる。口縁下に断面三角形の薄い突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。調整は内外面ともにナデである。胎土は１～２mm 程度の砂粒を含み、表面が風化している。色調は橙色を呈する。

下甕（27）は口径38.0cm、器高56.0cm（復元）、底径7.3cm の甕である。口縁は鋤形で、平坦面が広く伸び、端部に刻目を付ける。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。底部は平底に近い上げ底である。調整は外面が刷毛目で、内面がナデである。胎土は１～２mm 程度の白色砂粒を含む。色調は橙色を呈する。

９号甕棺（図14）

上甕（28）は口径44.7cm、器高54.0cm（復元）、底径10.5cm の甕である。外反した口縁の内側に断面三角形の粘土を貼付して肥厚させ、上下端に刻目を付ける。口縁の内側の粘土が外れた部分からは刷毛目が観察されるので、刷毛目を施した後に粘土を貼り付けたことがわかる。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、突帯頂部に刻目を付け、横ナデを施す。底部は上げ底である。調整は外面が刷毛目で、内面がナデである。胎土は１～２mm 程度の砂粒で、雲母を含み、全体的に風化している。

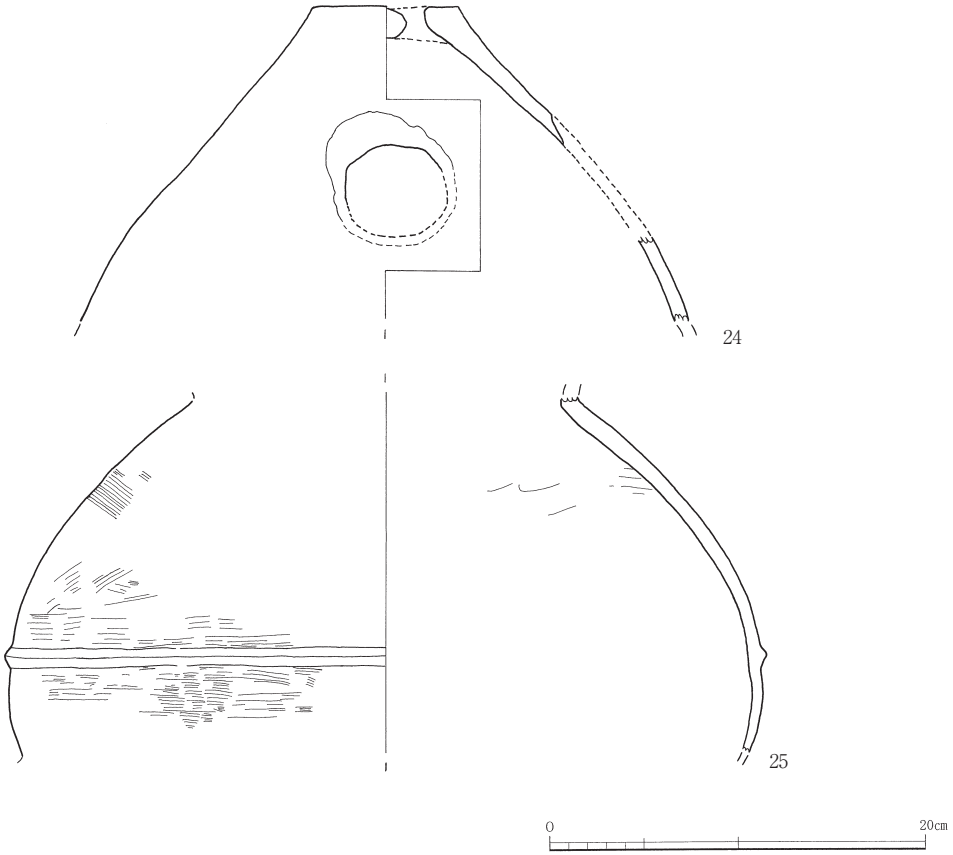


図12　７号甕棺、縮尺1/4

色調は浅い黄褐色を呈する。

下甕（29）は、底径11.2cm（復元）の壺である。底部は平底である。調整は内外面ともにナデである。胎土は１～２mm 程度の白色砂粒で、雲母を含む。色調は橙色を呈する。

10号甕棺（図15）

上甕（30）は口径48.4cm、器高59.4cm、底径9.6cm の甕である。口縁は鋤形だが、外側に低く傾斜

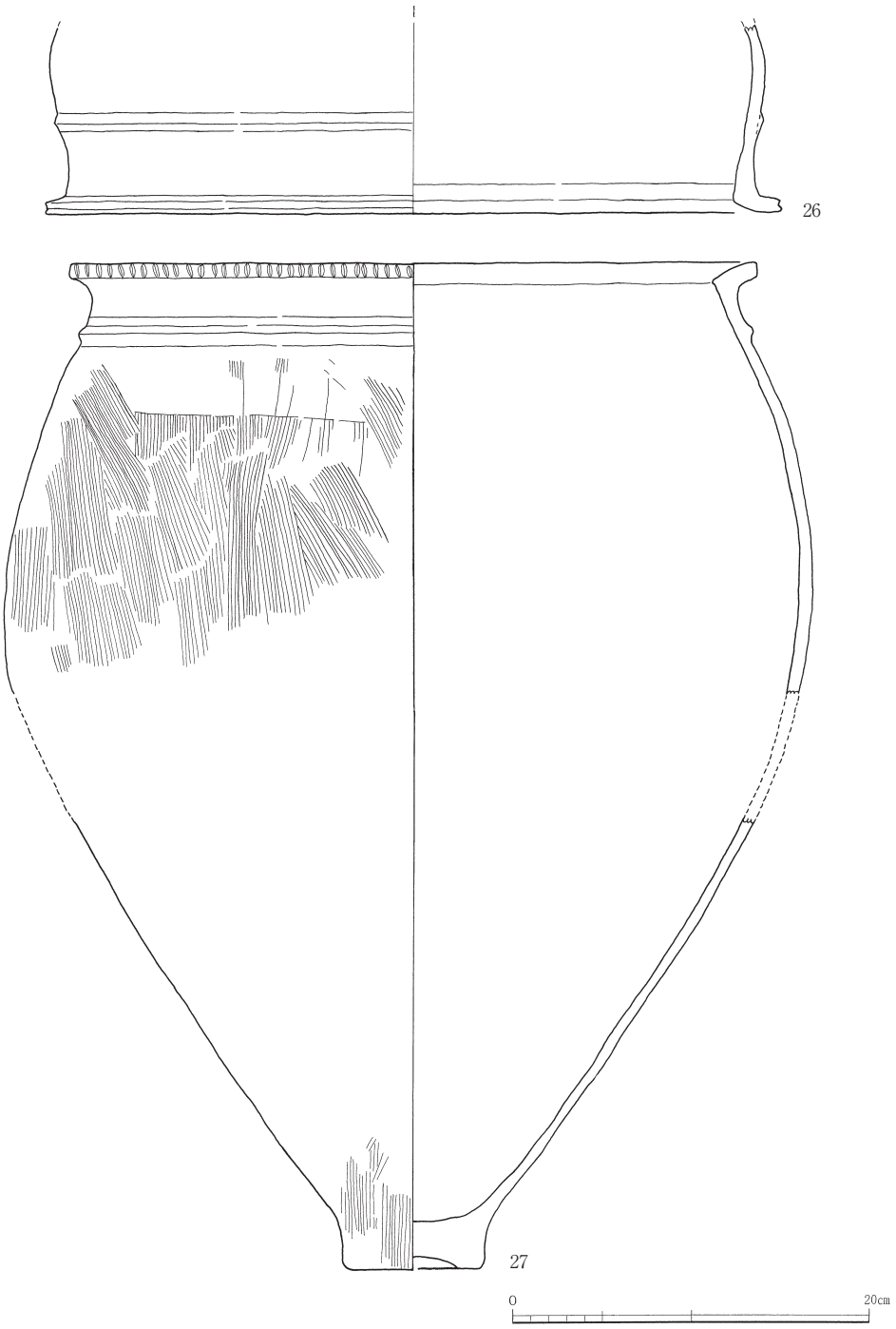


図13　８号甕棺、縮尺1/4

し、端部に刻目を付ける。露出した接合面から、口縁は外側に粘土を貼り付けていたことがわかる。口縁下に断面三角形の突帯を２条貼り付け、横ナデを施す。底部は上げ底である。調整は内外面ともにナデで、一部刷毛目である。胎土は１～２mm 程度の砂粒で、雲母を含む。全体的に風化している。色調は外面が橙色で、内面が明赤褐色を呈する。

下甕（31）は底径9.0cm の壺である。底部は平底である。調整は内外面ともにナデである。胎土は１～２mm 程度の砂粒で、雲母を含む。底部の内面は表面が剥がれ、全体的に風化している。色調は外面が橙色で、内面が明赤褐色を呈する。

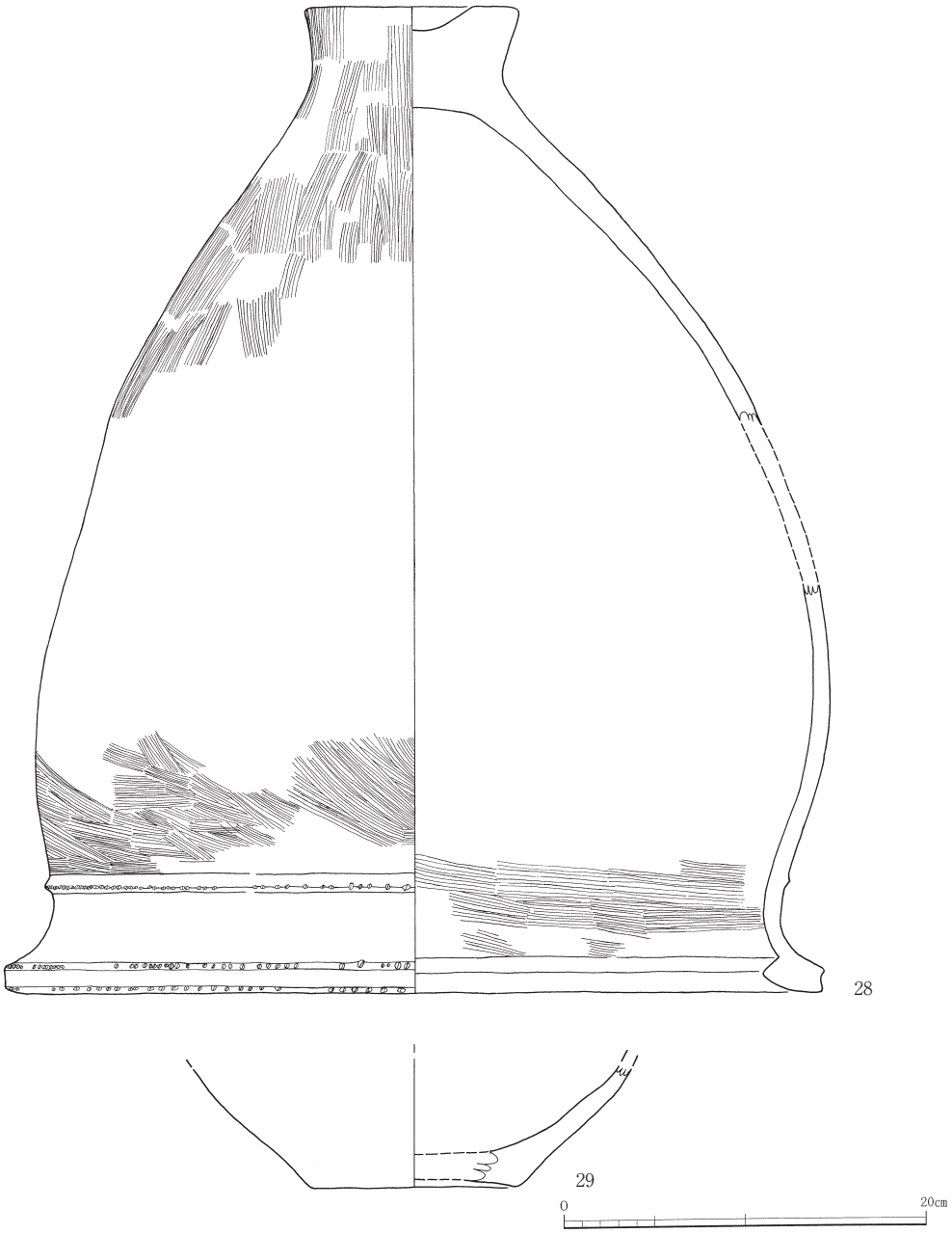


図14　９号甕棺、縮尺1/4

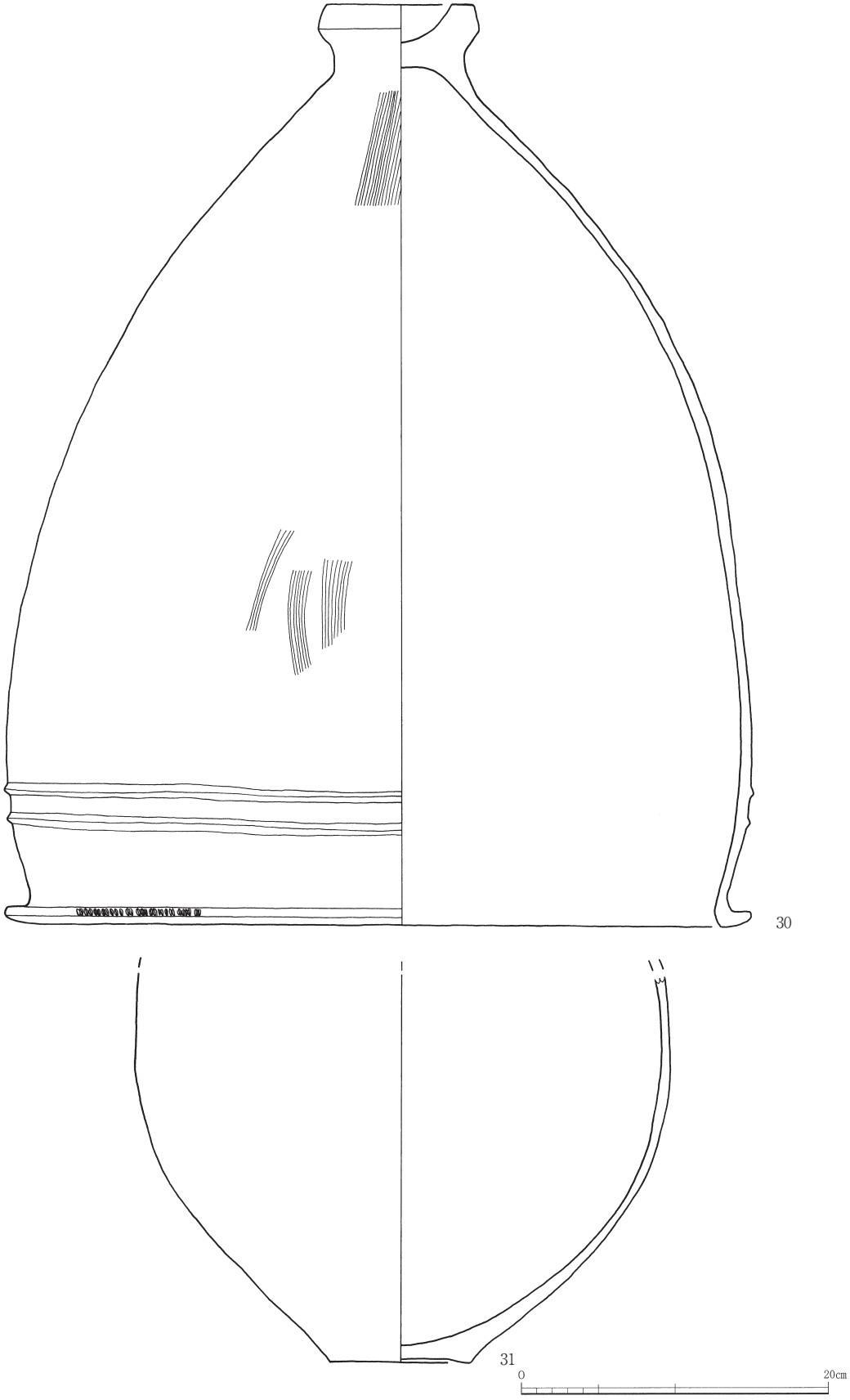
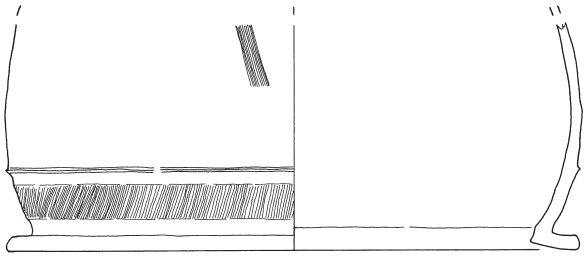
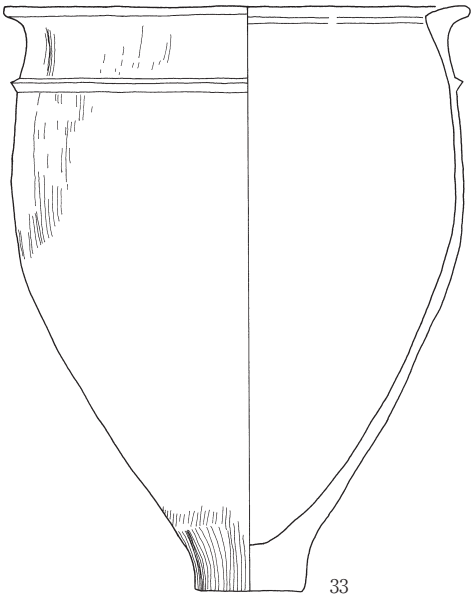


図15　10号甕棺、縮尺1/4





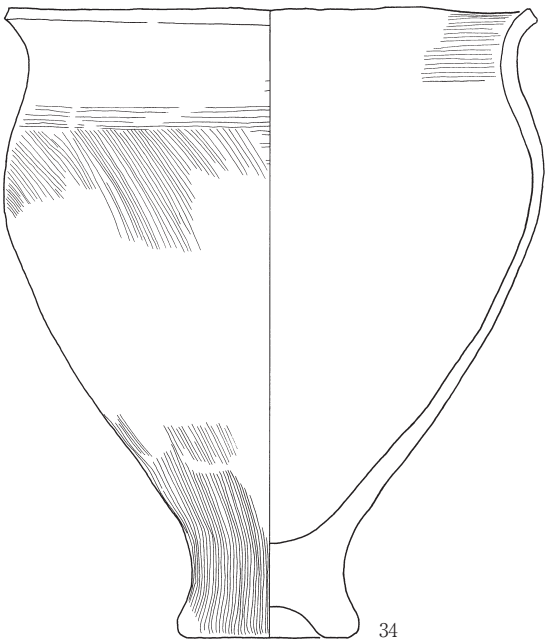


図16　11号甕棺（32・33）と12号甕棺、縮尺1/4

11号甕棺（図16）

上甕（32）は口径30.4cm（復元）の甕である。口縁は鋤形で、平坦面が広く伸びる。口縁下に薄い断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。調整は外面が刷毛目で、内面がナデである。胎土は１～２mm 程度の白色砂粒を含み、外面が風化している。色調は外面がにぶい赤褐色で、内面がにぶい橙色を呈する。

下甕（33）は口径24.6cm（復元）、器高30.8cm、底径5.2cm の甕である。口縁は鋤形で、平坦面が広く伸びる。露出した接合面から、口縁は外側に粘土を貼り付けていたことがわかる。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。底部は平底に近い上げ底である。調整は外面が刷毛目で内面がナデである。胎土は１～２mm 程度の白色砂粒を含み、全体的に風化している。色調は橙色を呈する。

12号甕棺（図16）

上甕は存在しないが、日誌の略測図から甕であったと思われる。口縁は鋤形で、口縁下に１条の突帯を貼り付けている。

下甕（34）は口径27.5cm、器高34.9cm、底径8.6cm の甕である。口縁は如意形で端部をコ字に整えている。底部は上げ底である。調整は外面が刷毛目で、内面は口縁付近が刷毛目で胴部がナデである。胎土は１～３mm 程度の白色砂粒を含み全体的に粗く、風化している。色調は橙色を呈する。

13号甕棺（図17）

上甕（35）は口径51.5cm（復元）の中型甕である。外反した口縁の上端に断面三角形の粘土を貼り付け内側を弱くナデて、金海式の大型甕棺の口縁部形態を呈する。口縁の外側端部に、上下別々に施した刻目を付ける。口縁下に断面三角形の突帯を２条貼り付け、横ナデを施す。調整は、外面が刷毛目で内面がナデである。胎土は１～５mm 程度の白色砂粒を含み、全体的に風化している。色調は橙色を呈する。外面の胴部上半と内面の口縁付近に黒斑がみられる。

下甕（36）は底径13.4cm の甕である。口縁は欠けていて不明だが、頸部の立ち上がりの形態から如意形と思われる。口縁部を意図的に欠いた可能性も考えられる。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。底部は上げ底である。調整は外面が刷毛目で、内面がナデである。胎土は１～３mm 程度の砂粒で、雲母を含む。色調は淡黄色を呈する。胴部上半に黒斑がみられる。

15号甕棺（図18）

甕棺は底径8.5cm の甕（37）である。底部は、平底に近い上げ底である。調整は内外面ともにナデである。頸部は、破片のため図化していないが、少なくとも３条の沈線が引かれており、頸部の形状から、口縁は如意形と思われる。頸部の調整は外面がナデで、内面が刷毛目である。胎土は１～２mm 程度の砂粒を含み、全体的に風化している。色調は外面が明赤褐色で、内面が灰黄色を呈する。

16号甕棺（図18）

上甕（38）は壺である。胴部が残存している。調整は外面がミガキで内面はナデである。外面には擦痕がよく観察される。胎土は１～２mm 程度の砂粒で、雲母を含む。色調は外面が淡橙色で、内面がにぶい黄褐色を呈する。外面の一部分に赤色顔料が付着している。

下甕（39）は口径33.6cm（復元）、器高37.0cm（復元）、底径8.4cm の甕である。口縁は鋤形である。口縁下に断面三角形の突帯を１条貼り付け、横ナデを施す。底部は上げ底である。調整は外面が刷毛目で、内面がナデである。胎土は１～３mm 程度の白色砂粒を含み、全体的に風化している。色調は橙色を呈する。黒斑は内外面の胴部下半にみられる。

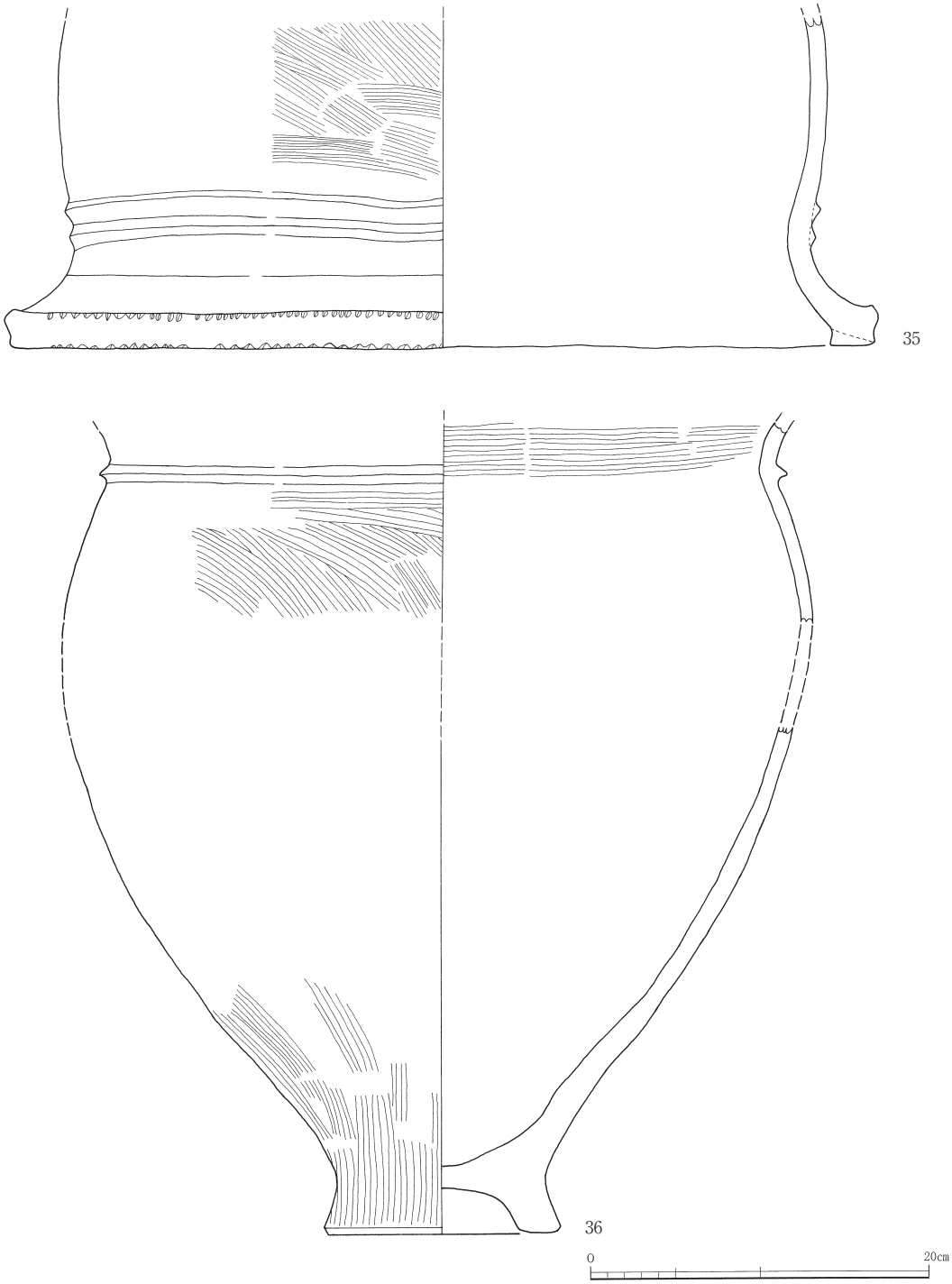


図17　13号甕棺、縮尺1/4

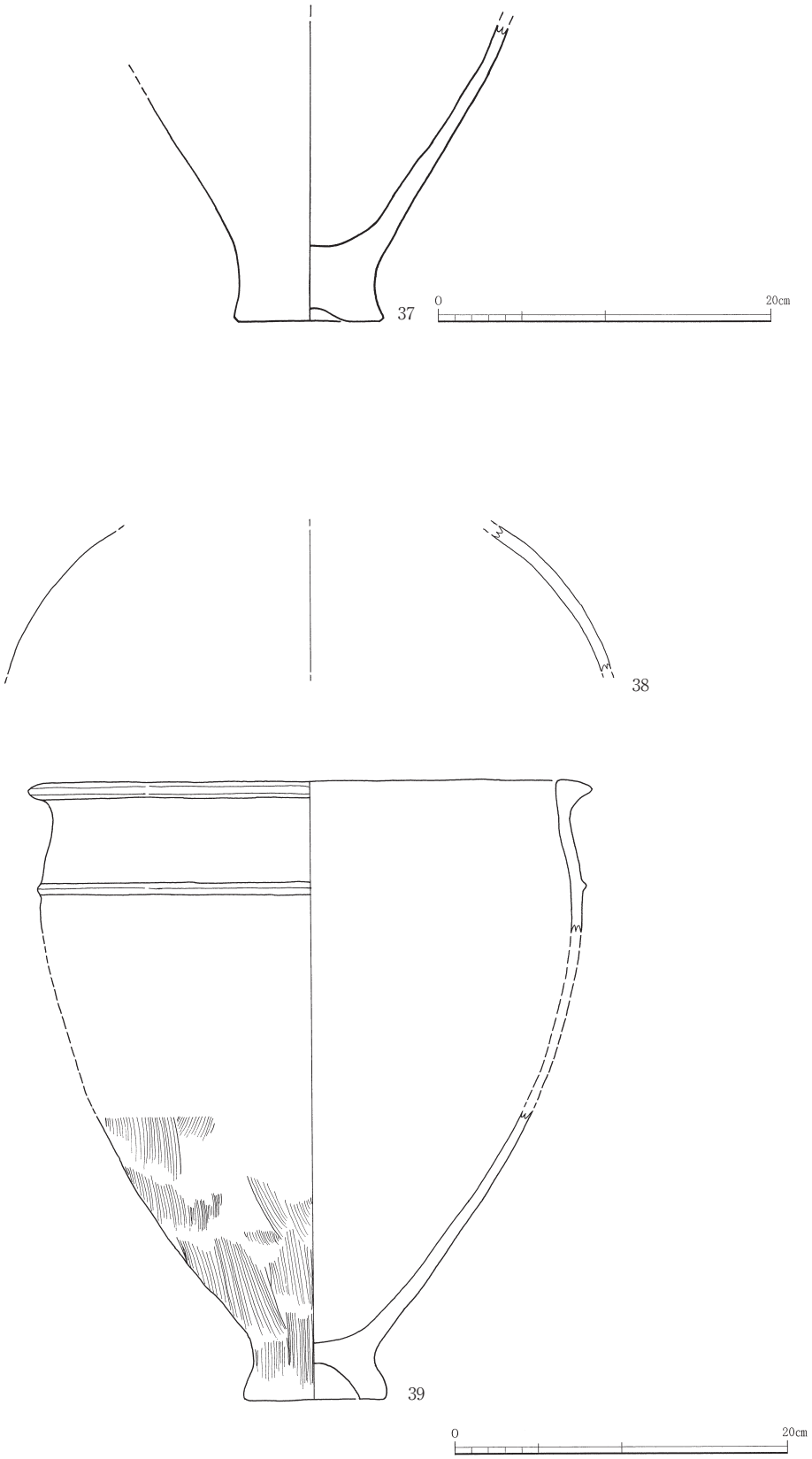


図18　15号甕棺（37）と16号甕棺（38・39）、縮尺1/4

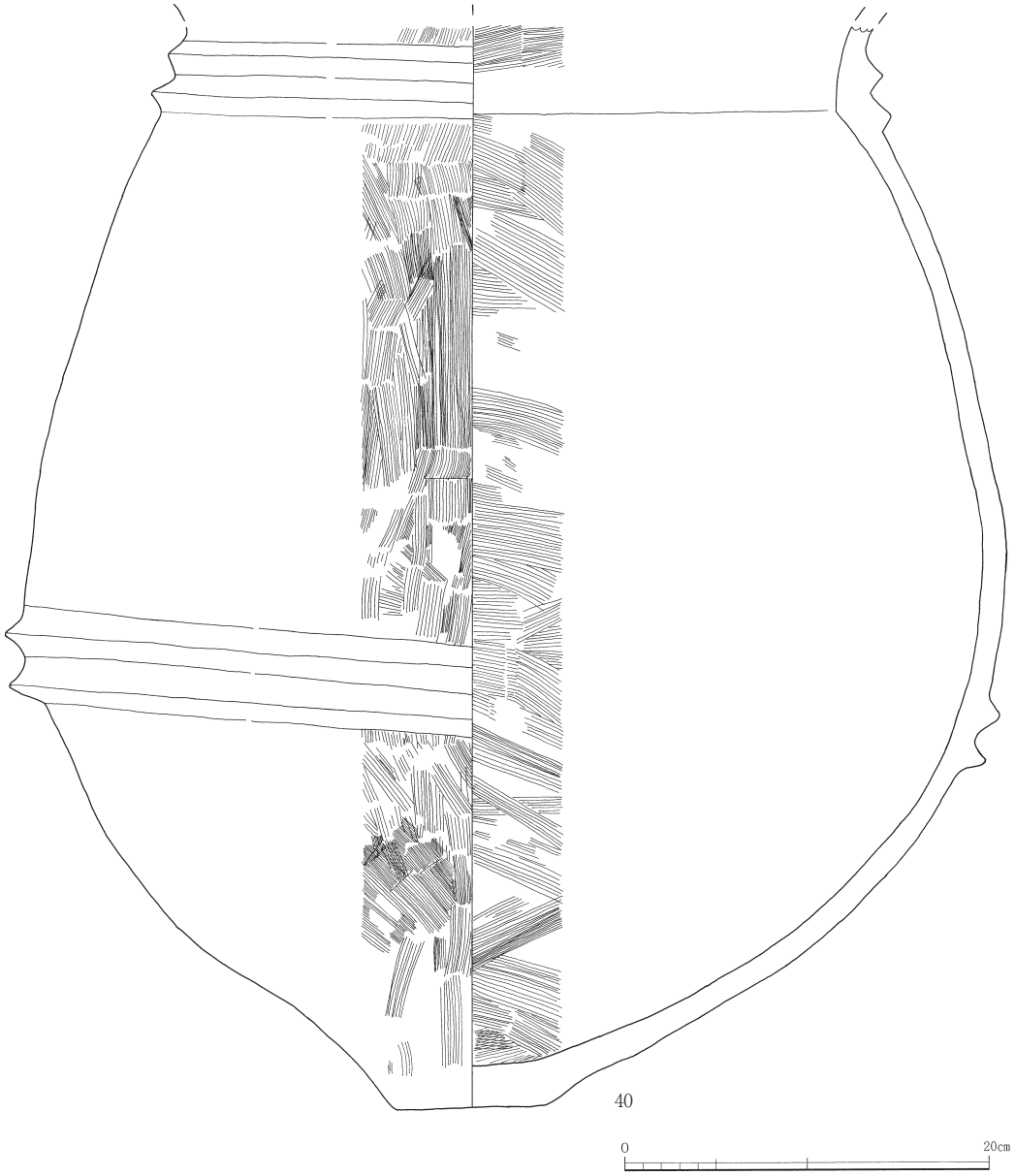


図19　番号不明甕棺１、縮尺1/4

番号不明甕棺１（図19）

番号が設定されておらず、出土位置も不明のもので、その大きさから甕棺と考えられる。残存器高59.2cm、底径8.2cm の中型甕（40）である。口縁は打ち欠いている。口縁下と胴部に２条ずつ断面三角形の厚い突帯を貼り付け横ナデを施す。底部は平底だが、つくりがやや雑である。調整は、内外面ともに刷毛目である。胎土は１～２mm 程度の砂粒を含む。色調は橙色を呈する。胴部下半とその反対側の胴部上半に黒斑がみられる。

時期は弥生時代後期である。

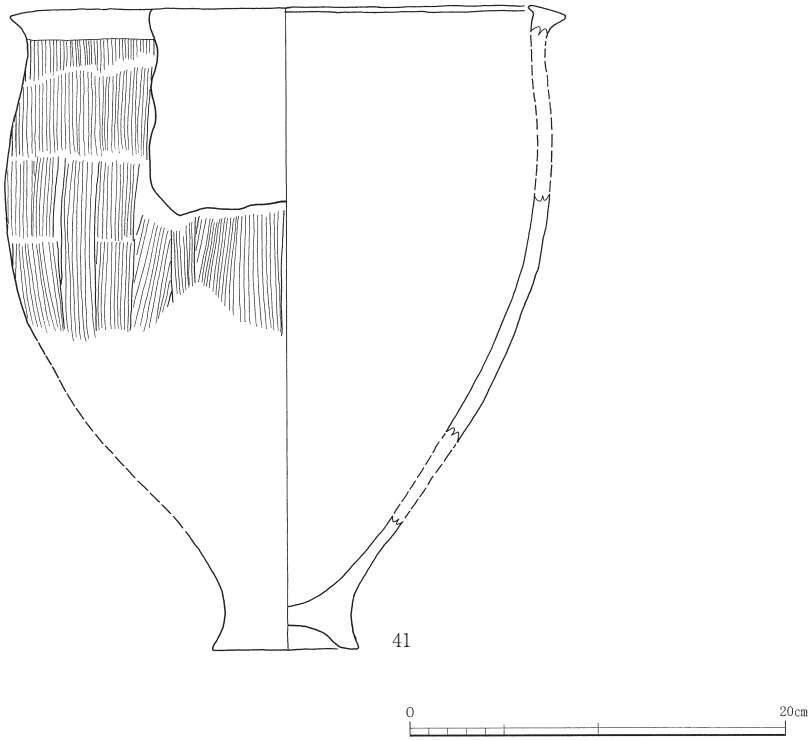


図20　番号不明甕棺２、縮尺1/4

番号不明甕棺２（図20）

ラベル・注記がなかったため不明甕棺（41）とする。形態から墓地群と関係があり、上で報告した甕棺墓に相当するものと推測されるが、どの甕棺に相当するかは不明である。

口径25.5cm、器高34.0cm（復元）、底径7.8cm の甕である。口縁は直立した口縁の外側に断面三角形の粘土を貼り付け、逆Ｌ字状を呈する。外側に低く傾斜し、内側に小さく突出し、強くナデられる。底部は上げ底である。調整は外面が刷毛目で、内面がナデである。胎土は１～２mm 程度の白色砂粒を含む。色調は外面がにぶい黄橙色で、内面が淡黄色を呈する。外面上半にスス痕跡、外面下半にスス酸化部、内面底部付近にコゲ痕跡がみられる。

（梶原慎司）

表１　閨繰遺跡出土土器観察表

No.	遺構	器種	法量				色調		胎土	器面調整		備考
			器高（復元）［cm］	口径（復元）［cm］	胴部最大径（復元）［cm］	底部径（復元）［cm］	外面	内面		外面	内面	
K1下	小型甕棺	甕	15.4（残存）	(38.2)	—	—	Hue10YR7/6 明黄褐、一部 Hue5YR5/8 明赤褐を含む	Hue10YR7/6 明黄褐	～3.0mm 砂粒 雲母含む	磨滅・ナデ・刷毛目	ナデ	
K2上	小型甕棺	甕	(53.5)	(39.2)	(38.3)	8.0	Hue10YR7/8 黄橙	Hue10YR7/6 明黄褐	～3.0mm 白色砂粒	ナデ	ナデ	
K2下		甕	45.5	34.5	38.6	9.8	Hue5YR6/6 橙	Hue5YR6/6 橙	～3.0mm 砂粒	刷毛目	ナデ	穿孔あり
K3上	小型甕棺	甕	45.5	(36.2)	(35.8)	10.0	Hue7.5YR6/6 橙	Hue5YR7/6 橙	～2.0mm 砂粒	ナデ	ナデ	
K3下		甕	39.2	34.4	34.4	10.6	Hue7.5YR7/8 黄橙	Hue10YR7/6 明黄褐	～2.0mm 砂粒	刷毛目	ナデ	スス・コゲ痕
K4上	小型甕棺	甕	23.5（残存）	(44.6)	(42.4)	—	Hue10YR7/6 明黄褐	Hue7.5YR7/6 橙	～2.0mm 砂粒雲母含む	刷毛目	ナデ	
K4下		甕	44.2	32.7	36.2	10.9	Hue10YR8/4 浅黄橙	Hue10YR8/4 浅黄橙	～2.0mm 砂粒	刷毛目	ナデ	
K5上	小型甕棺	甕	32.5	29.9	(28.2)	6.9	Hue7.5YR6/8 橙	Hue7.5YR7/8 黄橙	～2.0mm 砂粒	ナデ	ナデ	
K5下		壺	17.0（残存）	—	47.7	—	Hue5YR5/4 にぶい赤褐	Hue5YR5/4 にぶい赤褐	～2.0mm 砂粒	ナデ	ナデ	
K6上	小型甕棺	甕	22.5（残存）	39.2	(39.4)	—	Hue7.5YR7/6 橙	Hue7.5YR7/6 橙	～3.0mm 砂粒	ナデ	ナデ	
K7上	小型甕棺	甕	16.6（残存）	—	—	7.7	Hue2.5YR 6/8 橙	Hue10YR7/2 にぶい黄橙	～2.0mm 白色砂粒	ナデ	ナデ	穿孔２ヶ所あり
K7下		壺	19.0（残存）	—	40.3	—	Hue5YR5/8 明赤褐	Hue5YR5/8 明赤褐	～2.0mm 砂粒雲母含む	刷毛目、ナデ	ナデ	
K8上	小型甕棺	甕	10.2（残存）	(41.0)	(39.8)		Hue5YR7/8 橙	Hue5YR7/8 橙	～2.0mm 砂粒	ナデ	ナデ	
K8下		甕	(56.0)	38.0	(44.6)	7.3	Hue5YR6/6 橙	Hue5YR6/6 橙	～2.0mm 白色砂粒	刷毛目、ナデ	ナデ	
K9上	小型甕棺	甕	(54.0)	44.7	43.4	10.5	Hue10YR8/4 浅い黄橙	Hue10YR8/4 浅い黄橙	～2.0mm 砂粒雲母含む	刷毛目	ナデ	
K9下		壺	6.5（残存）	—	—	(11.2)	Hue2.5YR6/8 橙	Hue2.5YR6/8 橙	～2.0mm 砂粒雲母含む	ナデ	ナデ	
K10上	小型甕棺	甕	59.4	48.4	48.3	9.6	Hue7.5YR 6/6 橙	Hue5YR5/6 明赤褐	～2.0mm 砂粒雲母含む	刷毛目、ナデ	ナデ	
K10下		壺	25.0（残存）	—	—	9.0	Huw2.5YR6/8 橙	Hue5YR5/6 明赤褐	～2.0mm 砂粒	ナデ	ナデ	
K11上	小型甕棺	甕	12.0（残存）	(30.4)	30.7	—	Hue2.5YR4/3 にぶい赤褐	Hue7.5YR6/4 にぶい橙	～2.0mm 白色砂粒	刷毛目、ナデ	ナデ	
K11下		甕	30.8	(24.6)	23.9	5.2	Hue5YR6/8 橙	Hue5YR6/8 橙	～2.0mm 白色砂粒	刷毛目、ナデ	ナデ	
K12下	小型甕棺	甕	34.9	27.5	28.5	8.6	Hue5YR6/6 橙	Hue5YR6/6 橙	～3.0mm 白色砂粒	刷毛目、ナデ	ナデ	
K13上	小型甕棺	甕	19.2（残存）	(51.5)	—	—	Hue7.5YR6/8 橙	Hue7.5YR6/8 橙	～5.0mm 白色砂粒雲母含む	刷毛目	ナデ	
K13下		甕	(47.5)（残存）	—	—	13.4	Hue2.5Y8/3 淡黄	Hue2.5Y8/3 淡黄	～3.0mm 砂粒	刷毛目、ナデ	ナデ	
K15	小型甕棺	甕	17.5（残存）	—	—	8.5	Hue2.5YR5/8 明赤褐	Hue2.5Y6/2 灰黄	～2.0mm 砂粒	ナデ	ナデ	単棺
K16上	小型甕棺	壺	8.5（残存）	—	—	—	Hue5YR8/4 淡橙	Hue10YR7/3 にぶい黄褐	～2.0mm 砂粒雲母含む	ナデ	ナデ	外面赤色顔料塗布
K16下		甕	(37.0)	(33.6)	32.8	8.4	Hue7.5YR6/6 橙	Hue7.5YR6/6 橙	～3.0mm 白色砂粒	刷毛目、ナデ	ナデ	
不明①	甕棺	甕	59.2（残存）	—	53.4	8.2	Hue2.5YR6/6 橙	Hue2.5YR6/6 橙	～2.0mm 砂粒	刷毛目	刷毛目	
不明②	甕棺	甕	(34.0)	25.5	28.9	7.8	Hue10YR6/4 にぶい黄橙	Hue2.5Y7/4 淡黄	～2.0mm 白色砂粒	刷毛目	ナデ	スス・コゲ痕
1	不明	甕	6.6（残存）	(27.4)	—	—	Hue7.5YR8/6　浅黄橙	Hue10YR7/3 にぶい黄褐	～1.0mm 砂粒	刷毛目	ナデ	
2	不明	甕	4.0（残存）	(28.9)	—	—	Hue10YR7/3 にぶい黄橙	Hue10YR8/4 浅黄橙	～1.0mm 白色砂粒雲母含む	ナデ	ナデ	
3	不明	甕	6.2（残存）	(21.4)	—	—	Hue5YR6/6 橙	Hue5YR6/6 橙	～1.0mm 砂粒	ナデ	ナデ	スス痕
4	K8下？	壺	10.6（残存）	—	—	—	Hue10YR8/6 黄橙	Hue10YR8/6 黄橙	～2.0mm 砂粒	ミガキ	ミガキ	外面黒色顔料塗布
5	不明	壺	14.4（残存）	—	(29.6)	—	Hue5YR7/6 橙	Hue5YR7/6 橙	～1.0mm 砂粒	ナデ	ナデ	外面丹塗り
6	K8上表土	壺	8.4（残存）	—	(15.8)	(5.9)	Hue10YR8/6 黄橙	Hue10YR8/6 黄橙	～1.0mm 白色砂粒	磨滅	磨滅	
7	不明	高坏	5.3（残存）	—	—	(8.2)	Hue7.5YR7/6 橙	Hue7.5YR8/6 浅黄橙	～1.0mm 砂粒	ナデ	刷毛目、ナデ	穿孔３ヶ所あり
8	表土	高坏	15.0（残存）	—	—	(14.7)	Hue2.5YR6/8 橙	Hue7.5YR7/6 橙	～1.0mm 砂粒	ミガキ	刷毛目、ナデ	外面丹塗り
9	P13 ？	高坏	15.7（残存）			16.5	Hue10YR8/4 浅黄橙	Hue10YR8/4 浅黄橙	～1.0mm 砂粒 雲母含む	ミガキ	ナデ	外面丹塗り、穿孔６ヶ所あり（外面より穿孔）
10	不明	高坏	13.7（残存）	—	—	18.4	Hue2.5Y8/3 淡黄	Hue2.5Y8/3 淡黄	～2.0mm 砂粒	ミガキ	ナデ	丹塗り、穿孔６ヶ所あり
11	K8上表土	高坏	11.1（残存）	—	—	—	Hue10YR6/4 にぶい黄橙	Hue10YR6/4 にぶい黄橙	～1.0mm 白色砂粒	刷毛目	ナデ	
12	K8上表土	器台	12.4（残存）	(13.9)	—	—	Hue10YR7/4 にぶい黄橙	Hue10YR7/4 にぶい黄橙	～1.0mm 砂粒	刷毛目	刷毛目、ナデ	
13	表土	敲石・磨石	7.7（長径）	—	6.6（厚さ）	3.6（幅）	—	—	玄武岩（石材）多孔質	—	—	230.81g（重さ）中央部で破損・敲打痕はみられない

第５節　閨繰遺跡の調査の成果と課題

１．閨繰遺跡の位置

1954（昭和29）年に東亜考古学会によって調査された原の辻閨繰遺跡は、その後1995（平成７）年と1998（平成10）年に長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所によって発掘調査がなされている。長崎県教育庁の調査は幡鉾川流域の圃場整備事業に伴う調査であったが、調査時には東亜考古学会調査地点と同じ地点に存在する石棺墓・甕棺墓と考えられていた（長崎県教育委員会2002）。しかし、東亜考古学会調査の調査日誌に残されていた調査地点は、当時幡鉾川にかけられていた二つの橋の内、東側の橋を北方に直進して山際に接したところであった（図４）。これは、1995（平成７）年に発見された閨繰遺跡の位置とは、南北方向の道を大きく異にした地点で発見されたものであった（図21）。す

図21　閨繰遺跡の発掘調査地点

図22　閨繰遺跡の墓葬の分布

なわち、石棺墓・甕棺墓は大きく二つの異なった地点に造営されており（図22）、これらを併せて閨繰遺跡と呼んでいたことになる。東亞考古学会調査時に郷土史家山口麻太郎が「川内川の北向うの山麓にでた。二所あって、一方は石棺が二個出ていた。一方は石棺と甕棺の群で、大小拾数個あった。これは京大で調査した。」とあり（長崎県教育委員会2002）、２カ所の墓群があったことが知られる。この二つの墓群が、図22にあるような東亞考古学会の1954（昭和29）年調査地点と1995（平成７）年の長崎県教育庁の調査地点であった可能性がある。あるいは1995年の発見地点とはまた別に、丘陵斜面部に箱式石棺が露出していたとも言えよう。発掘調査日誌によれば、東亞考古学会調査地点よりさらに東側の丘陵斜面に箱式石棺側材が散乱と表記されている（図４）。この石棺材散乱地点が、山口麻太郎が言う墓地の一つであった可能性もある。原の辻閨繰遺跡と呼ぶ幡鉾川北側の山裾には弥生時代の石棺墓と甕棺墓からなる墓群が、複数存在していた可能性があり、今後の遺跡の確認調査が必要であると思われる。

２．石棺墓・甕棺墓の位置づけ

東亞考古学会による1954（昭和29）年の閨繰遺跡の調査では、北西から南東に向けて延びる丘陵斜面に平行するように列状に石棺墓が配置されていた（図23）。発掘調査時には石棺墓は１号石棺墓（ＣＩ）から確認されていたが、さらにその東側にも石棺墓群が列状に伸びていた可能性もあろう。

さらにその南側の斜面の落ち込んだ部分にP1～P7の甕棺墓群とP8～P16の甕棺墓群が大きく２群に分かれるように配置されている。弥生前期末にはP1・P3とP13・P15が、弥生前期末から中期初頭にかけてはP4とP9・P12が、弥生中期初頭にはP2・P6とP10・P16が、弥生中期前半にはP5・P7とP8・P11が併存して埋置されている。それぞれの墓群で弥生前期末から中期前半まで継起的に小児用の甕棺が造営されていた。

成人用の石棺墓は、現存しない２点の碧玉製管玉を含め副葬品が存在しないことから、年代の判定

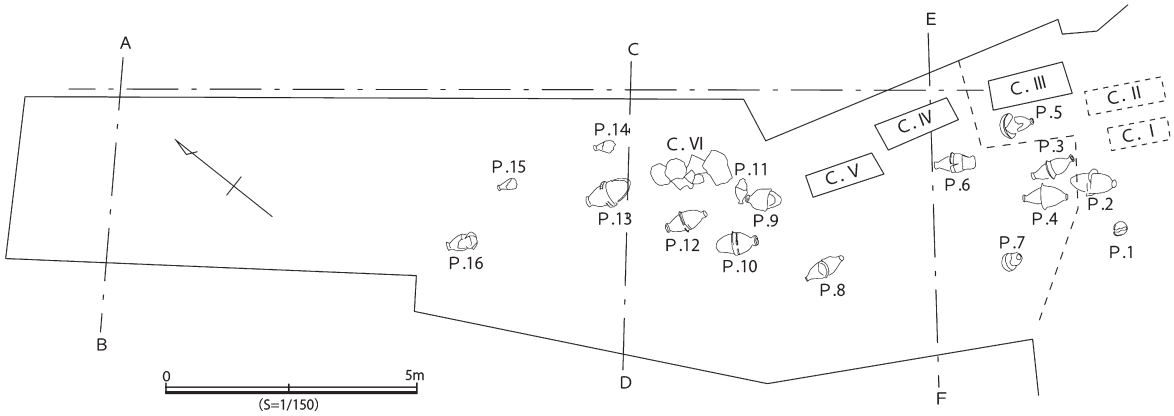


図23　東亞考古学会調査区の墓地

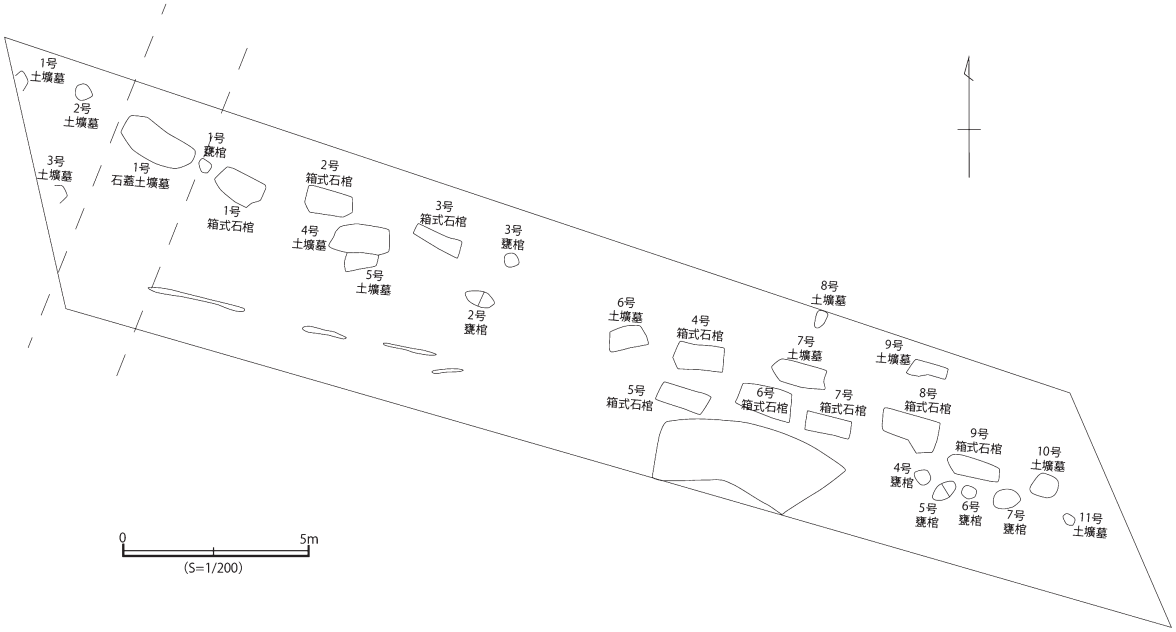


図24　長崎県教育委員会調査区の墓地

は難しい。石棺墓が小児用甕棺と同時期のものと仮定するならば、石棺墓も弥生前期末から弥生中期にかけて造営されたものと考えられる。

一方、別地点で1995（平成７）年に発見された長崎県教育庁の発掘調査地点は、箱式石棺墓と土壙墓が主体をなす（図24）。石棺墓・土壙墓と甕棺墓はそれらが組み合わさる形で大きく２群に分けられよう。箱式石棺墓１号から３号、土壙墓１号から５号、甕棺墓１号から３号、さらに１号石蓋土壙墓からなる西側の一群である。また、箱式石棺墓４号から９号、土壙墓６号から11号、そして甕棺墓４号から７号からなる東側の一群と区分できる。包含層出土遺物や甕棺墓は、須玖Ⅰ式から須玖Ⅱ式の弥生中期後半を主体とするものである。東亞考古学会調査地点の墓地群よりやや新しい段階に造営された墓地群であると判断される。東亞考古学会では土壙墓が検出されていなかったが、これは当時の発掘技術のレベルによって発見されなかっただけの可能性もあり、存在の有無は現在では判断しがたい。

幡鉾川を越え北側に広がる閏繰地区の山際には、1954（昭和29）年の東亜考古学会調査地点と1995（平成７）年の長崎県教育庁の発掘調査の２地点に成人用の石棺墓と土壙墓、小児用の甕棺墓が発見された。列状の石棺墓と２群の甕棺墓群からなる弥生前期末から弥生中期前半の東亜考古学会調査地点から、２群の墓群からなる弥生時代中期後半の長崎県教育庁の調査地点に、墓域が移動していることが理解された。また、前者は石棺墓が丘陵の落ち際の等高線に沿う形で列状の配置がなされていたのに対し、後者は石棺墓・土壙墓と甕棺墓が集塊状をなして配置されており、墓葬配置の時代的な変化が認められた。

（宮本一夫）

参考文献

武末純一1987「須玖式土器」『弥生文化の研究４ 弥生土器Ⅱ』、雄山閣
田崎博之1985「須玖式土器の再検討」『史淵』122
長崎県教育委員会1998『原始・古代の長崎県』通史編
長崎県教育委員会2002『閏繰遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第17集
長崎県教育委員会2005『原の辻遺跡　総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
壱岐市教育委員会2008『壱岐の古墳―壱岐島を代表する大型古墳―』
宮本一夫編2008『壱岐カラカミ遺跡Ⅰ―カラカミ遺跡東亜考古学会第２地点の発掘調査―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
宮本一夫編2009『壱岐カラカミ遺跡Ⅱ―カラカミ遺跡東亜考古学会第１地点の発掘調査―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
宮本一夫編2011『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ―カラカミ遺跡第１地点の発掘調査（2005～2008年）―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
宮本一夫編2013『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ―カラカミ遺跡第５～７地点の発掘調査（1977・2011年）―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

第２章　妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳

辻田淳一郎・齊藤　希・福永将大

第１節　東亞考古学会による壱岐島古墳調査の概要と本報告について

１．整理報告に至る経緯

本稿は、東亞考古学会の「第二班」が1953年（昭和28）の７月24日から８月15日にかけて、現在の長崎県壱岐市で行った「古墳調査」の報告である。調査は、旧芦辺町に位置する妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳の発掘調査を主体とする。これらの古墳の調査の内容および出土遺物については、これまで公表されておらず、詳細不明とされてきた。

2012年３月に、九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室の遺物収蔵室の整理作業を行っている際に、東亞考古学会考古資料として、妙泉寺古墳群および鬼の窟古墳の出土遺物が確認された。その後、図面・写真・日誌類もこれらと照合する形で存在を確認した。ただし写真は日誌の記載から当時撮影されたと想定される全てが確認できたわけではなく、本報告で掲載できたものはその一部であると考えられる。

本研究室では、2004年度以降、宮本一夫教授を中心として、カラカミ遺跡の発掘調査・東亞考古学会資料の報告をはじめ、壱岐島の調査を継続的に実施しており、その一環として、2013年度には東亞考古学会の閏繰遺跡出土遺物の整理作業を行っていた（前章参照）。それを承けて、同じく東亞考古学会の調査資料である妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳の図面・出土遺物の整理と報告書作成に向けた作業を実施することが計画された。実際の整理作業は2013年度から開始し、2016年度に報告書原稿を作成した。

２．東亞考古学会の調査と資料の概要

（１）東亞考古学会による古墳調査と九州大学保管資料

上述のように、東亞考古学会の「第二班」による古墳調査は、1953年の７月から８月にかけて行われている。詳細については以下の個別報告において述べるが、全体の概要を簡潔に整理すると次のようになる。

７月24日　調査開始：旧勝本町・芦辺町周辺の古墳の踏査
７月25日　旧芦辺町妙泉寺古墳群の踏査
７月26日　妙泉寺１号墳・７号墳の発掘調査を行うことが決定、７号墳の調査開始。
７月27日～８月４日　妙泉寺１号墳・７号墳の調査を並行して実施。
８月２日　妙泉寺古墳群の調査中に、「妙泉寺古墳調査を現在までの二基で中止、国分鬼ノ岩屋を発掘するようとの本部命令」があり、妙泉寺古墳群の調査終了後の８月５日に鬼の窟古墳の現地視察、８月６日から調査開始。
８月６日～10日　鬼の窟古墳の調査
８月11日～15日　撤収、調査関係者壱岐島から移動

以上のように、妙泉寺古墳群の調査が７月26日～８月４日の10日間、鬼の窟古墳の調査が８月６日～10日の５日間実施されている。九州大学で現在確認しているのは、この間記録された調査日誌・写真・墳丘測量図・石室実測図・遺物出土状況図などの図面類と、次節以降で報告する土器類・鉄器類などの出土遺物である。これらは閨繰遺跡の出土遺物と同様に、調査後に京都大学人文科学研究所に所蔵されていた資料が、故岡崎敬教授が所属していた九州大学文学部考古学研究室に移管されて現在に至っているものである。

（２）妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳のその後の調査と古墳の名称について

東亜考古学会が調査した妙泉寺１号墳・７号墳と鬼の窟古墳は、その後それぞれに調査が行われ、その成果が公開されている。

妙泉寺古墳群については、1953年に東亜考古学会による調査が行われた後、1998年８月17日から9月17日にかけて、長崎県教育委員会により、主要遺跡内容確認調査の一環として古墳群の地形・墳丘測量調査と、石室の測量・発掘調査が行われている（長崎県教育委員会2000）。この際の調査では、東亜考古学会の調査した古墳との対応関係が不明であったことが報告書で述べられている。

一方、鬼の窟古墳については、幕末の「壱岐名勝図誌」（1861）に古墳のスケッチと法量が記載され、早くから遺跡としてよく知られていた。東亜考古学会によって発掘調査が行われた後、1961年（昭和36）11月24日に長崎県の史跡文化財として指定されている。1970年には九州大学によって石室の実測図が作成されており、小田富士雄氏の論考（1980）において当該実測図が掲載されている。その後、1987年８月に台風の被害により羨道入口右側壁が崩壊したため、危険防止のための修復を主な目的とした調査が1989年に行われ、その際墳丘測量・石室の清掃と実測が実施されている。この調査において、石室周辺から須恵器や新羅土器などが検出された。調査後に、石室周辺が修復・整備されている（芦辺町教育委員会1990）。

以上のような調査により、各古墳の墳丘・石室について詳細な実測図が作成され、また遺物も出土していることから、その成果にもとづきこれまでも検討が進められてきた。その一方で、1953年の調査によって出土した遺物の実態が不明である点や、特に妙泉寺古墳群については、東亜考古学会が調査したのが現存するどの古墳に対応するのかといった点が不明である点などが課題となっていた。こうした点について、次節以下で具体的に検討する。その前に、ここでそれぞれの遺跡の名称について確認しておきたい。

まず妙泉寺古墳群については、後述するように、東亜考古学会の調査日誌では１号墳から８号墳までの番号が付されており、このうち実際に発掘調査が行われて遺物が存在しているのは「１号墳」と「７号墳」の２基である。日誌記載の分布図と石室実測図等から、東亜考古学会の「１号墳」は長崎県教育委員会調査の「１号墳」に、東亜考古学会の「７号墳」は同様に長崎県教育委員会調査の「３号墳」に対応することが判明した。このため、本報告に際して東亜考古学会調査の「妙泉寺７号墳」を現在の登録名称である「妙泉寺３号墳」として報告することも検討したが、後述するように、遺物の保管状況等から混乱が生じるおそれがあったため、本稿では調査当時の名称に従い、「妙泉寺７号墳」として報告する。

また鬼の窟古墳については、東亜考古学会の調査においては「鬼ノ岩屋古墳」として記録されており、こちらも東亜考古学会調査当時の呼称との齟齬が生じている。これについては、前掲の芦辺町教育委員会による報告（1990）に際して、「本書では、史跡指定名称である「鬼の窟古墳」の呼称で統一する」とされたことに鑑み、本稿でも「鬼の窟古墳」を正式名称とし、報告することとした。

３．整理・報告の経緯と経過

（１）報告書作成の方針

今回の報告に際しては、上記のように東亜考古学会の調査以降に地元で墳丘の測量調査・石室の調査が行われているため、その成果との関係についてあらかじめ検討した。東亜考古学会の調査では、墳丘に関しては妙泉寺古墳群については１ｍコンターの測量図が作成されているものの、鬼の窟古墳については略測図のみしか作成されていない。このため、東亜考古学会作成の測量図とともに、長崎県教育委員会・芦辺町教育委員会作成の測量図をあわせて掲載する。また石室についても、東亜考古学会作成の実測図と両教育委員会作成の図面をあわせて掲載し、両者を対比できるようにした。遺物の出土状況等の説明については東亜考古学会実測図に、法量等は後者に依拠することとする。遺物については、これまで未公開であった1953年の東亜考古学会発掘調査資料を報告する。長崎県教育委員会・芦辺町教育委員会の調査での出土遺物についても、必要に応じて本書にも掲載した。

また当時の日誌は、調査の進捗状況と具体的な内容を知る上で極めて有益である。このため日誌の内容について、日誌内の略測図も含め、妙泉寺古墳群（１号墳・７号墳）と鬼の窟古墳に分割して可能な範囲で再現して掲載した。

（２）出土遺物の帰属について

遺物の整理作業を進める過程で、１つ重大な問題が発生した。それは、遺物の保管状況に関わる遺物の帰属という問題である。今回報告する東亜考古学会資料は、最初に確認した2012年３月の時点では全くの未整理であり、調査時にラベルとともに新聞で包まれた状態で箱詰めされたまま1953年の調査から約60年近くが経過しており、一部でラベルの腐食などがみられた。また新聞による包装紙に「妙泉寺１号墳」「鬼の窟古墳」といった古墳名が明記されておらず、妙泉寺古墳群の遺物のみとして整理を進めていた箱の中に、鬼の窟古墳の遺物が分離されずに混在して保管されていたことが整理作業の途中で判明したため、これらを識別することが課題となった。この点について検討・協議した結果、以下のような形で鉄器類の帰属を区分して報告することとした。

まず調査日誌や遺物出土状況図から、妙泉寺１号墳からは鉄器が出土していないことが判明したため、これを除外した上で、鉄器類全体について、妙泉寺７号墳と鬼の窟古墳のどちらから出土したものかを確認する必要が生じた。区分の手掛かりとしたのは、鉄器に伴うラベルと、両古墳群の遺物出土状況図である。

ラベルには青鉛筆で記載されているものと、赤鉛筆で記載されているものがあった。検討の結果、青鉛筆で記載されているラベルには「妙泉寺古墳」と書かれており、確実に妙泉寺７号墳出土の鉄器に伴うラベルは青鉛筆で記載されていることが判明した。

また、ラベルには遺物の取り上げ番号が記載されたものがあった。遺物出土状況図記載の遺物取り上げ番号を確認した結果、妙泉寺７号墳では取り上げ番号は「21」までしか振られていなかった。そのため、取り上げ番号「22」以上が記載されているラベルに伴う鉄器は鬼の窟古墳出土のものである可能性が高いことがわかった。

取り上げ番号「21」以下のものについても、同番号が青鉛筆と赤鉛筆の両方で記載されている場合、青鉛筆記載のものは妙泉寺７号墳、赤鉛筆記載のものは鬼の窟古墳から出土したものと判断することができた。その際、遺物出土状況図に書かれている遺物の形態等と該当資料の特徴を比較検討し、両者が同一であるかどうかの確認も行っている。

このように、ラベルから得られる情報と、両古墳の遺物出土状況図から得られる情報を総合的に検討しながら区分作業を行っていったものの、どうしても所属がわからない鉄鏃および土器類が存在した。数量的には多いものの、これらについては無理に区分せずに、「不明」として報告することにした。以上から、「不明」分の土器類・鉄器類については、妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳群に帰属することが確実な遺物とは分離して、最後にまとめて報告することとした。

このように、遺物の確認時点で調査終了から約60年が経過していたこともあり、当事者でない我々が整理作業を行った結果、重大な情報が欠落することになっていないか危惧するところである。次節以降の報告は、上述のような検討を行った上で、慎重を期しつつ帰属を判断した上での報告であるが、以上の点について、御理解いただければ幸いである。

（辻田・福永・齊藤）

（3）整理・報告書作成作業の経過と整理作業参加者

整理作業は2013年度から2016年度まで、九州大学文学部における考古学実習の一環として断続的に行った。遺物の実測・トレースをはじめとした整理作業は、辻田による指導の下、九州大学大学院人文科学府学生・九州大学文学部学生を主体として行った。2015年度から2016年度にかけて、これらの成果を齊藤希（同大学院人文科学府博士後期課程）・福永将大（同大学院比較社会文化学府博士後期課程）の両名が中心となって整理した。最終的に齊藤・福永と辻田が分担して執筆を行い、辻田が全体を統括した。齊藤・福永執筆分および全員に係る執筆分については当該項目の末尾に記している（齊藤は土器類・装身具類の報告、福永は刀剣類以外の鉄器類の報告を執筆）。特に記載のない項目は全て辻田の執筆である。遺物写真は土器類を齊藤、鉄器類を福永が撮影した。遺構の記録写真は東亜考古学会撮影分以外辻田撮影である。各年度の整理作業参加者は以下の通りである（所属は当時）。

【2013年度】柿添康平、金子真夕、田中麻美（人文科学府修士課程）、梶原慎司、末廣いづみ、萩原尚樹、久田真奈美、梶佐古幸謙、櫻木織部、舟木太郎、森大樹、吉田賢多郎、武下智美、中野瑞香、古田英彦、牧野朱莉、三浦萌、カルロス・ヴェレッキア（文学部）

【2014年度】柿添康平、戴玥、富宝財（人文科学府博士後期課程）、原梓（同修士課程）、萩原尚樹、梶佐古幸謙、櫻木織部、森大樹、吉田賢多郎、舟木太郎、松尾泉、武下智美、中野瑞香、古田英彦、牧野朱莉、三浦萌、連景伊、平井貴大、曹絲縈（文学部）

【2015年度】齊藤希、戴玥、富宝財（人文科学府博士後期課程）、福永将大（地球社会統合科学府博士後期課程）、原梓、曹絲縈（人文科学府修士課程）、武下智美、中野瑞香、古田英彦、牧野朱莉、松尾泉、三浦萌、連景伊、平井貴大、岩田英信、新谷広太郎、田中利沙、長谷川桃子、藤尾徳馬、山下理呂（文学部）

【2016年度】齊藤希（人文科学府博士後期課程）、福永将大（地球社会統合科学府博士後期課程）三浦萌（人文科学府修士課程）、平井貴大、岩田英信、新谷広太郎、田中利沙、長谷川桃子、藤尾徳馬、山下理呂（文学部）

調査・整理報告に際しては、長崎県埋蔵文化財センターの片多雅樹氏、白石渓冴氏、壱岐市教育委員会の田中聡一氏、大野城市教育委員会の上田龍児氏より多大な御教示・御協力をいただいた。片多氏には妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳出土鉄器類の一部について、錆落とし・保存処理と分析を実施していただいた。記して厚く御礼申し上げます。

４．本報告の課題：壱岐島古墳時代研究の動向

ここで、本稿での妙泉寺古墳群および鬼の窟古墳の調査・研究という観点から、壱岐における古墳時代研究の動向と本報告の課題について整理しておきたい。図25は、壱岐島における主要古墳の分布を示したものである。従来から知られているように、壱岐島では前期の前方後円墳などの存在が不明であり、５世紀後半代における、初期横穴式石室を伴う大塚山古墳（径14m の円墳）の出現が１つの画期となる。それ以降、特に６世紀中葉以降、旧勝本町の亀石付近を中心に、対馬塚古墳（全長63m）・双六古墳（全長91m）の２基の前方後円墳が築かれる。その後、６世紀末から７世紀前葉前後の短期間のうちに、この周辺で相次いで４基の大型円墳と多数の群集墳が造営され、壱岐島の古墳造営においては最盛期となる。これら２基の前方後円墳と４基の大型円墳は、2009年（平成21）に「壱岐古墳群」として国史跡に指定されている（田中2007・2009・2012a・b）。こうした壱岐古墳群の築造を経て、７世紀後葉以降になると古墳の築造が減少したとみられる。これらの壱岐古墳群に近接して立地する壱岐嶋分寺は、８世紀前半頃から造営が始まり、９世紀代にピークを迎えたとみられ、当初は壱岐直の氏寺として造営された後、８世紀後半以降に壱岐嶋分寺として転用されたものと想定されている（高野2012）。

本稿で対象とする鬼の窟古墳は、この壱岐島中央部の古墳密集地帯である壱岐古墳群の中でも、その最終段階に造営されたとみられ、石室は島内最大規模、墳丘も島内で２番目に大きい大型円墳である。他方、妙泉寺古墳群は、壱岐古墳群と直線距離で約2.5km 離れた、壱岐島中央部のやや東寄りに位置する数基の円墳からなる古墳群である。

こうした壱岐における古墳の変遷とその意義については、これまで多くの研究が行われてきた（例：小田1980・2012；宮崎1992；蒲原1995；藤田1998；吉村2000；尾上2003；小田・下原2006；田中2007・2009・2012；広瀬2010；川口2012a；竹中2012）。特に各古墳の測量調査や発掘調査による基礎資料の蓄積が進んだ1990年代～2000年代以降、各古墳の造営年代や遺構・遺物からみた対外交流・東アジア的国際情勢の中での位置づけといった研究が活発に行われている。また2012年には壱岐市教育委員会により悉皆的な分布調査の成果がまとめられ、現在の島内各地の古墳の状況を一覧できるようになっている（壱岐市教育委員会2012）。こうした調査・研究動向において具体的に論点となっているのは、①横穴式石室の年代・系譜、②半島系土器、特に新羅土器の様相、③文献史学の成果との接合といった問題である。

①の横穴式石室については、大きく年代と系譜の２つの問題がある。年代については、特に壱岐古墳群の大型円墳である、兵瀬古墳・笹塚古墳・鬼の窟古墳・掛木古墳について、出土須恵器の年代にもとづき６世紀末から７世紀初頭前後の短期間に相次いで築造されたとする見方（例：小田・下原2006；田中2007・2009・2012a・b）と、近畿地域の横穴式石室の形態的比較という観点から、築造が６世紀末～７世紀前葉に段階的に築造されたとする見方（例：広瀬2010）が提示されており、いずれの年代観を採るかによって壱岐島における巨石墳の終焉についての理解が若干異なってくる。またこれに関連して、壱岐古墳群において最後に造営されたのが、本稿で検討する鬼の窟古墳であるのか、刳抜式石棺をもつ掛木古墳であるのか、といった点も問題となっている。これについては、本稿において、鬼の窟古墳の出土遺物の検討により、この問題に関して一定の理解を示すことができる可能性がある。特に横穴式石室の形態変遷と出土須恵器の年代観の対比により、造営年代および追葬・埋葬後の墓前祭祀の年代幅について、どの程度限定できるかという点が問題となる。以上のように、鬼の窟古墳の遺物の年代観が、壱岐古墳群の変遷と実年代の定点を考える上で重要な課題であるというこ

とができる。この点は、次の②半島系土器・新羅土器の問題ともあわせて、７世紀初頭前後の対半島情勢といった問題にも深く関わっている（cf. 田中2007；広瀬2010）。

また妙泉寺古墳群については、１号墳がいわゆる単室両袖型横穴式石室、７号墳が複室両袖型横穴式石室であり、両者の間に時期差があることが知られているとともに、１号墳については６世紀代の北部九州の在地的な横穴式石室であることから、それらがどのように壱岐島で出現したのか、またその後どのように壱岐島内で展開するのかがこれまでも検討されてきた（例：田中2007・2009・2012）。これについては、田中聡一氏が指摘するように、基本的には妙泉寺古墳群は、１号墳を嚆矢として出現し、北部九州と密接な関係を持ちつつ、壱岐島内の在地的な上位層の墓として展開したものと考えられている（田中2007・2012b）。一方で壱岐古墳群における三室構造横穴式石室の系譜については、前方後円墳の終焉および大型円墳への転換との関係（吉村2000）や北部九州の周防灘沿岸地域との関連が深いことなどが指摘されている（小田2012）。こうした点において、対馬塚古墳・双六古墳などの前方後円墳や、その他の壱岐古墳群における大型円墳との関係、また北部九州との関係の実態があらためて問題となる。特に本稿で課題となるのは、妙泉寺古墳群でどのような遺物が出土しており、それが壱岐古墳群およびその周辺での副葬品とどのような共通性あるいは差異がみられるのかといった点である。

②壱岐島出土の半島系土器、特に新羅土器の様相については、特に2000年代以降資料の増加とともに研究が活発に行われている問題である（例：小田1978・1988；洪2006・2012；寺井2012；上田2012）。６世紀代から７世紀代にかけて、北部九州や壱岐島では非常に多くの新羅土器が出土しており、半島との活発な交流を物語る資料として注目されてきたが、壱岐島では特に古墳での副葬品として多く出土しており、福岡平野などでの運搬容器類としての新羅土器の多さと対比されることが指摘されている（上田2012）。従来の調査で鬼の窟古墳から新羅土器の出土が知られているが、今回の東亞考古学会調査資料の整理において、まとまった量の新羅土器が出土していたことが判明しており、これにより壱岐島における新羅土器の様相がより具体的に明らかになることが期待される。

③文献史学の成果との接合については、特に壱岐島の６世紀代における北部九州系横穴式石室の出現と磐井の乱との関係、壱岐氏・壱岐国造・壱岐直と壱岐古墳群の関係、６・７世紀前後における東アジアと倭国との関係、そこにおける壱岐の位置づけ、といった問題と深く関わっている（例：小田1980；田中2007；広瀬2010；堀江2010・2012a・b・c）。また奈良時代以降の壱岐嶋分寺の展開（高野2012）や島府・郡家・交通路（木本2012）なども検討が進められている。こうした一連の問題意識と研究成果は、中世まで視野に入れた形でまとめられている（細井編2012）。妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳の出土遺物および年代観の再検討は、これらの問題を考える上でも一定の貢献をなすであろう。

以上のように、本稿が対象とする妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳は、それぞれ、磐井の乱前後における壱岐島での北部九州系横穴式石室の出現と在地化およびその後の展開といった問題、新羅土器にみられるような半島との交流、また壱岐古墳群の展開・終焉とその背景を考える上で直接関係する重要な遺跡である。こうした観点から、両遺跡の出土遺物とそれにもとづく年代観の再検討を行いつつ、７世紀前後の東アジア史におけるその意義を明らかにすることを課題としたい。

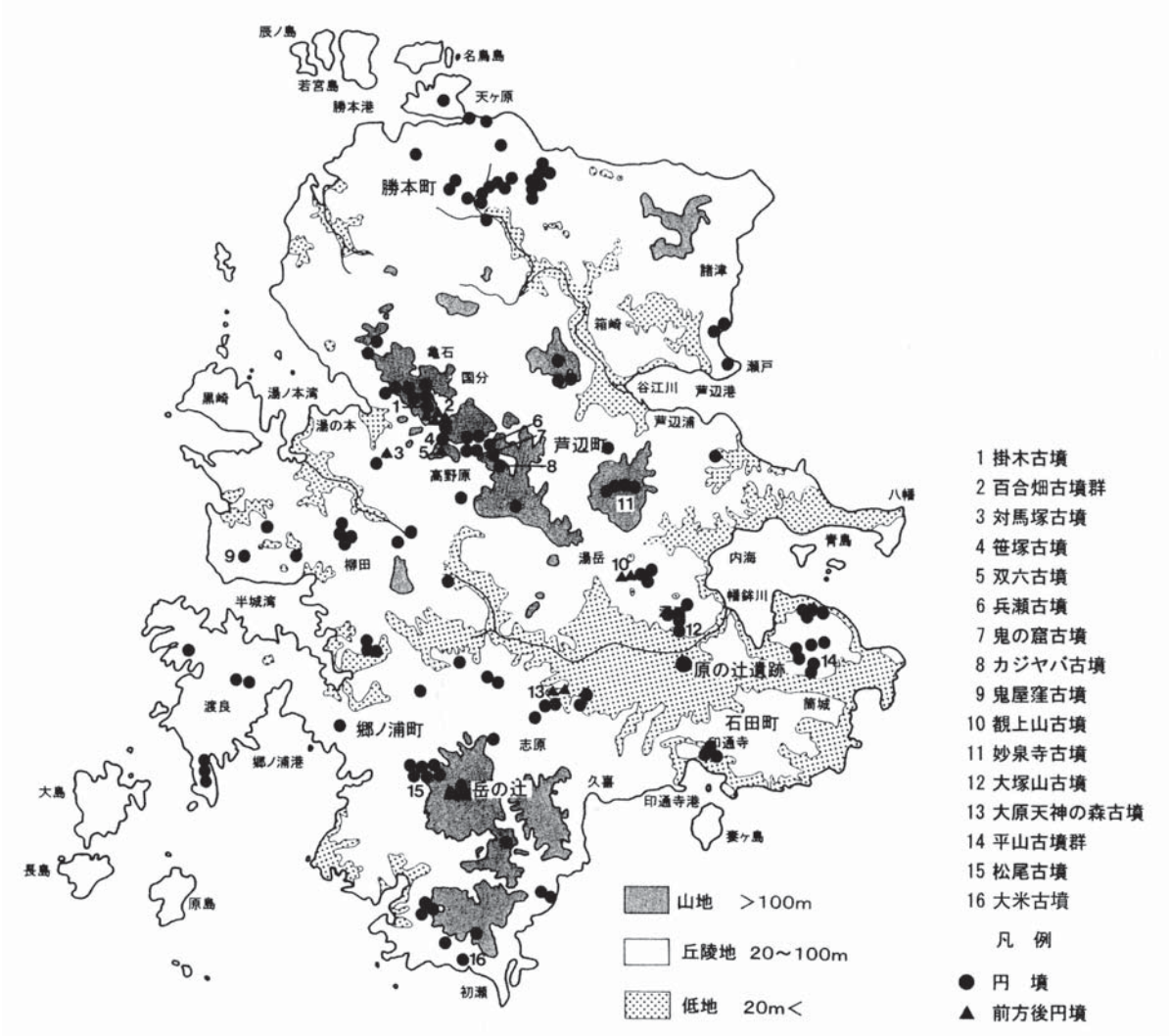


図25　壱岐島における主要古墳分布図（壱岐市教育委員会2006より）

第２節　妙泉寺古墳群

１．妙泉寺古墳群の位置と環境

妙泉寺古墳群の立地と周辺の現状について、長崎県教育委員会（2000）の報告書（以下、県報）にもとづき説明する。妙泉寺古墳群は、壱岐市芦辺町中野郷東触に所在する（図26）。近隣の芦辺港まで直線距離で約２km、鬼の窟古墳までは同じく約2.5km、壱岐嶋分寺までは同じく約２kmという位置にある。グーグル・マップによれば、妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳との間は、現在の車道・遊歩道を通って徒歩で最短ルートを行けば約４km、１時間弱の距離である。妙泉寺古墳群の立地については、県報において以下のように述べられている：「島の中央部のやや東側に当たり、高尾山（標高約142m）から派生する北側丘陵上に位置し、稜線に沿って町道高尾線が走るその道路沿いの標高約126～134mの間に現在４基の古墳群が立地する。（昭和27年８月の東亞考古学会の調査時の当古墳数は、「10基あまりの円墳が散在。その内には破壊され石室の天井石露出しているものも２、３あった」。と

の記録がある。)」(県報：p.30)。周辺は比較的平坦な地形が広がっており、妙泉寺古墳群は林に囲まれて現在も良好に保存されている（図27・図版12-13)。

第１節でも述べたように、東亜考古学会の調査では、１号墳から８号墳までの番号が付されており、図27の１号墳が東亜考古学会の１号墳、図27の３号墳が東亜考古学会の「７号墳」に対応する。したがって、本稿で報告するのは、図27の「１号墳」と「３号墳」ということになる。以下図27の「３号墳」を、「妙泉寺７号墳」として説明する。なお以下での調査日誌の検討に先立ち、他の墳丘も含めた対応関係を整理しておく。

（東亜考古学会1953年調査：本稿）	（図27：長崎県教育委員会2000）
１号墳	１号墳
２号墳	５号墳か
３号墳	２号墳ｂ
４号墳	２号墳ａ
５号墳	——
６号墳	——
７号墳	３号墳
８号墳	——

県報では、調査時に「４号墳」が消滅していたことが記されており、これが東亜考古学会の５号墳・６号墳・８号墳のいずれかに対応するとみられる。

以下で妙泉寺１号墳・７号墳の報告を行う前に、県報の２号墳（ａ・ｂ）および５号墳の概要について、県報にもとづき確認する。県報の「２号墳」は、上記のように東亜考古学会では３号墳と４号墳に区分されており、県報でもそれに対応するように、２つの墳丘の間の空間をもって「２号墳ｂ」と「２号墳ａ」に区分され、径15m の円墳が２基隣接するものと理解されている。測量のみの調査であり、石室等の詳細は不明である。両者の関係については以下のような記述がある：「石室の存否を含む墳丘内の状況は未知であり、円形のマウンドが連結したひとつの古墳であるのか、独立した２つの円墳であるのかは断言できない。等高線のラインからみると、ａ号墳とｂ号墳は標高124.75m から134m で、連結しているようであるが、墳丘全体の形状やフォルムからやはり別個のもの〔と〕考えるのが妥当であろう」(県報：p.43)。以上のように、１つの古墳である可能性を検討しつつ、最終的に東亜考古学会の調査時と同様に、別の古墳として位置づけられている。

また県報の５号墳（東亜考古学会の２号墳と推測）は、以下のように報告されている：「円墳で、墳頂高134.65m、径約10m、墳丘高約90cm を測る。墳頂近くに小さな孔が開いており、そこから石室内の板石小口積みの様子が、ごくわずかだが観察できる」(県報：p.43)。

以上のように、現状で主体部の調査が行われたのは、東亜考古学会の１号墳と７号墳に限定される。以下では、１号墳と７号墳に記述を分け、それぞれについて東亜考古学会の調査成果について、①日誌、②墳丘測量図、③石室・遺物出土状況の実測図・写真、④出土遺物の順に検討を行う。①の日誌については、１号墳と７号墳の調査が同じ調査員によって並行して行われているため、調査全体に関わる部分を先に１号墳の調査分とあわせて掲載する。②～④では、長崎県教育委員会の調査時の成果・出土遺物についても適宜参照・比較しながら検討を進めたい。

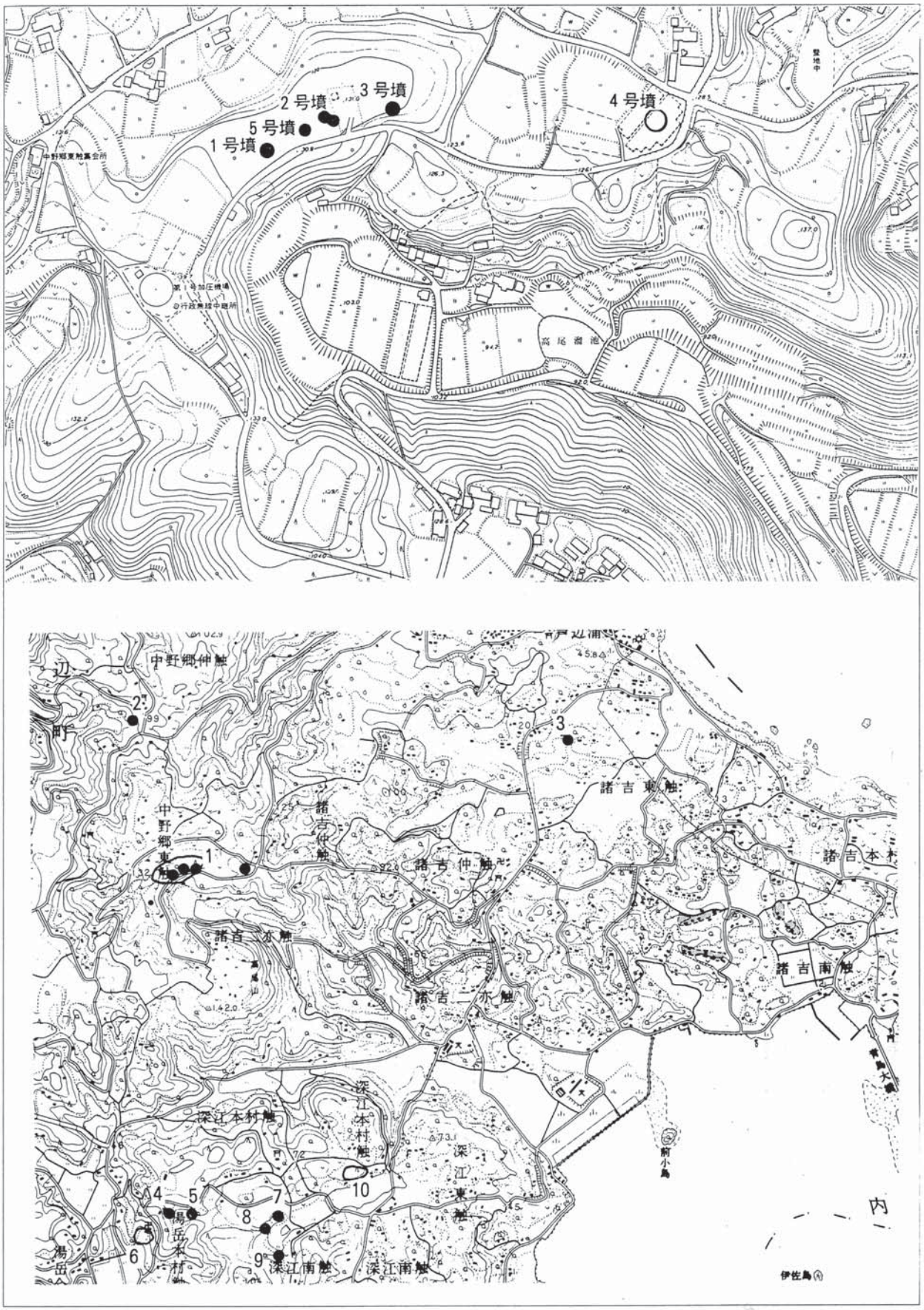


図26　妙泉寺古墳群と周辺の地形（長崎県教育委員会2000）

２．妙泉寺１号墳

（１）東亞考古学会の調査日誌

以下、東亞考古学会第二班の古墳調査日誌を掲載する。あらかじめ述べておくと、ここでの調査参加者は、樋口隆康氏・林巳奈夫氏・川端（西谷）眞治氏の３氏（調査員）と地元の青年団有志等の作業員であり、調査員３氏は固定である。見学者や臨時の調査参加者（有光教一氏など）については、適宜本文中で言及されている。日誌中では、「樋口・林・川端」の順で記名される日が最も多い。また７月25日の記述とそれ以降の日誌の筆跡から、毎日各古墳ごとに３氏がそれぞれに記述を行っているようであるが、記名がなく識別が困難であるため、ここでは３氏共通の記録として扱った。作業人員の動員や道具の借用、地権者との交渉など、田河町役場・那賀村役場をはじめとして地元との協力体制を構築している様子が日誌からも窺われる。なおこの田河町と那賀村が調査の２年後の1955年（昭和30）に合併されて芦辺町となっている。このうち田河町は1947年に旧田河村から町制施行により田河町になったもので、本文中では「田川村」と記載されている箇所も散見されたが特に修正せずそのまま採録した。

以下、まず妙泉寺古墳群・１号墳に関する部分を抜粋する。なお元の日誌には曜日の記録はないが、当時の日付から復元した曜日を参考のため付記している。

【第二班　古墳調査】日誌（抄）

○昭和28年７月24日（金）快晴　川端・林・樋崎〔引用者註：樋口氏の誤記か〕

古墳の分布踏査。勝本町亀石周辺。〔引用者註：遺跡名は未詳であるが、兵瀬古墳や周辺の百合畑古墳群などの踏査が行われたようである。鬼の窟古墳についてもこの日に踏査が行われている。〕

夕刻　役場に村長を訪問。帰宅。

○７月25日（土）曇後晴　樋口・川端・林

朝八時すぎ、田川村農業協同組合のオート三輪車にて那賀村役場に向ふ。同役場にて那賀村村長武岡利人氏に面会。同氏もオート三輪車に同乗して予定の宿会村長宅に行く。

十一時過ぎ、田川村、那賀村村界にある妙泉寺山古墳群の下見、発掘古墳の選定、地主との交渉に出かける。同古墳群の西端に位置する一きは□立って大きい同墳を選ぶ。（今回の古墳発掘地に妙泉寺古墳群を選んだのは樋口氏であるが、同地に行ってみて、同氏はどうも、勝本町新城□触打田堂藤雨堤（？）（昭27年8.7. 同記）古墳群と思ひ違ひをしてゐたことが判明！口の開いた古墳のないのに面喰ふ）

地区発掘予定の古墳の地主を立石氏、森村朝光、山口義員氏等に尋ね回ったが、どうも、十人近くの共有地らしく、その地主は田河町の人が多い、といふこと以外にわからず、仕方なく、田河村役場に行く。土地掛りの人の協力、村長さんの取り計らひで、明日現地に同町の役人の人に来てもらって、その地点を示して、所有者を確認し、了解をえてもらふことにして役場を辞去。土地掛りの人の調べてくれた、発掘地の共同所有者の一人山川重次郎氏を訪ねる。同氏も今夜部落中の共同所有者達を調べて、明日現地に来てくれることになる。

要之、今回は地主探しに丸半日足をスリコギにして那賀村を跋渉するに費やしたわけである。尚ほ、妙泉寺古墳群地側丘陵に祝部土器片の散布をみる。

（林記）役場にて判明した妙泉寺山の地名は田河町諸吉、二亦触字滝の上（立石重孝、山川重次郎

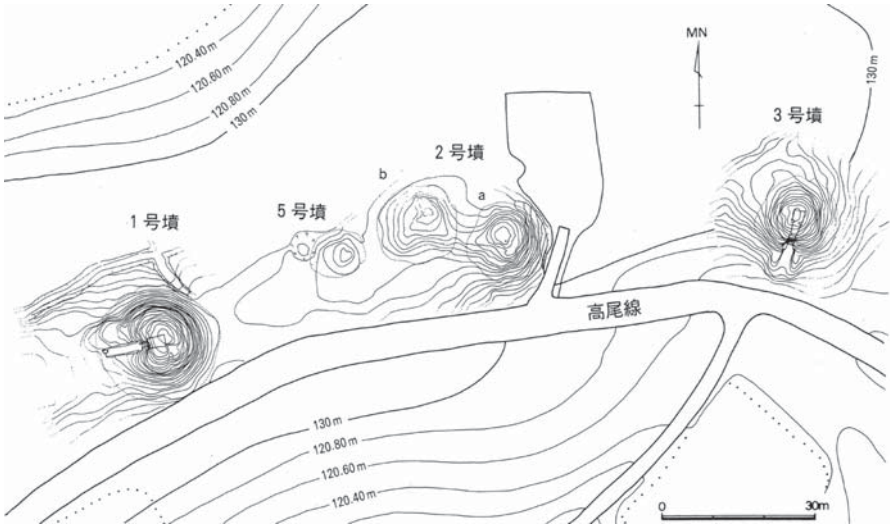


図27　妙泉寺古墳群の分布図（長崎県教育委員会2000）

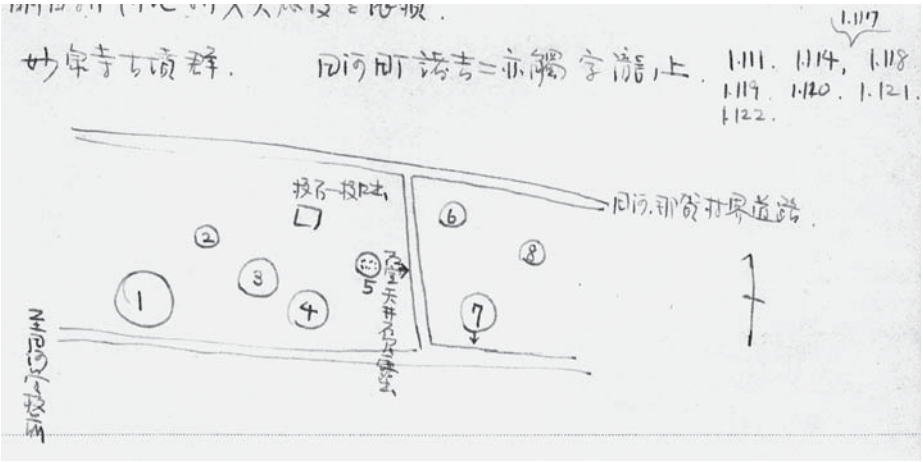


図28-1　7/26：妙泉寺古墳群分布図

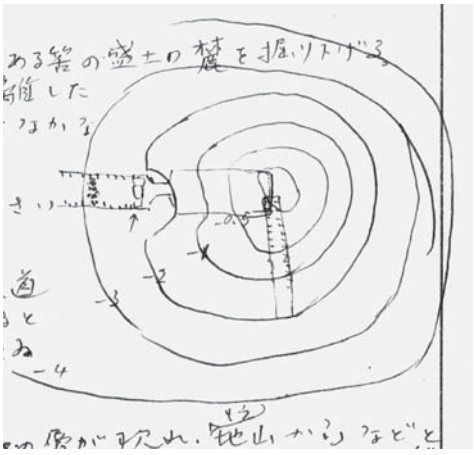


図28-2　7/31：１号墳墳丘トレンチ・石室の位置関係模式図

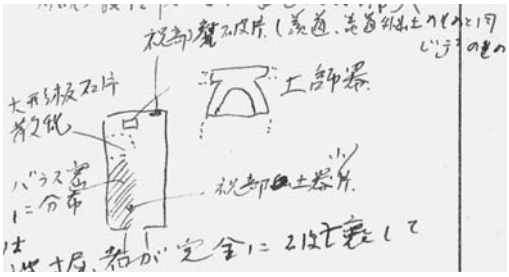


図28-4　8/1：
１号墳石室内遺物出土状況略図

図28-5　8/2：
１号墳羨道部模式図

図28-3　7/31：１号墳出土塗金鉄製馬具

以下十数名の共有地）なり。

○７月26日（日）小雨後晴　樋口・林・川端

９：00　現地に到着。発掘古墳所在地地主、立石重孝、山口義員、山川重次郎の三氏来り。発掘の承諾を得。この土地は十数名の共有地なるため他の地主に対しては三氏及び田河町役場より連絡していただくこととする。妙泉寺古墳群は現在八基を認めるが、先ず第１号、第７号を発掘することに決定。第７号〔註：第１号の誤記か〕は群中最大のものにして完全に残り、第７号は横穴式石室にして略南面して口を開き入口部は封土が崩れて人一人がようやく匍って入れる程度の空間を残している（図28-1：妙泉寺古墳群分布図）。

約束の人夫が来ない為取敢ず三名にて第７号の流入土を除去する。羨道天井石の外、両側壁の中間より祝部盌（高台付）、鉄刀破片、鉄製辻金具半欠、赤色素焼皿（糸切痕）破片を採取。遊離したものと思はれる。

13：00　水野・高橋視察に来る。14：00　瀧川敏氏来観。田河町役場よりの交渉の結果、宿舎を明日より同地山口義員氏宅に変更。明日より同地より人夫応援を依頼。

【妙泉寺１号墳】

○７月27日（月）晴　樋口・林・川端　人夫２名

那賀村村長武岡利夫氏宅を辞し宿舎を山口義員氏宅に移す。樋口・林は第１号墳を平板により測量。川端は人夫２名を督し第７号墳を発掘。

（１号墳）頂上から七方に放射状に切り開いて外形を1/100にて実測。きれいな円墳。西南方、丘陵に沿ってやや高く馬背状にコントルがのびて行くが、前方部であるか自然の丘陵であるかは未だ確かめず。灌木が密生していゐて見通しがきかぬためなり。

○７月28日（火）晴ひどい暑さ！　樋口・林・川端　人夫２名

林が人夫二人に手傳ってもらって入口を探す。第一日に掘りかけた南側のトレンチを掘り進めたが手答へなし。三尺ばかりの鉄棒を借りて来て、頂上より二三米の辺りを打ち込んで廻ったがやはり手答へなし。

最初のトレンチを頂上平坦部の外堀の線まで、頂上から深さ２ｍばかりに掘り進めてみたが、やはり横穴の構築に打ち当ることが出来なかった。

○７月29日（水）晴　樋口・林・川端　人夫４名

昨日につづき石室探索のトレンチを掘り拡げる。一時間も作業をすると、トレンチの奥近く杯の蓋が人夫の鋤先にやって壊れる。地表下1.3m 位。古い割れ口があり、偶然の混入だらうと思い、掘り進めることにしてもう一鋤打ち込むと、また杯の身が砕けて壊れた。これはいかんといふことになつて、移植鏝で慎重に掘ると、杯、高杯が続々と出土。トレンチの巾より東南方にも分布してゐるらしいのでもとのトレンチと直角にもう一つトレンチを掘り足す。その結果、頂上平坦部の縁に杯、高杯を置いて何かの行為を行ひ、上から更に1.5m 位の土を盛り足したらしいことが判明。杯は大凡東南に向って傾き、東南のもの程位置が低く、もともと蓋の上に身を重ね合せて置かれたものも、身が蓋の東南の方に転げ出したものもある。写真撮影、実測。処女墳の穴探しのトレンチが、思いがけない発見を生んだ。穴探しは明日に延期となる。

採取遺物：第１号：杯（蓋、身別々に数へて）23コ、高坏一コ

○７月30日（木）晴　樋口・林・川端　人夫４名

昨日のトレンチを掘り進む。昨日の土器の排列がやや間隔をあけて杯蓋身一組、身一個、提瓶一コのグループを以て前日の北側に並んでゐることを発見。杯身１コには朱を混えた土が入ってゐた。昨日の□□（　　）その例をみた。これらの実測、撮影を終へ、取り上げた後、その下を掘り下げ、天井石の一部を掘り当てた。三時頃。

四時過ぎ、それが石室の一つの隅であることを確かめ、後、五時頃人夫の人がその石の一つを取り除け、その穴から首を突っ込んで石室中を検分、それが玄室東南隅であることを知る。石室の奥壁は大きな平石の壁、側壁は平石積み、天井は平たい板石を以て築き、我々が取り除けたのは奥壁の大石と天井石の間につめた石である。石室内部は羨道（前室？）につづく入口の楣石の高さまで泥が入り、内面に朱を塗る。千何百才の処女（？）墳の内部ものぞいてみれば何の変哲もなし。石室内の□在。床面墳頂より－4.60m。

○７月31日（金）晴　樋口・林・川端　人夫４名

昨日確かめた石室の方向を基にし、入口のある筈の盛土の麓を掘り下げる。

大形甕の破片二三個出土し、時々遊離した板石が現れるが、入口らしきものはなかなか現れず。大分気をもむ。

晝休み直前に羨道の天井石現る。その前方50cmばかりに入口をふさいだらしい小口積みの積み石出土。この部分の盛土がえぐれてをり、羨道天井石と蓋石の間に隙間があるところをみると、少なくとも入口の部分は攪されてゐるか？羨道天井石が大分下の方にあるので掘り下げてゆくと小粒のバラスの層が現れ、「もう地山か？」などと人夫と問答してゐるうちにその辺りから塗金鉄製馬具一片出土（図28-2）。如上〔図28-3：方形の金具に鋲２点が施されたような模式図〕。

その部分の調査は後に残して、石室内の泥出しに専念。明日は遺物が出始めよう。

○８月１日（土）晴　樋口・林・川端　人夫３名

石室内部の清掃。結果右図の如し（図28-4）。遺物殆ど皆無に近し。いささか落胆。

北壁東辺に散乱せる大形板石は何らかの構造を成してゐたものを、盗掘者が完全に破壊してそこに形附けたものか。

この板石が、床面をなすバラス敷きの床の直上に在り、遺物の残存が皆無に近いことからみて、この古墳構築後まもなく、遺物が床上に露出していまだ土を被らない時代に盗掘が行はれたものか。

床面をなすバラスにも朱が附着。床面は入口より奥に向かって下向に傾斜。

○８月２日（日）晴　樋口・林・川端　人夫５名

妙泉寺古墳調査を現在までの二基で中止し、国分鬼ノ岩屋を発掘するようとの本部命令あり。

昨日に引続き羨道外のバラス敷きの斜路を清掃、羨道入口よりやや南にづれ、南に傾きながら長さ約３m、巾約１mの坂を形作る。バラスの間に塗金鉄金具断片その他鉄小片、祝部杯破片を相当に混入す（図28-5）。

高橋さんが写真撮影。一応発掘を完了。

○８月３日（月）晴　樋口・林・川端（有光）人夫５名
　樋口は国分鬼ノ岩屋調査設営の為那賀村に到り村当局の援助を依頼。
　（１号墳）石室 plan section　実測未了1/10。女子人夫３名南側トレンチ埋戻。

○８月４日（火）晴　樋口・林・川端
　石室セクション　奥壁実測終了。
　遺物採取、入口前砂利面を剥したところ、ガラス玉３個（内１面破片）。玄室入口附近よりも同じくガラス玉１個出土。玄室前壁見上、羨道入口俯瞰写真２枚－小型。
　本日を以て妙泉寺古墳群第１号、第７号調査を終了す。

（２）日誌からみた１号墳の特徴と検討課題

　以上が１号墳の調査の概要である。詳細については上述の通りであるが、この日誌の内容から、１号墳の特徴と検討課題について、調査の進捗状況と重ねつつ、以下の３点を挙げることができる。
　①石室入口部不明のため墳丘の調査から開始、トレンチにより墳丘盛土内から須恵器発見、その後玄室検出
　②未盗掘墳と思われたが、盗掘を受けており、玄室床面からは遺物が出土しなかった
　③墓道付近の調査で鉄器類等の遺物の出土が記録されているが、現在保管されている遺物の中にそれらが含まれない
　まず①は、当初石室の入口を探すところから調査が開始されており、その過程で墳丘に直線状のトレンチを設定して掘削したところ、墳丘盛土内から須恵器が出土したという点である。日誌にもあるように、杯と身が組み合わさって出土していることから、墳丘上での儀礼行為の所産とみられる。日誌の略測図と記述では、墳裾ではなく「頂上平坦部の縁」であり、さらに1.5m の盛土を付加したと想定されている。そしてこの過程で玄室奥壁付近が検出されたが、この時点ではまだ未盗掘墳の可能性があると考えられていた（７月27日～30日まで）。
　②は調査のその後の進捗であるが、羨道部楣石の高さまで土砂が堆積していることを確認後、玄室奥壁から羨道部の方向を計算して羨道部の掘削を始めたところ、須恵器の大甕破片が出土している。また羨道付近で鍍金鉄製馬具が出土している（７月31日）。８月１日の時点で、玄室内部の清掃が終了し、遺物が皆無に近いことが記されるとともに、埋葬終了後それほど時間が経過していない間に盗掘が行われた結果である可能性が想定されている。
　③墓道付近の調査において、「バラスの間」から鍍金鉄金具断片や須恵器片が「相当に混入す」との記述がある（８月２日）。確実に１号墳出土とわかる鍍金鉄金具・鍍金鉄製馬具は現状で該当する遺物がなく、現物不明である。調査終了日の８月４日に出土したガラス小玉は計４点を確認している。
　以上のように、盗掘により玄室からの遺物の出土はなかったようであるが、墳丘盛土中および墓道付近から多くの遺物が出土している。特に墳丘盛土からの須恵器の出土は、墳丘の構築過程および構築年代を考える上でも重要であろう。鍍金鉄金具・鉄製馬具類については、現物不明ながら、墓道付近からそれらが出土したとする記録がある点をあらためて確認しておきたい。

（３）墳丘

　東亜考古学会の調査では、７月27日に1/100で平板測量図の作成が行われている（図29）。西側に等高線が広がる点から前方部の可能性も示唆しつつも円墳として記述されている。この地形は県報の測

量図でも確認することができるが（図30）、県報によれば、「１号墳墳丘の裾に近い羨道部分は近年、重機によって掘削され、攪乱されていた。そのため構造については確定が困難であるが、掘削溝に堆積する廃棄物を除去した後、石室中心線に沿って２m×７m のトレンチを設定し、側面の土層観察による版築構造の確認と遺物の検出につとめた」とある（p.33）。県報では調査の結果として、径約23m、墳丘高約5.2m、墳丘頂の標高138.7m として報告されるとともに、墳丘は赤褐色と橙色、褐色の粘質土を10～20cm 厚で重ねた版築状盛土であることが確認されている（p.34）。１号墳の墳丘規模は、妙泉寺古墳群の中で最大である。

先に述べたように、東亞考古学会の調査では、石室の開口方向と直交する南方向のトレンチが設定され、墳丘頂部の平坦面付近の「縁」付近から須恵器が出土している。出土状況を示したものが図31である。立面図から、右手の方に傾斜しているので、図31の左手が墳頂部付近、右手の方が南側にあたるものとみられる。須恵器の杯・身の組み合わせと、提瓶１点が確認できる。上述のように、墳丘表土面から「約1.5m」の深さとされることから、石室構築およびこの位置までの墳丘造成の後、須恵器の供献を伴う儀礼行為が行われ、最終的にさらに約1.5m の版築盛土が行われたものと想定される。群集墳などで一般的に認められる墳裾部や墳丘斜面での須恵器供献とは異なる、円丘頂部での供献および盛土という点で注目される。図34に掲載する須恵器の多くはほぼ完形であり、この墳丘上トレンチから出土したものとみられる。この須恵器の出土状況の記録写真については未確認である。

（４）横穴式石室

東亞考古学会による石室実測図と県報の実測図を掲載する（図32・33）。東亞考古学会の調査時の状態が長崎県教育委員会による調査時まで、比較的良好に保存されていたことがわかる。側壁は北壁のみが図化されているが、東半分が図化されておらず、この理由は不明である。以下石室の法量等について、県報から抜粋する：「W-13°-S 方向に開口する単室両袖構造の横穴式石室」であり、「玄室へは標高134m 近くから約40cm ほど傾斜して坂を下って至る。玄室は3.4m×２m の長方形プランで、天井高2.3m を測る。奥壁に幅2.1m、高さ２m の、表面に粗く調整を施した巨大な自然石を１枚立てる」（p.34）。石室に用いられた石材は玄武岩である。側壁は、基底石に幅１m 前後の石材を、北壁では３個、南壁では２個並べ、その上に数十cm 幅の玄武岩石材を積み上げている。やや持ち送っており、玄室は３枚の天井石が架構されている。同様の石材で明瞭に前壁が構成される。

また県報の図面から復元すると、羨道は長さ約1.3m、幅約0.75m、墓道は長さ7.4m、幅約2.0m である。墓道の写真（図版14）をみると、特に南側にバラス敷きの状況が確認できる。実測図上では断面図において表現されているようである。西側から羨道方向に向かって比較的急傾斜で低くなっている。

閉塞については、７月31日の日誌に以下の記述がある：「〔羨道天井石の〕の前方〔手前の意か〕50cm ばかりに入口をふさいだらしい小口積みの積み石出土。この部分の盛土がえぐれてをり、羨道天井石と蓋石〔閉塞石の意か〕の間に隙間があるところをみると、少なくとも入口の部分は攪されてゐるか？」。「この小口積みの積み石」が羨道部に積み重ねられたような形で表現されている石材とみられ、この状態で羨道入口が検出されたようである。北部九州の単室両袖型横穴式石室では、閉塞石は大型の板石１枚を用いる場合と塊石を用いる場合の両方が知られている。玄室奥壁付近にも大型の板石が床面バラス敷きの直上に散乱しており、日誌では何らかの施設が盗掘時に分解されたとみているようである（８月１日）。これらの石材については、棺材や閉塞石の可能性が想定されるが、いずれにしても羨門部全体を閉塞するような大型の板石石材などが検出されていないことから、閉塞に関しては塊石のみを用いたか、玄室奥壁付近に散在する板石と塊石を併用する方式のいずれかであった

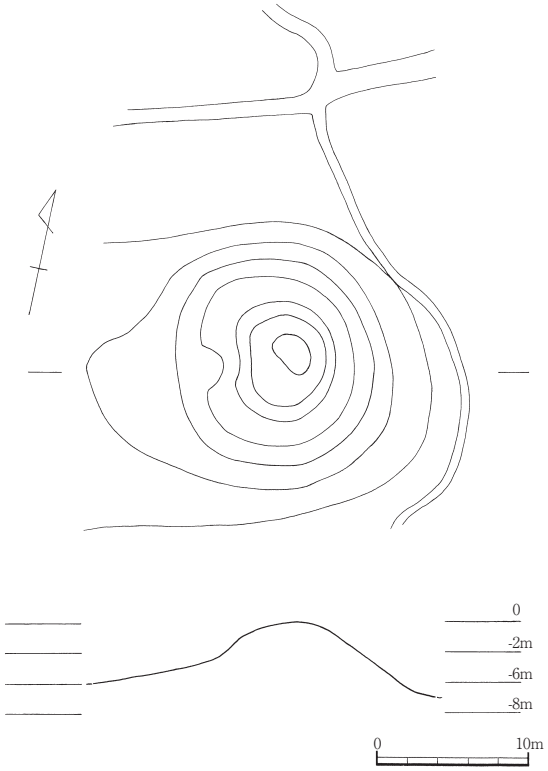


図29　1号墳・墳丘測量図（東亞考古学会調査：縮尺1/500）

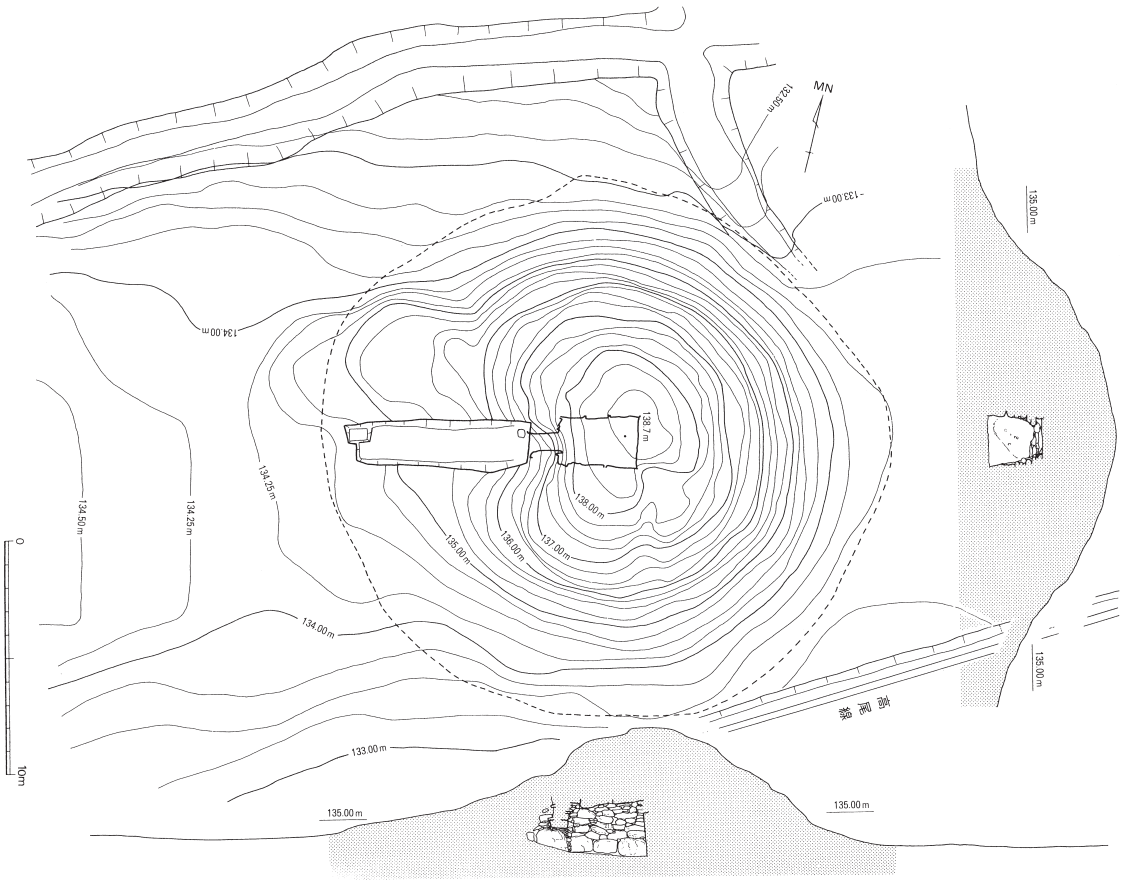


図30　1号墳・墳丘測量図（長崎県教育委員会調査：縮尺1/300）

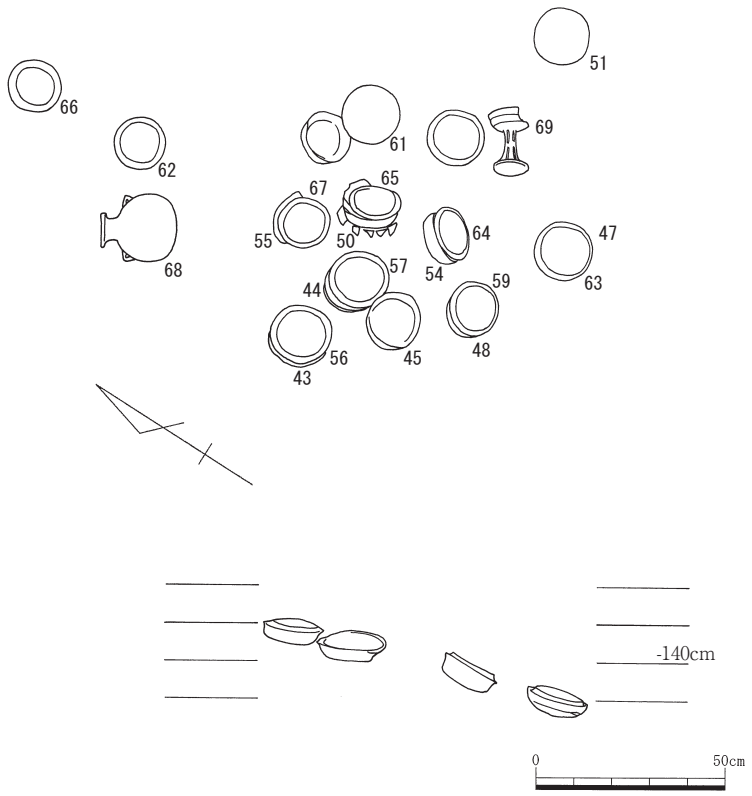


図31　1号墳・墳丘トレンチ須恵器出土状況図（縮尺1/20）

可能性が高い。

羨道は、両側壁に板石状の石材を配する点が特徴として挙げられる。墓道の「斜路」から石室内部に至るまで「バラス敷き」であることが日誌でも強調されているが、羨道から玄室入口付近ではやや大きめの石材として表現されており、図版16-1でも確認できる。県報では、玄室内の状況とあわせて以下のように報告されている：「床面には3cm前後の玉砂利を一面に敷く。ただし、羨道部付近の墳丘の状況やトレンチの精査内容から、本古墳は過去に盗掘等であらされた形跡があり、この砂利も原位置を保つものではないとみてよいであろう」(p.35)。東亞考古学会の調査後の状況ではあるが、それ以前に盗掘を受けているとする点において、この所見は東亞考古学会時の理解と一致している。梱石の存在は新旧いずれの図面においても明瞭でない。

東亞考古学会の調査では、盗掘を受けた玄室内の清掃の後、羨道外（墓道）の「バラス面」付近の調査に重点が置かれ、バラスの間から遺物が出土したことが記されている。また長崎県教育委員会の調査時においては、石室内から須恵器片1点が出土した以外は全て羨道部のトレンチから出土したとのことであり、この点も東亞考古学会調査時の状況と一致している。羨道・墓道周辺から金銅製馬具・鉄製品が出土していることと玄室内の状況から考えれば、玄室内の金属製品を含む副葬品が盗掘の際に全て持ち出されて、それらの一部が墓道付近に残存したものとみられる。その他、羨道から墓道にかけて、閉塞部付近に供献されていたであろう大甕などの須恵器がこれらと混在して検出されたと考えることができよう。

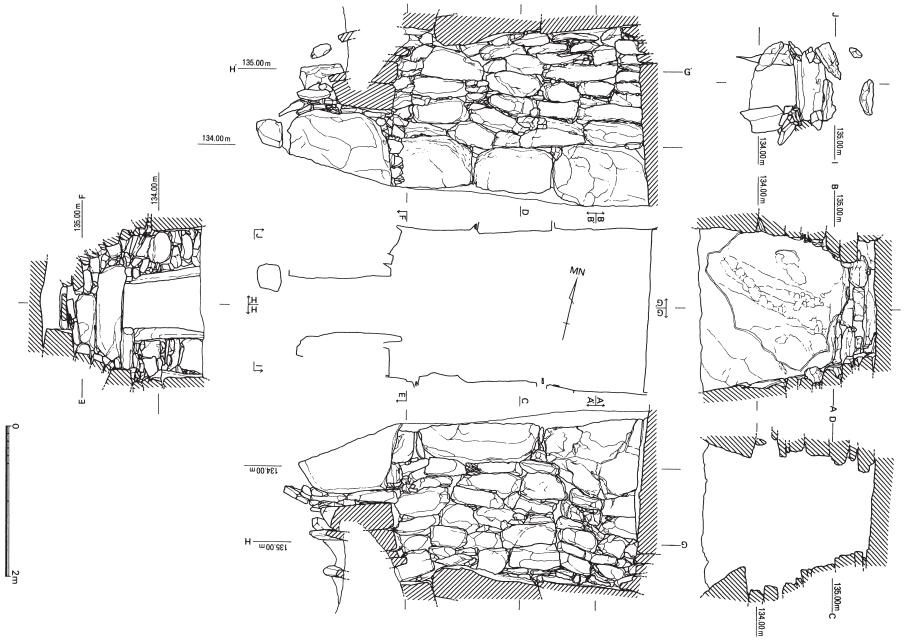


図32　１号墳・石室実測図（長崎県教育委員会調査：縮尺1/100）

また調査日誌でも記載があるように、本石室では赤色顔料の塗布が知られている：「本石室の特徴は玄室の壁面全体に赤色顔料を塗布している点である。石室入り口付近は外気との接触が多いためか顔料が色あせてしまった感があるが､内部とくに奥壁では鮮やかに艶のある色彩を保っている」(p.35)。現在も、奥壁や側壁のみならず、天井石まで含めて赤色顔料の塗布を確認することができる。

本石室の形態は、福岡平野をはじめ玄界灘沿岸地域でみられる単室両袖型横穴式石室との共通性が高いものであり、系譜関係や年代等については後述する。

（５）東亜考古学会調査による出土遺物（図34・35・表２-３）

ａ）１号墳出土遺物について

上述のように、日誌からは墓道付近で金銅製馬具類などが出土しているものの、現物不明である。現在保管されている遺物は、須恵器を主体とする土器類と、ガラス小玉４点である。　　（辻田）

ｂ）土器類

・須恵器

42～55は杯蓋、56～67は杯身である。調査日誌と実測図によると、杯は１号墳の墳丘の中から見つかっており、墳丘の頂上平坦部の縁に杯、高杯を置いて何らかの行為を行い、上からさらに盛土を付加したとの見解であった。盛土内土器出土状況の平面図から、杯蓋と杯身が組み合わさって出土したことが確実と考えられる組み合わせは５組ある。P1と P2（図31-43・56)、P3と P4（図31-44・57)、P6と P7（図31-48・59)、P8と P9（図31-47・63)、P10と P11（図31-54・64）である。また、P16と P17（図34-55・67）も出土位置からみて当初は組み合わさって置かれていた可能性が高い。

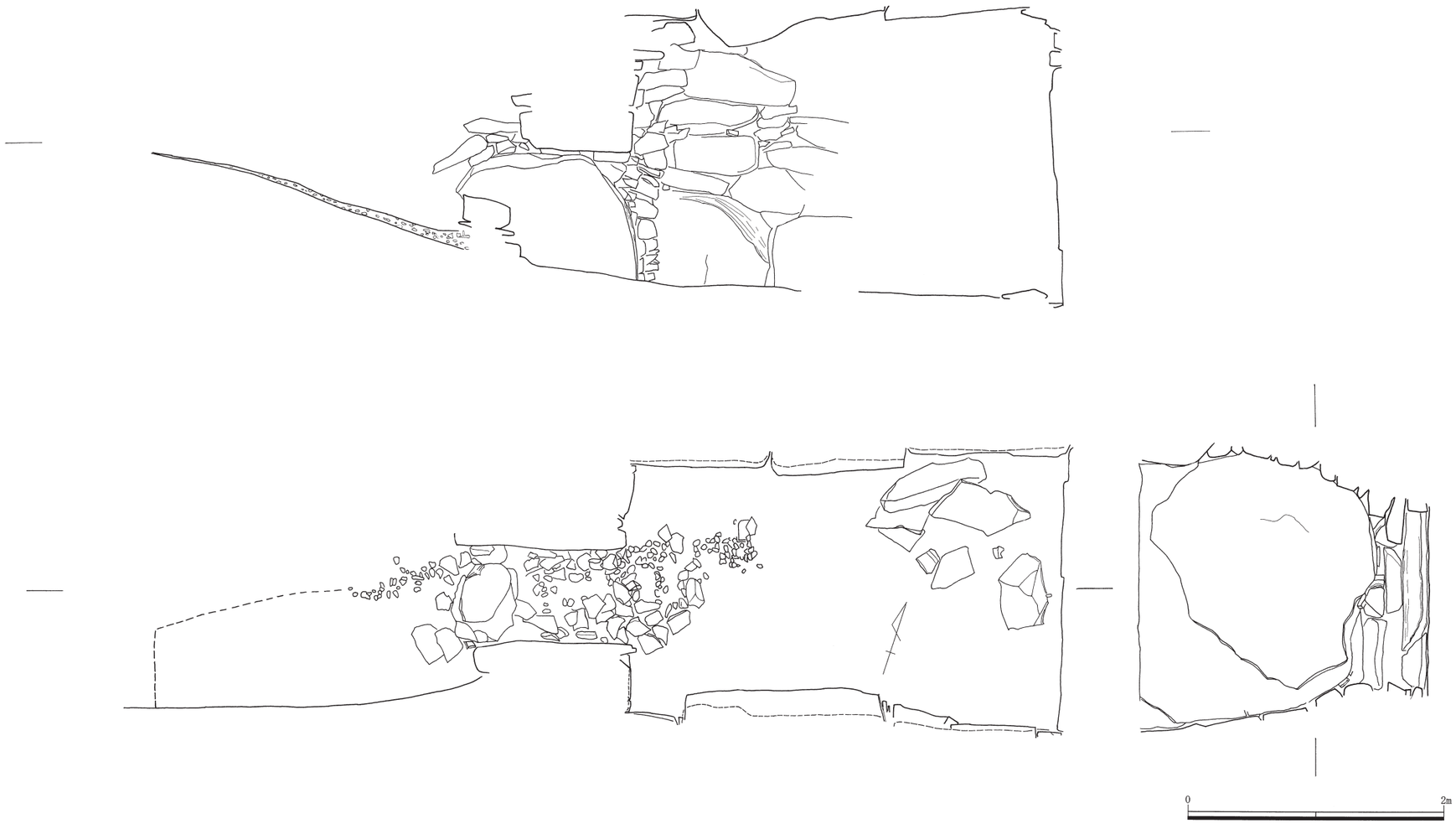


図33　1号墳・石室実測図（東亞考古学会調査：縮尺1/40）

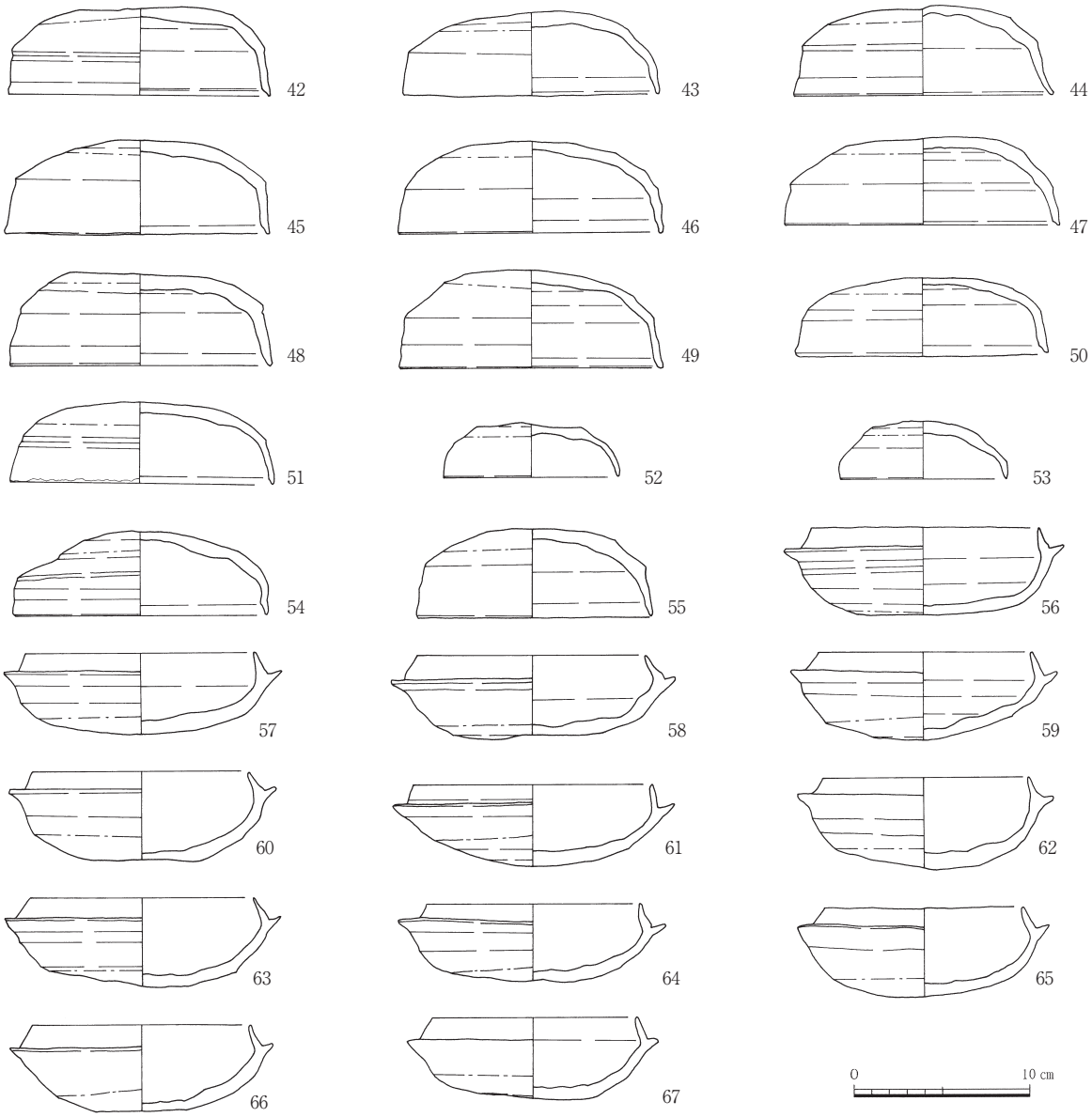


図34　1号墳・出土遺物実測図①（東亞考古学会調査：縮尺1/4）

42～49は天井部と体部の境が明瞭で、42と44は境に段を持つ。口縁端部近くには段を持ち、口縁部断面は斜縁をなし、外傾する。外面はヘラケズリで整形されるが、43・44・46・47・49などではヘラケズリがやや粗くなるためか天井部から一段窪んで体部に至るような形態の特徴を持つ。50と51は天井部と体部の境に段を持つが、全体にやや丸みを持つ。口縁端部は斜縁をなす。52と53は口径と器高が小さく、天井部に回転台からの切り離し痕が残り、ヘラケズリが粗い。56～67は蓋受けの立ち上がりが内傾し、口縁部断面は先端が尖った形態をなす。形態からみて、おおよそ小田編年・牛頸編年のⅢA期（6世紀中葉）～ⅢB期（6世紀後葉）に相当するだろう。

68は提瓶で杯蓋・杯身と同じく墳丘盛土内からほぼ完形で出土した。口縁部は外折して端部が厚く

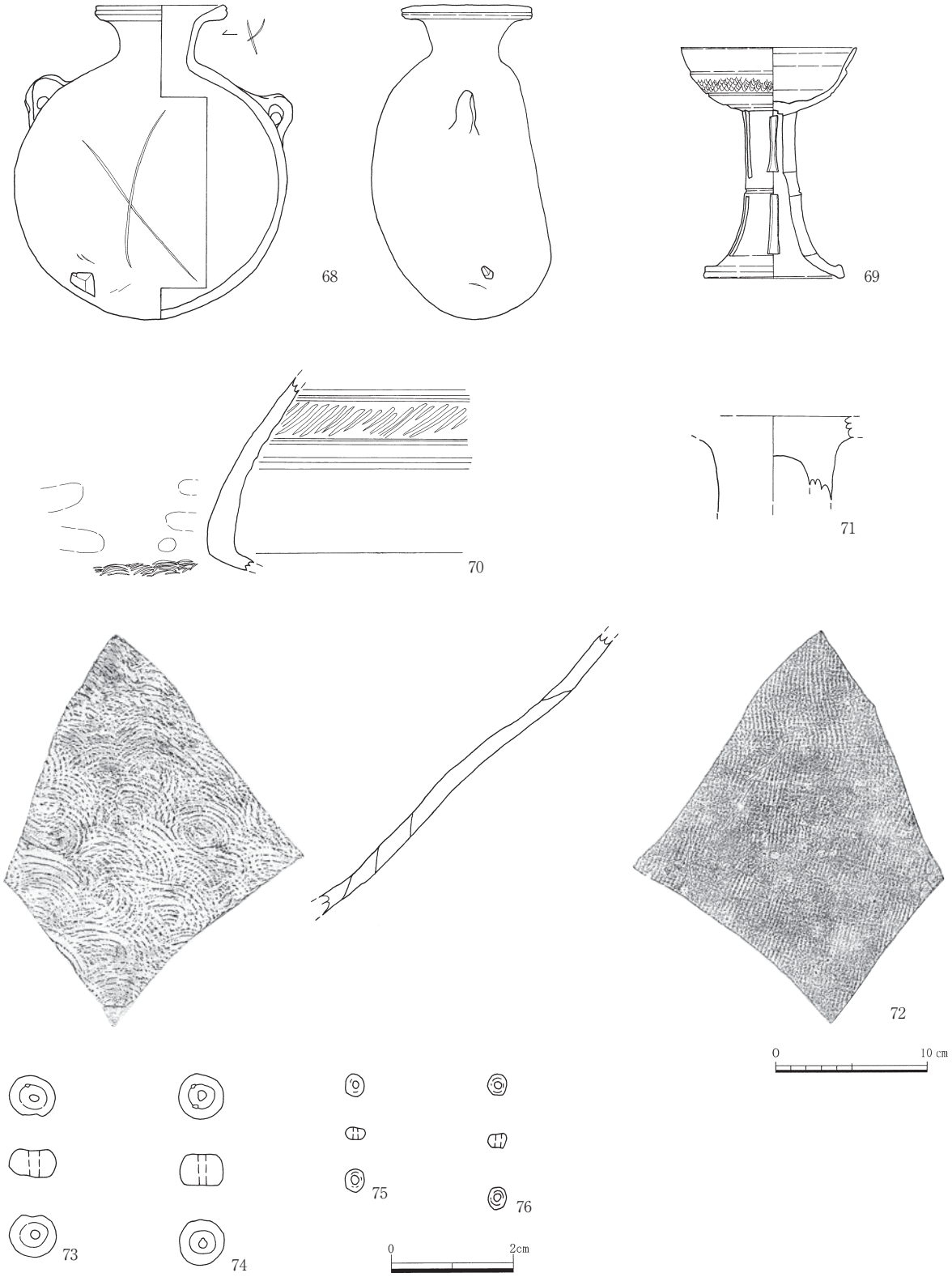


図35　1号墳・出土遺物実測図②（東亞考古学会調査：縮尺1/4・1/1）

なり、肩部には半環状の耳が両側に付く。胴部は片面がふくらみ中央にヘラ記号が刻まれ、もう一方の面は平坦面をなし指ナデの痕跡がみられる。胴部下方に粘土塊が付着しており、焼成時に貼り付いたものと思われる。牛頸編年におけるⅢA期（６世紀中葉）のものとみられる。

69は高杯。杯部は底部から体部の境界が明瞭でなくゆるやかに丸みを帯びて立ち上がり、体部には沈線と段の間に波状文が施される。脚部は三方向に長方形の二段透孔を持ち、ほぼ同様の厚みを保ちながら脚裾まで伸びて、下端部はわずかに肥厚し中央の凹んだ平坦面をなす。内面に自然釉がかかる。二段透孔や長脚などの特徴から、杯蓋・杯身と同時期の６世紀中葉～後葉と考えてよいだろう。

70は大甕の口縁部片で、口縁端部は欠損している。外面上方は沈線を数本めぐらせた間にヘラによる連続斜行文を施す。その下にも数条の沈線をめぐらせる。外面は光沢のある黒色を呈する。内面は、口縁部下方に指オサエの痕跡、胴部に同心円状の当て具痕がみられる。県報で妙泉寺１号墳羨道部トレンチ出土品として記載されている甕口縁部片と非常に類似しており、同一個体の可能性がある（図37-5）。

72は大甕の胴部片。外面は格子目状のタタキを施し、内面は同心円の当て具痕がみられる。（齊藤）

・その他

71は土師質の器台あるいは高杯の破片。非常に厚手である点が特徴である。８月１日の日誌に、玄室内から出土したことを示す記述があるが詳細不明である（図28-4）。（齊藤）

ｃ）装身具類

・玉類

73～76はガラス製の小玉である。いずれも引き伸ばし技法によるもので、順に径が7.9mm・7.3mm・3.9mm・3.8mmであり、大きく大小２種類がある。色調はいずれも青紺色を呈する（表３）。（齊藤）

（６）長崎県教育委員会調査による出土遺物（図36・37）

図36・37の遺物は、このうちの須恵器１点を除いて全て羨道から墓道付近から出土している。上述のように、図37-5は東亞考古学会出土資料（図35-70）と同一個体の可能性がある須恵器大甕頸部片である。須恵器の大甕片の他、杯や器台なども出土している。また図37-1・3は金銅製金具、図37-2は金銅製耳環と報告されている。東亞考古学会調査資料では金銅製品については現物不明ながら、長崎県教育委員会の調査資料により、調査日誌にある金銅製品の出土が裏付けられる。金銅製耳環も含めて、石室内の副葬品が盗掘時に持ち出された際の残存分とみられる。

（７）小結

以上、東亞考古学会の調査成果と長崎県教育委員会の調査成果を対比しつつ検討を行ってきた。その結果、前述のように、東亞考古学会の調査成果に関して、従来知られていなかった点として以下の３点を挙げることができる：①墳丘盛土内での須恵器の出土、②石室発見時の状況と玄室内での盗掘の確認、③墓道付近での金銅製馬具等の出土。このうち②については、あわせて石室発見時の実測図・写真と日誌の記録から、閉塞に際して大型板石１枚でなく塊石の積み石（もしくは塊石と小型の板石との併用）という方法が採られていた可能性が高いことが判明した。また③についても金銅製金具の出土から、東亞考古学会の成果が裏付けられる。以上の点から、１号墳は1953年の調査時点で玄室内について盗掘を受けていたものの、金銅製馬具類・金銅製品を含む点で、本来は壱岐島内でも屈指の内容を持つ古墳であったことが推測される。

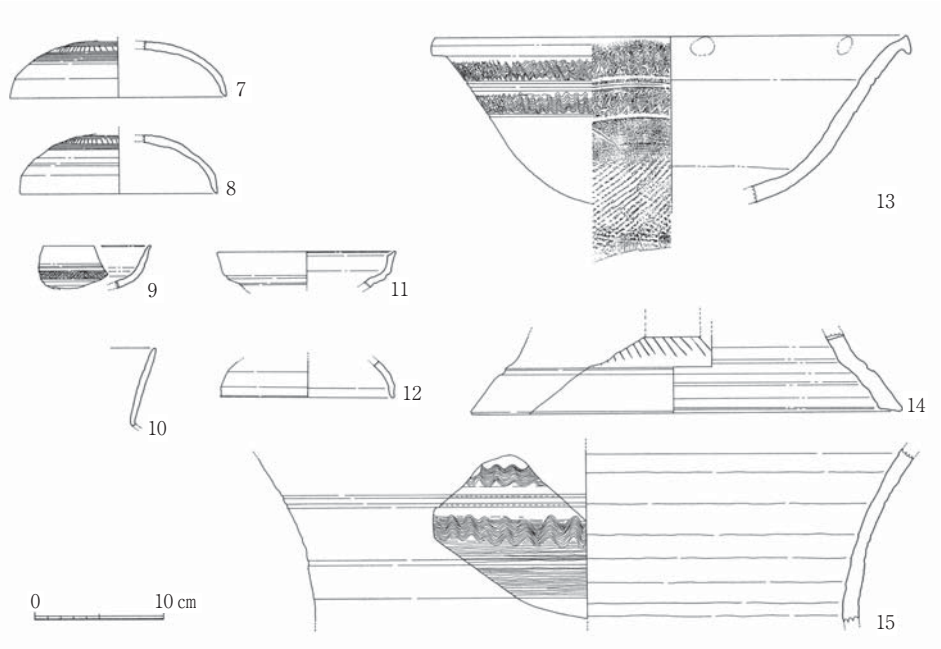


図36　１号墳・出土遺物実測図③（長崎県教育委員会調査：縮尺1/6）

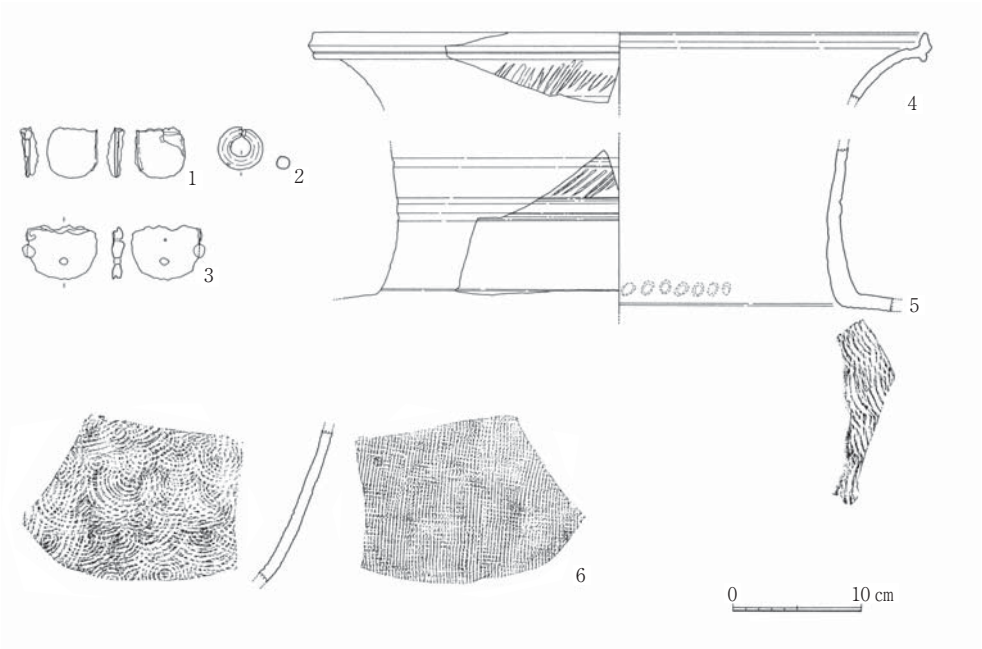


図37　１号墳・出土遺物実測図④（長崎県教育委員会調査：縮尺1/6）

問題となるこの１号墳の造営時期であるが、これまで長方形プランの単室両袖型横穴式石室という点から、「６世紀中葉のなかでもやや古い時期」（県報：p.46）といった年代観が提示され、その後も支持されてきている（例：田中2007・2012b）。これについては、本稿で東亞考古学会調査資料を検討した結果、①のように、墳丘盛土中でまとまった量の須恵器が供献されていることが判明した。それらの須恵器が示す年代は概ね小田編年・牛頸編年のⅢA～ⅢB期であり、上限をⅢA期とする点で従来の年代観を支持するものといえよう。１号墳は妙泉寺古墳群中最大の墳丘であり、本古墳群造営の嚆矢となったという先行研究の理解は、大きく変更する必要はないものと思われる。

一方で、図34の須恵器の中にはⅢB期のものが多く含まれる点で、石室形態が示す年代よりもやや新しい傾向を示している点が注意される。この墳丘盛土中の須恵器供献については、７月29日の日誌において「頂上平坦部の縁」とある点が問題となる。すなわち、「須恵器の供献」を一連の「墳丘造営過程」の一段階とみるか、古墳築造当初の墳丘は須恵器の供献地点付近の「平坦部」で一旦完了しており、【「平坦部」までの墳丘造成】と【須恵器供献＋盛土追加】の間に時期差があるとみるかどうかによって理解が異なってくる。いずれかに絞り込むのは現状では困難であるが、図30の県報掲載の墳丘測量図の断面図において、墳丘頂部・中心付近がやや高く突出したような形をしているのも、そうした盛土付加に起因するものである可能性も想定される。この時間の経過の有無という点については、将来墳丘の再調査が行われることがあれば、「平坦部」付近の土層中に炭化面が挟まれるかどうかといった点により検証されるであろう。なお天井石の石材が大型化しているとみられる７号墳の石室床面から墳頂までの高さが約4.6m（直径約15～16m前後か）であるのに対し、１号墳では約5.4m前後（直径約23m）である点を付記しておく。ここでは、古墳の築造年代については、石室形態と出土須恵器の上限年代が示すⅢA期前後・６世紀中葉前後と捉えつつ、東亞考古学会調査資料が、上述のような後期古墳の円丘部頂上付近での須恵器供献儀礼の存在といった重要な問題を提起している点を確認しておきたい。

３．妙泉寺７号墳

（1）東亞考古学会の調査日誌

７号墳についても、まず東亞考古学会の調査日誌の内容の精査から始める。全体の記述については先の１号墳の日誌を御参照いただきたい。

【妙泉寺７号墳】

○７月26日

〔全体の記載の後〕第７号は横穴式石室にして略南面して口を開き入口部は封土が崩れて人一人がようやく匍って入れる程度の空間を残している。

約束の人夫が来ない為取敢ず三名にて第７号の流入土を除去する。羨道天井石の外、両側壁の中間より祝部盌（高台付）、鉄刀破片、鉄製辻金具半欠、赤色素焼皿（糸切痕）破片を採取。遊離したものと思はれる。

○７月27日

昨日に引き続き石室内流入土を除去、前室を略完了。石室は玄室、前室、羨道の三つに分れ、各々は左右側壁に接する竪長の境石により区分される。境石の間は床面に閾石を設く。床面は前室に於ては比較的大きな板石を敷く。又前室には玄室堺に近く板石１枚及び塊石２個を床面に認めるが、これは玄室の封鎖に用ひたものであらう。遺物は前室に於て床面より遊離して祝部土器片、床面より鉄刀片、鉸金具、鎹？を発見、併し同じlevelより陶器片、クワラケ片が出土することより既に盗掘に遭ってゐるものと想像される（図38-1）。（採取遺物）祝部蓋（ツマミ付）大形甕？小片（叩目）陶器

○７月28日

石室内除土続行。玄室床面も前室と同様板石が敷かれ奥壁より80糎のところに高さ約30糎の障壁が

設けられてゐる。但し東壁寄りの一部のみ残存。玄室床面は前室に比し約20糎低い。障壁内東壁寄に床面より15糎高く金環１個、又障壁外同じく東壁寄同 level に銅環１個出土。盗掘に際して原位置より動かされた物か？障壁内東壁に接して人骨と覚しき骨粉出土。

昨日より前室及び玄室内の埋没土に混って板石が比較的多く認められるが石室壁のものとは思はれず、又床面敷石も完存してゐてその破片でないことは明かである。或は玄室、前室の封鎖に使ったものか？

（採取遺物）金環２個

○７月29日

石室内流入土除去。床面清掃略完了。

前室東壁側に左図の如く（図38-2)、祝部坏２個（完形)、土師坏１個、コジリ金具二口分（一つは銅製、他は銅環付)、金環１個、兵庫鎖及鉸具、鏃様鉄製品数個何れも副葬時の原位置と思はれる。

羨道入口中央部より土師坏（完形)、祝部坏破片、これも原位置ならん。その外入口外側より祝部高坏脚、金環１個出土、盗掘に際して排除せる土に混って石室外に出された物か。玄室内土器片は位置を見取り図（図38-3）に記入し採取。人骨粉は採上を断念。

（採取遺物）石室外側：祝部高坏脚、同蓋破片。玄室内：陶器、祝部破片。石室外側：金環１個。

○７月30日

昨日作業終了後石室内に闖入者あり。前室遺物攪乱され兵庫鎖、金環紛失、鉄器、土器類原位置を移動さる。

羨道入口外側より祝部蓋坏２個分、細頸壺２個分（頸の部分欠）出土。昨日の中央部土師坏は高坏なること判明。石室封鎖後入口に於て祭祀を行ひたるものか？

写真２枚－石室入口部（土器類を入れて）１　前室東壁遺物１

○７月31日

Plan 実測。1/10。出土遺物採取。扉石復原。

写真３枚（玄室奥壁、玄室障壁、玄室内より外向）

夕刻第７号墳盗難の件に就き田河町助役山口氏来る。警察に調査を依頼してはとのことなれど事荒立てぬため区長橋口網光氏に願って提出してもらふこととする。

○８月１日

晝休中に石室入口に兵庫鎖還る。金環は未還。

玄室袖石、前室袖石部 Section 実測。床面敷石 Plan、Section 補入。西壁 Section 実測。

○８月２日

石室 Section 終了。前室東壁側の床石を剥いだところ、直下より鉄鏃、その他不明鉄製品、緑色ガラス玉、祝部、土師破片あり。これが第一次埋葬のものか。或はこの板石が動いた形跡もある故盗掘に際して混入したものか今の所不明。写真２枚（玄室障壁及び床面、前室、玄室扉石復原）

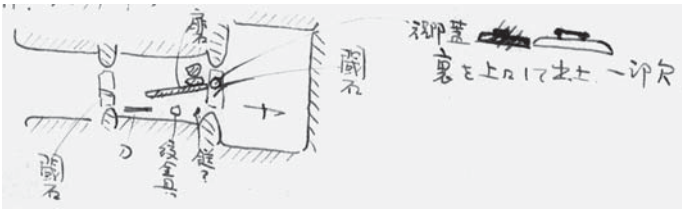


図38-1　日誌・石室・遺物出土状況模式図（7/27）

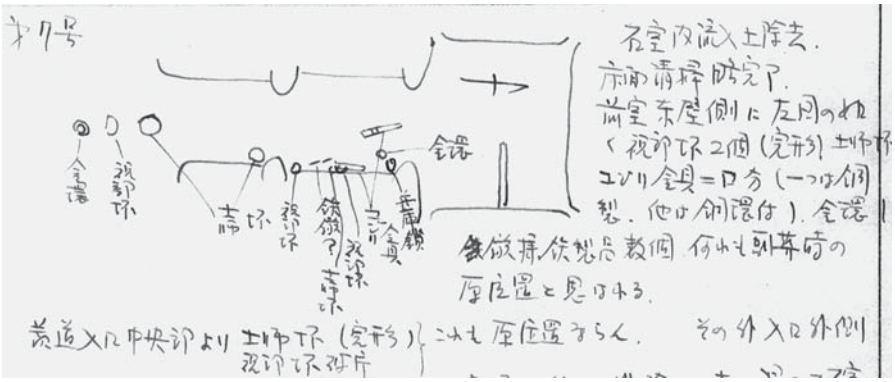


図38-2　日誌・石室・遺物出土状況模式図（7/29）

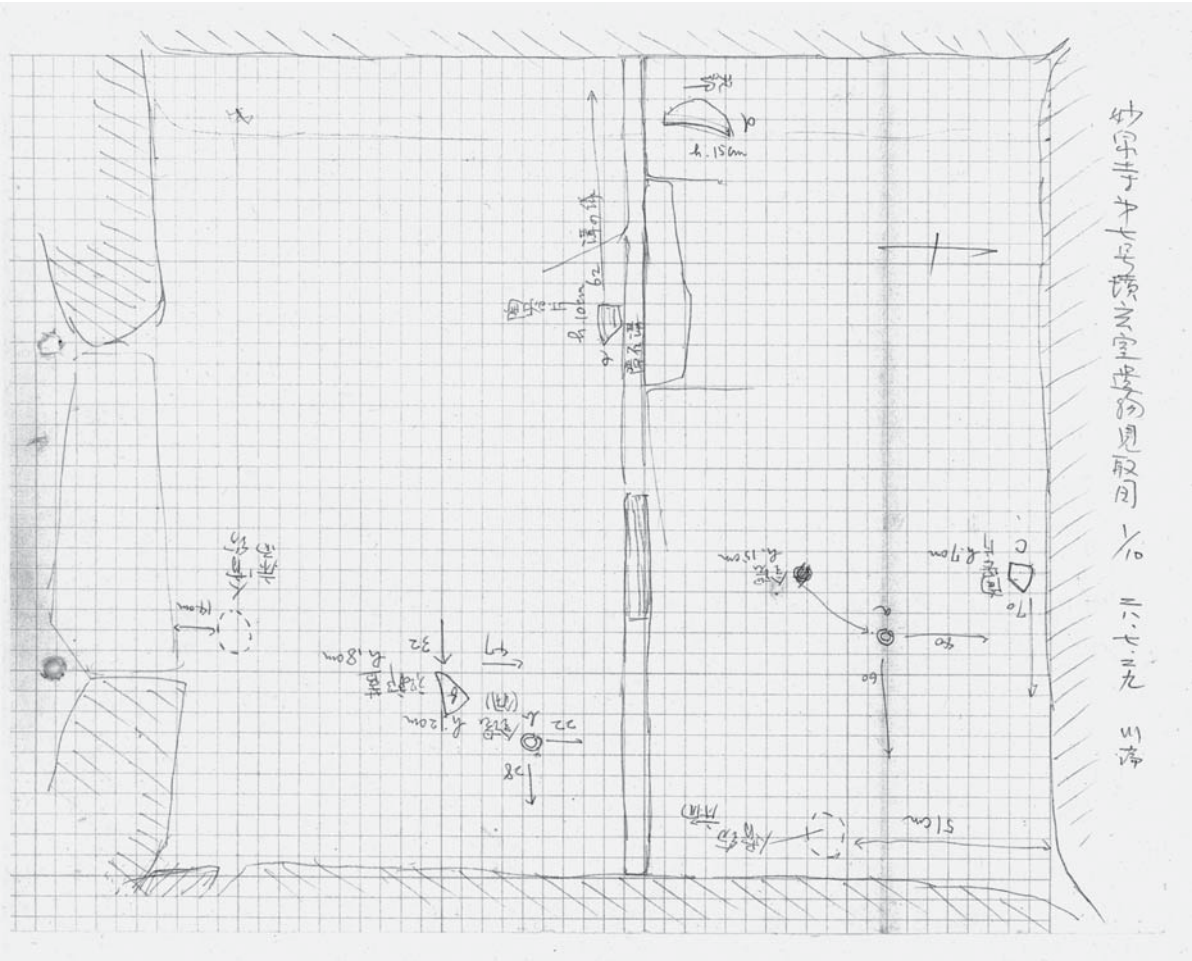


図38-3　日誌・石室・遺物出土状況模式図（7/29）

○８月３日

午前、川端・小林、墳頂より見通□□□を作る。

午後、有光人夫２名を使用して墳形実測1/100。Contor 1m。

前室東側床板石を剥し遺物検出続行。遺物は前室東半部に限られ西側には全く無し。玄室奥より発見せる金環と同類品１個出土。板石の置き方が玄室とは異なり動かされた形跡のあることと共に盗掘の際の混入と見るべきか？

○８月４日

昨日に引続き前室床下遺物検出。鉄鏃、その他不明鉄製品出土。但し東壁側に限られる。実測、写真。墳形測量終了―有光

本日を以て妙泉寺古墳群第１号、第７号調査を終了す。

（２）日誌からみた７号墳の特徴と検討課題

以上が７号墳の調査の概要である。１号墳と同様、調査の進捗状況とあわせて、７号墳の特徴と検討課題として以下の５点を挙げることができる：

①1953年当時すでに開口しており、盗掘を受けていた

②石室内から多数の遺物および人骨細片出土（人骨は取り上げ断念）

③玄室中央に主軸と直交する仕切石がある

④７月29日作業終了後に遺物の盗難・出土状況の攪乱あり

⑤前室東壁側の床石下から遺物が多数出土

この中で注目されるのは、多数の遺物とその出土位置の問題である。そして⑤にあるような、前室東壁側の床石石材を剥がした後に多数の遺物が出土した点については、日誌の中でも第一次埋葬のものか、盗掘の際の混入かの２つの可能性を示されている。８月３日の記述では混入の可能性をやや強調しているが、結論としてはあえて確定していないように見受けられる。本報告での遺物の整理という観点から、これについても検討したい。

また７月29日作業後の遺物の盗難等については、最終的に「兵庫鎖」が返還されたものの、「金環」については未還とのことである。他方で、それ以外の遺物についても、日誌に記録された遺物が全て保管されているわけではなく、現物不明なものも多い（例：８月２日出土の前室石材直下の「緑色ガラス玉」、８月３日出土の「金環」など）。以下では、可能な範囲で出土状況図と照合しつつ検討を行うこととしたい。

（３）墳丘

東亜考古学会の調査では、８月２日に1/100の墳丘測量図作成が行われている（図39）。県報での測量図（図40）と比べても、北西側がやや高く、平坦面が広がる地形が共通しており、大きな地形の改変はみられないようである。県報では次のように報告されている：「古墳群の最も東側に位置する円墳で、標高125～129m の斜面に位置し、北北西〔南南西の誤記か〕の谷側に石室が開口している。現状は山林となっている。墳丘の裾は、現況では直径約20m 程度であるが、石室の入口や測量図面などから、築造当初は、図中破線のように直径約15m 程度ではなかったかと推測される。墳丘の高さは、石室床面から墳丘頂までの高さは約4.6m で、墳丘頂の標高は131.9m である」（県報：p.40）。直径は最大で16m 前後とみられる。

（4）横穴式石室

東亜考古学会と長崎県教育委員会の実測図をそれぞれ掲載する（図41・44）。東亜考古学会の図面では、側壁は西壁のみが図化されている。一見してわかるように、前室・玄室の床石が1998年調査時にはすでに多く欠落しているが、1953年当時は全体として良好に保存されていたようである。また羨門部の梱石や後述する玄室の仕切石も1998年調査時には失われている。

法量等については、県報で次のように報告されている：「現存する石室の全長は8.1m である。玄室では、奥壁に幅2.1m、高さ2.2m の巨大な岩を使用している。側壁は、開口部を向いて右側の幅（奥行きが2.1m）、同左側が2.0m、玄門側は、幅2.0m を測る。以上から玄室の平面プランは、ほぼ２m×２m の正方形であるということができる。玄室天井部は、玄門側半分に、高さ1.5m で前室から連続して詰まれている。奥壁側の半分は、高さ2.1m と高くなっている。玄室の床面には、不定形の切り石が石畳状に敷かれているが、玄室中央部では盗掘によるものか、はがされて原位置をとどめていない。石棺および棺材も確認することはできなかった。……前室は、玄室側幅1.6m、右壁幅1.7m、左壁幅2.1m、羨道側幅1.4m で、崩れた平面プランとなっている。床面には、一部に敷石状の平たい石がのこるが、敷きつめられていたかどうかは不明である。羨道部は、石の採掘によるものか、両壁の先端部がずれている」（県報：p.40）。

玄室・前室ともに奥壁・側壁に一枚の大型基底石を用いており、玄門・羨門の立柱石の直上に天井石の縦断面中心位置付近が来るように大型の天井石が水平に架構されている。このような構築技法は、壱岐古墳群の兵瀬古墳および後述する鬼の窟古墳との共通性が非常に高い。また玄室奥壁が一枚の鏡石のみで構成されており、やや新しい要素とみられる。石材は玄武岩を用いている。

玄室については、日誌の中で、玄室床面が前室と比べて約20cm 低いこと、また奥壁から80cm のところに高さ約30cm の「障壁」が設けられていたことが記載されている（7月28・29日：図38-2・3）。奥壁に平行する形で仕切り石が設けられていたとみられ、屍床を設置したものと想定される。「障壁」の石材自体は東側半分しか残っていなかったようであるが、西側にも「障壁」を固定した「溝」が続いており（図38-3・図41・図版18）、本来は玄室全体を東西に横断して石材が配置されていたことがわかる（これらは一部県報実測図（図44）でも確認できる）。床面の石材は、後述する図46の98のように、長さ・幅20cm 前後・厚さ２cm 前後の薄い割石を多く用いており、玄室では今も整然とした床石の配置が残存している。他方、前室の床石は玄室よりやや大きく、配置も雑然としている。東壁側ではこれを剥がした地点で多数の副葬品が出土しており、また玄室床面は前室床面より約20cm 低いという記述（７月28日）からも、現在図示されている前室の床面石材は追葬に伴い持ち込まれ、新たに床面として形成されたものとみられる。また県報での1998年調査時においては、地山面まで掘り抜いたといった記述がみられないことから、図示された前室の床面レベルが元来のものであるのか、すなわち前室にも玄室と同様の大きさの床石が元来は施されていたのかどうかという点については未確認である。なお１号墳で顕著な特徴であった赤色顔料の塗布は、本石室では日誌でも言及されておらず、現状でも確認できない。

玄室の閉塞には、前室の玄室側の位置に板石１枚と塊石２個があり、これを用いたものと推測されている（７月27日）。また前室および玄室堆積土中で板石が多数出土しており、これも玄室の閉塞に用いられた可能性が想定されている（７月28日）。また８月２日には前室の「扉石」（閉塞石）を復元した写真を撮影したことが記述されているが、図版17や図41の東壁側断面図にみられるように、板石を起こして復元としたようである。

本石室の形態も、１号墳と同様、玄界灘沿岸地域をはじめとする北部九州地域との共通性が高いも

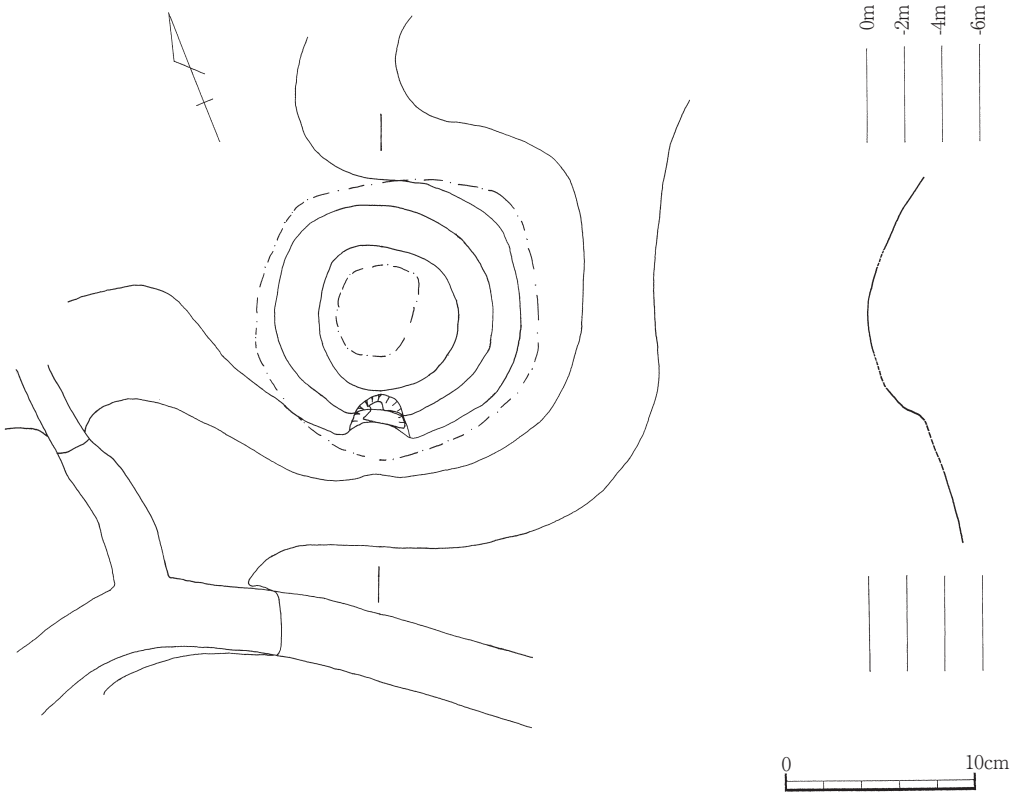


図39　７号墳・墳丘測量図（東亞考古学会調査：縮尺1/400）

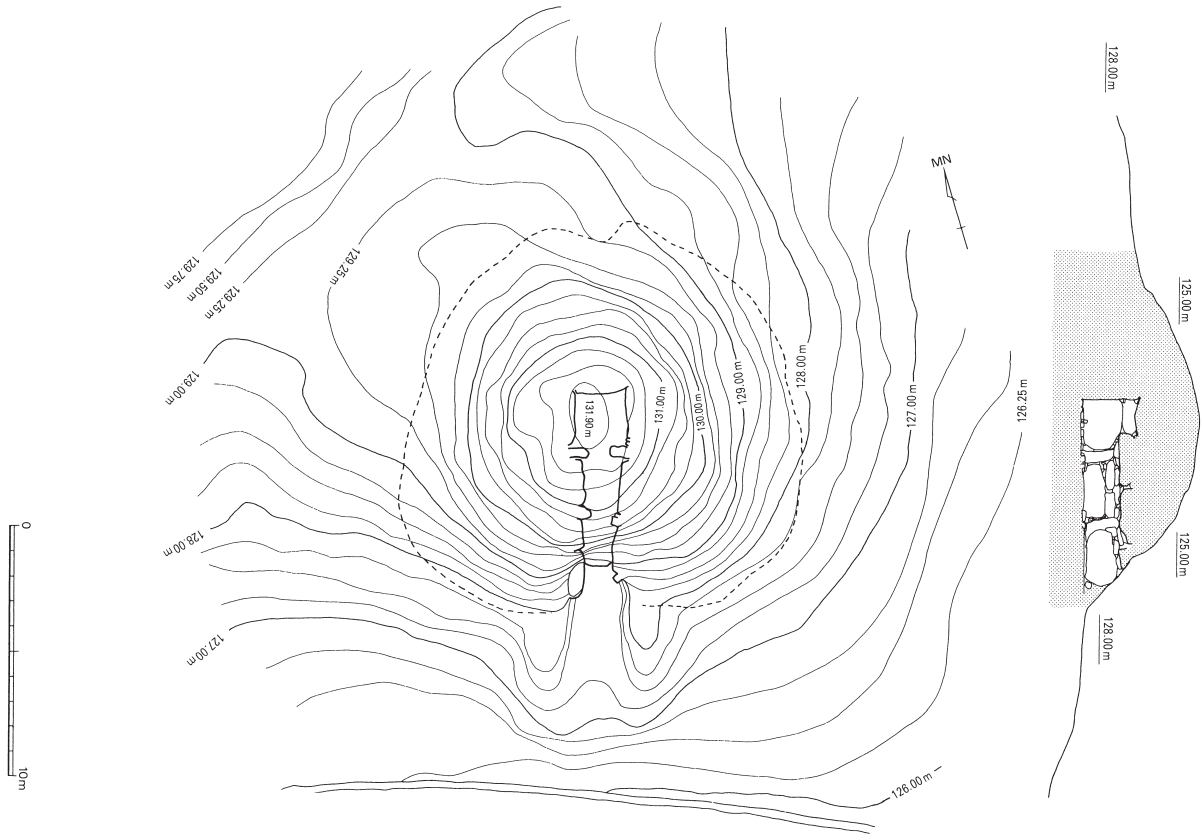


図40　７号墳・墳丘測量図（長崎県教育委員会調査：縮尺1/300）

のであるが、上述のように兵瀬古墳や鬼の窟古墳といった、壱岐島内の巨石墳との類似度が高い点が注目される。年代観については後述する。

（5）遺物の出土状況

日誌の記述にあるように、７号墳は盗掘を受けており、流入土の除去・石室の清掃・床石の取り外しといったそれぞれの調査の段階で遺物が出土している。またその中で、調査者の３氏により原位置を保っている可能性が指摘されているものもあった。こうした点をふまえ、玄室・前室・羨道の３ヶ所に分けて、日誌の記述の内容を元に遺物出土状況を復元的に整理する。

玄室　出土状況図は図38-3が残されている。前述のように玄室は中央に奥壁と平行して仕切石が配され屍床が設置されたとみられるが、以下では「北側空間」（奥壁側）と「南側空間」（前室側）に分けて記述する。まず奥壁側の北側空間では、東壁寄りに人骨片がみられる。また東壁から60cm の位置で金環が出土している。これは床面より15cm の高さで、原位置を保っていないとみられる。またほぼ同じレベルで南側空間の仕切石および東壁に近い位置からもう１点金環が出土している（７月28日の日誌文章中では銅環とあるが、採取遺物に「金環２個」とあるのでどちらも金銅製耳環の可能性が高いとみられる）。南側空間の玄門部付近でも人骨片が出土している。２ヶ所の人骨はいずれも「骨粉」と書かれており、保存状態が良好でなかったものとみられ、取り上げは断念されている。その他、須恵器片が数点出土しているようであるが、現物との対比はできていない。

以上から、玄室内部については、盗掘により遺物自体の出土が極めて少なく、金銅製耳環２点などが床面から15cm の高さのレベルで出土しているが、原位置を保っているとは考えがたい。これらの玄室出土の金銅製耳環２点は現物不明である。人骨片も盗掘後の流入土の一部として僅かに残存していたものとみられる。

前室　遺物が最も多く出土したのが前室である。まず７月27日の時点では、床面より遊離した須恵器片の他、「床面から鉄刀片、鉸金具、鎹？」などが発見されつつも、同じ面で陶器・土師皿が出土したことから、前室も盗掘を受けていることが推察されている（図38-1）。28日は主に玄室内の調査が行われた後、29日に須恵器杯２個（完形）・土師器高杯１点、「コジリ金具２口分」（１つは銅製、もう１つは銅環付）、金環１個、兵庫鎖と鉸具、鉄鏃数点が前室東壁側で出土し、これらについては「何れも副葬時の原位置と思はれる」と判断されている（図38-2）。前々日（27日）の図38-1の遺物との関係や、その時点では盗掘（原位置を保っていない）とした判断との関係が明確でないが、ともかく29日の出土遺物については「原位置」と判断された。ところがその直後に前室の金環・兵庫鎖の盗難および出土状況の攪乱が起こっており、29日の遺物出土状況は30日以降に引き継がれなかったものとみられる。

図43は、上が前室の遺物出土状況図で、右下が後述する床面石材を剥がしたその下から出土した遺物の出土状況を示したものである。この図43（上）は、日誌に記録された図38-2と概ね位置関係が対応しているため、29日の作業後の盗難・攪乱後、31日に「Plan 実測。1/10。出土遺物採取。」とある図面に該当するものとみられる。この場合、盗難・攪乱後に移動した遺物の場所をそのまま記録したか、あるいは29日の略測図（図38-2）と出土時の記憶を元に位置を復元し、それを記録したかといった点については残念ながら不明である。現状では、この図38-2とほぼ対応する図43（上）がある程度出土時の位置関係を示していると想定して、両者を対比しつつ検討する。まず図43（上）の右手に破線で円形に示された箇所があるが、おそらくこの周辺が金環１点と兵庫鎖の出土位置であろう。次に「コジリ」と記された２点は、図38-2と図43に示された内容から、図47の100・101に対応する。これ

らは同一個体の可能性がある鉄刀であり、やや離れて出土している。その左手に描かれた刀剣類は、現物でいえば図47の102の鉄剣が対応する。そしてこの東壁沿いで、土師器の杯（図46の88か）が出土している。これらの出土状況は写真による記録が残されている（図版16-2）。これ以外、鋏や鉸具は、図51の140や図53の155などが該当する可能性がある。これらはいずれも、次にみる石材除去後の鉄鏃類などより新しい段階での副葬の可能性があることから、周辺の須恵器についても7号墳出土須恵器の中のより新相のものである可能性があろう。これらが仮に床面石材直上であったとした場合も、原位置を保っていたかどうかは確定できない。副葬後のある時点からは大きく動いていないのかもしれないが、その時点がいつであるのかを確定することは1953年においても困難であったとみられる。ここでは壁沿いの副葬品の一部は副葬時の原位置を保っているものが含まれている可能性を認めつつ、その後のさらなる追葬等に伴う片付けや後世の攪乱などによって一部は当初の原位置を乱された状態であるものと考えておきたい。

次に問題となるのが、図43（下）の、床面石材除去後の遺物出土状況である。８月１日に遺物の返還と図面の作成がある程度進んだ段階で、８月２日に床面石材を剥がしたところ直下から鉄鏃・その他不明鉄製品・緑色ガラス玉・須恵器・土師器片が出土している。８月３日はさらに玄室北側空間から出土したものと同類の金環１個が出土したという。鉄鏃類以外では、完形に近い鉄器類という点と出土状況図から、図52・53の農工具類などが該当する可能性が高い。これらについては、上述のように８月２日と３日の日誌に記録される際にも、第一次埋葬の所産か盗掘の際の混入かという点について検討され、３日の日誌では「板石の置き方が玄室とは異なり動かされた形跡のあること」から混入の可能性が示唆されている。筆者は、鉄鏃類と鉄製農工具類といった製品にほぼ限定されている点から、これらが元来前室の埋葬に伴う副葬品であり、その後追葬が行われる際に片付けられ、その上に床面石材が配されたのではないかと考える。もう１つの可能性として指摘しておきたい。その上で、図43（上）の副葬品を伴う別の被葬者が埋葬されたものと想定され、さらにその後の追葬等によりそれらが原位置を動かされたものと考える。なお石室の項でも述べたように、床石除去後の床面のレベルが玄室床面よりもやや高いとみられることから、この面のさらに一層下に、もう一段階先行する埋葬面・玄室と同様の床石の面などが存在する可能性も否定できない。「床石上層」と「床石下層」に先行する床面の存在の可能性も含め、前室での埋葬行為とそれに伴う片付けが３回以上行われた可能性についても想定しておく必要があろう。

羨道　羨道および石室入り口・前庭部付近での遺物出土状況については、図38-2と図42および図版16-1に記録されている。初日の７月26日にすでに須恵器の高台付碗・鉄刀破片・鉄製辻金具片・糸切り痕の土師皿などが出土しているが、鉄刀片や辻金具片については現物不詳である。７月29日・30日の調査で土師器の高杯（図46の93）や須恵器の高杯脚、石室外から金環１個、蓋杯２個分、細頸壺２個分（92・94）などが出土しており、「石室封鎖後入口に於て祭祀を行ひたるものか？」（30日）と想定されている。一部盗掘時に石室内からかき出されたものが含まれている可能性と、石室入り口付近での墓前祭祀に伴う供献品が残存した可能性の両者を考えておきたい。

以上を整理すると、玄室からは人骨片、金環２個と須恵器片等が原位置を保っていない状態で出土しており、盗掘・攪乱のため元来の副葬位置の復元は困難である。前室の出土遺物が最も多く、須恵器杯・土師器杯・金環１点、鉄製刀剣類・鉄鏃類・馬具類・須恵器などが床面石材上面（前室上層）から出土し、床面石材の下（前室下層）から鏃類・農工具類を主体とした鉄器類と緑色ガラス玉・金環１点が集中して出土している。これらはそれぞれ追葬などに伴う片付けのために元来の副葬品の位置関係が改変されたものと想定した。羨道付近では須恵器・土師器と金環１点などが出土している。

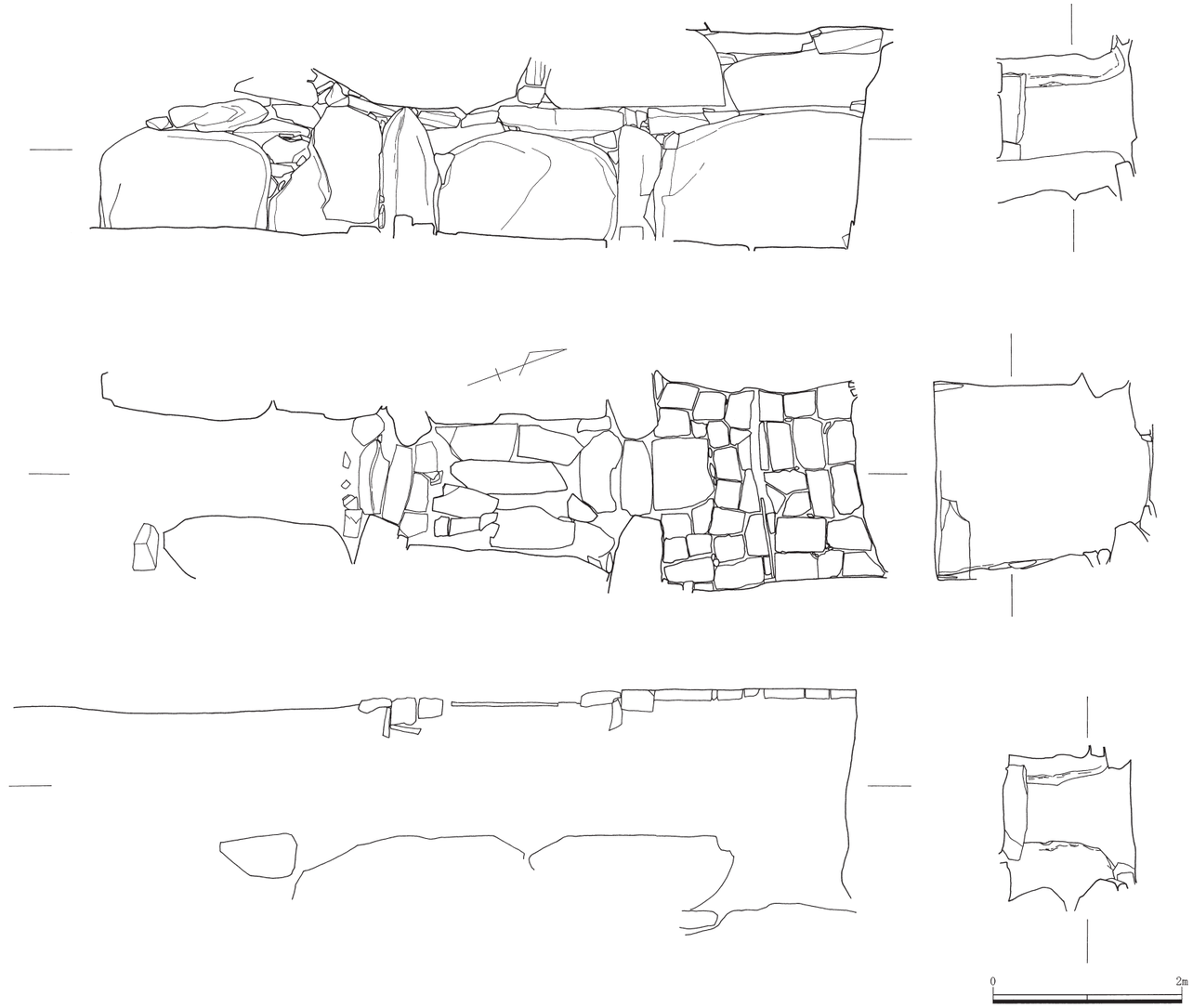


図41　７号墳・石室実測図（東亞考古学会調査：縮尺1/60）

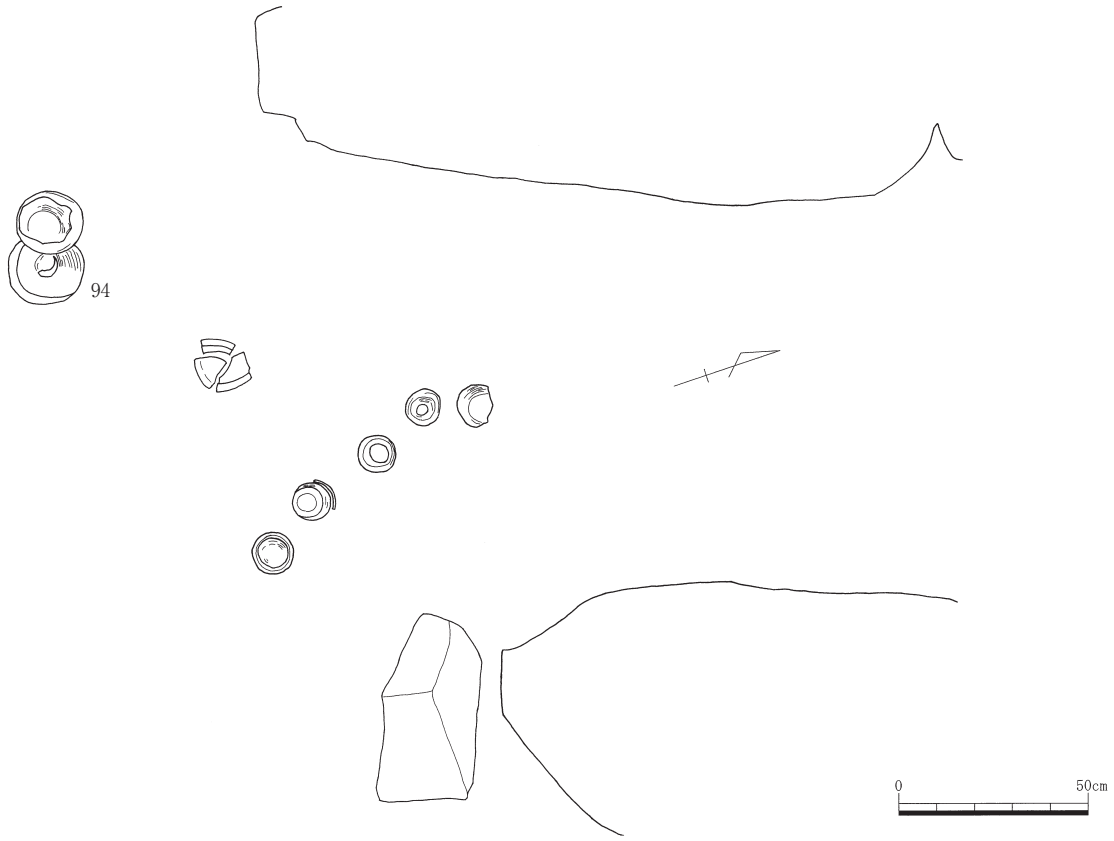


図42　羨道部前面・須恵器出土状況（東亞考古学会調査：縮尺1/20）

図43　前室遺物出土状況（東亞考古学会調査：縮尺1/20）

本来の内容と埋葬後の状態を最も維持していたとみられるのは前室の東壁寄りの部分であったことを確認した。

（6）東亜考古学会調査の出土遺物

a）７号墳出土遺物について

以上の日誌の検討から、金銅製耳環（「金環」）が計５点出土していたことが判明した（玄室北側・玄室南側・前室石材除去前・前室石材除去後、羨道部入口外側）。以下で検討する出土遺物で現物不明であるのは、これらの金環5点と、前室石材直下出土の緑色ガラス玉（点数不明）である。これ以外で現在保管されている遺物は、須恵器・土師器・石室床材・鉄器類（刀剣類・鏃類・馬具類・農工具類）である。（辻田）

b）土器類・その他（図45・46、表４）

・須恵器

77～85は杯蓋である。77は天井部と体部の境にわずかに段があるが全体に丸みを呈する。天井部にヘラ記号が刻まれる（図45最下段左側）。牛頸編年ⅣA 期（６世紀末）に相当するだろう。78は身受けのかえりを持ち、天井部はヘラ切り後指でナデる。80も身受けのかえりを持ち、天井部はヘラケズリされ平坦面をなし、ヘラ記号が刻まれる（図45最下段右側）。体部は反るように外方に開く。ⅣB 期前半（７世紀初頭～前半頃）の形態に近い。79と81は比較的口径が大きい。身受けのかえりは短く、体部より下方に出ずに体部に収まる。天井部が欠損しており、つまみを持つか否かは不明である。82は天井部がやや粗くヘラケズリされ、身受けのかえりは体部に収まる。83は中央部がやや尖るボタン状のつまみを持ち、端部は身受けのかえりを持たず下方に折り曲げる形態である。天井部はヘラケズリが施される。ⅦA 期（８世紀初頭～前半頃）に相当するとみられる。84は天井部と体部の境に明瞭な段を持ち、天井部中央は欠損しているが、さらにもう一つ段を有していたようである。体部にはヘラによる斜線文が施され、その下部には一条の突帯がめぐる。段を有する点や暗灰色に近い緻密な胎土などから、半島系土器である可能性も考えられる。実際に、対馬コフノ隈遺跡の報告では、類似した土器が半島系として報告されている（長崎県上対馬町教育委員会1984 p.32 第41図 -4）。85は天井部が欠損しているが、ヘラケズリが施され、83と同様につまみが付いていた可能性がある。86～89は杯身である。86は体部がほぼ直線的に外方に開き口縁端部がやや外反する。底部は欠損しているが、高台はつかないようである。ⅦA 期（８世紀初頭～前半頃）か。87は体部が直線的でやや外方に立ち上がり、底部と体部の境は明瞭で端部より内側に短い高台がつく。ⅦA 期（８世紀初頭～前半頃）か。88は高台を持たず、やや深く丸みがある。底部に回転ヘラケズリを施す。89は体部がほぼ直線的に外方に開き、底部端部よりやや内側に付いた短い高台は外側に開く。ⅦA 後半（８世紀前半）か。

92は瓶（瓶子）である。底部と胴部の境がヘラケズリされるほか、全体にナデ調整が施される。ⅦA 期～ⅦB 期（８世紀代）によくみられる器種である。94は脚付壺。頸部下方は直立し、胴部はやや上方で肩部が張り出す形態を持つ。肩部には自然釉が付着。胴部最大径付近には上下に平行沈線をめぐらせ、その区画内に斜めの連続刺突文が付く。胴部下方は回転ヘラケズリを施す。脚部はやや反るように裾部に向かって広がり、焼成前穿孔が３方向にある。96、97は大甕の頸部屈曲部片。96は頸部外面上方に波状文が施され、肩部内面には同心円状の当て具痕がみられる。97は肩部外面に平行のタタキが施され、内面に同心円状の当て具痕が残る。頸部には沈線が一条みられる。（齊藤）

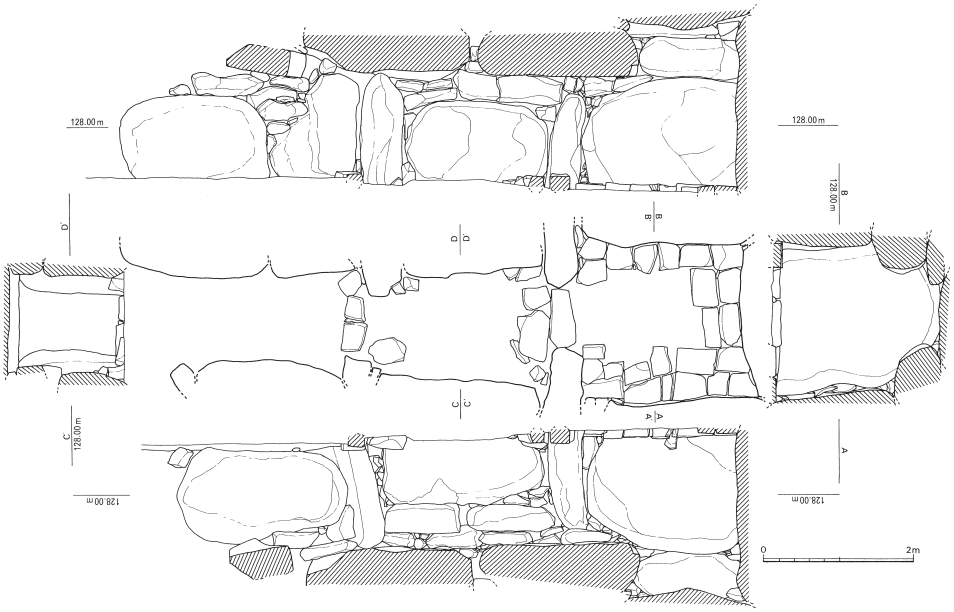


図44　７号墳・石室実測図（長崎県教育委員会調査：縮尺1/100）

・土師器

90は杯蓋。胎土が緻密で非常に薄い。天井部から体部まで丸みを持ち、天井部はヘラケズリされ、体部上方には指ナデが一周めぐる。比較的精緻な胎土で作られており、「畿内産土師器」（西1982、林部1992ほか）の模倣である可能性も考えられよう。91は中世の小皿。底部には回転糸切り痕が残る。93は高杯。杯部の内外面は一部のみミガキがみられ、脚部外面はタテ方向のミガキが明瞭である。脚部との接合面付近には指オサエの痕跡が残る。半球状の杯部は５世紀中頃以降に見られるようになる形態であるが、調整が粗略化しつつあることなどをふまえ６世紀後半以降に下るものと考えられる。99は埦のような器種の胴部片。外面はミガキがあり、一部摩滅している。内面は板状工具によるナデが施される。胎土は比較的粗い。（齊藤）

・その他

95は中世の青磁埦。口縁端部から底部まで均等な厚みを保ちながら曲線を描いて伸び、短い高台が付く。内面および外面上半まで施釉され、見込み部には蛇目口釉剥ぎがみられる。同安窯系のものか。

98は石板。石室の床石として使われたものと考えられる。石材は玄武岩か。（齊藤）

ｃ）鉄器類（表５）

・刀剣類（図47）

前項でみたように、鉄器類が多く出土した前室では、８月２日に床石の取り外しが行われていることから、それを基準として大きく「上層」と「下層」に区分することができる。

100・101は鉄刀、102は鉄剣、103は捩り環である。日誌において、100・101は「コジリ金具」（鞘尻金具）として注目され、101は「銅環付」と記されたものに該当する。これらはいずれも取り上げ

後そのままの状態で保管されており、土と一体化している部分もあり崩壊の危険があったため、長崎県埋蔵文化財センターの片多雅樹氏に依頼し、錆落としと保存処理、および部分的な分析を実施していただいた。あらためて深く謝意を表するものである。

100は厚さ約６mm・幅2.5cm の刀身部をもつ鉄刀に、青銅製の鞘尻金具が伴うものである。鞘尻金具には木質が残存しており、本来、鞘尻金具を伴う鞘に収められた状態で副葬されていたものとみられる。鞘尻金具は、残存長6.5cm、最大幅2.6cm、先端部は2.3cm×1.3cm の楕円形を呈している。厚さ約0.5mm の青銅板を丸めて溶接したものとみられ、側面部の合わせ目は見えなくなっている。先端部は一部が割れて隙間が生じている。

101は厚さ約6mm・幅2.7cm の刀身部に２本の銅環と鏶金具を伴う鉄刀である。残存長は17.2cm である。刀身部の法量が100とほぼ一致するので、本来同一個体であった可能性が高い。刀身部の周囲には鞘の木質が良好に遺存しており、100と同じく鞘に収められた状態で副葬されていたものとみられる。鞘の木質は二枚重ねのものであり、２本の環状金具（「銅環」）を巻いてこれらを固定している。なおこの２本の環状金具は、前述の片多氏の分析の結果、表面から銀が検出されており、銅地銀装であることが判明した。また環状金具は一方に大きく突出しており、断面凸字状を呈する。柄縁部には、形状から鋳造品とみられる鏶があり、全体で3.8cm の長さを測る。断面は卵形を呈しており、刀身部側の最大径が2.9cm、柄部側の突帯部の最大径は3.4cm である。その刀身部側に2.3cm 幅の青銅製金具が伴い、両者は重なった状態で固着している。柄部は大半が欠損している。

また片多氏の分析の結果、鏶金具は銅・鉛・錫による青銅製であることが判明しており、かつ鏶金具でも臭素（Br）が検出されていることから、「臭化銀（AgBr）」の所産として、鏶金具についても銀装の可能性がある。さらに、「銅地銀装」と想定された２本の環状金具では錫が検出されていないことから、これについては鍛造の可能性も想定される（以上の２つの見解については、片多氏から直接御教示いただいたことを明記する）。

102は切先部分を欠損する鉄剣で、残存長41.5cm を測る。剣身幅は3.4cm、厚さは６mm である。茎部は長さ14.3cm、中央付近の幅は約２cm、厚さは５mm で、両関である。中央に径約３mm の目釘穴をもつ。また茎端部に近い部分が錆膨れのため三角形状に隆起している。茎端部は厚さ２mm まで薄くなっている。

103は鉄地銀張りの捩り環である。注記に「I-21 8/4」とあることから、７号墳調査最終日の、前室東壁側で出土した遺物（「その他不明鉄製品」とある）に該当するものとみられる。最大幅が外径で7.7cm、内径で5.6cm、高さは最大で3.9cm、柄頭からの推定露出部分の高さは約2.7cm である。鉄芯部の先端はいずれも尖っており、図示した左手の方がやや大きい。目が細かい捩りが施された銀板が全体を覆っているが、左手の方は鉄芯の錆が進行して全体を覆っている。

以上のように刀剣類については、青銅製の鞘尻金具を伴う鉄刀一振りと鉄剣一振り、そして捩り環１点が確認できる。これらのうち100・101は日誌に記載された出土状況において前室の床面石材上面（石材除去前）から出土したものとみられ、確実に上層である。形態からも７世紀代のものとみられる。攪乱による欠損か埋葬行為に伴う破砕かは不明である。

他方、103の捩り環については出土日（８月４日）と日誌の記載から、調査終了直前に出土したもので、床石除去後の下層に属するとみられる。本来は大型の大刀に伴っていたものと考えられるが、この下層の遺物の中には大刀がみられず、また７号墳全体としても大刀の出土が確認されていないことから、前室に埋葬された被葬者に伴うものか、元来は玄室に埋葬された被葬者の副葬品であるのかといった可能性も含め、本来の副葬位置や帰属については不明な点が多い。調査開始日の７月26日に

「羨道天井石の外、両側壁の中間」から鉄刀破片が出土したとあるが、これも現物としては確認できない。100・101の欠損部分に該当する可能性とともに、それらとは別に盗掘の際にかき出された鉄刀が存在した可能性も想定される。捩り環自体は、鉄地銀張りで法量から深谷淳氏分類（2008）のⅢB類に該当する。TK43型式期前後に増加する事例の中に位置づけることができ、類例として奈良県藤ノ木古墳出土例などが挙げられる。（辻田）

・鏃類（図48・49）

本報告では、鏃身部の形態を基準とし、以下のように分類した。

Ａ類…片刃形の鏃身部を有するもの（図48：104）

Ｂ類…鑿箭形の鏃身部を有するもの（図48：105～112）

Ｃ類…長大な鑿箭形の鏃身部を有するもの（図48：113・115）

Ｄ類…長三角形の鏃身部を有するもの（図49：129・130・133・134）

Ｅ類…三角形の鏃身部で、深い逆刺を有するもの（図49：131）

Ｆ類…方頭形の鏃身部を有するもの（図49：127・128）

Ｇ類…鏃身部に透かしを有するもの（図49：132）

以下、それぞれの分類単位ごとに特徴を述べていく。Ａ類に属するものは104の一点のみである。逆刺は持たず、長い頸部を有する。頸部関は棘関である。

105～112はＢ類。本古墳出土で最も多く出土している鏃である。鏃身は全体的に丸みを帯びており、鏃身関は撫関である。杉山秀宏氏による鉄鏃編年案のＸＩ期（TK209型式期）以降に位置づけられよう（杉山1988）。鏃身断面形は105～109・111が片鎬造、110は片切刃造である。頸部関はいずれも棘関をもつ。107は鏃身部に別個体の鏃身部が付着している。

113・115はＣ類。いずれも鏃身断面形は片鎬造で、鏃身関部は撫関。頸部関部は113が撫関、115は棘関を有する。115は鏃身部上半が欠損している。

129・130・133・134はＤ類。129の鏃身関は角関で他と異なる。130・133・134はいずれも浅い逆刺を有する。

131はＥ類。杉山氏の腸抉三角形鏃Ｂ形式（杉山1988）に属するものと考えられる。やや深めの逆刺を有しており、頸部関は撫関。

127・128はＦ類。127の鏃身部は上方が幅広で下方に向かうほど幅狭になる。鏃身関部は撫関。128は鏃身部が欠損しており判断が困難なものの、おそらく方頭鏃と考えられる。鏃身関・頸部関はともに撫関である。棘関を有する別個体の茎部が付着している。

Ｇ類は132の一点のみである。鏃身部の一部が欠損しており、形態は不明である。鏃身の中央に大きな透かしを有している。

116～126は鉄族の頸部～茎部である。確認できるものはいずれも棘関を有する。棘関はTK43型式期に出現するとされている（関1986；杉山1988）。（福永）

・馬具類（図50・51）

135～138は、鐙の兵庫鎖と考えられる。大半が２本の鉄棒を連結させており、鉄棒の断面は円形を呈する。これらが同一個体のものかどうか判断することは困難だが、136は他に比べて鉄棒の径が小さく、135・137・138とは別個体である可能性が高い。135は「8/1」のラベルがあり、上層出土であることが確認できる。

139は、引手金具。一本の鉄棒を折り曲げて成形している。

140は、鉸具。おそらく135～138の兵庫鎖のいずれかと連結していたものと考えられる。

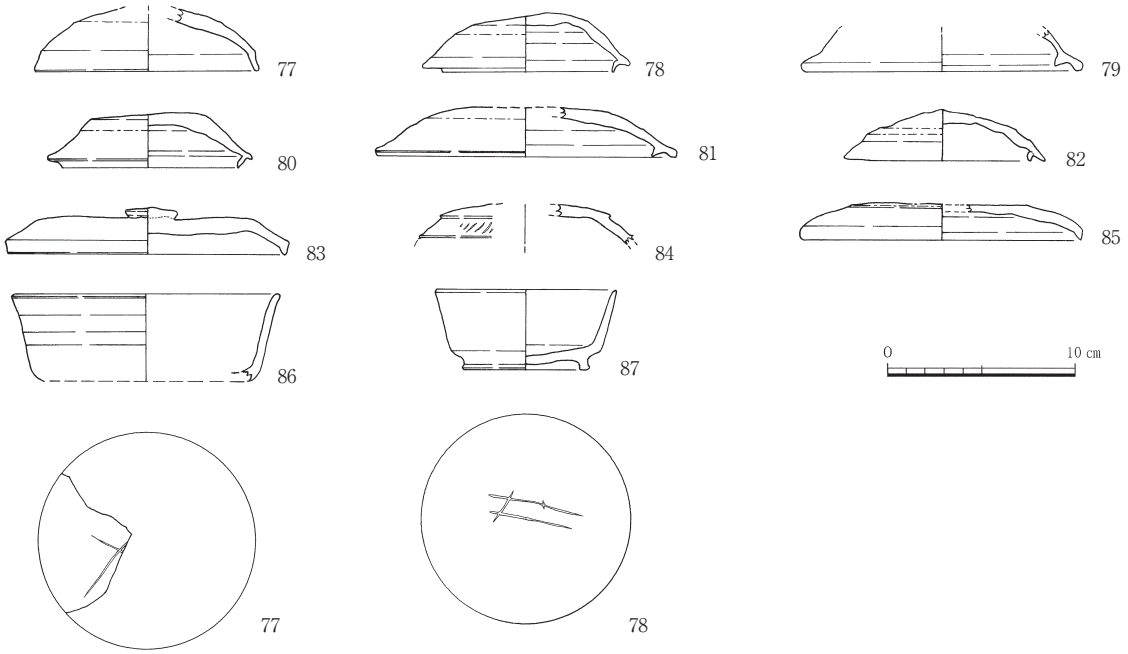


図45　７号墳・出土遺物実測図①（縮尺1/4）

鉸具頭は瓢箪形を呈する。刺鉄が残存しており、鉸具頭の鉄棒に巻きつけるように一辺を固定している。

141は、おそらく銜の一部と考えられる。斜行する捩り痕跡が見られる。「I3 7/31」のラベルがあり、上層に属する。

142は、馬具の飾金具か辻金具の脚部と考えられる。菱形状に鉄板を加工し、外縁を折り曲げて成形している。鋲が３つ付けられている。「I8 7/31」のラベルがあり、上層に属する。　（福永）

・農工具類（図52・53）

143～145は、曲刃の鉄鎌である。143はほぼ完形で残存しており、全長13.5cm を有する。刃に対する柄の角度は90°前後である。144は刃部であり、着柄部は欠損している。145は着柄部である。刃に対する柄の角度は90°前後。

146・147はＵ字形刃先。146の平面形は、全長より横幅が狭い幅狭の形状である。刃部の断面形はＹ字形を呈する。147はＵ字形刃先の耳端部であり、こちらも断面形はＹ字形を呈する。端部に鉸具が付着しており、おそらく140と同形の鉸具であると考えられる。147は「前室東壁側 8/2」のラベルがある。

148・149・150・151・152は、袋状鉄斧である。148・149・150・151は袋部で、いずれも刃部は残存していない。袋部横断面は、148は円形、149は方形、150・151は横長の楕円形を呈すると考えられる。148・149・150は鉄板に厚みがあるが、151は鉄板が薄い。152は刃部と考えられるが、残存状態が悪く判断が難しい。148には「I1 7/31」のラベルがあり、上層に属するとみられる。

153は、刀子の柄部。破損しているが、おそらく両関造りの刀子と考えられる。

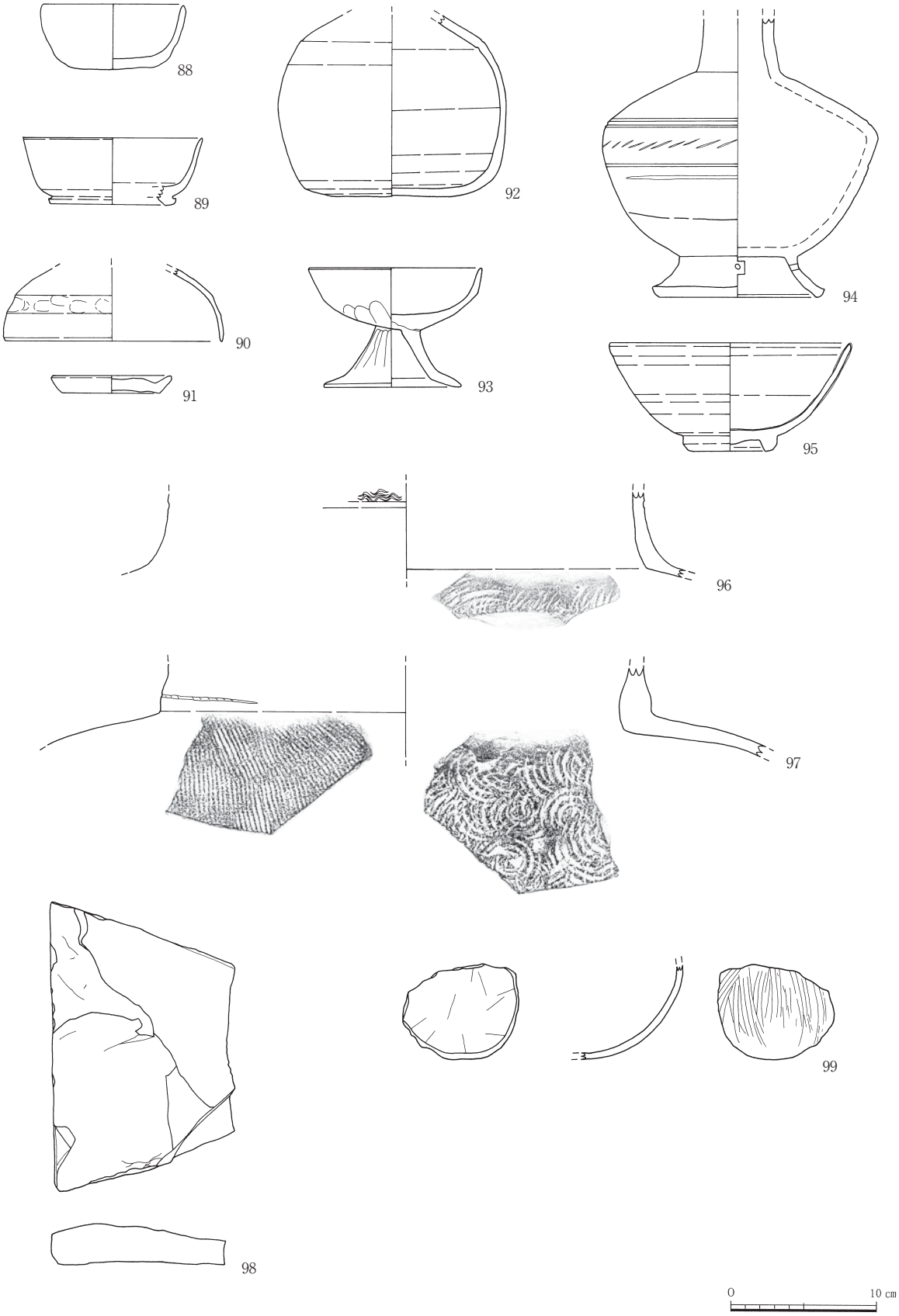


図46　７号墳・出土遺物実測図②（縮尺1/4）

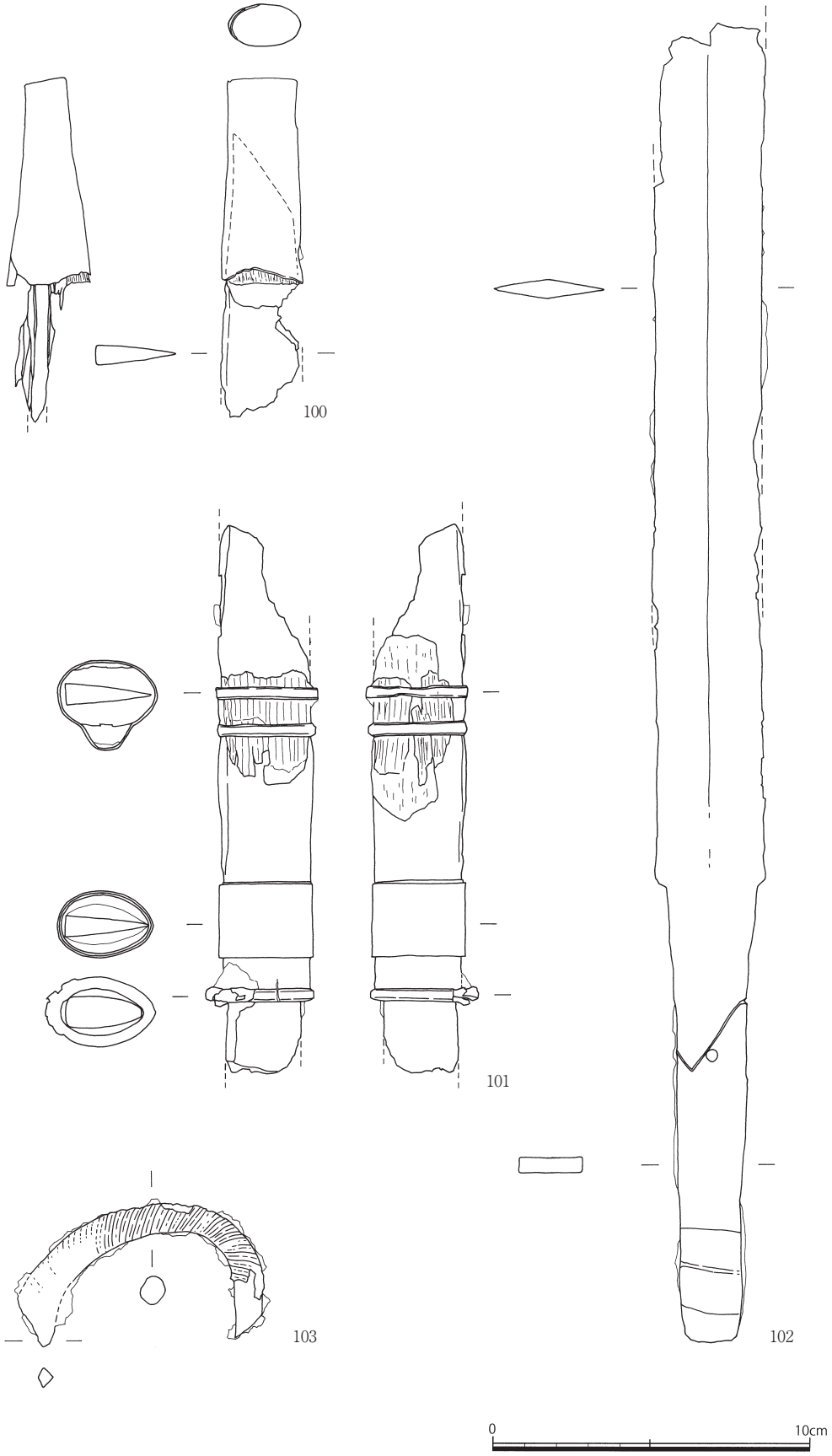


図47　７号墳・出土遺物実測図③（縮尺1/2）

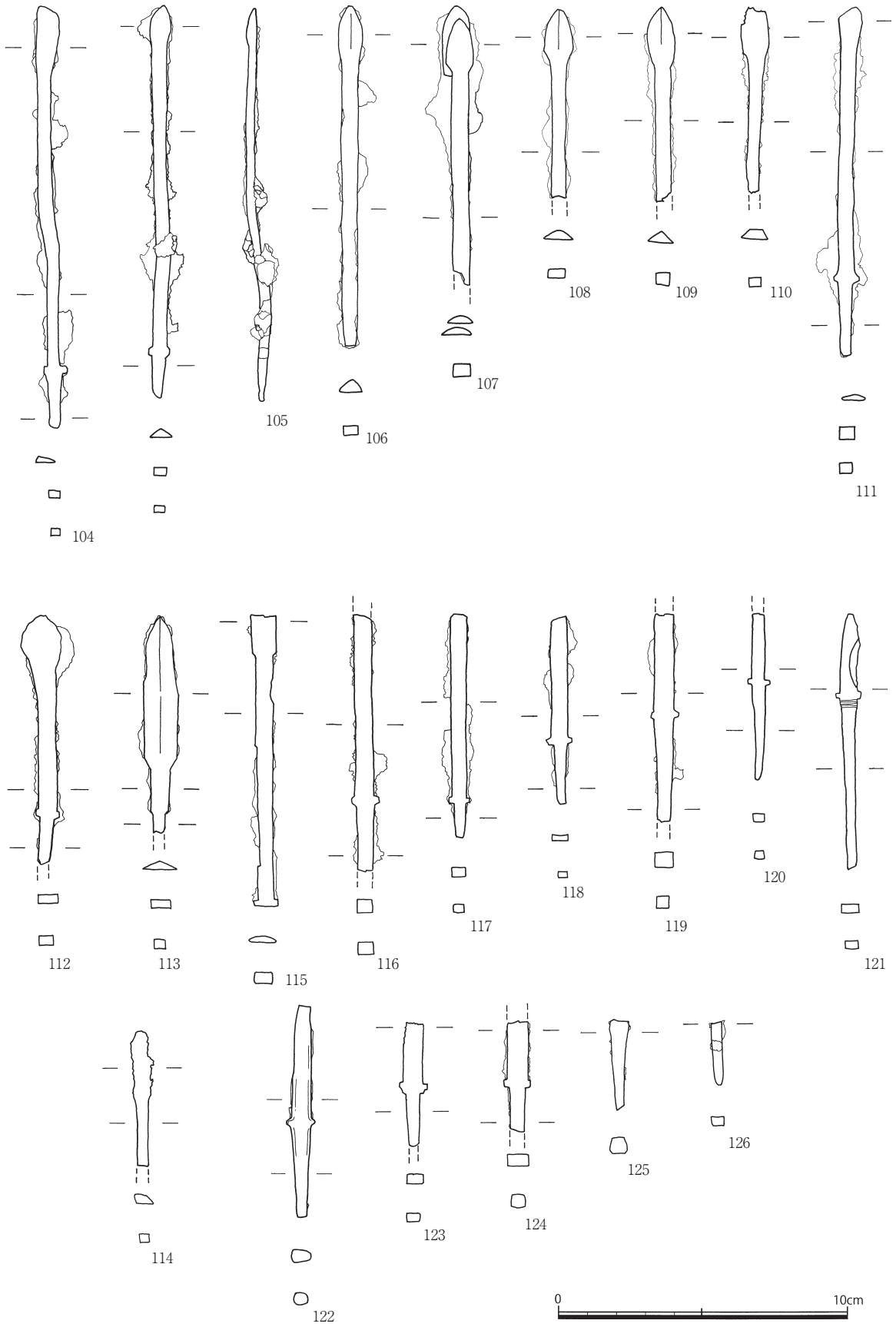


図48　７号墳・出土遺物実測図④（縮尺1/2）

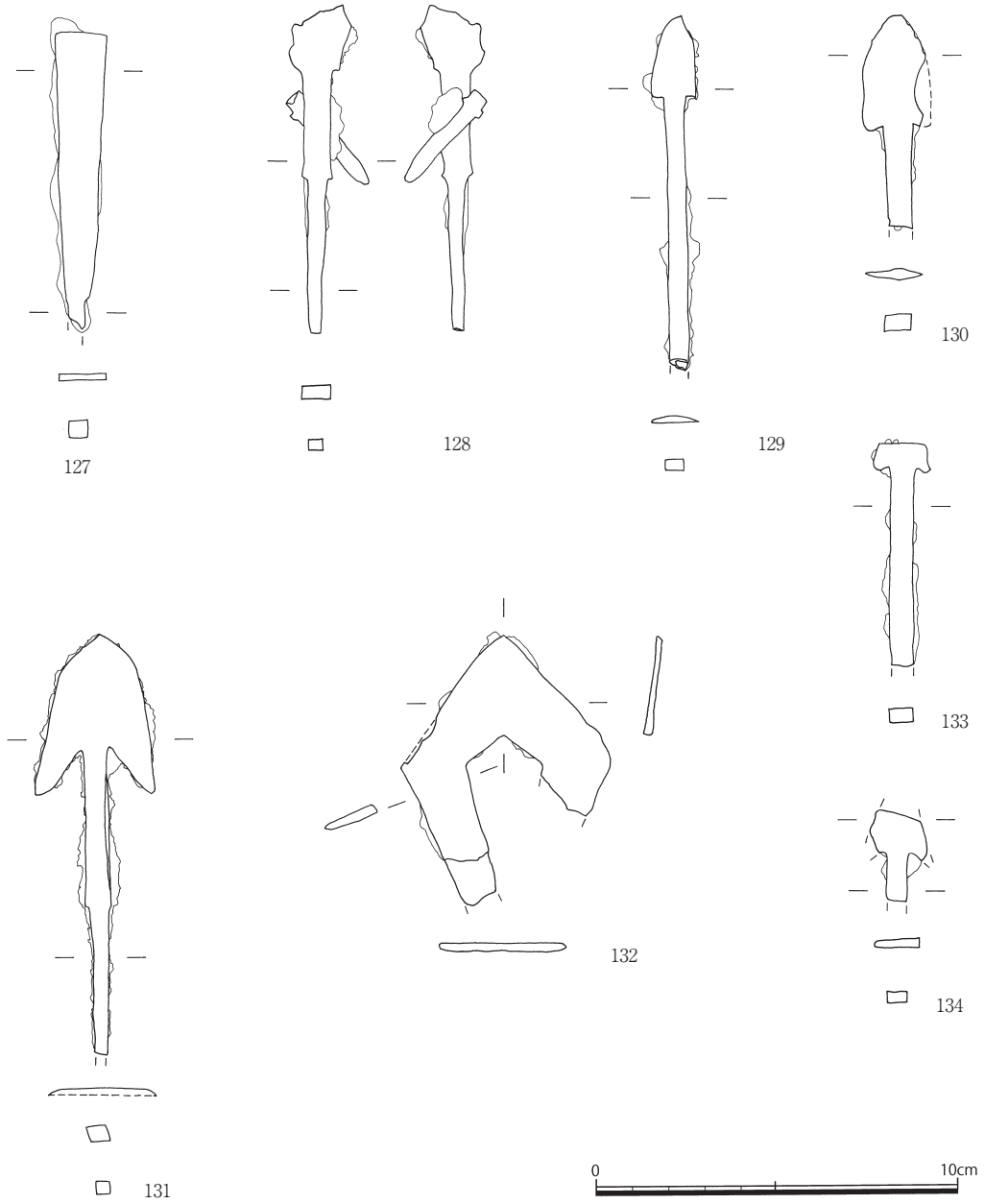


図49　７号墳・出土遺物実測図⑤（縮尺1/2）

154は、刃部は破損しているが鉈と考えられる。角関を有する。

155は、不明鉄製品。幅0.4cm、厚さ0.2cm の棒状の鉄板の両端を屈曲させている。鉄板の断面は長方形を呈する。日誌に記述があった「鋏」状鉄製品とみられる。（福永）

（7）長崎県教育委員会調査の出土遺物（図54）

長崎県教育委員会による調査時には前室床面から須恵器片１点が出土している。次のように報告されている：「表面灰白色で、焼成は良好である。体部注意に凸帯が巡り、その上に櫛状の原体による斜文が連続して施される」（県報：p.40）。筆者未実見であるが、形態や櫛状原体による斜文といった

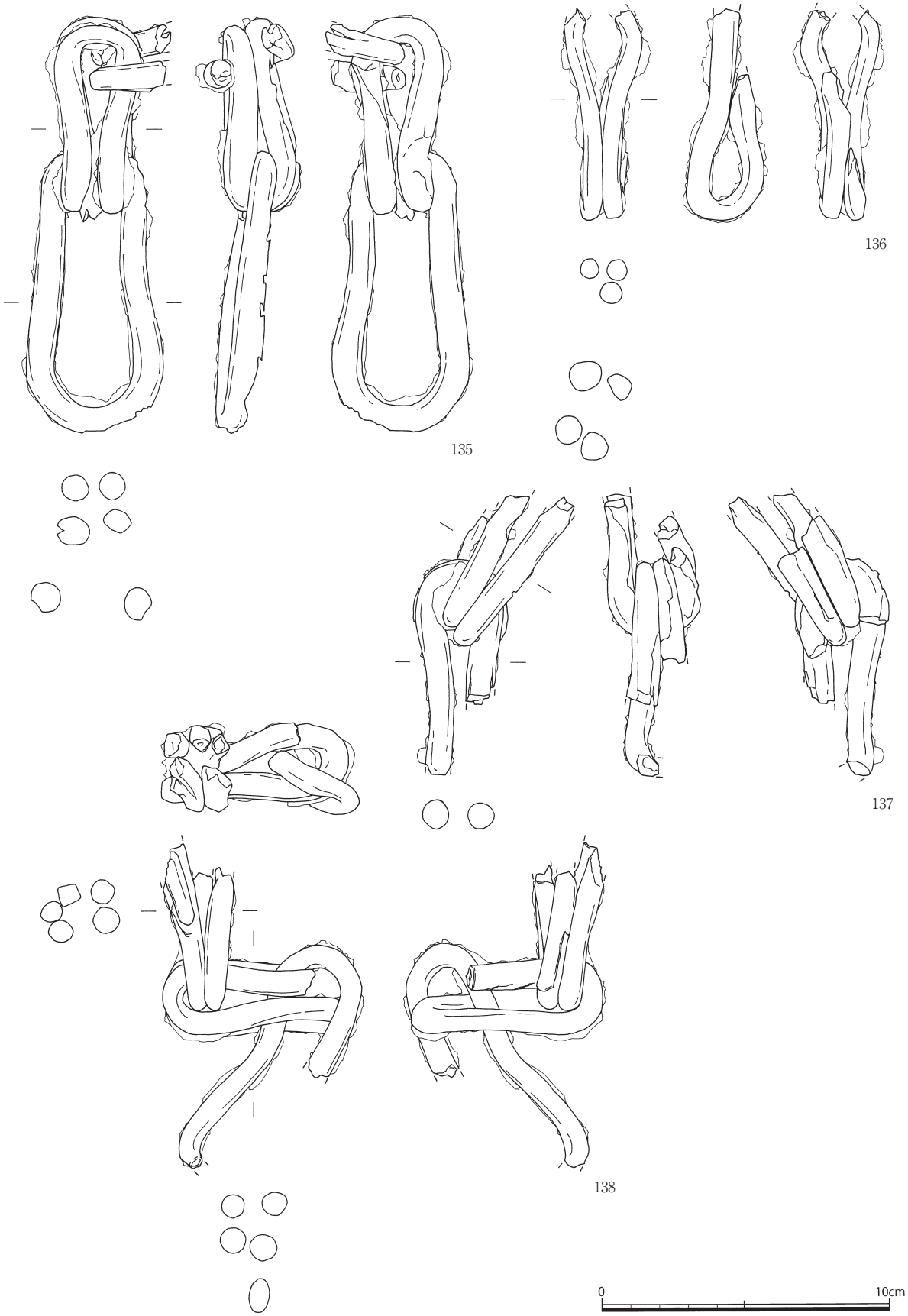


図50　７号墳・出土遺物実測図⑥（縮尺1/2）

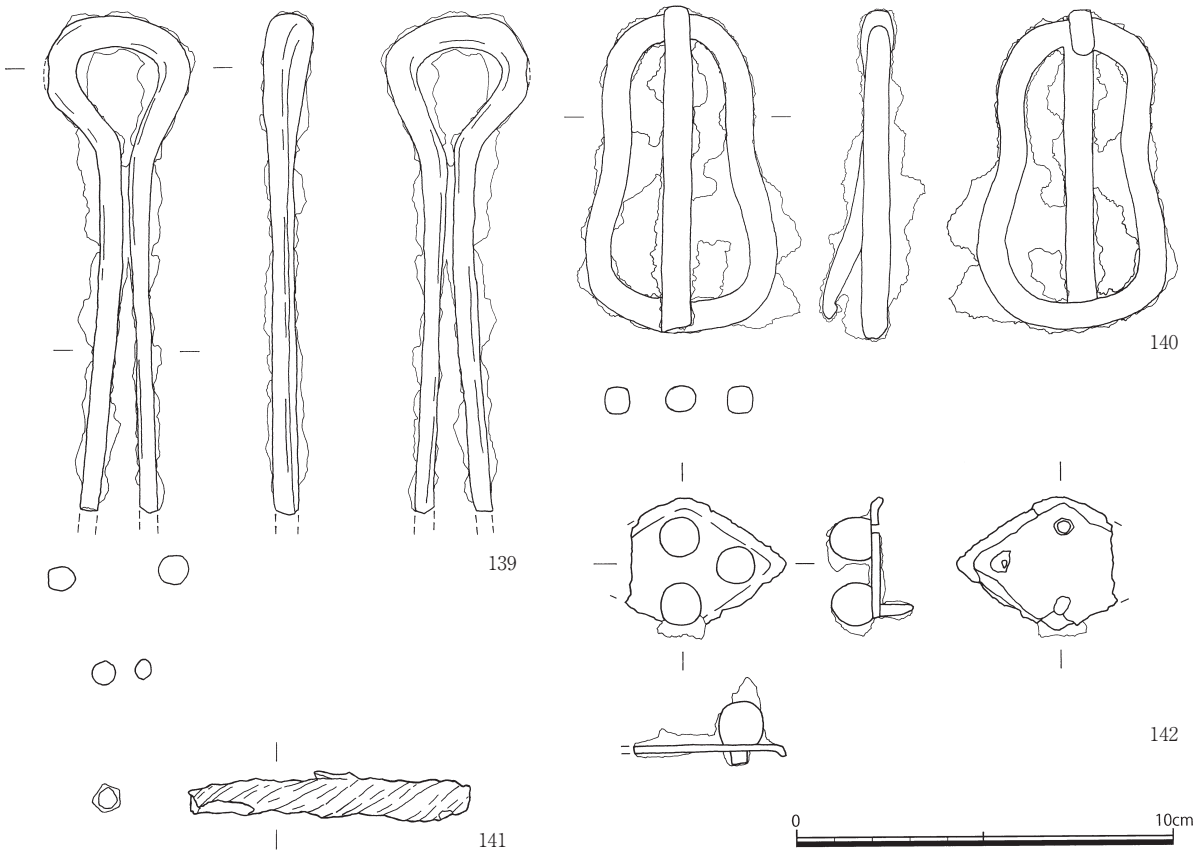


図51　７号墳・出土遺物実測図⑦（縮尺1/2）

特徴が他の７号墳出土須恵器とは異なっており、半島系土器の可能性も含めて注意しておきたい。

（辻田）

（8）小結

以上、妙泉寺７号墳の東亞考古学会による調査成果について、長崎県教育委員会の調査成果と対比しつつ検討してきた。その結果、径約16m 前後の円墳で複室両袖型横穴式石室をもつ７号墳について、特に遺物の出土状況や出土遺物の実態が明らかとなった。１号墳と同様、７号墳も盗掘を受けていたが、前室において一部追葬に伴う片付けなどの結果として、副葬品の出土位置が一定の原位置を維持されていた可能性を指摘した。横穴式石室については、玄室に仕切石を伴う点が新たに確認され、方形プランの玄室であることから、北部九州の横穴式石室と対比すれば概ね６世紀末～７世紀初頭前後の年代観が想定される。出土遺物については、須恵器が示す年代がⅣA 期（６世紀末）・ⅣB 期前半（７世紀初頭～前半頃）、またⅦA 期（８世紀初頭～前半頃）であることから、７号墳の築造年代は須恵器ⅣA 期前後の６世紀末頃と考えられ、横穴式石室の形態から想定される年代観とも概ね一致している。その後、７世紀初頭～前半において追葬が行われたとみられ、これが前室の副葬品出土状況と関わるものと考えることができる。さらに８世紀代の須恵器などが出土していることから、奈良時代になってからも妙泉寺古墳群あるいは７号墳において須恵器の供献が行われたものと考えられる。盗掘の時期がこの８世紀代の須恵器が示す年代まで遡るかどうかは不明であるが、遅くとも土師皿や陶磁器が示す中世までには開口していたとみられる。

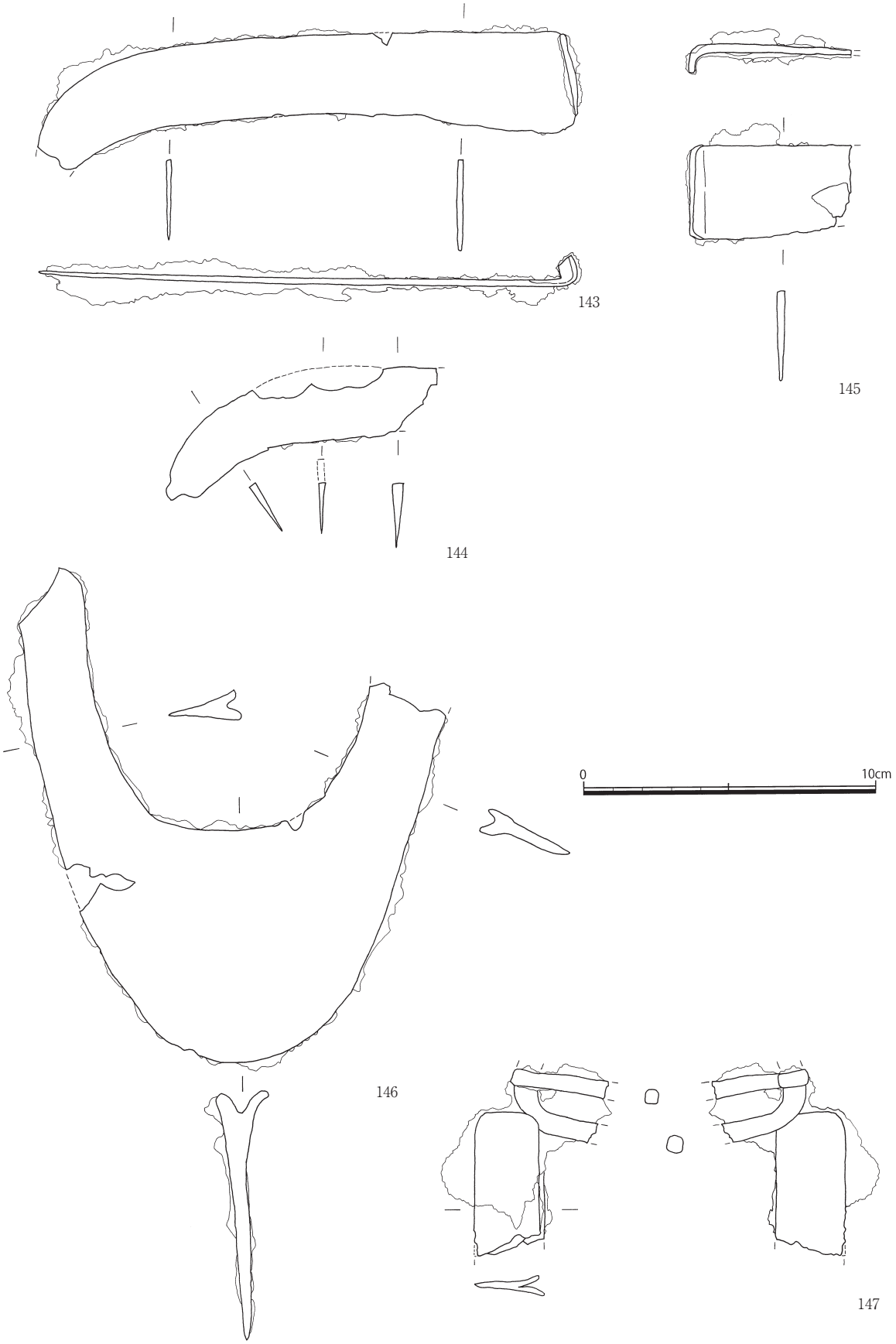


図52　７号墳・出土遺物実測図⑧（縮尺1/2）

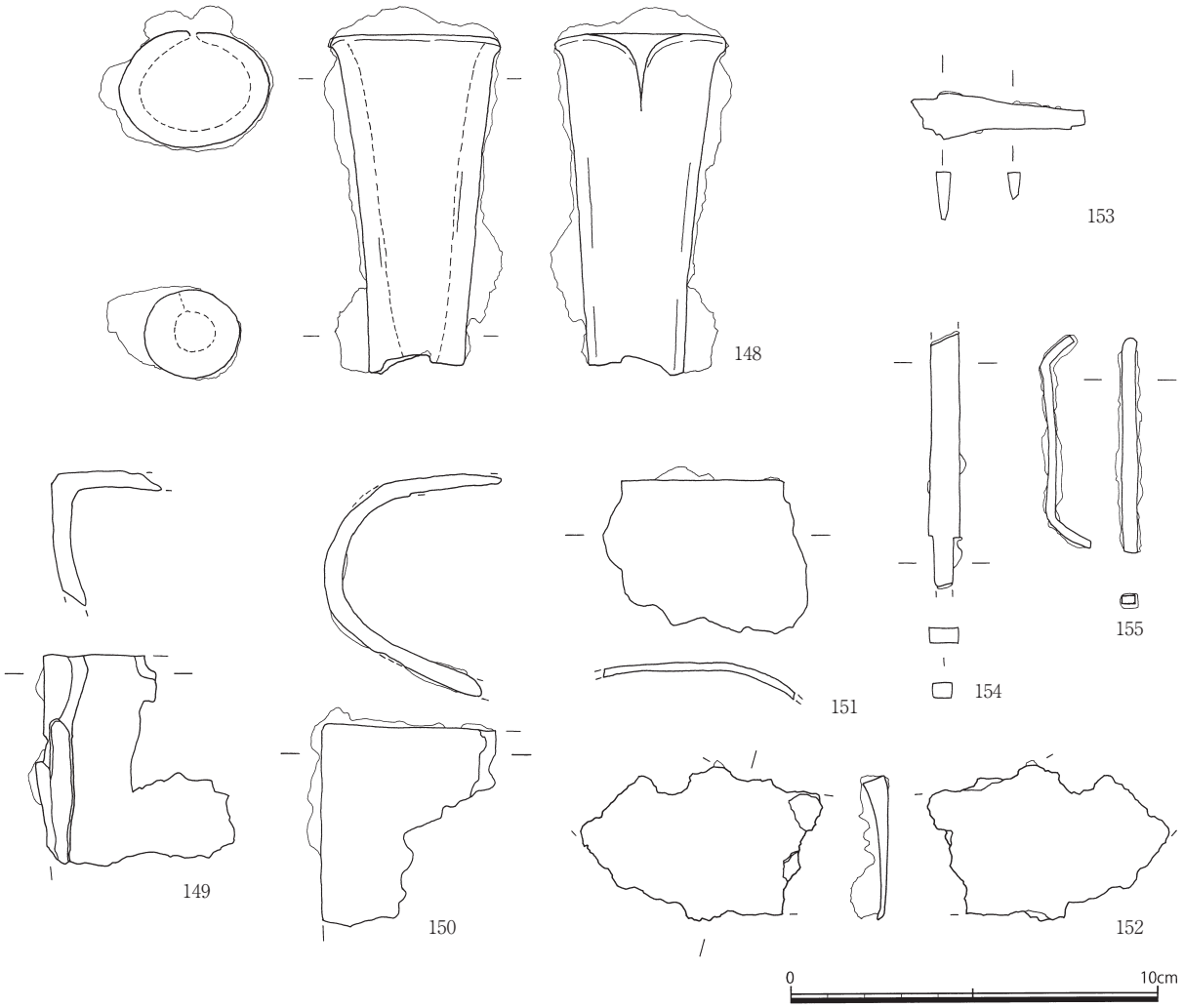


図53　７号墳・出土遺物実測図⑨（縮尺1/2）

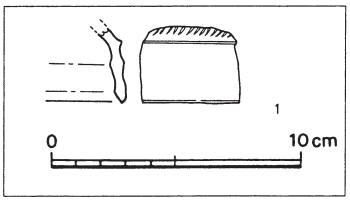


図54　７号墳・出土遺物実測図⑩（縮尺1/3）

鉄器類については、鏃類・農工具類の多くは前室床面石材除去後（前室東壁付近下層）に属し、刀剣類・馬具類の多くは前室床面石材上面（前室東壁付近上層）に属するものとみられる。鉄製馬具類は、轡・鐙などで一セットをなすものと想定される。捩り環については、出土日から前室東壁下層付近での出土と想定されるが、大刀が未確認であることから元来の副葬位置・帰属については不明である。

妙泉寺古墳群では、１号墳・７号墳のいずれにおいても、現状では朝鮮半島系土器・新羅土器や畿内系土師器などについては、出土量の比率としてはごく僅かである（１号墳は造営年代が古いためい

ずれも殆ど出土していない)。この点は、以下で検討する鬼の窟古墳などをはじめとした壱岐古墳群との違いとして挙げられよう。

古墳群全体の変遷については不明な点が多いが、現在の資料からは、西端に位置する最大の１号墳が６世紀中葉前後に最初に築造されたものと想定される。その後、７号墳が６世紀末前後に築造され、７世紀以降も追葬が行われつつ、８世紀代にも須恵器の供献が行われたという実態が明らかとなった。１号墳と７号墳の副葬品の内容も含めた妙泉寺古墳群の位置づけについては後ほどあらためて検討したい。

第３節　鬼の窟古墳

１．鬼の窟古墳の位置と環境

鬼の窟古墳の立地と周辺の現状について、芦辺町教育委員会（1990）の報告書（以下、町報）にもとづき説明する。鬼の窟古墳は、壱岐市芦辺町国分本村触に所在する。壱岐古墳群の東端に位置しており、付近の標高は100m 前後である。約150m の距離を置いて北北東の位置に兵瀬古墳が隣接している（図55・56)。前述のように、この２基の古墳は古くから遺跡として知られており、幕末の『壱岐名勝図誌』に並んで描かれている。また東側約500m の位置に壱岐嶋分寺が所在する。

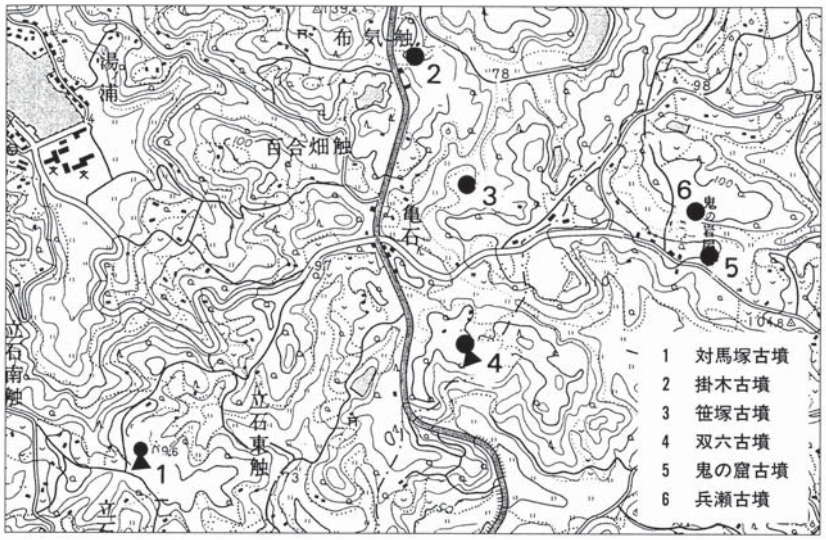


図55　壱岐古墳群分布図（藤田1998）

第１節でみたように、東亞考古学会による鬼の窟古墳の調査は1953年８月６日～10日の５日間にわたって行われた。以下、東亞考古学会の調査成果とその後の調査成果について、第２節と同様、①日誌、②墳丘・石室実測図・写真、③出土遺物の順に検討する。

２．東亞考古学会の調査成果とその後の調査成果

（1）東亞考古学会の調査日誌

本調査日誌は前節で検討した妙泉寺古墳群の日誌と一連のものであり、全体に関わる点については

図56　鬼の窟古墳周辺地形図（町報 Fig.6）

第２節を御参照いただきたい。以下では８月10日の古墳調査終了後、８月15日の日誌終了分まであわせて掲載している。

【鬼ノ岩屋古墳】日誌（抄）

○８月２日（日）晴れ　樋口・林・川端　人夫５

妙泉寺古墳調査を現在までの二基で中止し、国分鬼ノ岩屋を発掘するようとの本部命令あり。

○８月３日（月）晴れ　樋口・林・川端（有光）人夫５

樋口は国分鬼ノ岩屋調査設営の為那賀村に到り村当局の援助を依頼。

○８月４日（火）晴れ　樋口・林・川端

〔鬼の窟古墳についての記載なし。〕

○８月５日（水）曇り　樋口・林・川端

７：30　森貞次郎、鎌木義昌、石丸太郎 三氏来観

９：00　山口氏宅を辞去。那賀村オート三輪にて国分に移動。三氏同乗。森氏のみ田河学校前にて下車、安国寺に帰還。那賀村役場に立寄り村長に挨拶。同村公民館主事江田春之氏より明日からの那賀青年団員の発掘援助の確約を得。

10:00　国分の長崎縣農業試験場壹岐分場長藤田忠員氏宅に宿会を定め、休憩後国分弥生式土器散布地、鬼ノ岩屋古墳を視察。鎌木、石丸は現地よりカラカミ貝塚見学のため出発。晝食後石室壁面実測のため割付を行ふ。試験場生徒斉藤恒利、斉藤菊裕二君手伝。

鬼の岩屋の地名　那賀村大字国分小字本村觸、磐屋、森1206の第一　保安林　地主　横山蔦吉

○８月６日（木）晴れ　樋口・林・川端　那賀村国分青年団５名応援

石室内流入土除去。玄室、第一前室を終了（二つの前室を玄室側より第一、第二と仮称す：図57-1）。

石室の周壁及び天井石はすべて玄武岩を使用。

玄室中央に石室長軸と直角に殆ど玄室幅一杯の板石が斜に倒れて居り、その内側に同質の塊状の石数個在り。第一前室東壁側にも玄室より□大きな板石横倒しになり、一隅は破損してゐる。床面には板石を敷く。板石は棺材かと思はれる。溝等の加工の痕は認められない。板石、床石、塊石は共に凝灰岩質のものである。

遺物は流入土中に祝部土器（蓋、高坏）の破片を数個得たのみで土の状態よりしても床面まで完全に盗掘されてゐる。（附近の古姓の話ではかつて長崎の古物商が古墳の土地を買ひこれを掘ったといふことである）。

夕刻公民館主事江田氏に八日の応援青年団は妙泉寺第一号墳埋戻に当って呉れる様電話で依頼する。

○８月７日（金）曇り　樋口・川端・林　那賀村湯岳青年団３名

午後　金関大人、後藤マラソン翁来観。後藤氏は夕刻まで発掘手伝。

第二前室及羨道土出作業

第二前室も第一と同様敷石あり。部分的に欠除してゐるが盗掘に際して剥したものであらう。第一、第二前室の境には大きな板石が一段高く置かれ、第二前室と羨道との境には袖石と同じ幅の閾石が置かれゐる（図57-2）。第一と第二前室の床面の高さは略同じ。

第二前室より祝部土器破片数十片出土。何れも床面より遊離してゐる。

第二前室の入口には閾石に接して高さが略天井に達する大石一枚が羨道側に斜に倒れてゐる。入口を封鎖した扉石であらう。その外側には塊石積重ってゐるが、扉石の外側からこれを支へたものと思はれる。

羨道左壁の袖石の如く突起した立石の内側より祝部坏四個（完形）、鉄製鏡板、棒状鉄片、扉石下より土師高坏出土。何れも原位置と思はれる（実測1/5、小型写真２枚）〔図57-3・図版21-2〕。

○８月８日（土）晴れ　樋口・林・川端

13：00高橋　写真撮影のため来援　羨道床面清掃

昨日祝部土器及鉄器の出土せる袖石の部分に更に祝部、鉄片多数出土。

土器は杯の蓋約四個分。昨日のものは身のみ一群となってゐたが本日の蓋の一群と同一個体を離して置いたものか？鉄器は殆ど棒状のもので、その置方も雑然として埋葬時の原状とは思はれず。

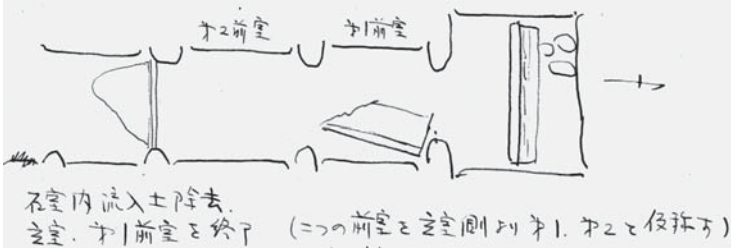


図57-1　日誌・石室の略称（8/6）

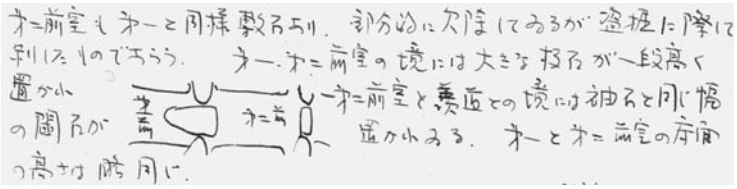


図57-2　日誌・第一・第二前室の閉塞石と梱石（8/7）

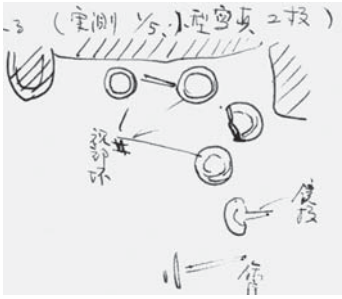


図57-3　日誌・須恵器出土状況（8/7）

図57-4　日誌・鉄鏃模式図（8/9）

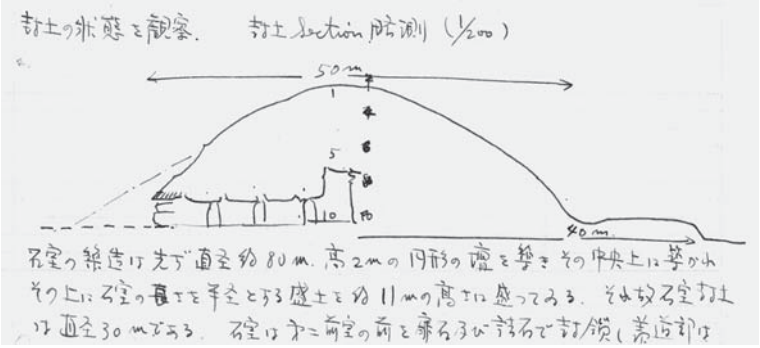


図57-5　日誌・墳丘断面略測図（8/10）

羨道部も敷石あり。但し玄・前室と異なり水成岩質の板石を混へてゐる。

敷石の外端は両側壁の端の石を以て一線を割す。

奥壁　右側壁実測1/20　未完

写真６枚　玄室床面、玄室より外向、第二前室より内向、羨道入口、羨道遺物、第一・第二前室床面〔図版21～23〕

○８月９日（日）晴れ　樋口・林・川端　那賀村住吉青年団２名

羨道東壁の遺物検出、実測、遺物採取。

昨日棒状鉄片？と記したものは殆ど鉄鏃であり、数種の形式が含まれてゐる（図57-4）。其の他鋌らしきものあり。

銅地鍍金の鍔金具らしきもの及び同質紐状片四個出土。

出土状況すべて秩序なし。遺物はすべて床敷石上約10cm の土及び粘土の上より出土する。壁間に塡められた粘土が堆積した後これ等の遺物が置かれたものであらう。

羨道扉石を復原　外向に斜に倒れていた板石を起す。天井石との間には約20cm の空隙あり。又向かって右隅に三角形の空間があるがこれは扉石が破砕したものであらうか。

玄室不動様を□□□に安置

Plan Section 実測続行　夕刻現地に朝日新聞記者来る。

○8月10日（月）小雨後晴れ　樋口・林・川端

Plan Section 実測終了

羨道東壁側詰石下より祝部坏・蓋破片出土。昨日出土のものの続きである。

封土の状態を観察。封土 Section 略測（1/200）（図57-5）

石室の築造は先ず直径約80m、高２m の円形の壇を築きその中央上に築かれ、その上に石室の長さを半径とする盛土を約11m の高さに盛ってゐる。それ故石室封土は直径30m である。石室は第二前室の前を扉石及び詰石で封鎖し羨道部は元来露出してゐたものと考へられる。

現在のところ封土上には葺石、埴輪類は認められない。

外形の測量はかなりの日数を要するので今回は Section にとどめておく。

（鬼の窟古墳の調査終了）

○８月11日（火）晴れ　樋口・林・川端

10：30　国分引揚　途中那賀村により挨拶（村長不在）ポール、平板を返還

11：00　安国寺着　本隊に合流

○８月12日（水）　記載なし

○８月13日（木）快晴　水野、樋口、岡崎、金関恕、林、川端、楢崎、藤田、高橋、鎌木

・水野、楢崎、鎌木バスにて出発（８：30）

・樋口、川端オート三輪にて荷物二十個つんで出る

・岡崎、藤田、高橋、最後のオート三輪にて出発（９：30）

・11時乗船（大衆丸）郷ノ浦出発、遺物二十七個も同船す。

・15時博多着　夕立にある。

・一行寺に泊まる。

○８月14日（金）快晴

・林出発（呉にむかふ）

・川端、鎌木出発（日向にむかふ）

・樋口出発

・高橋、楢崎出発

○８月15日（土）晴れ

・水野、藤田出発（筑紫号にて）７：40－

（日誌終了）

（２）日誌からみた鬼の窟古墳の特徴と検討課題

以上の調査日誌の内容から、東亜考古学会調査時における所見として、鬼の窟古墳の特徴と検討課題について以下の４点を挙げることができる：

①玄室を含めて全体的に盗掘を受けている

②玄室の板材について棺材の可能性が指摘されている

③須恵器数十点が第二前室から出土

④羨道での多数の遺物の出土

①については、玄室床面まで含めて徹底的な盗掘であることがこの時の調査で確認されている。③の須恵器についても、床面から遊離した状態であり原位置は保っていないことが記されている（８月７日）。他方、④として挙げたように、羨道の第二前室寄りの立柱石付近で出土した須恵器は原位置を保っている可能性が指摘されている。周辺からは多数の鉄器類も出土しており、これらについては原位置を乱されていると認識されている（８月８日）。埋葬行為に関わるものである可能性もあるが、全体が盗掘を受けている点から判断が難しいところである。

②の玄室板材については、町報においても同様に棺材の可能性が指摘され、第一前室（中室）にも同様の石材がみられることから、玄室・第一前室それぞれに「組合式石棺」の存在が想定されている（町報：p.16）。

以上のように、1953年当時の調査において、後述するような多数の遺物が出土しているが、その多くは床面から遊離した状態で出土したもののようである。ただし、出土状況図が記録されている羨道部では、一部原位置を維持したものも含まれていた可能性が想定され、遺物の位置づけを考える上で重要である。

また８月９日の日誌において、現在の羨道閉塞石はこの調査時に復元されたものであることが明記されている点に注意しておきたい。本石室では、盗掘後も閉塞石が良好に残存していた点が特徴として挙げられよう。

（３）墳丘

墳丘測量図については、大型の墳丘であったため、断面の略測図のみが作成されている（図57-5・58）。東亜考古学会の記録においては、墳丘の基壇が径80m、高さ２ｍの円形の壇として築かれ、石室封土は石室の長さを半径として径30m、墳丘高は約11ｍと推定されている。またあわせて閉塞は第二前室入口側で行われており、羨道は元来露出していたものと想定されている（８月10日）。

図59は芦辺町教育委員会作成の50cmコンターの測量図である。町報では以下のように報告されている：「等高線の状況からもわかるように、若干西側部分がゆるやかであるが、全体的に墳丘の傾斜は見た目よりきつく、かなりの盛土がなされていることがうかがえる。また、裾部は西側の一部を除いてほとんど崩壊と掘削を受け北側から東側一帯にかけては崖のようになり４ｍを越える所もある。墳丘の北側一帯は現在ヒノキなどの植林がなされており、この部分の掘削は以前畑地だった頃に受けたものであろう。以上のことから考えて本古墳は〔図59〕にも図示したように、直径45m、高さ13mを測る、堂々たる規模の大円墳であることがわかった。周溝などの外部施設は認められない」（町報：p.11）。

以上のように、町報では径45m、高さ13ｍの円墳とされ、東亜考古学会調査時の想定より大きかったことが明らかとなっている。直径80m・高さ２ｍの基壇は東亜考古学会の図57-5・58にみられる北側（図の右手にあたる部分）を指している。芦辺町教育委員会の調査時はこの部分までの測量は行われておらず、東亜考古学会の調査において指摘されたような形でこの基壇が全体として円形に造成されたものであるのか、そして古墳の築造に伴う造成であるのかについては未確認であり、今後の課題としておきたい。

なお1989年の調査では石室入口の崩壊部分を中心に盛土の精査が行われており、地山の基盤層がほぼ平坦に整地された上に、大型の石室石材を配しつつ石室周辺に盛土が行われる過程が再現されてい

る。それによれば、地山から約90cm の高さまで大まかな盛土が行われた後、５～10cm の厚さで版築状の盛土が行われている（町報：pp.15-16）。高さ13m・直径45m という大規模な墳丘全体の構築技術を考える上で極めて重要な成果である。

（４）横穴式石室

ａ）横穴式石室の規模と構造

東亞考古学会による石室実測図と町報の石室実測図を掲載する（図60・61）。前述のように第二前室入口の閉塞石は1953年８月９日に復元されたもので、それ以外は概ね現在まで当時の状況が維持されているようである。これは1970年の九州大学の実測図（小田1980）についてもほぼ同様である。石室全長は16.5m で、主軸を N-7°-E の南北方向にとり、南側に開口する三室構造の横穴式石室である。東亞考古学会では奥から玄室・第一前室・第二前室・羨道と呼称されているが、町報では同じ順番で玄室・中室・前室・羨道と呼称されている。本稿では、東亞考古学会の日誌の記録にもとづくため、前者の名称に準拠する。以下、町報にもとづき石室の法量等について整理すると次のようになる。

（玄室）	長さ3.2m、	幅3m、	高さ3.3m
（第一前室）	長さ4.1m、	幅2.4m、	高さ1.75m
（第二前室）	長さ4.1m、	幅2m、	高さ1.9m
（羨道）	長さ5.1m、	幅1.8m、	高さ1.8m
（入口）		幅1.9m、	高さ2.4m

石室の構造について検討する前に、図60・61を比較し、1953年の東亞考古学会調査当時の状況を確認しておきたい。妙泉寺古墳群と比較すれば、一見すると、1953年の石室実測図と1989年のそれとの間ではそれほど大きな違いがないようにもみえることから、全体としては1953年以降石室の状態は良好に保存されてきたものと考えることができる。ただし、重要な違いが３点見受けられる。第１に、玄室の「棺材」と推定された石材の傾きが図60では南向きであるのに対し、現在は北向きの奥壁側に傾いている（図版23-2）。どこかの時点で奥壁側に倒されたとみられる。また現在は奥壁前面に不動像が安置されているが、これは８月９日に安置されたものが現在まで維持されているものであろうか。このため図61ではこの石材より奥側が図示されていない。

第２に、最も重要な違いは、1953年調査時には羨道床面の床石が確認されており、明瞭に図示されている点である。そしてこれに関連して、第二前室入口の閉塞石が羨道側（南側）に傾き、その閉塞石を支えるように根元に塊石が配置されている状況が良好に保存されていたとみられる点が注目される（図60、図版21-1）。後述するように、いわば「羨道側に傾いた状態」で検出された閉塞石が、８月９日に「復原」された結果、現在のように垂直に立った状態となって現在に至るようである。

第３に、羨道南側の開口部付近では、東側のみ立柱石が配され羨道側に突出しているが、この部分にはかつて梱石状に段差を持った石材の配列があったことが記録されている（図60・図版22-1）。元来はあたかも「四室構造」に近いものであったことが想定される。なおこの梱石状の石材は1970年の九州大学の石室実測図（小田1980）の作成時点までは残存していたようである。

以下、この３点の違いに注意しつつ、石室の構造について検討したい。石室全体としては、巨石を用いた天井石がほぼ同じ高さで羨道部から第一前室上面まで架構されている。玄門部などはいずれも左右に袖石として立柱石が配され、床面には袖石とほぼ同じ幅の閾石が配されることが日誌にも記されている。玄室・第一前室・第二前室ともに、奥壁・側壁に一枚の大型基底石を用いており、玄門・羨門の立柱石直上に天井石縦断面中心位置付近が来るように大型の天井石が水平に架構される点で、

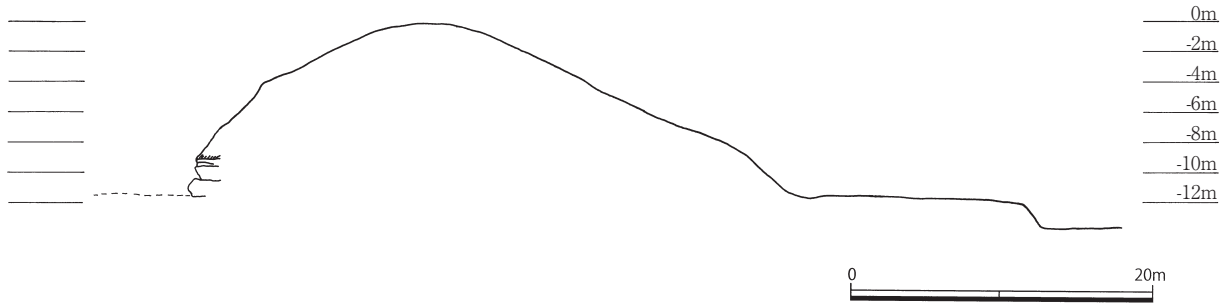


図58　墳丘断面図（東亞考古学会調査：縮尺1/500）

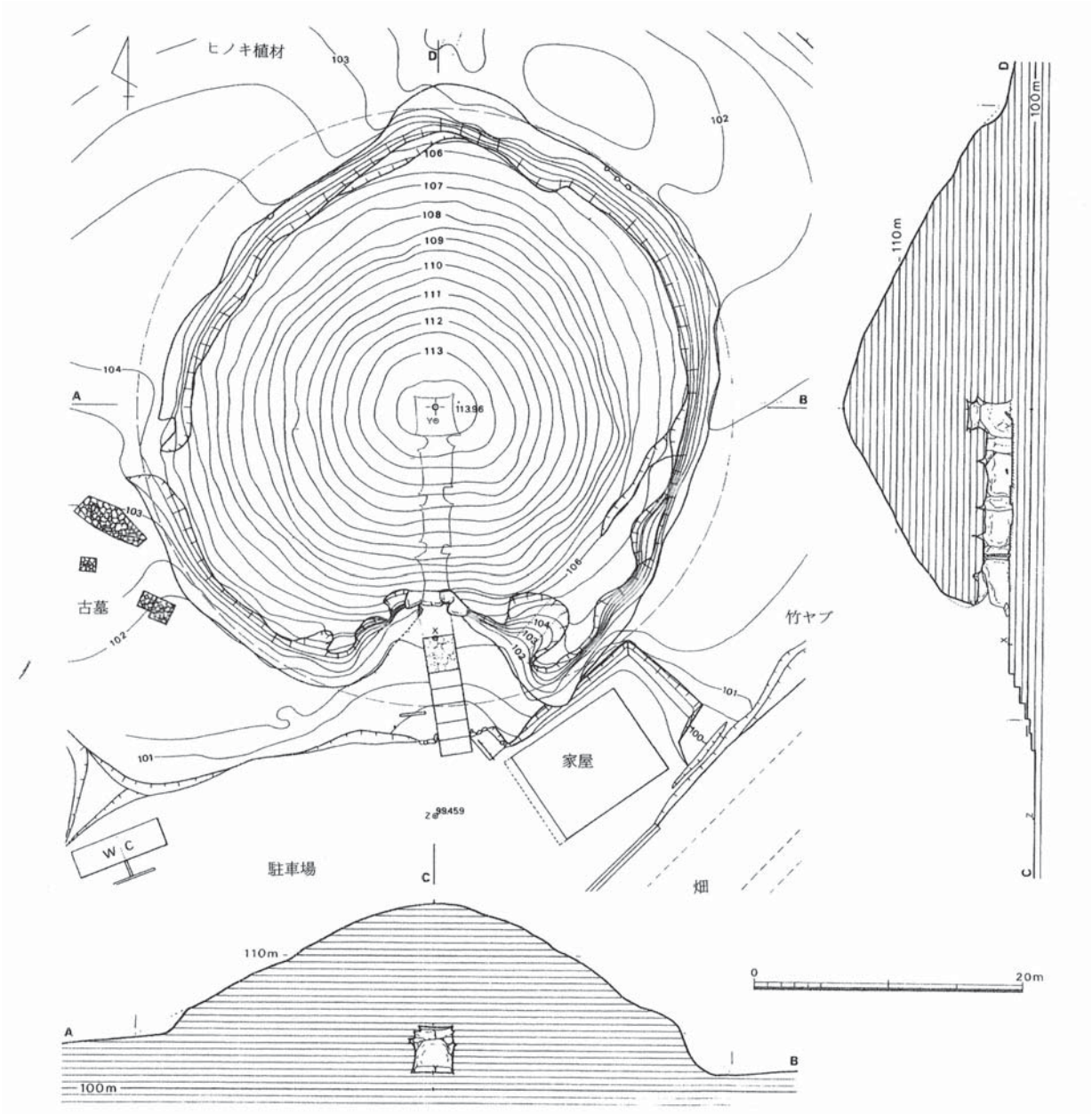


図59　墳丘測量図（芦屋町教育委員会調査：縮尺1/500）県報 Fig.7

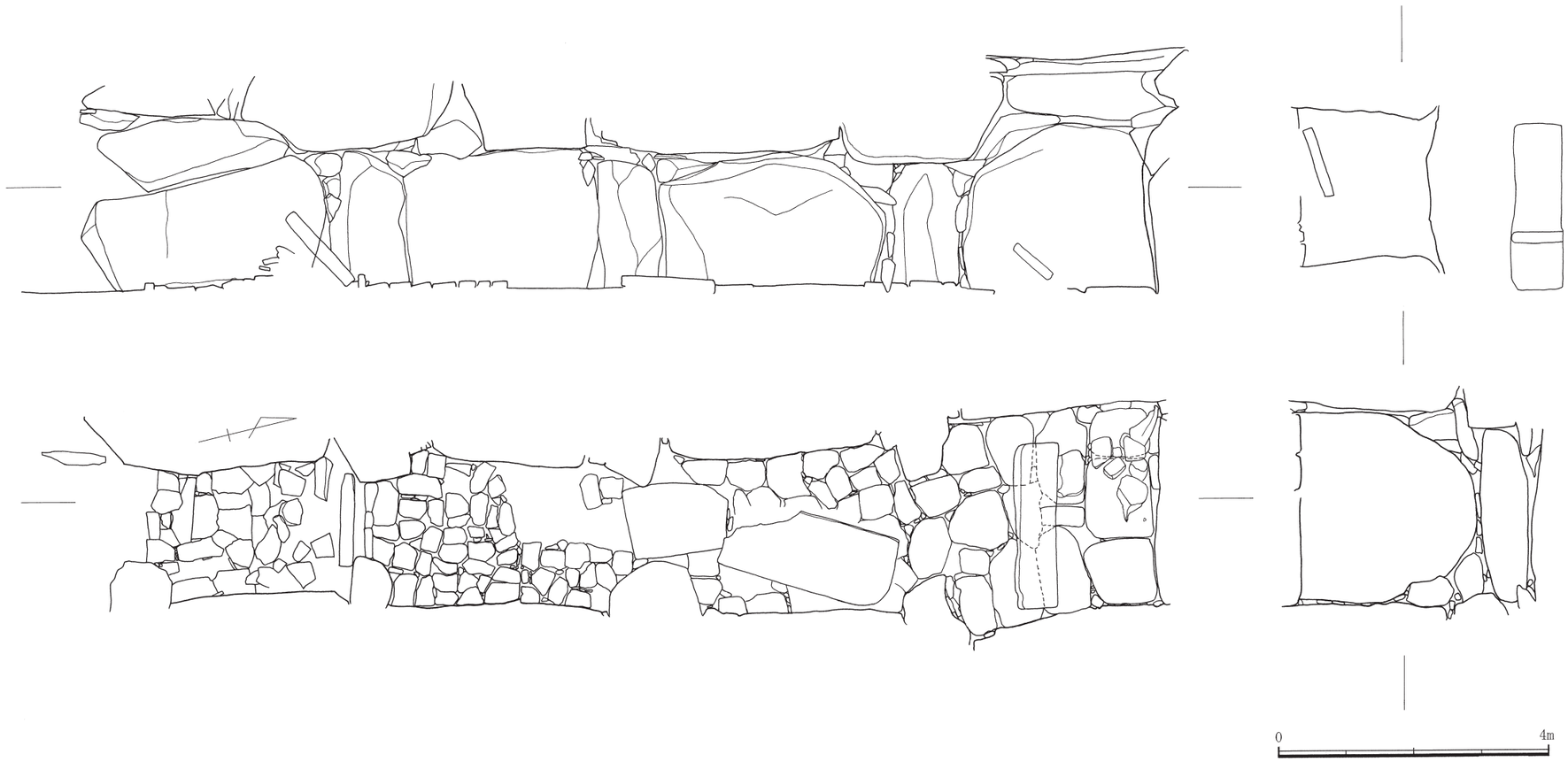


図60　石室実測図（東亞考古学会調査：縮尺1/80）

前述の妙泉寺７号墳や兵瀬古墳と共通する築造方法である。奥壁が鏡石の上にもう１段大型の石材を載せて構成される点が妙泉寺７号墳とは異なる点である。床面にはいずれも敷石が設置されており、町報でも指摘されているように、第二前室・第一前室・玄室の順に敷石の大きさが大きくなっている（町報：p.16）。第二前室入口と第一前室入口には、閉塞に用いられた板石が残存している。また玄室と第一前室にはそれぞれ従来棺材かと想定されてきた大型石材がみられる。以下、玄室・第一前室・第二前室・羨道の順に、それぞれの空間の詳細と東亞考古学会調査時における遺物出土状況について検討する。

b）玄室

玄室は奥壁に大型の鏡石を用いつつ、その上にもう一段別の石材を載せ、天井石で覆っている。前述のように、東亞考古学会調査時から棺材と推定される石材が現在も残存している。この石材は『壱岐名勝図誌』（1861）にも「矢櫃石」として記載されているものである。石材の法量は、長さ2.55m、幅0.75m、厚さ0.13m である。玄室中央、奥壁側に約40°傾く形で現存している。上述のように、当時は第一前室側に傾いており、８月６日の調査日誌には、この斜めに傾いた石材の「内側」で塊石数個が残存していたとの記述がある。図60の玄室床面奥壁前面の石材の表現がこれに該当しよう。町報では「組合式石棺」の可能性が想定されているが、先に検討した妙泉寺７号墳と同様、屍床設置のための仕切石で本来は現在の位置で垂直に立っていた可能性も想定される。ただし妙泉寺７号墳とは異なり、1953年の図面においても床面に石材固定のための溝の設置が認められないことから、この場合は床面の床石の上に他の石材とともに組み合わせて組合式石棺状に立て置かれた可能性などを想定する必要が出てくる。後述する第一前室の床面に残存する石材は幅1.1m とされ、大きさからすればこの玄室奥壁棺状施設の蓋石の可能性なども想定されよう。いずれにしても、この棺状施設の本来の形態・構造については不明な点が多く、両小口部付近の石材の有無等も含め、課題としておきたい。

東亞考古学会の調査では、調査初日の８月６日の時点で遺物が皆無に近く盗掘を受けていることが確認されており、流入土中から須恵器の蓋・高杯片が出土したことが記録されている。

c）第一前室

いわゆる「中室」である。中央に残存する石材は、長さ約2.5mm、幅1.1m、厚さ0.18m であり、上述のように石棺の一部と推定されている（町報：p.16）。1953年の調査時においてもこの位置で検出されており長くこの位置から動いていないようである。玄室同様、第一前室についても８月６日の時点で流入土の除去が終了しており、ここでも盗掘により遺物が殆ど出土しなかったものとみられる。

d）第二前室

いわゆる「前室」である。第二前室は、1989年の調査時点で第一前室側・北西側の床石が失われているが、これは東亞考古学会の調査当時の図面でも同様であり、1953年の調査当時の状況をよく保存したものであることが今回の検討の結果判明した。また８月７日の日誌で言及された、第一前室との間に一段高く置かれた「大きな板石」（図57-2）は、位置関係からみて第一前室入口の閉塞石が第一前室側に倒れ込んだものである可能性が高い。この板石も1953年当時に現在と同じ位置で検出されたものであり、長くこの位置から動いていないようである。

８月７日の調査で、第二前室の流入土を掘削した際に、須恵器片が「数十点」、いずれも床面より遊離した状態で出土したことが記録されている。第二前室も盗掘により床面石材直上での遺物は殆ど

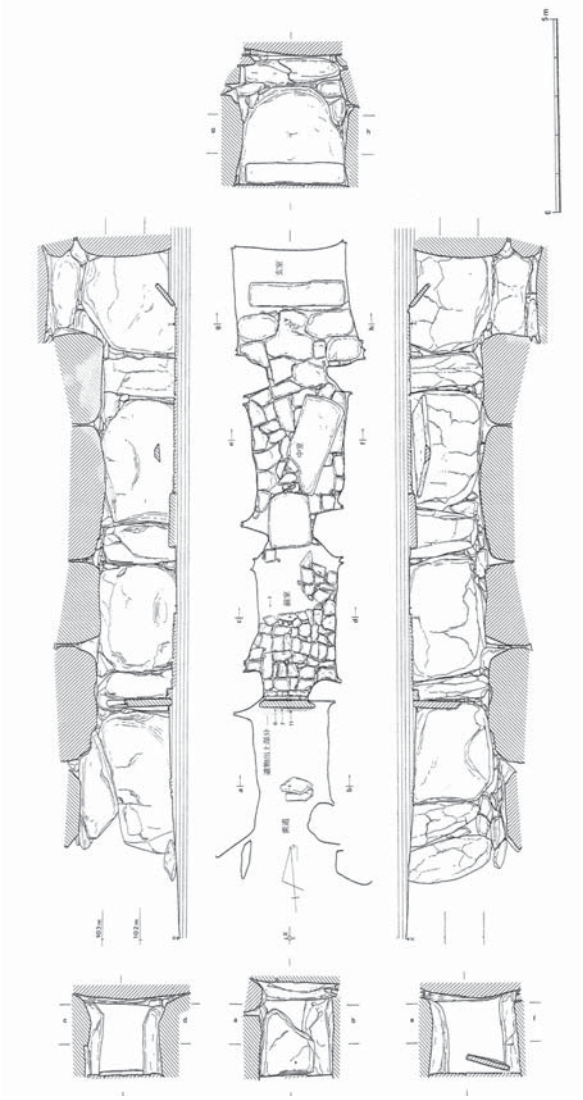


図61　石室実測図（長崎県教育委員会調査：縮尺1/200）

なかったようであるが、後述する東亜考古学会出土の須恵器や新羅土器の「破片」類はこの第二前室から出土したものが多く含まれる可能性が高い。

e）羨道

前述のように、1953年当時は羨道にも床石が敷設されていたこと、またかつては羨道入口付近に梱石状の石材の配置があったことが明らかとなった。前庭部との境界という意味での「梱石」とみるべきかどうかはともかく、この「梱石」状の石材の内側、羨道床石石材の上面から多数の遺物が出土している。

８月７日以降の調査で、須恵器の杯・蓋、多数の鉄鏃類、「鉄製鏡板」（８月７日）、「鎹らしきもの」「鉄地鍍金の鍔金具らしきもの」（８月９日）などが出土している（図57-3・図62）。標高の記録はないが、８月７日に北西隅付近の須恵器杯４点が出土した際に原位置を維持していると判断されていることから、これらについては床石直上かそれに近い位置で出土したものとみられる（図版21-2・22-1）。その後、周辺から多数の鉄器類が出土した結果、図62のような状態となったようであるが、

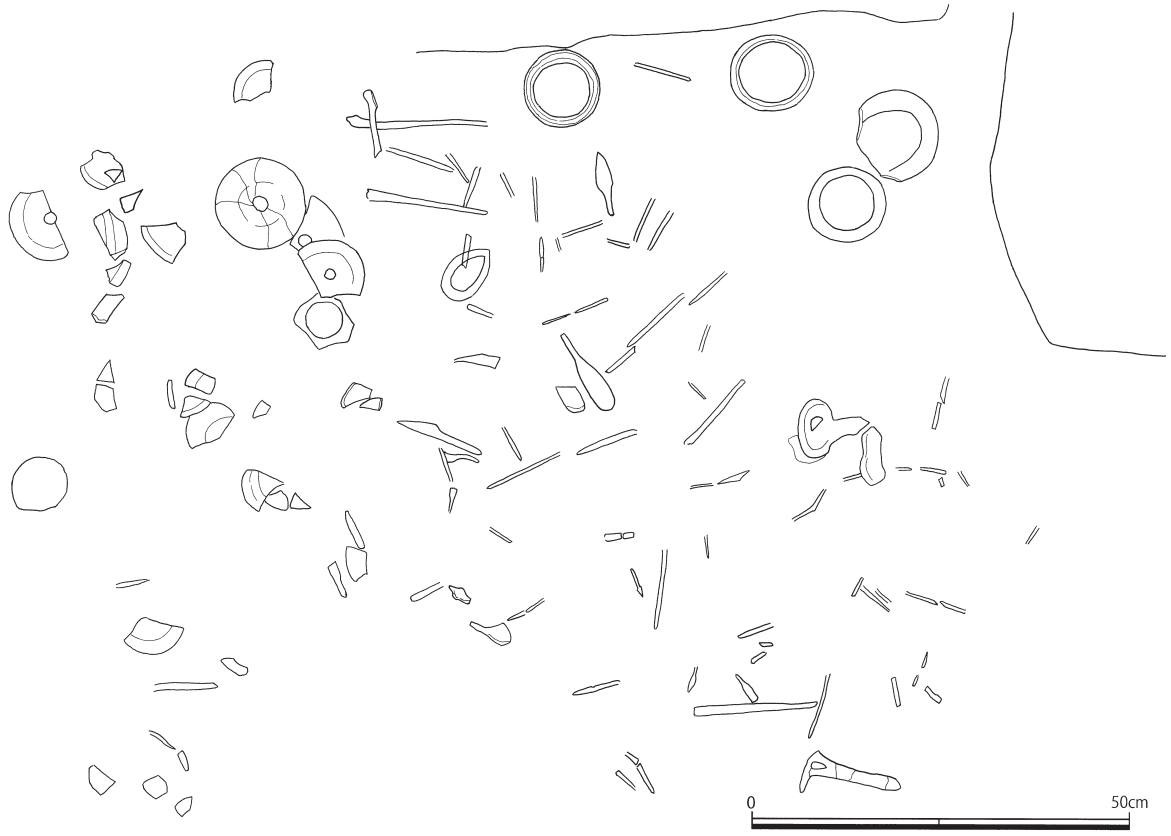


図62　羨道部遺物出土状況図（東亜考古学会調査：縮尺1/10）

これらについては、８月９日に「出土状況すべて秩序なし。遺物はすべて床敷石上約10cm の土及び粘土の上より出土する。壁間に塡められた粘土が堆積した後これ等の遺物が置かれたものであらう」とする記述があり、「10cm ほどの土砂や壁体の剥落粘土の堆積の後にこれらが散乱した」という理解である点で、盗掘時の攪乱という判断がなされたものとみられる。その上で流入土が堆積したとする解釈であろうか。

この問題を考える上で重要なのは、先にも言及した、閉塞石の復元に関わる８月７日の記述と写真による記録である：「第二前室の入口には閾石に接して高さが略天井に達する大石一枚が羨道側に斜に倒れてゐる。入口を封鎖した扉石であらう。その外側には塊石積重ってゐるが、扉石の外側からこれを支へたものと思はれる」〔図版21-1・22-1〕。

またその後、８月９日に以下のように復元されている：「羨道扉石を復原　外向に斜に倒れていた板石を起す。天井石との間には約20cm の空隙あり。又向かって右隅に三角形の空間があるがこれは扉石が破砕したものであらうか」。

ここでこれらの記述を再掲したのは、後述するように、1989年の芦辺町教育委員会の調査時に、この閉塞石の下部からまとまった量の遺物が出土しているためである。その中には、杯身２点と鐙１点がほぼ完形で並んで出土しており、「追葬時などの原位置をとどめている可能性も考えられる」ものが含まれていたという（町報：pp.19-20）。この東亜考古学会の日誌の記述と図版21-1・図60の断面図での表現から、東亜考古学会の調査時には閉塞石は斜めに傾いた状態ではあったものの、原位置から大きく動いていなかったものとみられ、この「傾き」が盗掘時の所作もしくは最終閉塞の状況に近

いものであるとすると、８月９日にそれを第二前室側に「起」こした「だけ」であったということは、この閉塞石の下部は盗掘等による攪乱を受けておらず、最終的な閉塞の前の堆積状況が良好に保存されていた可能性が高いことを示している。その結果、1989年の調査で閉塞石直下、すなわち図版21-1と図60の断面図に示された、閉塞石の南側前面の石材付近の堆積層から多くの遺物が出土したのであろう。８月10日に羨道東壁側に広がった須恵器片の検出と取り上げが終わったところで調査は終了している。

東亜考古学会の調査時においても閉塞石が原位置を動かされていないという点を論拠として、「閉塞石下部が最終埋葬時の閉塞の状況を良好に維持しており（盗掘等による影響を受けておらず）、それ故に1989年に閉塞石下部の堆積土中から遺物が出土した」とする理解が妥当であれば、東亜考古学会調査時の羨道周辺の遺物出土状況（図62）は、この閉塞石下部の状況と一連のものである可能性がある。少なくとも、当初原位置と判断された壁際の須恵器杯類などは、そうした閉塞石下部のものと同様の脈絡で理解することができよう。鉄鏃をはじめとした鉄器類については、床石上10cm 以上で遊離した状態での出土ということから、須恵器などとは切り離して考えた方がよいのかもしれないが、羨道床面付近の土層堆積状況に関する情報が少ない現状ではこれ以上の判断は難しい。鉄器類についても、最終的に閉塞石が設置される以前の段階で追葬や片付けに伴って散乱した状態で埋没していたものが含まれる可能性は想定しておく必要があろう。いずれにしても、図62に記録された遺物出土状況については、後世の盗掘に伴うものが主体というよりは、追葬やそれに伴う片付けに関連する遺物が多く含まれる可能性が指摘できよう。この理解は、東亜考古学会の閉塞石に関する日誌の記録と1989年の芦辺町教育委員会の調査成果の両者がなければ導かれないものである点を強調しておきたい。

以上のように、東亜考古学会調査時においては、流入土中から以外では、玄室・第一前室からの遺物の出土は殆どなかったようである。また第二前室から出土した須恵器片も床面から遊離したものとされているが、少なくともそれよりも内側（第二前室から玄室まで）の空間に元来存在したものであろう。羨道付近の遺物に関しては、上述のように最終的な閉塞石の設置の下部の堆積層中からの出土という点で、追葬に伴う片付けなどに関わる形で埋没したものが多く含まれているものと想定された。

（５）東亜考古学会調査の出土遺物

ａ）東亜考古学会調査の鬼の窟古墳出土遺物について

以上の検討をふまえて鬼の窟古墳出土遺物について検討するが、現在保管されているのは、須恵器・土師器・半島系土器（新羅土器）・鉄器類（鏃類）である。第１節で述べたように、妙泉寺古墳群との帰属が識別できないものが一定数存在するとともに、上記の日誌および出土状況の検討で言及した、羨道出土の「鉄製鏡板」（８月７日）、「鉄地鍍金の鍔金具らしきもの」（８月９日）については現物不明である（図62）。また妙泉寺古墳群でみられたような金銅製耳環や玉類の出土はこれまでのところ知られていない。（辻田）

ｂ）土器類

・須恵器（図63～65、表６）

156～172は杯蓋である。このうち、156～165はつまみが付かないもので、天井部と体部の境には段がなく丸みを持つ。口縁端部は156や163のように段を持つものもあるが、総じて先端が尖った形態を呈し、165を除きかえりは付かない。159は外面にヘラ記号が付く（図65上段中央）。160は内面に赤色の付着物が散見される。時期については、156や162が牛頸編年ⅢＢ期（６世紀後半）に遡る可能性が

考えられるほかは、おおよそⅣA期（６世紀末）におくことができるだろう。164は器体が比較的小さく、口縁先端がやや外傾する。外面にヘラ記号が付き、その周囲に緑色の自然釉がまばらに付着する（図65上段右）。165もやや小さく身受けのかえりを持つ。かえりは短く体部の中に納まる。外面にはヘラ記号が付く（図65上段左）。時期についてはやや下り、ⅣB期（７世紀初頭～前半）に相当する。166～172はつまみが付くもの（168・169はつまみ欠損）で、つまみの形態は宝珠形をなす。器高は低く、天井部はヘラケズリされる。受け身のかえりは短く、体部からわずかに下方に出るか内に収まる。171は外面に所々自然釉が付着する。ⅣB期（７世紀初頭～前半）かそれよりやや新しい時期のものとみられる。

173～192は杯身である。173～181は蓋受けの立ち上がりが内傾し、口縁端部は先端が尖った形態をなす。173の立ち上がりは比較的高く、ⅢB期によくみられる形態に近い。その他はおおよそⅣA期～ⅣB期（６世紀末～７世紀前半）に相当するだろう。181の底部外面は指オサエの痕跡がみられる。焼きしまりが非常に良い。182はヘラ切り離しのままヘラケズリが粗いためか、底部が段をなす。第２前室遊離資料であり、時期が下る可能性もある。183～187は、底部と体部の境に段か稜をなすもので、口縁部はわずかに反りながら外傾する。183は外面底部にヘラ記号が付く（図65左下破片）。188～190は体部の立ち上がりが直立に近く、口縁端部まで直線的である。この形態はⅣB期もしくはⅤ期に多く、７世紀中頃まで下る可能性がある。185の外面は自然釉が全体にかかり光沢のある黒色を呈する。191・192は底部が厚く、側面から見ると粗い高台を持つかのように段をなす。

193は杯蓋。天井部に回転ヘラケズリが施され、扁平なつまみを持つ。あるいは半島系土器である可能性もあるが、体部に段が付かない点や、つまみが低く、朝顔形でもない点などの違いから須恵器としておく。

195は瑳の胴部片。胴部最大径付近に平行沈線を横走させて段をなし、その区画内部に櫛歯状工具による斜行文が施される。類例としては、双六古墳出土の出土資料などがある（壱岐市教育委員会2006　第10図-5）。196も瑳の胴部とみられる。

202は頸部片。外面にカキ目が施される。福岡照日遺跡群１号窯跡灰原出土の平瓶頸部片とやや類似しており、この土器もあるいは同一器種であるかもしれない（新吉富村教育委員会1995：p.34第27図-210）。

203は壺の肩部片。外面は自然釉が全体にかかり光沢のある黒色を呈する。半島系土器である可能性もあるが、紋様もなく器形が不明確であるためここでは須恵器としておく。

205は口縁部の欠損した埦。胴部にカキ目がめぐり、底部は手持ちヘラケズリによる調整がなされる。外面底部にはヘラ記号のような刻線がみられる。牛頸平田窯跡の灰原出土須恵器に類似したものがある（大野城市教育委員会1980 p.６第６図-10）。

210は脚付壺の胴部片。最大径付近に平行沈線を上下に横走されて区画し、その内部に櫛歯状工具による斜位の短い連続刺突文をめぐらせる。胴部下半外面は回転ヘラケズリが施される。外面が光沢のある黒灰色で一部に自然釉がかかる。以前に前庭部手前（攪乱層）出土資料として報告されている壺破片（県報：p.22 Fig.12-15,p.35 PL7-15）が写真と実測図からみて非常に類似しており、同一個体である可能性がある。また、双六古墳にも類例がある（壱岐市教育委員会2006：第13図-2,5）。

211は高台片、212は埦とみられ、いずれも206に類似した灰白色を呈する。半島系である可能性も考えられるが、断定が出来なかったためここでは須恵器としている。214は大型甕の胴部片。外面は格子目状のタタキ、内面は同心円状の当て具痕がみられる。（齊藤）

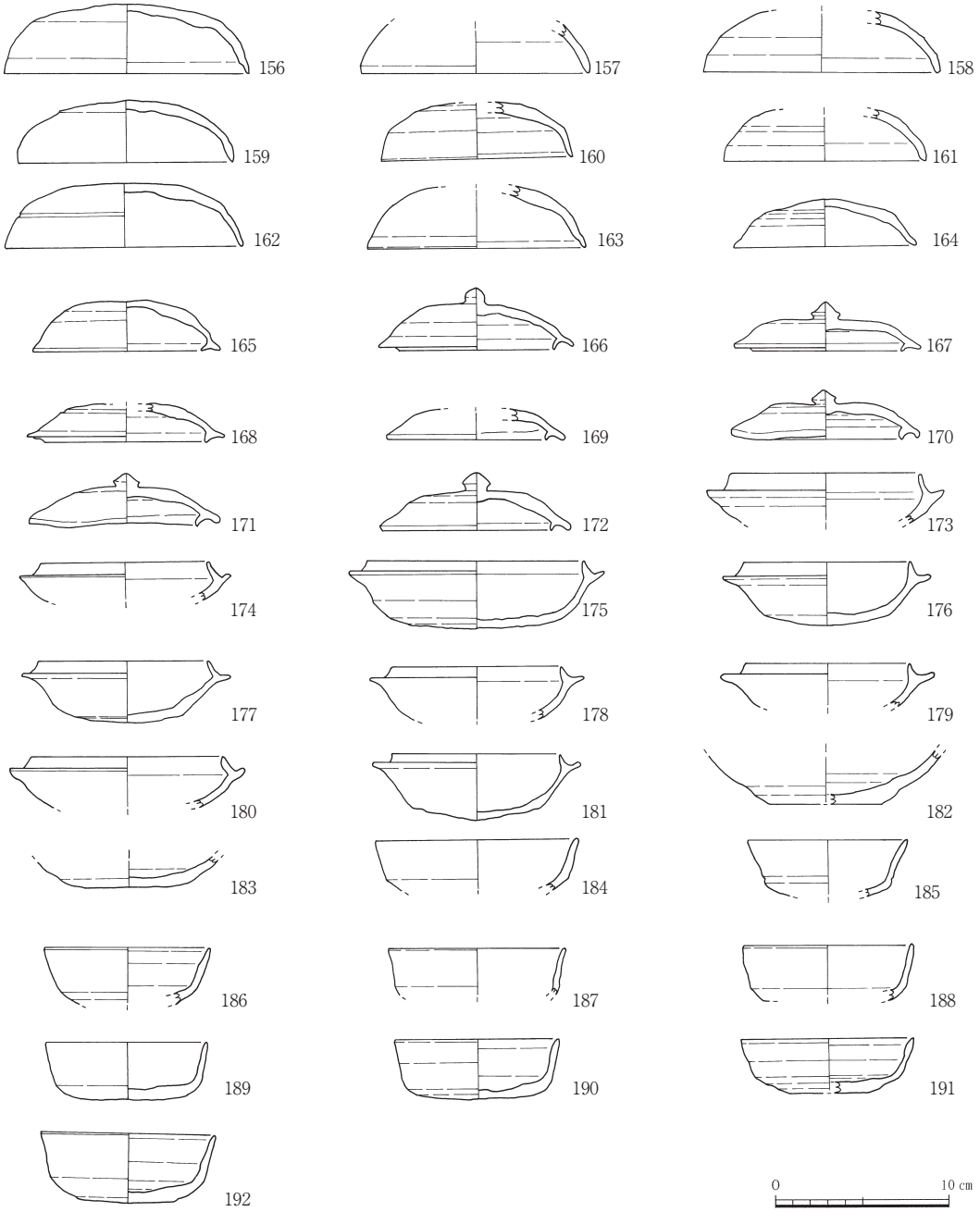


図63　出土遺物実測図①（縮尺1/4）

・朝鮮半島系土器（図64、表６）

194は杯蓋。身受けのかえりが体部より下方に突出し、直立に近い。欠損しているがつまみが付いていた可能性が高いだろう。天井部にヘラによる穂粒状の刻文が円形にめぐり、上にヘラ記号が施される。外面には自然釉がかかりやや光沢をもつ。７世紀以降と思われる。

197は高杯の脚部片。脚部には２条沈線が施され、その上下に短い長方形の透孔を２段持つ。蔚州華山里９号墳出土の無蓋高杯などが類例として挙げられるだろう（小田1988）。

198は瓶の口縁部片。口縁部は斜め上方に開く。

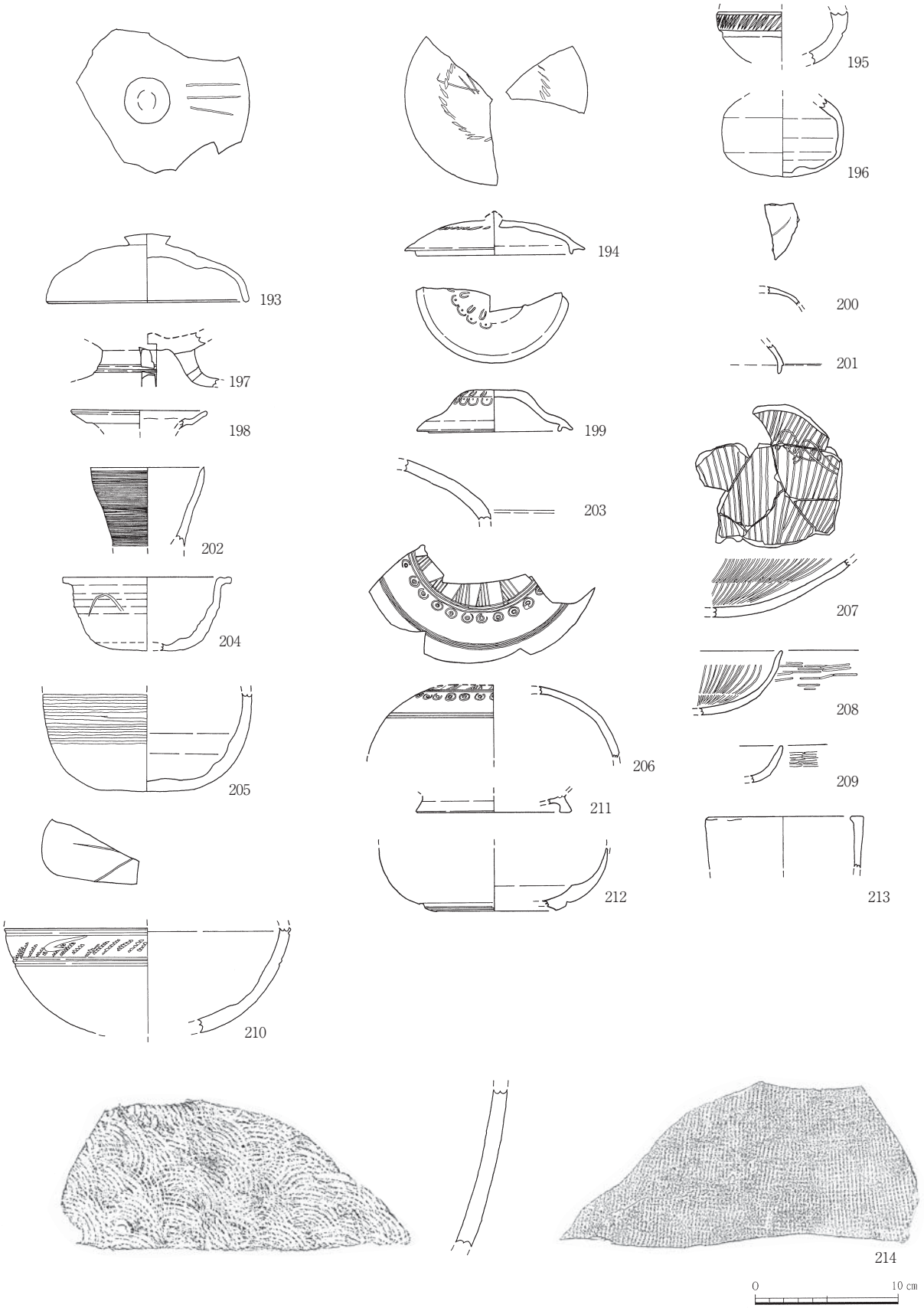


図64　出土遺物実測図②（縮尺1/4）

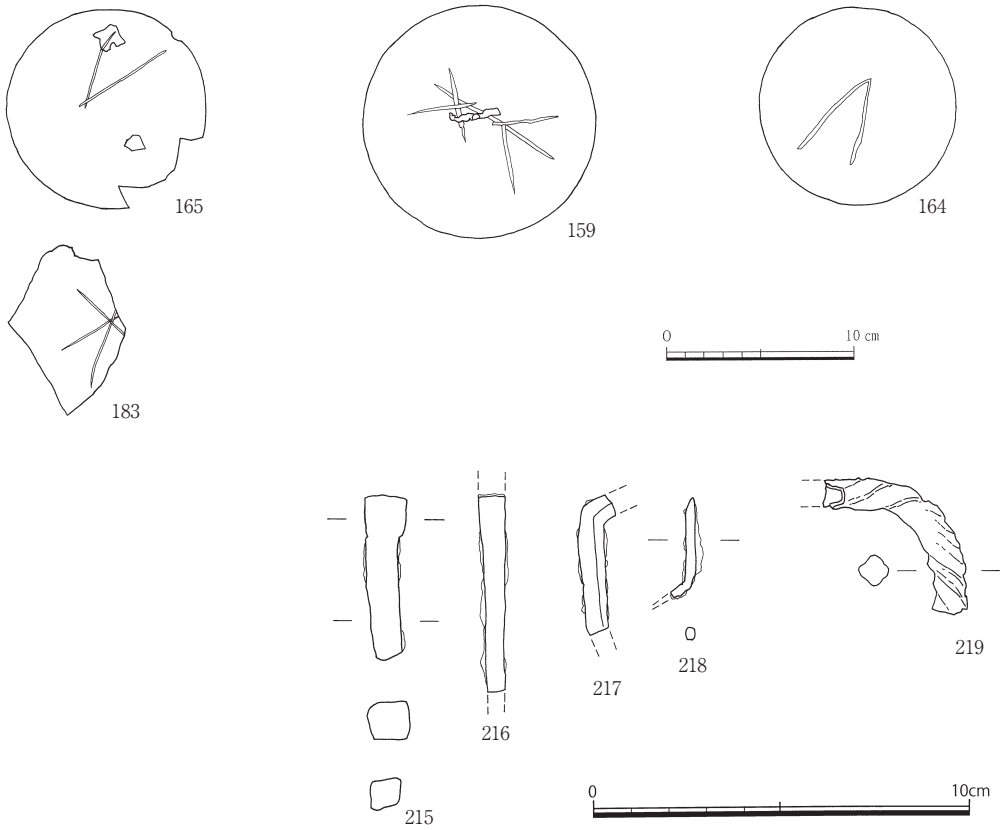


図65　出土遺物実測図③（縮尺1/4、1/2）

199は器蓋。天井部が大きく盛り上がり、裾広がりになった口縁部にかえりが付く。かえりは体部よりわずかに突出する。天井部には周辺に点列を伴う水滴文のスタンプ文をめぐらせ、その下にさらにスタンプで半円点文を施す。外面には自然釉がかかる。双六古墳出土品に類例があり（壱岐市教育委員会2006：第11図-16）、時期については７世紀前半と考えられる。200、201もおそらく器蓋片であろう。ともに外面に自然釉が付着し光沢のある黒色を呈する。

204は鉢。底部は回転ヘラケズリ、胴部はヨコナデを施す。壱岐芦辺町カジヤバ古墳の羨道部出土資料（長崎県芦辺町教育委員会1988）に非常に類似している。この報告書内では須恵器の鉢とされているが、あまり例をみない器形であり、朝鮮半島系の土器の可能性を述べている。さらに対馬コフノ隈遺跡の類似した土器は半島系とされており（長崎県上対馬町教育委員会1984 p.34 第18図-8,9）、慶尚南道金海郡禮安里古墳群第49号墳にも類例があり、時期は６世紀中頃～後半に比定される（小田1988）。

206は器蓋。色調は灰白色を呈す。三角集線文の下に３条の平行沈線がめぐり、さらにその外周に同心円文が施される。酷似した文様を持つ破片が石室前の攪乱層からの出土品として報告されており（長崎県芦辺町教育委員会1990 p.23 Fig.3-18、p.35 PL7-17）、同一個体である可能性が考えられる。６世紀末～７世紀初頭に位置づけられる。（齊藤）

・土師器（図64、表６）

207～209は土師器の杯。いずれも精製された粘土を使っており、内外面の調整の特徴からみても「畿内産土師器」（西1982；林部1992ほか）とみられる。207の内面には底部中央から放射線状に広が

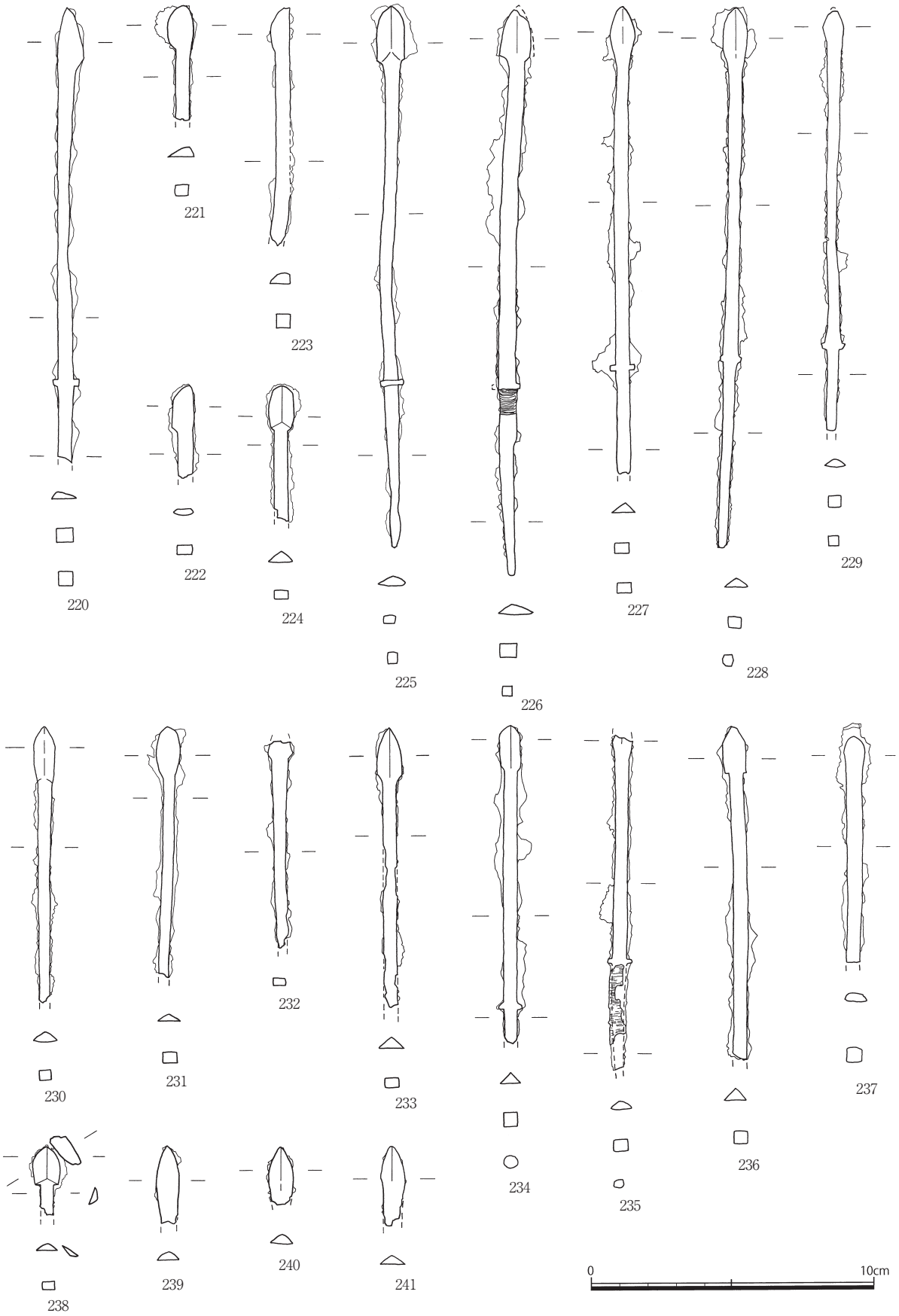


図66　出土遺物実測図④（縮尺1/2）

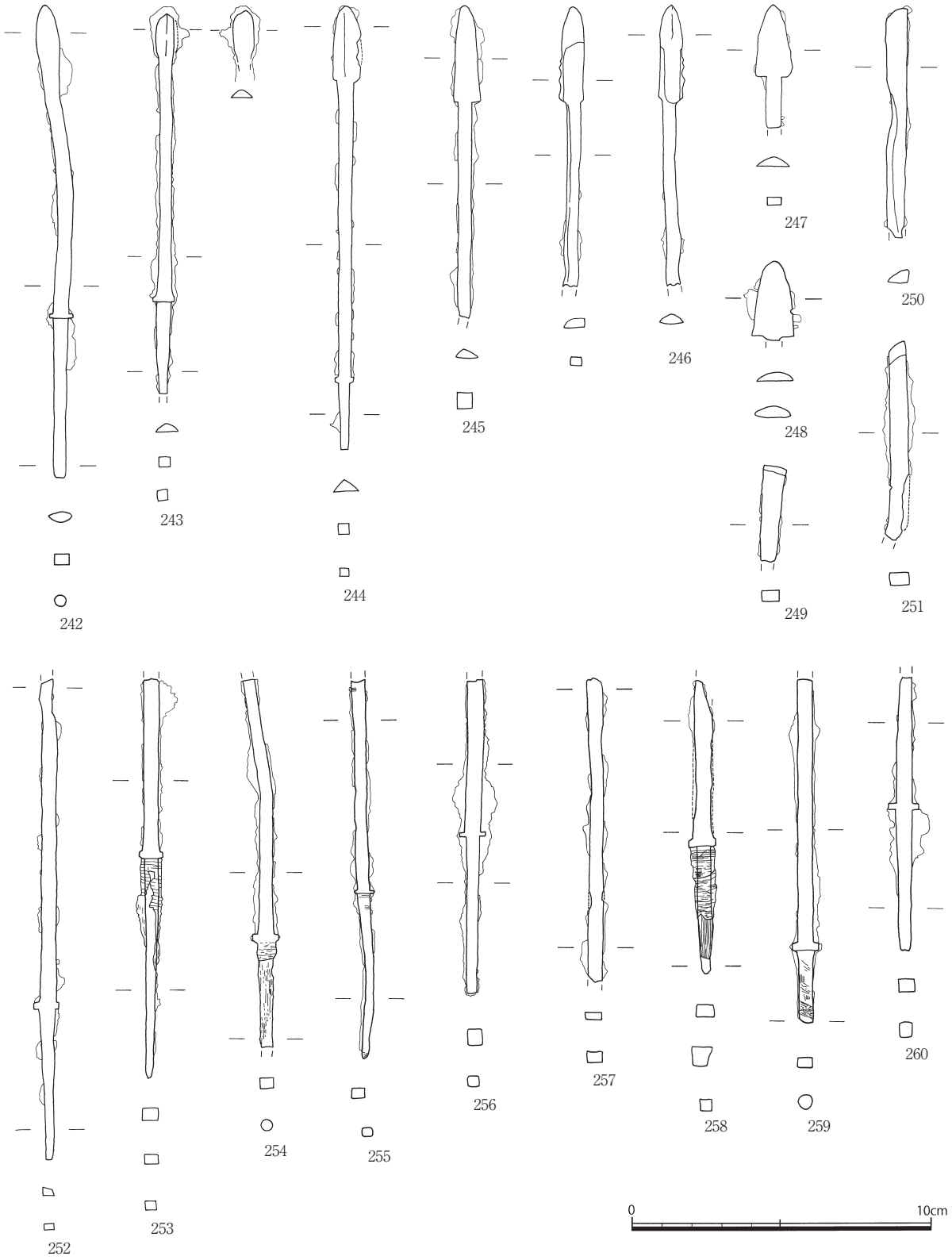


図67　出土遺物実測図⑤（縮尺1/2）

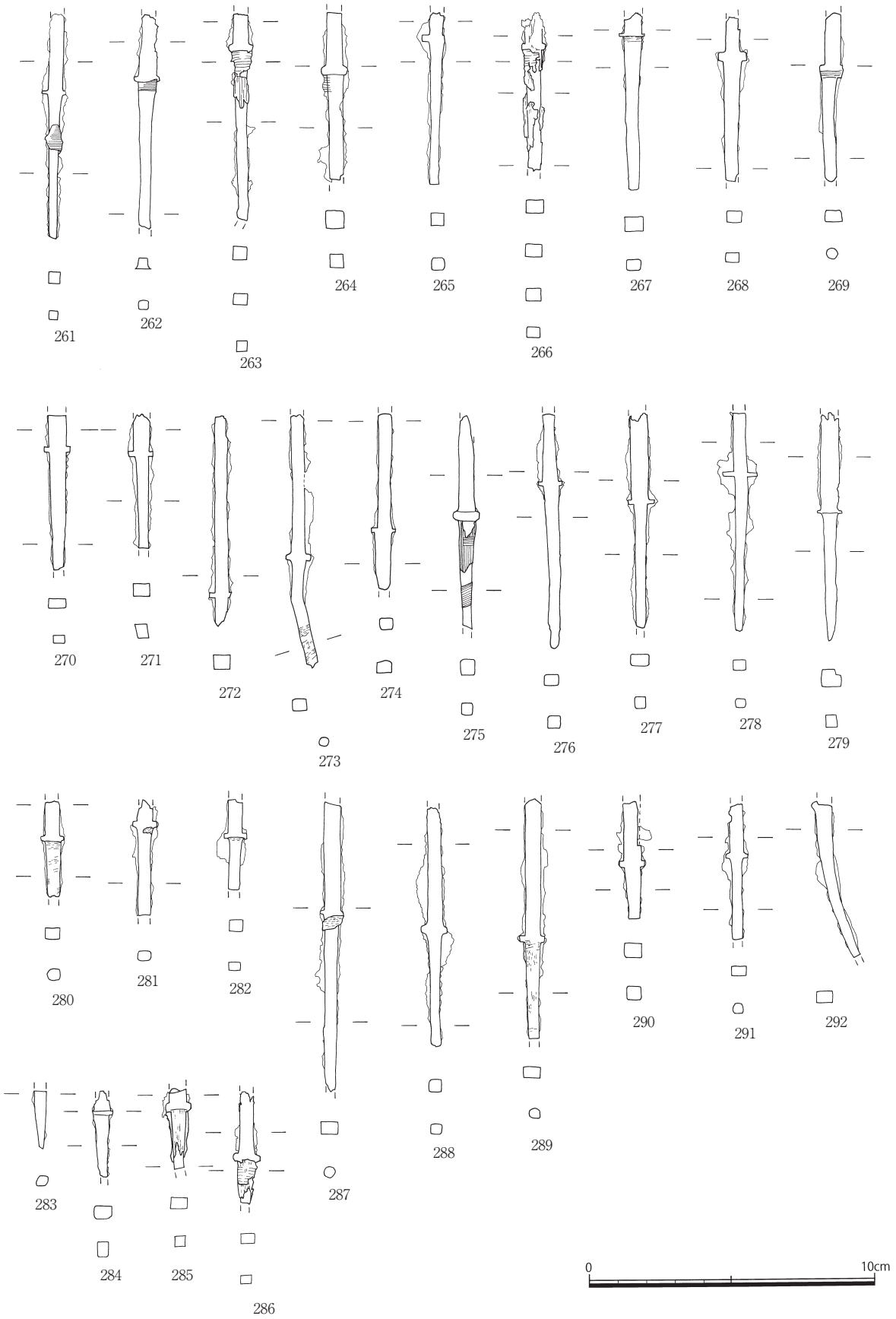


図68　出土遺物実測図⑥（縮尺1/2）

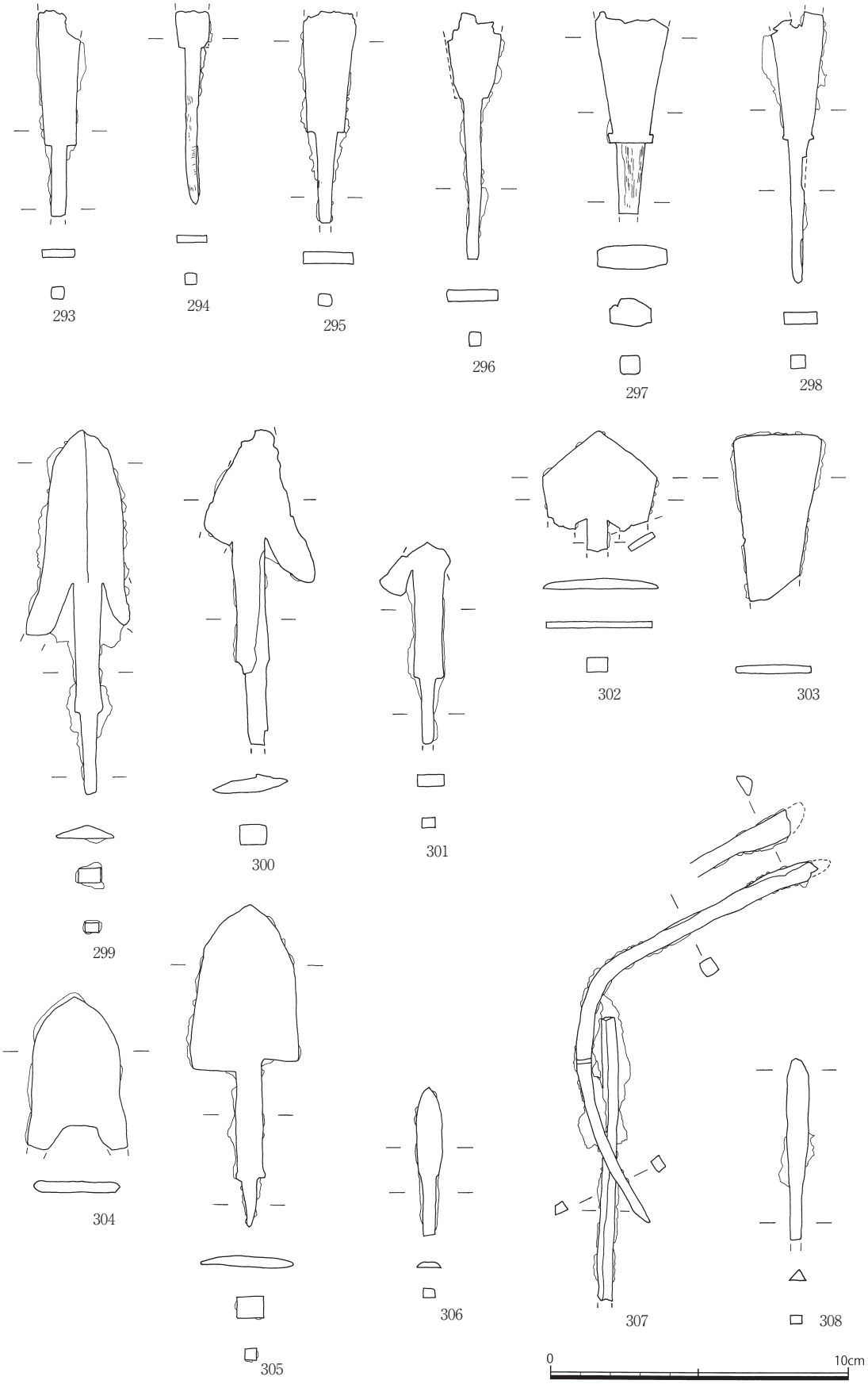


図69　出土遺物実測図⑦（縮尺1/2）

るように暗文状のミガキが二段施され、一部にはらせん暗文がみられる。外面はナデられている。口径は復元できなかったが、比較的大きめで、奈良文化財研究所（1976）の分類における杯ＣⅠ類にあたるとみられる。口縁端部の形態や立ち上がりが不明であるため、時期は絞り込めないが、飛鳥Ⅱ～Ⅳ期（７世紀第２四半期～第４四半期）におさまるだろう。208は丸底に近く、ゆるやかなカーブを描き口縁部まで続く。口縁端部は指でつまみ出され、内端面はやや凹む。さらに口縁部はヨコナデが施される。外面はヨコ方向にミガキを持つ。壱岐芦辺町カジヤバ古墳の玄室内出土の杯ＣⅡ類とされる土器に非常に類似している（長崎県芦辺町教育委員会1988）。カジヤバ古墳の資料は飛鳥Ⅲ期に比定されており、この土器も同時期である可能性が高い。209は小さな破片のため器形がはっきりしないが、器高は浅く皿に分類されるかもしれない。外面にミガキがみられる。（齊藤）

・陶磁器

213は青磁の埦。内外面に緑灰色の釉薬がかかる。（齊藤）

ｃ）鉄器類

・不明鉄製品（図65、表７）

215～217はいずれも棒状鉄製品であるが詳細不明である。217は２方向に屈曲する。218は日誌でも記述があった「鋏」状鉄製品とみられる。妙泉寺７号墳の図53-155と形態・法量がほぼ共通する。219は捩りを伴う円環状の鉄製品である。捩り環の可能性もあるが、銀張りなどの痕跡は確認できず、その場合は鉄芯のみのものということになる。捩りを伴う馬具類の可能性なども想定されるが、円環状の屈曲が本来のものであるのか、一部の鉄鏃（図69-307など）のように埋葬時に折り曲げられた可能性があるのかといった点が不明であり、ここでは参考資料として扱っておきたい。なおラベルに「国分鬼 羨道遊離28 8/7」とあり、羨道出土とみられる。（辻田）

・鉄鏃（図66～69、表７）

妙泉寺７号墳出土鉄鏃と同様、鏃身部の形態を基準として以下のように分類した。分類名は妙泉寺７号墳出土鉄鏃に用いたものと一致させている。

Ａ類…片刃形の鏃身部を有するもの（図66：220～223）

Ｂ類…鑿箭形の鏃身部を有するもの（図66：224～243）

Ｃ類…長大な鑿箭形の鏃身部を有するもの（図67：246、図69：306～308）

Ｄ類…長三角形の鏃身部を有するもの（図67：244・245・247・248）

Ｅ類…三角形の鏃身部で、深い逆刺を有するもの（図69：299～302・304）

Ｆ類…方頭形の鏃身部を有するもの（図69：293～298・303）

Ｈ類…三角形の鏃身部を有するもの（図69：305）

妙泉寺７号墳で見られたＧ類は本古墳では見られなかった。Ｈ類は妙泉寺７号墳にはなかったものであり、今回新たに分類単位として抽出している。以下、それぞれの分類単位ごとに特徴を述べていく。

220～223はＡ類。いずれも逆刺はもたず、鏃身は全体的に丸みを帯びている。220は頸部に棘関を有する。221～223は頸部が欠損しており、頸部関部の形態は不明。

224～243はＢ類。本古墳出土で最も多く出土している鏃である。鏃身関は、236の角関を除いて、他はすべて撫関であり、228・229・230・235・237・242・243などのように関が退化しているものも見られる。鏃身断面は、ほとんどが片鎬造であり、229・242のように両丸造と考えられるものもある。確認できる頸部関はすべて棘関である。226と235は茎部に有機質が残存している。これらは、杉山秀

宏氏による鉄鏃編年案のＸＩ期（TK209型式期）以降のものと考えられる（杉山1988）。

246・306～308はＣ類である。鏃身関は、246が撫関であり、306～308は関が退化している。307は頸部と茎部が曲がっており、別個体の鏃が付着している。

244・245・247・248はＤ類。鏃身断面形態は244・245・247が片鎬造、248は鎬が明瞭ではなく、片丸造と考えられる。鏃身関は244が撫関で、他はすべて角関である。頸部関が確認できるのは244のみであり、棘関を有している。

299～302・304はＥ類。299～301は杉山氏の腸抉三角形鏃Ａ形式に属する（杉山1988）。逆刺は深く、逆刺部は外反している。頸部関が確認できるものは全て撫関である。302は鏃身部が五角形状を呈し、深い逆刺を有する。欠損しており逆刺部の形状は不明。304は、錆が付着しており判断が難しいが、おそらく299～301と同様、腸抉三角形鏃Ａ形式に属するものと考えられる。頸部は欠損しており、299～301に比べて逆刺部の外反は緩やかである。

293～298・303はＦ類。いずれも上方に行くに従って鏃身幅が広くなる傾向が見られる。293～295に比べて296～298・303にその傾向が強い。293～296は角関、297・298は棘関を有する。方頭鏃で棘関を有するのは、６世紀後半以降の特徴とされる（関1986；杉山1988）。297は茎部に有機質が存存している。

305はＨ類。鏃身のふくらがやや角張っており、類五角形化の傾向が見られる。杉山氏の三角形鏃Ｃ形式に相当する（杉山1988）。左右で鏃身下端のラインが一致していない。頸部関は棘関である。頸部断面は四角形で、重量感がある。

249～251は鉄鏃の頸部、252～292は頸部～茎部である。確認できるものはいずれも棘関を有する。253～255・258・259・261～264・266・267・269・275・280～282・285～287・289は、茎部に有機質が残存している。（福永）

（６）芦辺町教育委員会調査の出土遺物（図70・71）

芦辺町教育委員会の1989年の調査では、第二前室から須恵器の破片１点が出土した以外は、玄室・第一前室などでの遺物の出土はみられなかった。他方、先に述べた閉塞石直下と、前庭部手前（攪乱層）から遺物が出土している。

まず閉塞石直下（「閉塞部」）については次のように述べられている：「閉塞石直下には暗褐色土層堆積があり、除去したところ約30点の遺物が出土した。今回の調査における出土遺物はここからの須恵器片が大半を占め、他に土師器片や黒色土器片も出土をみる。中でも杯身（６・７）と瑤（11）は、欠損部も少なく接合によりほぼ原型が復元できたもので、３点が並ぶように出土した。追葬時などの原位置をとどめている可能性も考えられる」（町報：pp.19-20）。前述のように、東亜考古学会の日誌の記録からも、これらは町報で推測されているように、盗掘以前の状況を保存している可能性が高いと考えられる。なお町報での記述の中には、図60や図版21-2・22-1にみられるような閉塞石下部前面の塊石についての言及がないことから、1989年の調査時までにはこれらの石材が除去されていたものとみられる。1970年の石室実測図（小田1980）においてもこれらの石材は図示されておらず、この点を傍証している。なお1970年の実測図では閉塞石前面の土層がやや盛り上がっており、1989年の堆積層の調査はこの部分に係るものと想定される。

また前庭部手前（攪乱層）については次のように述べられている：「現在、古墳下の駐車場から石室の直前までコンクリートの階段が設けられ容易に見学することができるようになっている。今回の調査で、前庭部付近の状況を確認するために階段部分を避け掘り下げてみたが既に攪乱されていた。

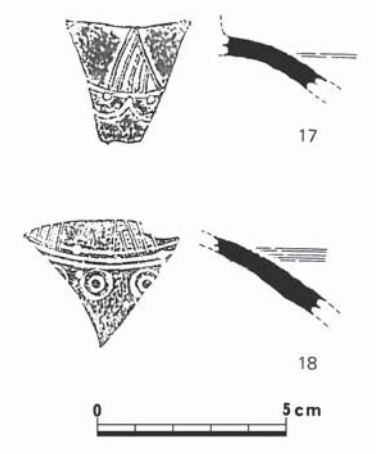


図70　出土遺物実測図⑧（縮尺1/2）

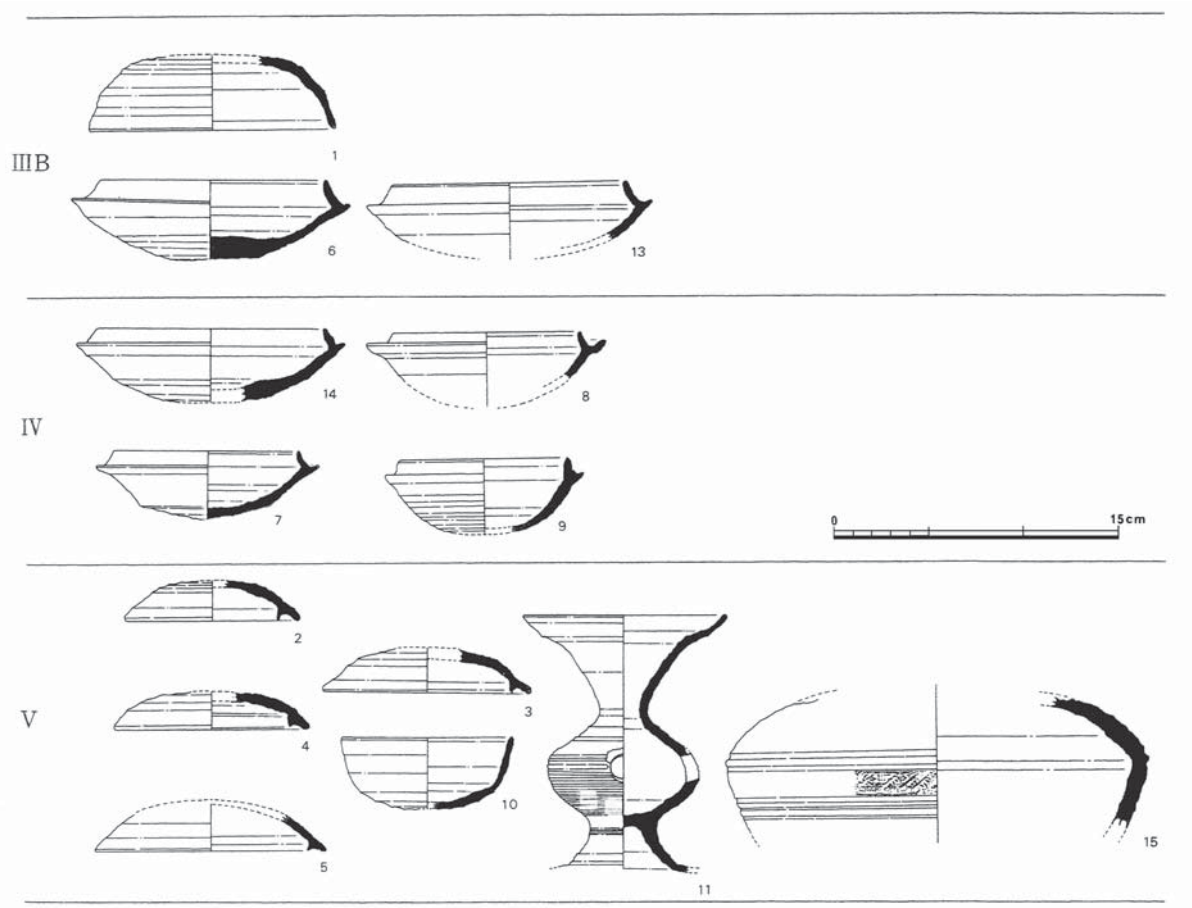


図71　出土遺物実測図⑨（縮尺1/4）

何等の遺構も検出できなかったが、須恵器片など数点の遺物が出土した」（町報：p.22）。

またこの時の調査で、新羅土器が２点出土している（図70：閉塞部（17）と前庭部（18）からそれぞれ１点ずつ）。

以上について須恵器の年代観が整理されたものが図71である。問題となっている閉塞石直下から出土した須恵器（６・７・11）はⅢB期～Ⅴ期のものが混在しており、同時期のものではないことがわかる。追葬やそれに伴う片付けなどにより原位置を移動したものが閉塞部付近に混在して埋没したも

のと考えられよう。須恵器の年代がⅢB期からⅤ期にわたっており、それに新羅土器が加わる点は、上述の東亜考古学会資料の内容と一致している。

3．小結

以上、東亜考古学会の調査成果とその後の1970年の九州大学の調査、1989年の芦辺町教育委員会の調査成果について検討を行ってきた。東亜考古学会の出土遺物は芦辺町教育委員会調査時の遺物の内容と一致していることが確認され、さらに遺物の出土状況についても、1953年の調査日誌から具体的に明らかとなった。須恵器類は第二前室と羨道から出土しており、特に第二前室から多数の破片が出土したとあることから、新羅土器片の多くもこの中に含まれる可能性が高い。また鉄器類の大半は羨道部から出土したものであり、それらは盗掘時の影響をあまり受けておらず、追葬の過程で閉塞部前面に散乱した状態で埋没したものである可能性が高いことが判明した。遺物は年代の上限としてⅢB期の須恵器が出土しており、その後Ⅳ期・Ⅴ期の須恵器が出土していることから、７世紀代以降も継続して追葬もしくは土器の供献が行われたものと考えられる。石室の規模は異なるものの、複室構造・床石の敷設・玄室への棺材の設置の可能性といった様々な点で妙泉寺７号墳との共通性が高く、築造年代もそれほど離れていないものと考えることができる。壱岐古墳群の中での年代的な位置づけや石室形態の系譜、妙泉寺古墳群との関係などについては後述したい。

第４節　帰属不明の遺物

1．帰属不明の遺物について

東亜考古学会調査資料の中には、第１節で述べたラベル記載に係る問題のため、妙泉寺１号墳・７号墳・鬼の窟古墳のいずれに帰属するのかが不明な遺物が含まれている。特に妙泉寺７号墳と鬼の窟古墳は造営年代が近接・重複しており、分離が困難であることから、土器類・鉄器類含めてここでまとめて報告する。（辻田）

2．土器類・鉄器類

（1）土器類（図72、表８）

・須恵器

309～316は杯蓋。309は天井部が欠損しているが、天井部と体部の境は明瞭で段を持つ。杯身と合わさる口縁先端は尖った形態を呈す。310も天井部と体部の境に段がある。天井部のヘラケズリはやや粗く、体部はナデによる凹凸が大きい。口縁端部は短く外傾する。312も310に類似するが、沈線は施されず、口縁端部に段を持つ。311は天井部が平坦で、体部との境は不明瞭で丸みを帯びる。全体にヘラケズリは粗く、口縁端部は短く外傾し、先端は斜縁をなす。以上の杯蓋は形態からみて、牛頸編年のⅢB期（６世紀後半）に相当すると考えられる。313は体部片で口縁端部はやや尖る。314は器高が低く、天井部は回転ヘラケズリがされるが体部を含めて全体に整形が粗く凹凸が強い。かえりは体部よりやや下方に出るが短い。つまみは欠損しているものの、宝珠形を呈すると考えられる。７世紀前～中頃のものと考えられる。315も同様であるが、314に比べて器高がさらに低く、天井部が明瞭

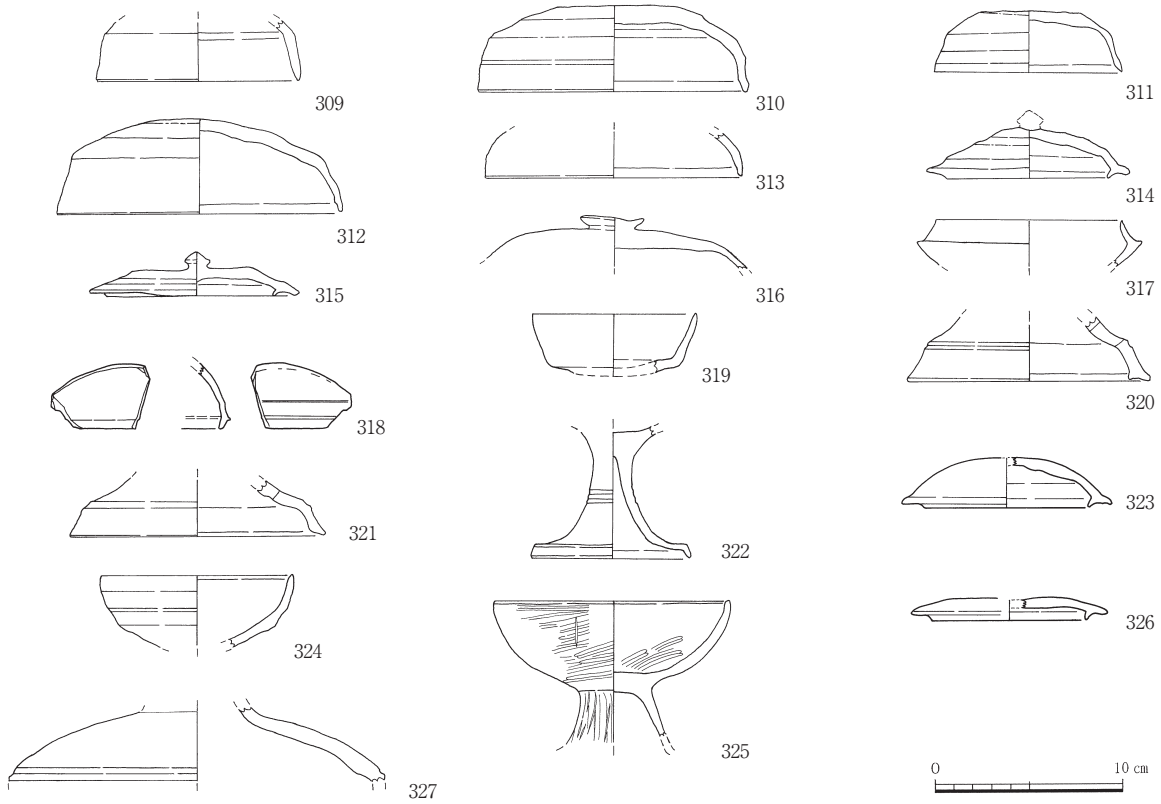


図72　不明土器類（縮尺1/4）

な平坦面をなす。時期は７世紀中～後半に下るだろう。316はつまみの形態がボタン状を呈し、天井部は回転ヘラケズリが施される。６世紀後半のものとみられる。

317・319は杯身。317は蓋受けの立ち上がりが内傾し、口縁部の先端は尖る。牛頸編年のⅢB期（６世紀後半）相当のものか。319は底部からほぼ直角に体部が立ち上がり、口縁部までわずかに外方に開きながら伸びる。時期は７世紀前～中頃と考えられる。

320・321は脚裾部の破片。裾部は段をなし、段の上方に透孔が付く。320の裾下端部は肥厚し、接地面は中央がやや窪んだ面をなす。321は裾下端部が斜縁を呈する。壱岐市双六古墳墳丘周辺部出土資料として報告されている脚杯壺の脚部破片が類例としてある（長崎県壱岐市教育委員会 2006 p.27 第13図-3）。

322は高杯の脚部片。脚部はラッパ状を呈し、中間付近に２条の沈線がめぐる。脚裾部は短く下方に屈折する。小型化していることなどから、時期は牛頸編年におけるⅤ期（７世紀前半）相当であろうか。

323・326は杯蓋。323は天井部と体部の境は消失しドーム状を呈する。かえりは体部よりやや下方に出る。天井部は回転ヘラケズリが施され、つまみは欠損している。326は器高が低く、天井部中央は欠損しているがつまみが付いていた可能性が高い。323は７世紀前半～中頃、326は７世紀後半に相当するだろう。

324は杯身の可能性が高い。胴部は丸みを帯び、やや凹凸がある。（齊藤）

・土師器

325は高杯。半円状の杯身部を持ち、内外面に暗文状のミガキが施され、脚部にもタテ方向のミガキと沈線が付く。内面の暗文は渦状を呈して内から外に広がる。（齊藤）

・朝鮮半島系土器

318は新羅土器の杯蓋片とみられる。体部下方はゆるやかな曲線を描き口縁部まで続き、端部は外面に突帯を持ちわすかに内傾する。かえりは体部よりやや下方に短く突出する。外面はミガキが施され光沢があり、内面には赤色付着物がみられる。類似した資料としては、小田富士雄氏が「対馬・北部九州発見の新羅系陶質土器」の中で紹介している韓国昌寧・桂城Ａ地区第９号の新羅土器有蓋高杯などがあげられる（小田1978）。

327は壺の肩部片。肩部下方に段が付く。外面には自然釉が付着し、内面は頸部付近にしぼり痕がみられる。同じく小田が紹介している千葉県・野々間古墳と京都府大覚寺３号墳出土の「新羅焼長頸壺」に肩部の張りと沈線、および灰白色の粒子の細かい胎土、外面に釉薬がかかる点などが類似している（小田1978）。327の土器は文様はないが、同様の器種である可能性が高い。（齊藤）

（２）鉄器類（図73～75、表９）

・鉄鏃

328～405は、妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳のいずれから出土したものか不明の鉄鏃である。これまでと同様、鏃身部の形態を基準として以下のように分類する。なお、分類名は妙泉寺７号墳・鬼の窟古墳出土鉄鏃の分類に用いたものと一致させている。

Ａ類…片刃形の鏃身部を有するもの：図73-328～340

Ｂ類…鑿箭形の鏃身部を有するもの：図73-341～359

Ｅ類…三角形の鏃身部で、深い逆刺を有するもの：図75-403・404

Ｆ類…方頭形の鏃身部を有するもの：図75-391～394・396～401

Ｇ類…鏃身部に透かしを有するもの：図75-402・405

Ｈ類…三角形の鏃身部を有するもの：図75-395

妙泉寺７号墳・鬼の窟古墳で見られたＣ類、Ｄ類は見られない。

328～340はＡ類である。いずれも逆刺はもたず、鏃身部は全体的に丸みを帯びている。328は頸部関が確認でき、棘関を有している。

341～359はＢ類。大半の鏃身関は撫関であり、関が退化しているものも多く見られる。351・352の鏃身関は山形関と考えられる。杉山氏の編年観によると、山形関は古墳時代前期か存在し、五世紀後葉には見られなくなるとされており（杉山1988）、妙泉寺７号墳・鬼の窟古墳から出土している他の遺物の年代に比べて著しく古いことになる。出土した古墳や出土状況も不明であることから、その位置づけを行うことは困難である。鏃身断面は、341・342・345・350・351・352～359が片鎬造、343・344・346・348が両丸造、347・351が片切刃造であると考えられる。確認できる頸部関はすべて棘関である。

403・404はＥ類。いずれも杉山氏の腸抉三角形鏃Ａ形式（杉山1988）に属すると考えられる。403は深い逆刺を有しており、逆刺部は外反しない。残存状態が悪いものの、404も403と同様の形態的特徴を有していると考えられる。

391～394・396～401はＦ類。392の頭部はやや丸みを帯びている。鏃身関の形態は、392が撫関、他は角関を有する。397は鏃身の中央に小さな穴が開いている。錆が付着しており、元々空いていたの

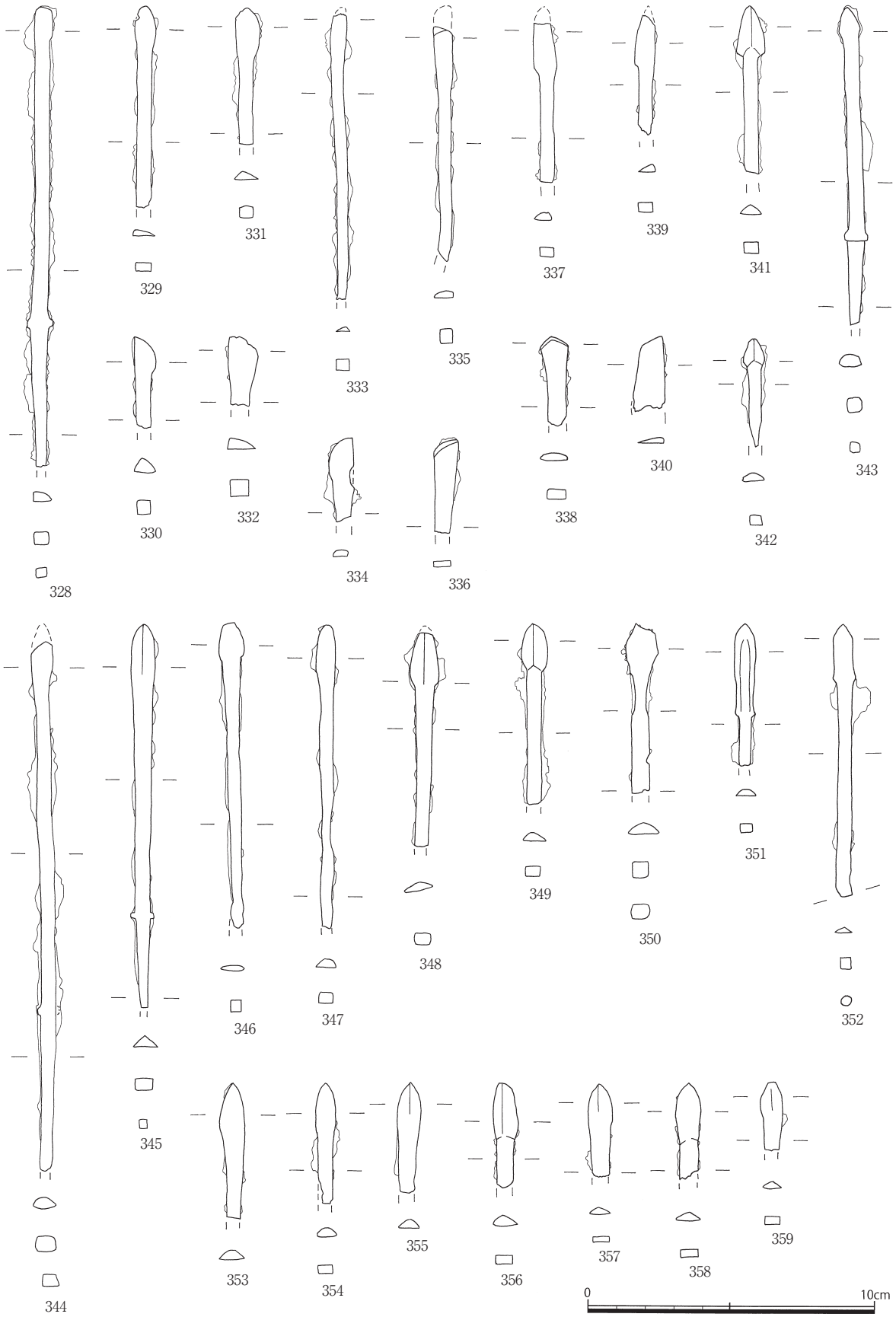


図73　不明鉄器類（縮尺1/2）

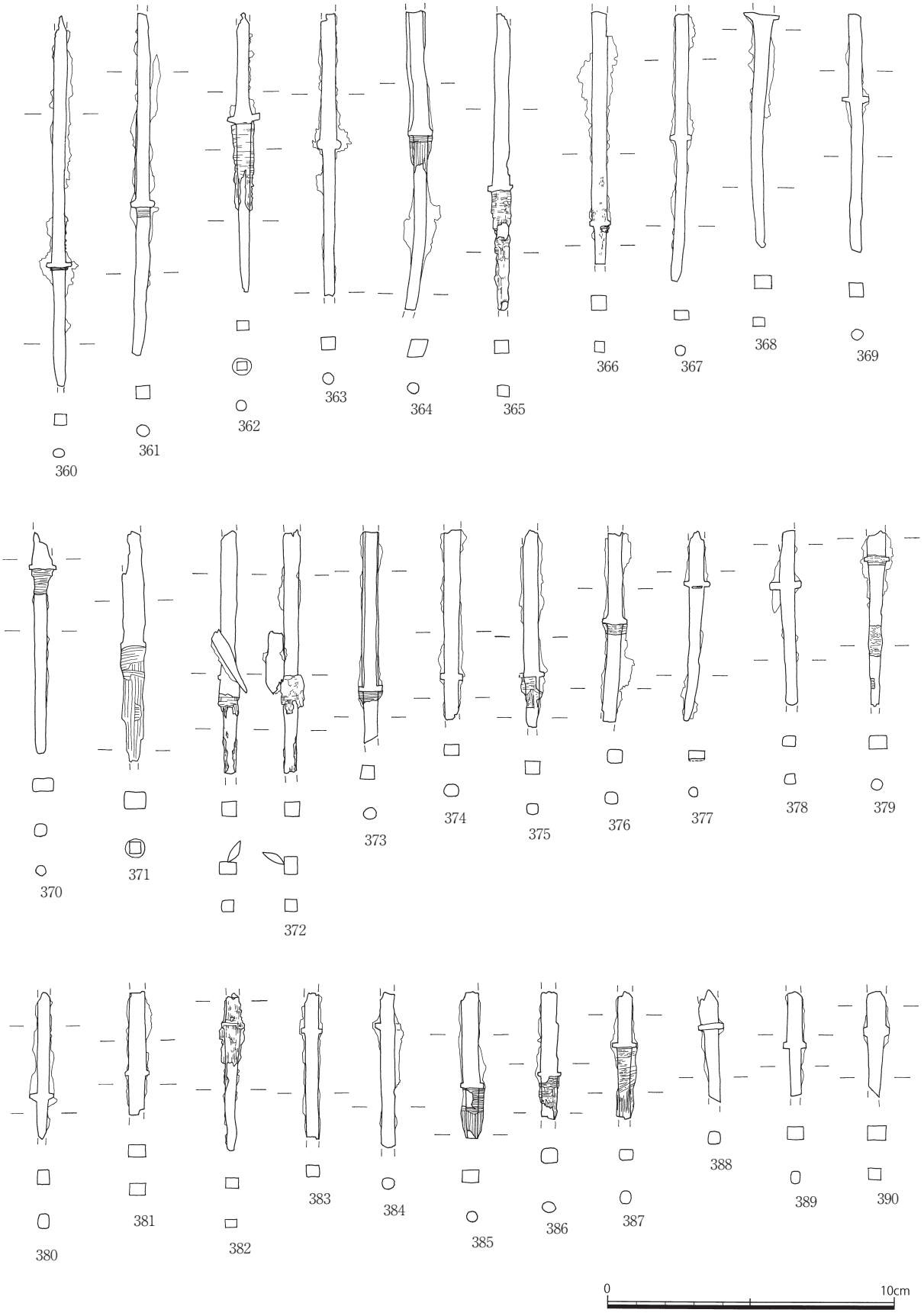


図74　不明鉄器類（縮尺1/2）

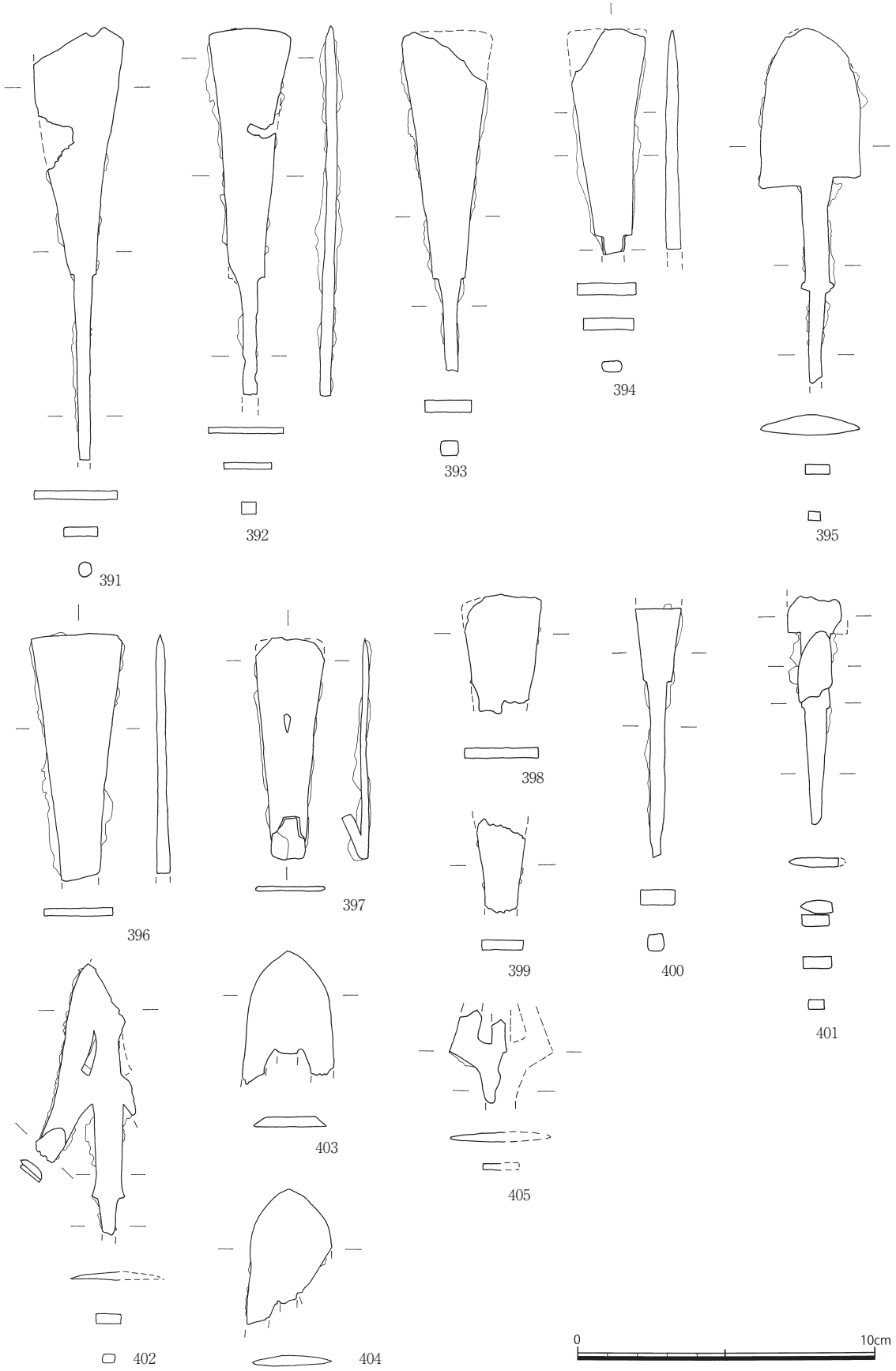


図75　不明鉄器類（縮尺1/2）

か、腐食して穴が開いたのかの判断は難しい。また、鏃身の下部で折れ曲がっている。401は頸部に別個体の鏃身部と思われるものが付着している。

402・405はＧ類。402は鏃身中央に二つの透かしを有している。深い逆刺を有しており、逆刺部は外反している。頸部関は台形関に形態が近いが、下端部がやや傾斜している。405はその大部分が欠損しているものの、鏃身中央に透かしを有していることがわかる。

395はＨ類。杉山氏の三角形鏃Ｃ形式（杉山1988）に属すると考えられる。鏃身関は角関であり、左右で鏃身下端のラインが一致していない。頸部関は棘関である。

360～390は鉄族の頸部～茎部である。確認できるものはいずれも棘関を有する。361・362・364・365・370～373・375・376・379・382・385～387は、茎部に有機質が残存している。（福永）

３．小結

以上の検討の結果、土器類は一部６世紀後半代に遡る可能性がある資料が含まれるものの、６世紀末～７世紀代の資料が主体である。鉄鏃についても同様であることから、これらは妙泉寺７号墳と鬼の窟古墳出土遺物が大半であるとみられる。

土器類については、新羅土器の図72の318と、鬼の窟古墳出土新羅土器片（図64の201）が同一個体の可能性が高いことから、これらの帰属不明土器類の中には鬼の窟古墳出土遺物が含まれるとみられる。鉄器類については、長頸鏃の帰属の判断は困難であるが、方頭鏃（Ｆ類：391～394、396～401）が鬼の窟古墳で多く出土していることから（図69）、これらは鬼の窟古墳に帰属する可能性もある。

以上のように、部分的に鬼の窟古墳への帰属が想定可能な資料が含まれるものの、全体として各古墳への帰属を明瞭に識別・分離することが困難であることから、ここで挙げた土器類・鉄器類は各古墳の遺物が混在しているものと考えておきたい。（辻田）

第５節　まとめ

１．東亜考古学会調査の成果

ここで、これまでの検討をふまえ、東亜考古学会の調査成果として、各古墳の内容を整理しておきたい。なお墳丘・石室の法量等はそれぞれ県報・町報にもとづくものである。

（妙泉寺１号墳）
・墳丘：円墳、径約23m、墳丘高5.2m
・埋葬施設：単室両袖型横穴式石室・玄室長3.4m・幅２m・羨道長1.3m・赤色顔料塗布
・出土遺物：須恵器・土師器・ガラス小玉、他に金銅製耳環等（県報）、現物不明遺物（金銅製馬具類）
・備考：墳丘上のトレンチから須恵器が多数出土、墳頂部での儀礼的供献後に1.5m の盛土が行われる。

（妙泉寺７号墳）
・墳丘：円墳、径約16m 前後、墳丘高4.6m
・埋葬施設：複室両袖型横穴式石室（前室・玄室）、全長8.1m、玄室長2.1m・幅2.1m

・出土遺物：須恵器・土師器・鉄器類（刀剣類・鏃類・馬具類・農工具類）、他に現物不明遺物（金銅製耳環５点、緑色ガラス玉）
・備考：鉄器類の多くは前室で出土、床石の上層・下層で時期差あり。須恵器類が前庭部付近でまとまって出土。前室で捩り環１点（銅地銀張り）が出土。

（鬼の窟古墳）
・墳丘：円墳、径45m、墳丘高13m
・埋葬施設：複室両袖型横穴式石室（第二前室・第一前室・玄室）、全長16.5m、玄室長3.2m・幅３m
・出土遺物：須恵器・土師器（畿内系土師器含む）・新羅土器・鉄器類（鏃類）、他に現物不明遺物（「鉄製鏡板」・「鉄地鍍金の鍔金具らしきもの」）
・備考：須恵器片が第二前室の流入土中から多く出土、また羨道閉塞部前面の堆積土中から須恵器・鉄器類が多数出土。日誌の記述から閉塞石が原位置を保っていることが判明し、羨道出土遺物は追葬や片付けに伴い原位置を移動した副葬品が埋没したものが多く含まれると想定された。

２．出土遺物からみた妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳群の年代観

東亜考古学会調査時の出土遺物の検討により、各古墳の年代観が具体的に明らかになった。以下のように整理される。

妙泉寺１号墳は、出土須恵器の上限年代がⅢA 期であり、石室の形態とも矛盾しないことから、この時期が築造年代と考えられる。須恵器自体はⅢB 期が多く、追葬・供献に伴うものとみられる。以上から、初葬が６世紀中葉前後、追葬が６世紀後葉前後と考えられる。

妙泉寺７号墳は、出土須恵器の上限年代がⅣA 期であり、石室の形態とも矛盾しないことから、この時期が築造年代と考えられる。その後、ⅣB 期やⅦA 期の須恵器が出土しており、追葬や供献に伴うものとみられる。以上から、初葬が６世紀末前後、追葬・供献が７世紀初頭～前半および８世紀初頭～前半に行われたと想定される。

鬼の窟古墳は、出土須恵器の上限年代がⅢB 期であり、ⅣA・ⅣB 期・Ⅴ期の須恵器が出土する。また飛鳥Ⅱ～Ⅳ期の畿内系土師器も出土している。以上から、須恵器からみた年代観の上限は、初葬がⅢB ～ⅣA 期（６世紀後葉～末）に行われ、追葬が７世紀代を通じて行われたものとみられる。

以上の年代観は、壱岐の古墳出土須恵器から想定されてきた各古墳の年代観（小田・下原2006）と概ね一致するものであり、今回報告した東亜考古学会の調査資料はあらためてそれを補強する材料ということになろう。各古墳の年代観を以上のように考えた上で、壱岐の古墳時代における各古墳の位置づけについて考えてみたい。

３．壱岐の古墳時代における妙泉寺古墳群と鬼の窟古墳の位置づけ

（１）年代からみた各古墳群の関係

第１節でもみたように、従来から壱岐の古墳の年代については諸説あり、特に壱岐古墳群で大型古墳が築造される点について、短期間に多数の古墳が併行して築造されたとみる立場（例：小田・下原2006；田中2007・2012b）と、６世紀後半から７世紀前半まで段階的に築造されたとみる立場（広瀬2010）の双方が存在している。東亜考古学会調査の出土須恵器の年代をふまえた上で、出土遺物から

築造年代の上限を考えた場合、築造年代としては６世紀後葉～末頃に集中するものとみられる。すなわち、妙泉寺１号墳のように６世紀中葉前後に築造が開始された後、特に６世紀後葉から末にかけて、壱岐古墳群では対馬塚古墳・双六古墳といった前方後円墳の築造を嚆矢として造営が開始され、その後短期間のうちに併行ないし連続して４基の大型円墳が築造されたものとみられる。妙泉寺７号墳もこれらの大型円墳とほぼ併行する時期の築造である。各古墳への追葬は７世紀代を通じて行われたものと想定される。４基の大型円墳（笹塚古墳・兵瀬古墳・鬼の窟古墳・掛木古墳）については、これまでも石室構造の微細な違いから様々に前後関係が想定されているが、個々の古墳の築造にあたって時間的な意味での前後関係は当然存在するとしても、考古学的な時間軸上での築造年代は、「６世紀末葉前後」における「ほぼ同時期の所産」と考えざるを得ない。

以上のように理解するならば、壱岐における後期古墳は、６世紀中葉前後に妙泉寺１号墳などが出現した後、６世紀後葉～末に壱岐古墳群と百合畑古墳群や百田頭古墳群といった周辺の群集墳が多数造営され、７世紀代を通じて追葬・祭祀が行われたということになろう。古墳の新規の造営自体は７世紀に入ると大きく減少する。このように捉えた上で、以下横穴式石室の系譜と出土遺物・副葬品からみた各古墳群の間の関係について若干検討しておきたい。

（２）妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳の横穴式石室の系譜と相互の関係

従来から指摘されているように、妙泉寺古墳群および鬼の窟古墳のいずれも北部九州系の横穴式石室である。ここで、単室両袖形横穴式石室である妙泉寺１号墳と、複室両袖型横穴式石室の妙泉寺７号墳・鬼の窟古墳を分けて検討したい。

単室両袖型横穴式横穴式石室は、５世紀代以来の北部九州型初期横穴式石室と入れ替わるように出現する６世紀代の新たな石室であり（柳沢1975）、系譜関係については不明な点が多いが、６世紀前葉に玄界灘沿岸の各地で出現したものとみられている（重藤1999）。６世紀中葉以降、博多湾沿岸地域とその周辺では、複室両袖型横穴式石室を上位として、単室両袖型横穴式石室をその下位とする序列化が明確化し、群集墳も含めて広く普及する（辻田2011b）。本報告で扱った妙泉寺１号墳はこの単室両袖型横穴式石室であり、その系譜は福岡平野をはじめとした博多湾沿岸地域に求められる。

妙泉寺１号墳で注目したいのは、東亞考古学会の調査記録によって、閉塞が１枚板石でなく塊石の積み上げによるものであることが確認された点である。博多湾沿岸地域では、単室両袖型横穴式石室に閉塞が行われる場合、この両者が認められるが、６世紀中葉前後の単室両袖型横穴式石室の閉塞に大型板石１枚を用いる例として、福岡市元岡石ヶ原古墳（前方後円墳・49m）などがある。円墳の同三苫京塚１号墳などでは塊石を用いており、福岡市周辺の群集墳においては、塊石のみか小型の板石に塊石を併用するものが大半を占める。また鬼の窟古墳の閉塞石で大型の１枚板石が用いられている点からも、こうした閉塞方法の違いは被葬者の階層的位置の違いを示している可能性が高い。この点からすれば、妙泉寺１号墳の被葬者は、博多湾沿岸地域の脈絡でいえば、前方後円墳の被葬者層に次ぐ序列に位置づけられるものとみることができよう。かつ妙泉寺１号墳では現物不明ながら元来は金銅装馬具類が出土していたようであり、上述の三苫京塚１号墳などは比較的類似したあり方として認められよう。また妙泉寺１号墳の石室は、側壁の配置などの点においても、福岡市小戸１号墳（辻田2011a）や三苫京塚１号墳など、６世紀中葉前後の博多湾沿岸地域の単室両袖横穴式石室との共通性が極めて高い。この点から、この時点では壱岐と博多湾沿岸地域との関係が非常に近接していたことが想定される。

妙泉寺１号墳の調査成果としてもう１点注目されたのは、円丘部墳頂部平坦面での須恵器供献と盛

土という点である。現在のところ、妙泉寺１号墳だけの例外的特殊事例であるのかどうか不明であるが、例えば双六古墳などのように後円部の高さが通例より極端に高いものについても、こうした円丘部墳頂部での儀礼行為と盛土による嵩上げといった点が想定されうるのかどうか、今後の課題として記しておきたい。

他方、妙泉寺７号墳と鬼の窟古墳の複室両袖型横穴式石室については、前述のように両者の関係が密接である点が特筆される。すなわち、石室形態および石材の配置・天井石の架構方法などが兵瀬古墳・鬼の窟古墳などとほぼ共通である。博多湾沿岸地域の石室などよりも、壱岐島内での共通性の方が高いことから、妙泉寺７号墳の石室プランも、福岡平野などに直接系譜を求めるよりは、兵瀬古墳や鬼の窟古墳の三室構造横穴式石室の第二前室を省略して全体を小型化したとみる方が蓋然性が高いだろう。その点で、時期的に併行しつつ、壱岐古墳群の大型円墳との明瞭な階層的関係および親縁性のつよさを表示しているとみることができよう。

また福岡平野などとの共通性が薄れる一方で、上述のような石室形態・構築技術としてはどちらかといえば遠賀川流域や周防灘沿岸地域などの横穴式石室との関係がつよくなっている（小田2012）。また双六型と呼ばれる独自の石室の展開にあたって、近畿地域の影響も想定されている（広瀬2010）。すなわち、６世紀中葉以降、壱岐島では複室両袖型横穴式石室が定着する過程で、周防灘沿岸や近畿といった他地域の影響も広く受けつつ、壱岐の石室形態として在地化したものとみられ、その中で上述の兵瀬古墳・鬼の窟古墳と妙泉寺７号墳の間での共通性の高さ、といった特徴が生み出されたものと想定される。

以上のような点から、６世紀後葉～末の時点では、墳丘・石室規模という点で、【壱岐古墳群】－【妙泉寺古墳群（７号墳）】－【百合畑古墳群・百田頭古墳群】といった階層的序列関係が顕在化・定着していたものとみられる。ここで注目されるのは、今回の調査で明らかとなった、鬼の窟古墳と妙泉寺７号墳の出土遺物の特徴である。１つは、前者において新羅土器が非常に多量に出土しているのに対し、妙泉寺７号墳（および１号墳）では殆ど殆ど出土しないか、出土していたとしても非常に少数であった点である。もう１つは、妙泉寺７号墳において捩り環頭大刀が副葬されていたとみられる点である。従来から壱岐における新羅土器の出土量の多さは注目されているが、その中でも壱岐では福岡平野などと比べて石室内への碗などの供献が多いことが指摘されている（上田2012）。東亜考古学会調査の出土遺物でも、鬼の窟古墳からはそうした小型の器種が豊富に出土しており、そのような供献を可能にするような新羅との対外交流が存在したことを窺わせるものである。また鬼の窟古墳や掛木古墳などで７世紀代の畿内系土師器が一定数副葬されている点も、そうした最上位層の広域的政治的関係を示すものといえよう。

捩り環頭大刀については、九州では出土例が少ないながらも６世紀前半代の副葬事例がやや多いが（例：福岡県山の神古墳・王塚古墳・熊本県国越古墳など；深谷2008；辻田2015；福田2016）、６世紀後葉～末の壱岐に捩り環頭大刀がもたらされていること、かつ最上位層の壱岐古墳群ではなく妙泉寺７号墳においてその捩り環頭大刀が出土している点は、妙泉寺古墳群の被葬者層が、群集墳の被葬者層よりも上位で、かつ近畿中央政権とも深いつながりを持つような上位層の一部をなしていたことを示している。このような脈絡において、前述の石室構造からみた兵瀬古墳・鬼の窟古墳と妙泉寺７号墳の親縁性の深さという点も理解することができよう。

以上のように、６世紀中葉前後に妙泉寺１号墳などを嚆矢として始まった壱岐における古墳築造は、６世紀後葉～末に至り、壱岐古墳群を最上位層、妙泉寺古墳群をそれに準ずる上位層の一部とする形で展開した。周辺の多数の群集墳の築造とあわせて、６世紀末前後をピークとしながら大量の古墳造

営が同時進行で併行して行われたものと想定される。

４．妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳の造営と時代背景

最後に、以上の年代観と古墳群の関係をふまえた上で、時代背景および文献史学の成果との関係について述べておきたい。

まず壱岐島における後期古墳の出現を考える上で重要となる６世紀中葉前後の妙泉寺１号墳・単室両袖型横穴式石室の築造は、上述のように、博多湾沿岸地域との密接な関係において説明される現象である。これについては、６世紀中葉前後という年代観も含め、磐井の乱後の糟屋屯倉献上・那津官家修造をはじめとした、北部九州における初期ミヤケの成立・展開（桃崎2010；岩永2012・2014；辻田2011b・2012・2013）とほぼ時期的に重なる問題である。この点で、『先代旧辞本紀』の『国造本紀』において、壱岐国造のみ磐井の乱時に功があったとする由来が記されている点で、磐井の乱後の時期まで壱岐国造任命時期が遡る可能性を論じた堀江潔氏の見解は興味深い（堀江2012a・c）。妙泉寺１号墳や対馬塚古墳・双六古墳などの被葬者と壱岐国造との関係の有無を考古資料から直接的に明らかにすることは難しいとしても、博多湾沿岸地域に系譜が求められる単室両袖型横穴式石室が６世紀中葉前後に壱岐島において出現した背景は、こうした磐井の乱とその後の北部九州におけるミヤケ設置と関わっているとみて大過ないと考えられる。この点で、壱岐の古墳時代後期の開始は、近畿中央政権および博多湾沿岸地域・那津官家とのつながりの中にその画期と契機の１つを求めることができよう。

またこれ以降半島南部地域で加耶地域をめぐる新羅・百済の競合がさらに進展し、562年に新羅により加耶地域が併呑されたことがその後の新羅に対する近畿中央政権の外交方針を大きく規定したことから考えれば（森2006・2011）、広瀬和雄氏（2010）が指摘するように、基本的には壱岐および対馬が対新羅戦略の軍事的・外交的最前線として重視された結果として、壱岐島において６世紀後半以降古墳造営が活発化したと考えるのが妥当であろう。広瀬氏は、壱岐古墳群の造営については、壱岐島内の人口および自律的な要因では説明できないこと、それ故に北部九州・中九州からの集団移住およびミヤケからの食料・物資支援などが行われた可能性を指摘している（広瀬2010）。上述のように、壱岐古墳群の築造年代については、須恵器編年から６世紀後葉～末に集中すると捉える点で、７世紀前葉まで壱岐古墳群の築造が段階的に行われたとする広瀬氏の年代観とは異なるが、上記の広瀬氏の見解は壱岐島の古墳造営の特質を考える上で極めて重要と考える。

先にも述べたように、壱岐古墳群が島内の秩序として最上位層とはいうものの、前方後円墳築造停止後の６世紀後葉～末前後において、ほぼ「同時期」に大型円墳が４基も併行して造営されるあり方は、社会統合のあり方として通常の状況ではなく、かなり特殊な状況下での古墳造営であることを確認しておく必要がある。これは博多湾沿岸地域での巨石墳の少なさや北部九州各地での大型古墳の限定性および地域社会の統合のあり方と比較すると明らかである。すなわち、同時期の博多湾沿岸地域においては、おそらく那津官家などの管轄下において、６世紀後葉の早い段階で前方後円墳の築造が停止し、大型円墳と群集墳という地域社会の編成が明瞭に認められる。また宗像地域や筑後川流域など、６世紀後葉まで大型前方後円墳の築造が継続する地域においては、最大規模墳を頂点として群集墳や横穴墓の被葬者層に至る地域社会の階層秩序が形成されており（辻田2012）、いわゆるミヤケ制・トモ－部制をその背後に想定することも可能とみられる。６世紀後葉～末における壱岐古墳群の集中的造営は、そうした北部九州の地域社会のあり方などと比較すると明らかに特殊であり、その背後に

６世紀末前後の対新羅をめぐる軍事的緊張関係の増加が大きく影響しているものと考えられる。これについては、「国境防衛」のための大量移住・新羅に対する政治的・外交的パフォーマンスとしての「継続的」古墳造営（広瀬2010）といった可能性も含め、「巨大な古墳を多数・継続的に・集中的に築造する」という行為そのものに別の意味が付与されていたと考えるのが妥当であろう。またそうした中で、壱岐古墳群に他地域と比べてより多くの新羅土器が出土している点、また７世紀代において畿内系土師器が出土している点は、新羅への軍事遠征が準備され、そして中止された６世紀末～７世紀初頭の前後において、壱岐の古墳造営に従事した諸集団およびそれを統括した上位層が、新羅および近畿中央政権の双方と密接な関係を持ちながら、両者の仲介役としての役割を双方から期待されつつ、政治的過程として対外交流が進行したことを物語るものであろう。笹塚古墳など、壱岐古墳群における新羅系馬具の出土は、新羅土器とともに新羅との関係を考える上で重要である。同じく６世紀末～７世紀初頭に築造されたとみられる福岡県古賀市の船原古墳の埋納坑で発見された新羅系馬具を含む大量の副葬品の出土も、こうした壱岐における新羅系馬具や新羅土器の出土と同様の脈絡で理解できる可能性がある。

その後、壱岐での古墳造営は７世紀前半には大幅に減少し、７世紀中葉前後に一旦終焉を迎えたものとみられる。築造数の減少という点では、６世紀末頃と比べて古墳築造に関わる人員という意味での壱岐島の人口が減少した可能性も想定される。７世紀前半は、このように６世紀末前後の集中的な古墳造営が落ち着いて、追葬・墓前祭祀へと比重が移った段階とみることができるのではないか。この点で、継体朝以降の近畿中央政権の外交戦略の変遷において、推古朝段階で対新羅から対隋外交重視へと方針転換が行われ、その中で壱岐の軍事的拠点としての役割・地位に変化が生じたとする堀江潔氏の見解は重要である（堀江2012a・c）。こうした外交方針の転換と軌を一にしながら、７世紀段階には壱岐島での大型古墳造営が減少し、追葬・墓前祭祀主体へと移行した可能性は高い。そうした中で、７世紀代から８世紀代にかけて、壱岐古墳群の造営集団や被葬者層の一部が「壱岐直」「壱岐国造」として収斂したものと考えられよう（小田1980）。

なお壱岐古墳群において鬼の窟古墳とともに最終段階の築造と想定される掛木古墳で、近年初期隋唐鏡の出土が確認された（辻田・片多2016）。７世紀前葉の隋末～唐初期に製作された中型の対獣瑞獣文鏡であり、掛木古墳における追葬に伴う副葬品とみられるが、日本列島での７世紀代における出土例が殆どないことから、双六古墳出土の北朝産陶磁器（弓場2006）と並んで、新羅経由か近畿中央政権も含めた対中国の外交ルートによるものかといった点で問題となる資料である。これについては将来の資料の増加に期待するとして、そうした壱岐古墳群における北朝産陶磁器や初期の隋唐鏡の出土についても、新羅土器や畿内系土師器の出土と同じく、広域的な政治的関係および外交関係の所産として生み出されたものであることを確認しておきたい。

５．結語

以上、東亜考古学会の妙泉寺古墳群および鬼の窟古墳の調査成果にもとづき、現在問題となっている論点についていくつか検討を行ってきた。妙泉寺１号墳の出現については、６世紀中葉の磐井の乱後のミヤケ設置といった点との関係について指摘した。また特に従来から問題となっている壱岐古墳群の築造年代、特に実年代については、出土須恵器の年代観からも、６世紀後葉～末前後をピークとする形で、ほぼ「同時期」に多数の古墳が併行して築造される、かなり特殊な状況下での古墳造営であったことを論じてきた。その上で、そうした特殊な古墳造営は、６世紀後葉～末の対新羅情勢に起

因する他律的なものであり、新羅や近畿中央政権との政治的関係の中で古墳造営が行われた後、７世紀代以降は造営そのものが減少し、追葬や墓前祭祀主体へと移り変わっていったものと想定した。こうした古墳造営の変遷は６・７世紀代における壱岐の国際的・政治的な位置とその変遷を如実に示しているものと考えることができよう。

以上の説明は、1953年の東亜考古学会の調査以降の約60年における、壱岐の古墳時代をめぐる考古学・文献史学双方の研究の進展を物語るものであると同時に、未報告資料のため詳細が不明であった東亜考古学会の調査資料が、そうした現在の研究動向においてあらためて非常に重要な位置を占めるものであることを示している。今回報告した1953年の調査に当時直接関わられた東亜考古学会の関係の方々、ならびに種々御教示・御協力いただいた長崎県教育委員会・壱岐市教育委員会をはじめとした関係の方々に深く感謝申し上げるとともに、当該資料とその成果が今後さらに有効に活用されることを願いつつ擱筆したい。

【参考・引用文献】

芦辺町教育委員会1988『カジヤバ古墳―壱岐郡芦辺町国分川迎触字平原所在―』、芦辺町文化財調査報告書第３集.
芦辺町教育委員会1990『鬼の窟古墳』、芦辺町文化財調査報告書第４集.
壱岐市教育委員会2006『双六古墳』、壱岐市文化財調査報告書第７集.
壱岐市教育委員会2012『壱岐の島の古墳群：現状調査』、壱岐市文化財調査報告書第20集.
石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編1991『古墳時代の研究６ 土師器と須恵器』、雄山閣.
一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆編2011『古墳時代の考古学１ 古墳時代史の枠組み』同成社.
岩永省三2012「糟屋屯倉中核施設所在地の可能性」『一般社団法人日本考古学協会2012年度 福岡大会研究発表資料集』、日本考古学協会2012年度 福岡大会実行委員会.
岩永省三2014「ミヤケの考古学的研究のための予備的検討」高倉洋彰編『東アジア古文化論攷２』中国書店.
上田龍児2012「北部九州における古墳出土の新羅土器―６・７世紀を中心に―」『九州古文化研究会・七世紀史研究会発表資料』.
大野城市教育委員会1980『牛頸平田窯跡―Ｄ地点―福岡県大野城市大字牛頸字平田所在窯跡調査報告』、大野城市文化財調査報告書第５集.
大野城市教育委員会2008『牛頸窯跡群―総括報告書Ｉ―』
小田富士雄1978「対馬・北部九州発見の新羅系陶質土器」『古文化談叢』５.
小田富士雄1980「対馬・壱岐の古墳文化」『東アジアにおける日本古代史講座２』、学生社.
小田富士雄1988「対馬・北部九州発見の新羅土器」『古墳化談叢』19.
小田富士雄2012「古墳時代の北部九州と壱岐島・序説」『巨大古墳の時代 東アジアにおける壱岐古墳群の位置』、壱岐市教育委員会.
小田富士雄・下原幸裕2006「須恵器―双六古墳から壱岐島の須恵器へ―」『双六古墳』、壱岐市文化財報告書第７集.
尾上博一2003「壱岐・対馬および長崎県の古墳の様相」『前方後円墳周縁域における古墳時代社会の多様性』、九州前方後円墳研究会.
上対馬町教育委員会1984『コフノ隈遺跡』、上対馬町文化財調査報告書第１集.
蒲原宏行1995「肥前（壱岐・対馬）」『九州における古墳時代首長墓の動向』、九州考古学会・宮崎考古学会合同学会実行委員会.
川口洋平2012a「壱岐古墳群の歴史的意義」細井浩志編『古代壱岐島の世界』、高志書院.
川口洋平2012b「古代海域世界と壱岐」細井浩志編『古代壱岐島の世界』、高志書院.
木本雅康2012細井浩志編「古代壱岐島の歴史地理」『古代壱岐島の世界』、高志書院.
洪潽植2006「壱岐の新羅土器」『双六古墳』、壱岐市文化財報告書第７集.
洪潽植2012「６世紀～７世紀前半の嶺南地域と壱岐の交流」『巨大古墳の時代 東アジアにおける壱岐古墳群の位置』、壱岐市教育委員会.
小嶋篤2009「第５章 考察 １節 長者の隈古墳石室の検討」『長者の隈古墳 若杉今里窯跡』、福岡大学考古学研

究室調査報告第８冊.
小嶋篤2012「墓制と領域―胸肩君一族の足跡―」『九州歴史資料館研究論集』37.
小嶋篤2015「古墳時代後期の埋葬施設と墳丘」『古墳時代の地域間交流３』、九州前方後円墳研究会.
定森秀夫2015『朝鮮三国時代陶質土器の研究』、六一書房.
重藤輝行1999「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』、九州前方後円墳研究会.
重藤輝行2008「玄界灘沿岸地域の後期古墳」『後期古墳の再検討』、九州前方後円墳研究会.
下原幸裕2006『西日本の終末期古墳』、中国書店.
新吉富村教育委員会1995『照日遺跡群 福岡県築上郡新吉富村大字安雲所在窯跡群等の調査』、新吉富村文化財調査報告書第９集.
杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』８.
関義則1986「古墳時代後期鉄鏃の分類と編年」『日本古代文化研究』３.
高野晋司2012「壱岐嶋分寺の平城宮式瓦」細井浩志編『古代壱岐島の世界』、高志書院.
竹中哲朗2012「対馬・壱岐における古墳」細井浩志編『古代壱岐島の世界』、高志書院.
田中聡一2007「壱岐島の古墳」『西海考古』７.
田中聡一2009「終末期古墳の再検討 壱岐島」『終末期古墳の再検討』、九州前方後円墳研究会.
田中聡一2012a「壱岐古墳群について」『巨大古墳の時代 東アジアにおける壱岐古墳群の位置』、壱岐市教育委員会.
田中聡一2012b「壱岐島における後・終末期古墳の動向」細井浩志編『古代壱岐島の世界』、高志書院.
田中聡一2012c「壱岐島・対馬島の諸勢力と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』、九州前方後円墳研究会.
辻田淳一郎2011a「小戸１号墳」『新修 福岡市史 資料編 考古３』、福岡市
辻田淳一郎2011b「博多湾沿岸地域の古墳時代後期社会―小戸１号墳の調査成果から―」『新修 福岡市史 資料編 考古３』、福岡市.
辻田淳一郎2012「雄略朝から磐井の乱に至る諸変動」『日本考古学協会2012年度福岡大会 研究発表資料集』日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会.
辻田淳一郎2013「古墳時代の集落と那津官家」『新修 福岡市史 特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』、福岡市.
辻田淳一郎2015「鉄製刀剣・鉾」『山の神古墳の研究―「雄略朝」期前後における地域社会と人制に関する考古学的研究：北部九州を中心に―』、九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室.
辻田淳一郎・片多雅樹2016「長崎県壱岐市・掛木古墳出土の鏡について」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』６.
寺井誠2012a「６・７世紀の北部九州出土朝鮮半島系土器と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』、九州前方後円墳研究会.
寺井誠2012b「白村江前後の難波と筑紫―朝鮮半島から搬入された土器の検討を中心に―」『日本考古学協会2012年度福岡大会 研究発表資料集』日本考古学協会2012年度福岡大会実行委員会.
長崎県教育委員会1992『県内古墳詳細分布調査報告書』、長崎県文化財調査報告書第106集.
長崎県教育委員会2000『県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅲ』、長崎県文化財調査報告書第156集.
奈良文化財研究所1976a『平城宮発掘調査報告Ⅶ』、奈良文化財研究所学報第26冊.
奈良文化財研究所1976b『飛鳥・藤原宮発掘調査概報６』、奈良文化財研究所.
奈良文化財研究所1978a『平城宮発掘調査報告Ⅸ』、奈良文化財研究所学報第34冊.
奈良文化財研究所1978b『飛鳥・藤原宮発掘調査概報８』、奈良文化財研究所.
奈良文化財研究所2005『畿内産暗文土師器関連資料Ⅰ』、奈良文化財研究所史料第72冊.
西谷正1984「九州出土の朝鮮産陶質土器について」『九州文化史研究所紀要』29.
西弘海1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』.
林部均1986「東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学雑誌』72-1.
林部均1992a「律令国家と畿内産土師器―飛鳥・奈良時代の東日本と西日本」『考古学雑誌』77-4.
林部均1992b「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学研究』39-3.
広瀬和雄2010「壱岐島の後・終末期古墳の歴史的意義―６・７世紀の外交と『国境』―」『国立歴史民俗博物館研究報告』158.
深谷淳2008「金銅装倭系大刀の変遷」『日本考古学』26.
福田匡朗2016「国越古墳の被葬者について」『考古学は科学か―田中良之先生追悼論文集―』、田中良之先生追悼論文集刊行会.

藤田和裕1998「長崎県の古墳文化」『原始・古代の長崎県 通史編』、長崎県教育委員会.
堀江潔2012a「壱岐古墳群造営の歴史的背景―文献史料からみた６～７世紀の東アジア情勢と壱岐―」『巨大古墳の時代 東アジアにおける壱岐古墳群の位置』、壱岐市教育委員会.
堀江潔2012b「壱岐島の国造について」細井浩志編『古代壱岐島の世界』、高志書院.
堀江潔2012c「継体朝の対外交渉と壱岐島」細井浩志編『古代壱岐島の世界』、高志書院.
細井浩志編2012『古代壱岐島の世界』、高志書院.
宮崎貴夫1992「壱岐」『前方後円墳集成 九州編』、山川出版社.
桃崎祐輔2010「九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦？還暦！―武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集―』、武末純一先生還暦記念事業会.
森公章2006『東アジアの動乱と倭国』、吉川弘文館.
森公章2011「東アジア史の中の古墳時代」『古墳時代の考古学１ 古墳時代史の枠組み』、同成社.
柳沢一男1975「北部九州における初期横穴式石室の展開―平面図形と尺度について―」『九州考古学の諸問題』、東出版.
弓場紀知2006「壱岐双六古墳出土の白釉緑彩円文碗―その年代と中国陶磁史上での位置づけ―」『双六古墳』、壱岐市文化財報告書第７集.
吉村靖徳2000「北部九州における三室構造横穴式石室の諸相」『古文化談叢』45.

表２　妙泉寺１号墳出土土器類観察表

図番号	挿図番号	ラベル・注記	器種	器高［cm］	口径（：復元径）［cm］	底部径（：復元径）［cm］	胴部最大幅［cm］	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	器面調整 外　面	器面調整 内　面	備考
図34	42	IP20	須恵器 蓋	5.05	14.75			HueN6/ 灰	HueN6/ 灰	0.5～2mm 程度の白色の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	不定方向ナデ	
図34	43	IP2，P1	須恵器 蓋	4.7	14.3			HueN5/ 灰	Hue7.5Y6/1灰	粗い砂粒を少量含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図34	44	IP3，IP4	須恵器 蓋	4.9	14.6			Hue10Y6/1灰	Hue10Y6/1灰	1～2mm 程度の砂粒を少量含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	不定方向ナデ	
図34	45	IP5	須恵器 蓋	5.4	14.9			HueN8/ 灰白	HueN6/ 灰	1～4mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転横ナデ	
図34	46	IP24　7/29	須恵器 蓋	5.2	14.8			Hue5Y7/1灰白	Hue2.5Y6/3にぶい黄	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図34	47	IP8	須恵器 蓋	4.95	15.3			Hue5Y6/9灰	Hue2.5Y6/1黄灰	0.5～1.5mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図34	48	P6，7	須恵器 蓋	5.3	14.7			Hue7.5Y5/1灰	Hue7.5Y5/1灰7	0.1～4mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	左回転
図34	49	IP13	須恵器 蓋	5.45	14.7			HueN6/ 灰	HueN6/ 灰	0.6～1mm 程度の白色の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図34	50	IP14	須恵器 蓋	4.4	14.3			Hue5Y6/1灰	Hue2.5Y6/1黄灰	0.5～1.5mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図34	51	IP21	須恵器 蓋	4.6	14.8			Hue2.5Y5/1黄灰	Hue5Y5/1灰	５mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図34	52	No.1 P5 7/31	須恵器 蓋	3.3	9.8			Hue5Y6/1灰	Hue5Y6/1灰	1～2mm 程度の砂粒、4mm 程度の砂礫少量を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	不定方向ナデ	
図34	53	No.1 P5	須恵器 蓋	3.6	9.5			Hue10Y6/1灰	Hue10Y6/1灰	1mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	不定方向ナデ	天井部に切り離し痕
図34	54	IP11	須恵器 蓋	4.8	14.4			Hue7.5Y6/1灰	Hue5Y6/1灰	砂粒を少量含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図34	55	IP17	須恵器 蓋	5.0	13.4			Hue5Y6/1灰	HueN6/ 灰	1～2mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図34	56	(IP2，P1?) (IP27?)	須恵器 坏身	5.0	12.9			Hue10Y6/1灰	Hue5Y6/1灰	粗い砂粒を少量含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図34	57	IP3，IP4	須恵器 坏身	4.6	13.0			Hue10Y6/1灰	Hue10Y6/1灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	不定方向ナデ	
図34	58	IP23	須恵器 坏身	5.0	13.1			Hue5PB6/1青灰～ N4/ 灰	Hue5PB6/1青灰～ N4/ 灰	1～4mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図34	59	P6，7	須恵器 坏身	5.0	12.1			HueN6/ 灰	HueN6/ 灰	0.1～3.8mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	左回転
図34	60	IP18	須恵器 坏身	5.0	12.1			HueN5/ 灰	HueN6/ 灰	0.5～2mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	外面中央付近に5.0mm程の白色粒
図34	61	IP19	須恵器 坏身	4.6	13.5			Hue5Y6/1灰	Hue5Y6/1灰	1～2mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図34	62	IP25	須恵器 坏身	5.2	11.6			HueN5/ 灰	HueN6/ 灰	0.5～1.5mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	不定方向ナデ	
図34	63	MSJ IP8	須恵器 坏身	5.0	12.6			Hue7.5Y6/1灰	Hue7.5Y6/1灰	1～2mm 程度の砂粒をまばらに含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図34	64	IP10	須恵器 坏身	4.4	12.0			Hue5Y5/1灰	Hue5Y7/1灰白	砂粒を少量含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	不定方向ナデ	
図34	65	IP12	須恵器 坏身	5.1	11.3			Hue10Y7/1灰白	Hue10Y7/1灰白	1～2mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図34	66	IP27	須恵器 坏身	4.9	12.3			Hue5Y6/1灰	Hue2.5YR5/4にぶい赤褐	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図34	67	IP16	須恵器 坏身	4.6	11.6			Hue2.5Y6/1黄灰	HueN6/ 灰	4mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図35	68	MSJ1	須恵器 提瓶	20.5	8.6		17.7	Hue10R6/1赤灰～10YR6/4にぶい黄橙	Hue10YR6/4にぶい黄橙	1～5mm 程度の砂粒を多く含む	良好	指ナデ 回転横ナデ	ナデ	
図35	69		須恵器 高坏	15.1	11.5	9.2		Hue5Y7/2灰白～5Y7/4浅黄	Hue5Y7/2灰白～5Y7/4浅黄	1mm 程度の白色砂粒を多く含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	内部自然釉。 ４ヶ所透孔口縁部付近に羽状文。
図35	70	1号 P1	須恵器 甕	12.6 （残存高）	不明			Hue2.5Y4/1灰	Hue2.5Y4/1灰	1～2mm 程度の砂粒を少量含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ 指おさえ同心円状の当て具痕	胴部タタキ調整
図35	71	MSJ1号 P2	弥生土器器台（高杯）	6.3 （残存高）				Hue2.5YR7/8橙	Hue2.5Y7/2灰黄	1～2mm 程度の石英砂粒を多く含む	良好	ナデ	ナデ	
図35	72	MSJ 入口付近	須恵器 甕	18.4 （残存高）				HueN6/ 灰	HueN7/ 灰白	1～2mm 程度の砂粒を少量含む	良好	格子目状タタキ	同心円状当て具痕	

表３　妙泉寺１号墳出土ガラス小玉観察表

図番号	挿図番号	器　種	色　調	径［mm］	全長［mm］	孔径［mm］	備　考
図35	73	ガラス小玉	青紺色	7.90	4.80	1.50	引き伸ばし
図35	74	ガラス小玉	青紺色	7.30	5.10	1.30	引き伸ばし
図35	75	ガラス小玉	青紺色	3.90	2.10	1.00	引き伸ばし
図35	76	ガラス小玉	青紺色	3.80	2.20	1.00	引き伸ばし

表４　妙泉寺７号墳出土土器類観察表

図番号	挿図番号	ラベル・注記	器種	器高［cm］	口径（：復元径）［cm］	底部径（：復元径）［cm］	胴部最大幅［cm］	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	器面調整 外　面	器面調整 内　面	備考
図45	77	No.7 P3	須恵器 蓋	3.3（残存高）	（11.6）			Hue10YR5/1褐灰	Hue2.5YR5/2灰赤	0.5～1mm 程度の白色、橙色の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	ヘラ記号有り
図45	78	No.7 P4 7/31	須恵器 蓋	3.2	9.1			Hue10Y5/1灰	Hue10Y5/1灰	1mm 程度の砂粒を少量含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	上部に指で押さえた痕あり
図45	79	No.7 P3	須恵器 蓋	2.2（残存高）	（15.0）			Hue5Y6/1灰～2.5Y5/1黄灰	HueN6/ 灰～10YR5/1褐灰	0.5～1mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図45	80	No.7 P9	須恵器 蓋	2.9	9.3			HueN4/ 灰	Hue2.5YR4/1 赤灰	1mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	ヘラ記号有り
図45	81	No.7 P3	須恵器 蓋	2.6（残存高）	（13.4）			Hue5Y6/1灰	Hue5Y6/1灰	0.5mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	外面一部に鉄サビ付着
図45	82	No.7 P6 7/31	須恵器 蓋	2.7	9.2			Hue10G6/1緑灰	Hue10G6/1緑灰	1mm 程度の砂粒を多く含む	良好	手持ちヘラケズリ→指ナデ 回転横ナデ	回転横ナデ 指ナデ	左回転
図45	83	No.7 玄室閾石上遊離	須恵器 蓋	2.5	（14.6）			Hue2.5Y6/1黄灰	Hue2.5Y7/1灰白	砂粒を少量含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	つまみは貼り付けによる接合
図45	84	I-19 鉄器内混入	須恵器 蓋	1.9（残存高）	—			HueN5/ 灰	HueN3/ 暗灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	体部にヘラによる斜線文半島系の可能性あり
図45	85	妙泉寺7 遊離土 7/29	須恵器 蓋	1.97	14.85			Hue10BG5/1青灰	Hue10G6/1緑灰	緻密	良好	ヘラケズリ 回転ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	把手の取れた痕有り
図45	86	No.7 玄室	須恵器 坏身	4.65（残存高）	（14.0）			HueN5/ 灰	HueN5/ 灰	0.5～2mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図45	87	No.7	須恵器 坏身	4.2	（9.6）	（6.75）		Hue5B6/1青灰	HueN5/ 灰	1～3mm の白色砂粒を多く含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図46	88	No.7 P10 7/31	須恵器 坏身	4.4	9.5			Hue5Y6/1灰	Hue5Y6/1灰	1mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 指による不定方向ナデ"	右回転
図46	89	No.7 遊離土 7/29	須恵器 坏身	4.6	（12.2）	（8.4）		Hue2.5Y7/1灰白	Hue5Y5/1灰	緻密	良好	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	
図46	90	No.7 P1 7/31	土師器 蓋	5.0（残存高）	（15.0）			Hue5YR7/6橙	Hue5YR7/6橙	緻密	良好	手持ちヘラケズリ ナデ→指おさえ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図46	91	No.7	土師器 小皿	1.2	（8.0）	（6.5）		Hue7.5YR6/6橙	Hue7.5YR6/6橙	1～3mm 程度の砂粒を多く含む	良好	回転横ナデ 回転糸切り痕	回転横ナデ	
図46	92	No.7 P1 7/31	須恵器 瓶	12.4（残存高）	—	8.2	15.6	Hue7.5Y4/1灰	Hue7.5Y4/1灰	0.5～1mm 程度の砂粒をまばらに含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ 不定方向ナデ	回転横ナデ	
図46	93	No.7 P7 7/31	土師器 高坏	8.2	11.6	9.7		Hue5YR7/8橙	Hue5YR7/8橙	緻密	良好	ミガキ ナデ	ミガキ ナデ	表面のミガキ摩滅
図46	94	No.7 P2 7/31	須恵器 脚付壺	19.1（残存高）		10.8	18.8	Hue2.5Y7/2灰黄色	Hue2.5Y7/2灰黄色	1～2mm 程度の砂粒、4mm 程度の砂礫少量を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	底部付近に焼成前穿孔３方向に有り。自然釉付着
図46	95	No.7 玄室1 陶器片 7/29	青磁 椀	7.4	（16.4）	5.8		釉色：Hue10Y5/2オリーブ灰	釉色：Hue10Y5/2オリーブ灰～Hue7.5Y7/3浅黄 素地色：Hue5YR6/4にぶい橙	非常に緻密	良好	回転横ナデ、後に施釉 回転ヘラケズリ	回転横ナデ、後に施釉 釉剝ぎ 施釉	見込み部に蛇の目釉剝ぎあり同安窯系か
図46	96	No.7 前室遊離	須恵器 甕	5.4（残存高）				Hue5YR6/1褐灰	Hue5YR6/1褐灰	1mm 程度の砂粒を少量含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ 同心円状の当て具痕	
図46	97	No.7 前室遊離	須恵器 甕	5.5（残存高）				Hue7.5YR7/4にぶい橙	Hue7.5YR7/4にぶい橙	1mm 程度の砂粒を少量含む	良好	平行タタキ	回転横ナデ 同心円状の当て具痕	
図46	98	No.7 石室床石	石室床石											玄武岩
図46	99	No.7 P8 7/2	土師器 埦	6.5（残存高）				Hue2.5YR6/8橙	Hue2.5YR6/8橙	1～2mm 程度の砂粒を含む	良好	ミガキ 所々摩滅	板状工具ナデ	

表５　妙泉寺７号墳出土鉄器類観察表

図版番号	挿図番号	ラベルの注記	器種	全長／残存長(cm)	刃部			頸部			茎部			最大幅(cm)	最小幅(cm)	鉄棒幅(cm)	刀身厚(cm)	刀装具厚(cm)	厚さ(cm)	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)							
図47	100	妙泉寺 No.7 I7 剣 or 刀の柄 7/31	刀装具	10.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.6	2.1	—	1.3	0.6	—	
図47	101	妙泉寺 No.7 I7 剣 or 刀の柄 7/31	刀装具	17.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	2.8	—	0.7	2.1	—	
図47	102	妙泉寺 No.7 詳細不明	鉄剣	41.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.4	1.9	—	0.6	—	—	
図47	103	I-21 8/4 捩り環頭	捩り環	7.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.4	—	0.9	—	—	—	
図48	104	I-16	鉄鏃	14.5	2.3	0.7	0.25	10.35	0.4	0.25	1.85	0.35	0.3	—	—	—	—	—	—	
図48	105	I-12 8/4	鉄鏃	13.5	1.4	0.7	0.3	10.6	0.4	0.3	1.5	0.4	0.3	—	—	—	—	—	—	
図48	106	I-21 8/4	鉄鏃	11.8	2	0.8	0.4	9.8	0.5	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図48	107	I-11 8/4	鉄鏃	9.15	1.75	0.95	0.3	7.4	0.6	0.45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図48	108	I-15	鉄鏃	6.5	2	1.1	0.5	4.5	0.6	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図48	109	I-19ノ下	鉄鏃	6.7	2.1	0.9	0.4	4.6	0.5	0.4～0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図48	110	I-14	鉄鏃	6.5	1.7	1	0.3	4.8	0.4	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図48	111	I-18	鉄鏃	12.3	—	0.6	0.3	—	0.45	0.4	2.5	0.3	0.4	—	—	—	—	—	—	
図48	112	I-18	鉄鏃	8.5	2	—	—	5.3	0.6	0.3	1.5	0.5	0.3	—	—	—	—	—	—	
図48	113	I-11 8/4	鉄鏃	7.5	4.9	1.2	0.4	2	0.65	0.3	0.6	0.4	0.3	—	—	—	—	—	—	
図48	114	I-19ノ下	鉄鏃	4.65	2.45	0.5	0.3	2.2	0.35	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図48	115	I-11	鉄鏃	10	1.4	0.9	0.2	8.6	0.6	0.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図48	116	7号墳 I-19	鉄鏃	8.85	—	—	—	6.6	0.5	0.5	2.25	0.55	0.4	—	—	—	—	—	—	
図48	117	I-19 7号墳	鉄鏃	7.7	—	—	—	6.5	0.5	0.3	1.2	0.4	0.25	—	—	—	—	—	—	
図48	118	I-16	鉄鏃	6.45	—	—	—	4.45	0.55	0.2	2	0.3	0.2	—	—	—	—	—	—	
図48	119	7号墳 I-19	鉄鏃	7.05	—	—	—	3.5	0.65	0.55	3.55	0.45	0.4	—	—	—	—	—	—	
図48	120	I-19	鉄鏃	5.7	—	—	—	2.2	0.5	0.3	3.5	0.7	0.25	—	—	—	—	—	—	
図48	121	I-16	鉄鏃	8.8	—	—	—	2.6	0.6	0.3	6.2	0.45	0.25	—	—	—	—	—	—	
図48	122	妙泉寺古墳群 No.7 I8 7/31	鉄鏃	7.3				4	0.65	0.4	3.1	0.45	0.45	—	—	—	—	—	—	
図48	123	I-14	鉄鏃	4.3	—	—	—	2.5	0.6	0.4	1.8	0.5	0.3	—	—	—	—	—	—	
図48	124	I-19 7号墳	鉄鏃	3.8	—	—	—	2.3	0.7	0.4	1.5	0.45	0.45	—	—	—	—	—	—	
図48	125	I-19	鉄鏃	3.1	—	—	—	—	—	—	3.1	0.6	0.6	—	—	—	—	—	—	
図48	126	I-21 8/4	鉄鏃	2.2	—	—	—	—	—	—	2.2	0.4	0.3	—	—	—	—	—	—	
図49	127		鉄鏃	8.7	7.45	1.4	0.2	—	—	—	0.8	0.45	0.5	—	—	—	—	—	—	
図49	128	I-18	鉄鏃	8.9	1.7	—	—	3	0.8	0.4	4.2	0.55	0.3	—	—	—	—	—	—	
図49	129	I-18	鉄鏃	9.8	2.2	1.2	0.2	7.6	0.5	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図49	130	I-21 8/4	鉄鏃	6	3.1	1.1	0.3	2.9	0.7	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図49	131	I-11 8/4	鉄鏃	11.6	4.4	3.3	0.2	4.7	0.7	0.5	3.8	0.45	0.4	—	—	—	—	—	—	
図49	132		鉄鏃	7.5	7.5	5.8	0.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図49	133	I-16	鉄鏃	6.15	0.8	—	—	5.35	0.65	0.35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図49	134	I-16	鉄鏃	2.45	1.3	1.25	0.25	1.15	0.55	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図50	135	妙泉寺古墳群 No.7 前室東壁 馬具 8/1	兵庫鎖	14.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.9	2.55	1	—	—	—	
図50	136	妙泉寺7or9 I5 ？馬具 7/ ○	兵庫鎖	7.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.75	1.5	0.6	—	—	—	
図50	137	妙泉寺古墳群 No.7 前室東壁 馬具 8/1	兵庫鎖	9.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.3	2.9	1	—	—	—	
図50	138	妙泉寺7or9 I5 ？ 馬具 7/ ○	兵庫鎖	11.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.9	1.75	0.9	—	—	—	
図51	139	1	引手金具	13.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.7	1.35	0.6	—	—	—	
図51	140	妙泉寺7号墳 I-19 下	鉸具	8.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.2	4	0.8	—	—	—	
図51	141	妙泉寺古墳群 No.7 I-3 7/31	銜	7.45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	
図51	142	妙泉古墳群 No.7 I8 7/31	飾金具 or 辻金具	4.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.65	—	—	—	—	—	
図52	143	I-19下	鉄鎌	13.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.5	1.5	—	—	—	0.2	
図52	144	I-20	鉄鎌	9.25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.3	1.3	—	—	—	0.35	
図52	145	I-14	鉄鎌	5.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.2	2.8	—	—	—	0.25	
図52	146	I-21 8/4	U字形鋤先	17.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	2.15	—	—	—	1.4	
図52	147	妙泉寺古墳群 No.7 前室東壁側 鉄器 8/2	U字形鋤先	4.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.4	—	—	—	—	0.25	
図53	148	妙泉寺古墳群 No.7 I8 7/31	袋状鉄斧	9.25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.7	3.55	—	—	—	0.8	
図53	149	妙泉寺7号墳 I19	袋状鉄斧	5.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.1	2.4	—	—	—	0.5	
図53	150	妙泉寺7号墳 I19	袋状鉄斧	5.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.9	2.2	—	—	—	0.5	
図53	151	妙泉寺7号墳 I-19	袋状鉄斧	4.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.2	4.4	—	—	—	0.2	
図53	152	妙泉寺古墳群 No.7 I8 7/31	袋状鉄斧	4.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.1	—	—	—	—	0.25	
図53	153	I-14	刀子	4.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.3	0.45	—	—	—	0.4	
図53	154	妙泉寺7号墳 I-4	鉋	6.95	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7.5	0.5	—	—	—	0.4	
図53	155	番号なし B 番外土器の下⑨	不明鉄器	5.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.4	—	—	—	—	0.2	

表6　鬼の窟古墳出土土器類観察表

図番号	挿図番号	ラベル・注記	器種	器高[cm]	口径(:復元径)[cm]	底部径(:復元径)[cm]	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	器面調整 外面	器面調整 内面	備考
図63	156	国分鬼第2前室遊離	須恵器 蓋	4	14.1		HueN4/ 灰	HueN3/ 暗灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	157	OI 羨	須恵器 蓋		13.2		Hue2.5Y8/2灰白	Hue10YR8/2灰白	緻密	良好	回転ナデ	回転ナデ	
図63	158	OI 第2前室	須恵器 蓋	3.5(残存高)	13.8		HueN6/ 灰	Hue5Y6/1灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	159	国鬼羨 P1 28 8/9 30111	須恵器 蓋	3.6	12.2		Hue5Y6/2灰オリーブ	Hue5Y6/1灰	1～4mm 程度の砂礫を少量含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	ヘラ記号あり
図63	160	国分鬼第2前室遊離 28 8/7	須恵器 蓋	3.4(残存高)	11.0		Hue5Y7/1灰白	Hue5Y7/1灰白	非常に緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	内外面に所々赤色の付着物あり
図63	161	OI 羨 P10	須恵器 蓋		11.4		Hue2.5Y5/2暗灰黄	Hue2.5Y6/1黄灰	緻密	良好	回転ナデ	回転ナデ	
図63	162	国分鬼第2前室遊離 28 8/7	須恵器 蓋	3.7	13.6		HueN3/ 暗灰		緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	163	国分鬼第2前室遊離 28 8/7 番号なしB	須恵器 蓋	3.6 (残存高)	(12.5)		Hue5B4/1暗青灰	Hue5B4/1暗青灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	164	国鬼羨道 P3（S28.8.9）	須恵器 蓋	2.7	10.4		HueN7/ 灰白	Hue2.5Y6/1黄灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	ヘラ記号あり
図63	165	国鬼羨 P9 28.8.9	須恵器 蓋	2.8	10.6		HueN7/ 灰白	HueN7/ 灰白	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	焼成時灰がガラス化。上部一部剥離。ヘラ記号あり
図63	166	国分鬼第2前室遊離南部屋 28.8.9 30111	須恵器 蓋	3.6	8.9		Hue7.5YR4/2灰黄褐	Hue2.5YR4/2灰褐	1～4mm 程度の砂礫を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ 指おさえ	
図63	167	国鬼羨 P6 28.8.9 30111	須恵器 蓋	2.8	8.5		HueN6/ 灰	HueN6/ 灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	つまみはりつけ
図63	168	OI 羨	須恵器 蓋		9.0		HueN5/ 灰	HueN5/ 灰	1mm 程度の砂粒を少量含む	良好	ヘラケズリ	ナデ	
図63	169	国鬼羨 P8	須恵器 蓋	1.85(残存高)	10.3		HueN5/ 灰		緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	ナデ	
図63	170	国鬼羨道 P4 28.8.9 30111	須恵器 蓋	2.8	10.8		Hue5PB6/1青灰	Hue5PB6/1青灰	1mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図63	171	国分鬼第2前室遊離 28 8/7	須恵器 蓋	3.1	10.8		HueN5/ 灰	HueN5/ 灰	0.1mm 程度の白色砂粒を含む。緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 板ナデ	外面に自然釉あり。つまみはりつけ
図63	172	国鬼羨 P5	須恵器 蓋	3.3	10.6		Hue10Y5/1灰		1～2mm 程度の砂をまばらに含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図63	173	OI 羨	須恵器 坏身		10.8		Hue2.5Y7/1灰白	Hue2.5Y8/2灰白	緻密	良好	回転ナデ	回転ナデ	
図63	174	国分鬼第2前室遊離 28 8/7 番号なしB	須恵器 坏身	2.2(残存高)	(9.6)		Hue5B4/1暗青灰	Hue5B4/1暗青灰	1mm 程度の砂粒を多く含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	175	国鬼羨 P6 28.8.9 30111	須恵器 坏身	3.9	12.3		Hue2.5YR4/3にぶい赤褐	Hue5R3/1暗赤灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	176	国分鬼第2前室遊離	須恵器 坏身	3.6	(9.5)		Hue5Y6/1灰	Hue7.5Y6/1灰	1mm 程度の砂粒を少量含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	177	国鬼羨道遊離 28 8/7 番号なしB	須恵器 坏身	3.5	9.7		Hue10YR5/1褐灰	HueN5/ 灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	178	国分鬼羨道 P10 28.8.9	須恵器 坏身	3.0(残存高)	(9.7)		Hue5PB5/1青灰	Hue5RP4/1青紫灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	179	国分鬼第2前室遊離 28 8/7 番号なしB	須恵器 坏身	2.2(残存高)	(9.4)		Hue5BG6/1青灰	Hue5BG5/1青灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	180	国鬼羨 P7 28.8.9	須恵器 坏身	2.9(残存高)	(11.0)		Hue10GY5/1緑灰	Hue10GY5/1緑灰	緻密	良好	回転ナデ	ナデ	
図63	181	国鬼羨 P10 28.8.9	須恵器 坏身	3.3	(9.7)		Hue2.5Y4/1黄灰	Hue5RP3/1暗紫灰	1mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転横ナデ 指おさえ	回転横ナデ	ヘラ記号？
図63	182	国分鬼第2前室遊離	須恵器 坏身	3.0(残存高)		6.4	Hue2.5Y8/1灰白	Hue2.5Y8/1灰白	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	183	国分鬼第2前室遊離 28 8/7 30111	須恵器 坏身	1.7(残存高)			Hue10YR4/3にぶい黄褐	Hue10YR6/3にぶい黄橙	1mm 程度の砂粒を少量含む	不良	回転横ナデ	不定方向ナデ	ヘラ記号
図63	184	国鬼 P10 28.8.9 30111	須恵器 坏身	3.0(残存高)	(11.7)		HueN 5/0灰	HueN 5/0灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	185	国分鬼第2前室遊離 28.8.7 30111	須恵器 坏身	3.2(残存高)	(9.0)		HueN2/0黒	HueN 2/0黒	1mm 程度の砂粒を少量含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	186	国分鬼第2前室遊離 28 8/7 番号なしB	須恵器 坏身	3.2(残存高)	9.4		Hue7.5Y5/1灰	Hue7.5Y5/1灰	1～5mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	187	OI 羨	須恵器 坏身		10.1		Hue5Y6/1灰	Hue7.5Y5/1灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	188	国分鬼第2前室遊離 28.8.7 30111	須恵器 坏身	3.2(残存高)	(9.8)		Hue10BG5/1青灰	Hue10BG5/1青灰	1～2mm 程度の砂粒を含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図63	189	国鬼羨 P2 28.8.9	須恵器 坏身	3.3	9.1		Hue2.5Y7/1灰白	Hue2.5Y7/1灰白	1mm 程度の砂粒を少量含む。緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 指による不定方向ナデ	
図63	190	国分鬼第2前室遊離 28 8/7	須恵器 坏身	3.4	9.4		Hue 6/1青灰	Hue 6/1青灰	1～3mm 程度の白色砂粒を多く含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図63	191	国分鬼第2前室遊離 28 8/7 番号なしB	須恵器 坏身	3.1	9.8		Hue5/ 灰	Hue5/ 灰	1mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図63	192	OI 羨 P7	須恵器 坏身	4.1	10.0		Hue10Y6/1灰	Hue10Y6/1灰	0.5～2mm 程度の白色砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	
図64	193	国分鬼第2前室遊離 28.8.7 30111	須恵器 蓋	4.75	14.0		Hue2.5GY 4/1暗オリーブ灰	Hue2.5GY5/1オリーブ灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図64	194	国分鬼羨道 28 8/9 番号なしB	陶質土器 蓋	2.45(残存高)	10.6		Hue2.5GY2/1黒	HueN4/ 灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	ヘラ記号？
図64	195	国分鬼第2前室遊離 28 8/7 30111	須恵器 甕	3.6(残存高)	9.0		Hue5PB4/1暗青灰	Hue5PB4/1暗青灰	1～4mm の砂礫を含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図64	196	国分鬼第2前室遊離	須恵器 甕	5.4(残存高)			HueN2/ 黒	HueN2/ 黒	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	底部は粘土板貼付のちナデ
図64	197	国分鬼第2前室遊離 28.8.7 30111	陶質土器 高杯	3.7(残存高)	(9.4)		HueN4/ 灰	HueN4/ 灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	脚部より上部分が全体的に剥落
図64	198	国分鬼第2前室遊離 28 8/7	陶質土器 瓶	1.4(残存高)	9.4		HueN1.5/ 黒	HueN1/ 黒	緻密	良好	回転横ナデ	ナデ	
図64	199	国分鬼第2前室遊離 28	陶質土器 器蓋	2.9	10.8		Hue5Y4/1灰	HueN4/ 灰	1mm 程度の砂粒をわずかに含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	自然釉が付着
図64	200	国分鬼第2前室遊離 28.8.7	陶質土器 器蓋	1.3(残存高)			HueN2/ 黒	HueN4/ 灰	1mm 程度の白色砂粒を少量含む	良好	回転ヘラケズリ	回転横ナデ	外面にヘラ記号のような刻線
図64	201	国分鬼第2前室遊離 28 8/7 30111	陶質土器 器蓋	2.0(残存高)			Hue7.5Y5/1灰	Hue5Y5/1灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	外面に釉薬あり
図64	202	国分鬼第2前室遊離 28 8.7 30111	須恵器 平瓶頭部片	5.5(残存高)	(7.8)		Hue2.5Y2/1黒	Hue5Y6/1灰	1mm 程度の砂粒を含む	良好	カキ目	回転横ナデ	
図64	203	OI 羨 P7	須恵器 壺	4.4(残存高)			Hue5Y7/1灰白	Hue5Y7/1灰白	緻密	良好	ナデ	回転横ナデ	
図64	204	国分鬼第2前室遊離 番号なしB	陶質土器 鉢	3.9	7.0		Hue10G4暗緑灰	Hue5G4暗緑灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図64	205	国分鬼第2前室遊離 28.8.7	須恵器 埦	6.7(残存高)	14.5		HueN3/ 灰	HueN4/ 灰	2～3mm 程度の砂粒を含む	良好	手持ちヘラケズリ 回転横ナデ カキ目	回転横ナデ	ヘラ記号
図64	206	国分鬼第2前室遊離 28 8/7	陶質土器 器蓋	4.8(残存高)			Hue10Y7/1灰白	Hue10Y7/1灰白	緻密	良好	ナデ	回転横ナデ	沈線による文様
図64	207	国分鬼第2前室遊離（？）	土師器 杯				Hue5YR6/6橙	Hue5YR 7/6橙	緻密	良好	ミガキ	ミガキ	
図64	208	国鬼第2前室遊離か？	土師器 杯				Hue2.5YR5/6明赤褐	Hue5YR 5/6明赤褐	緻密	良好	横方向のミガキ	暗文のミガキ	
図64	209	国鬼第2前室遊離	土師器 杯	2.6(残存高)	6.8		Hue2.5YR5/6明赤褐	Hue2.5YR5/6明赤褐	緻密	良好	ミガキ	ミガキ	
図64	210	国鬼羨 P7（土器注記は OI 羨 P10 ？）	須恵器 脚杯壺	7.2(残存高)	19.7		Hue5Y2/1黒	HueN5/ 灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ	回転横ナデ	沈線に挟まれた文様帯あり。一部ミガキに近い光沢を持つ
図64	211	国分鬼第2前室遊離 28 8/7	陶質土器 高台片	1.2(残存高)		10.8	Hue10Y7/1灰白	Hue10Y7/1灰白	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	底部剥離残存。半島系の可能性も
図64	212	国分鬼第2前室遊離 28 8/7	陶質土器 瓶	4.4(残存高)		8.2	Hue5Y7/1灰白	Hue5Y7/1灰白	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	半島系の可能性も
図64	213	国分鬼第2前室遊離 28 8/7 番号なしB	青磁 埦	3.6(残存高)	(11.3)		Hue2.5GY6/1オリーブ灰	Hue2.5GY6/1オリーブ灰	非常に緻密	良好	施釉	施釉	断面色調 HueN 7/灰白 外内面一部に釉薬ハガレあり
図64	214	国鬼羨 P8	須恵器 甕				HueN5/ 灰	HueN7/ 灰白	緻密	良好	タタキ	同心円状当て具痕	

表７　鬼の窟古墳出土鉄器類観察表

図版番号	挿図番号	ラベルの注記	器種	全長／残存長(cm)	刃部 長さ(cm)	刃部 幅（cm）	刃部 厚さ(cm)	頸部 長さ(cm)	頸部 幅（cm）	頸部 厚さ(cm)	茎部 長さ(cm)	茎部 幅（cm）	茎部 厚さ(cm)	最大幅（cm）	最小幅（cm）	鉄棒幅（cm）	備考
図65	215	鬼の窟第二前室28 8/7	不明鉄器	4.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.1	0.8	0.8	
図65	216	鬼の窟第二前室28 8/7	不明鉄器	5.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.7	0.45	0.45	
図65	217	鬼の窟第二前室28 8/7	不明鉄器	3.65	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.7	0.55	0.55	
図65	218	鬼の窟第二前室28 8/7	不明鉄器	2.85	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.25	0.2	0.2	
図65	219	番号なしＢ 国分鬼 渓道遊離28 8/7	捩り環？	3.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.8	
図66	220	仮番号3	鉄鏃	16.05	2.25	0.85	0.25	11.1	0.5	0.5	2.7	0.5	0.5	—	—	—	
図66	221	P4下	鉄鏃	4.05	1.5	0.9	0.4	2.55	0.5	0.4	—	—	—	—	—	—	
図66	222	P4下	鉄鏃	3.3	1.6	0.7	0.25	1.7	0.55	0.4	—	—	—	—	—	—	
図66	223	29	鉄鏃	8.4	1.5	0.7	0.4	6.9	0.5	0.5	—	—	—	—	—	—	
図66	224	5	鉄鏃	4.8	1.6	0.9	0.4	3.2	0.5	0.3	—	—	—	—	—	—	
図66	225	25及びＹ1下	鉄鏃	19.05	2	0.95	0.4	11.3	0.4	0.3	5.75	0.35	0.4	—	—	—	
図66	226	30	鉄鏃	19.9	1.8	1	0.4	11.5	0.6	0.5	6.6	0.4	0.35	—	—	—	
図66	227	31	鉄鏃	16.4	2.1	0.8	0.3	10.7	0.5	0.4	3.6	0.5	0.35	—	—	—	
図66	228	23下	鉄鏃	19.1	2.3	0.85	0.3	10.2	0.45	0.4	6.6	0.4	0.4	—	—	—	
図66	229	32	鉄鏃	14.75	0.95	0.65	0.25	10.9	0.45	0.4	2.9	0.4	0.35	—	—	—	
図66	230	32	鉄鏃	9.7	1.9	0.8	0.35	7.8	0.4	0.35	—	—	—	—	—	—	
図66	231	7下	鉄鏃	8.7	1.8	0.7	0.25	6.9	0.5	0.4	—	—	—	—	—	—	
図66	232	仮番号4	鉄鏃	7.3	0.6	—	—	6.7	0.5	0.25	—	—	—	—	—	—	
図66	233	13下	鉄鏃	9.8	1.7	0.9	0.4	8.1	0.5	0.35	—	—	—	—	—	—	
図66	234	10＋12	鉄鏃	11.2	1.5	0.7	0.4	8.5	0.5	0.5	1.2	0.5	0.5	—	—	—	
図66	235	23下	鉄鏃	11.8	0.8	0.7	0.3	7.3	0.5	0.4	3.7	0.3	0.3	—	—	—	
図66	236	仮番号1　23ノ下	鉄鏃	11.65	1.6	0.8	0.4	10.05	0.5	0.45	—	—	—	—	—	—	
図66	237	10	鉄鏃	7.5	0.7	0.5～0.7	0.3	6.8	0.5～0.6	0.5	—	—	—	—	—	—	
図66	238	24	鉄鏃	2.75	1.35	0.75	0.25	1.1	0.45	0.3	—	—	—	—	—	—	①
図66			鉄鏃	1.3	1.3	0.7	0.25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	② ①と癒着した破片
図66	239	土器の下	鉄鏃	2.25	2.25	0.8	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図66	240	13	鉄鏃	2.1	2.1	0.9	0.45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図66	241	13	鉄鏃	2.85	2.85	0.9	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図67	242	23	鉄鏃	15.8	2.1	0.8	0.3	8.3	0.5	0.35	5.3	0.4	0.4	—	—	—	
図67	243	56・57	鉄鏃	12.7	1.4	0.7	0.3	8.2	0.4	0.3	3.1	0.3	0.35	—	—	—	
図67	244	58	鉄鏃	14.85	2.55	0.85	0.4	10.05	0.35	0.35	2.25	0.3	0.25	—	—	—	
図67	245	59	鉄鏃	10.5	3.2	0.8	0.25	7.3	0.45	0.45	—	—	—	—	—	—	
図67	246	25及びＹ1下	鉄鏃	9.4	3.3	0.75	0.35	6.1	0.4	0.3	—	—	—	—	—	—	
図67	247	I-19	鉄鏃	4.1	2.4	1.1	0.25	1.7	0.5	0.25	—	—	—	—	—	—	
図67	248	I-19	鉄鏃	2.65	2.5	1.2	0.3	0.15	—	—	—	—	—	—	—	—	
図67	249	P4下	鉄鏃	3.3	0.4	0.9	0.3	2.9	0.6	0.4	—	—	—	—	—	—	
図67	250	仮番号31	鉄鏃	7.7	—	0.7	0.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図67	251	16	鉄鏃	6.7	—	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図67	252	15ノ下？	鉄鏃	16.1	—	—	—	10.1	0.4	0.3	6	0.3	0.25	—	—	—	
図67	253	32	鉄鏃	13.4	—	—	—	6	0.55	0.4	7.4	0.3	0.3	—	—	—	
図67	254	13下	鉄鏃	12.3	—	—	—	8.8	0.45	0.35	3.5	0.4	0.4	—	—	—	
図67	255	番外土器の下12	鉄鏃	12.6	—	—	—	7.1	0.4	0.3	5.5	0.3	0.3	—	—	—	
図67	256	19	鉄鏃	10.45	—	—	—	5.25	0.5	0.55	5.2	0.4	0.35	—	—	—	
図67	257	仮番号22	鉄鏃	10.15	—	—	—	8.1	0.5	0.35	—	—	—	—	—	—	
図67	258	15ノ下	鉄鏃	9.8	—	—	—	5.5	0.5～0.7	0.6	4.3	0.3～0.9	0.3～0.6	—	—	—	
図67	259	13下	鉄鏃	11.4	—	—	—	8.9	0.5	0.35	2.5	0.45	0.5	—	—	—	
図67	260	7下	鉄鏃	9.1	—	—	—	4.4	0.5	0.45	4.7	0.4	0.5	—	—	—	
図68	261	17	鉄鏃	7.9	—	—	—	2.8	0.4	0.4	5.1	0.3	0.3	—	—	—	
図68	262	31	鉄鏃	7.45	—	—	—	2.35	0.55	0.4	5.1	0.35	0.35	—	—	—	
図68	263	32	鉄鏃	7.25	—	—	—	1.25	0.5	0.45	6	0.35	0.4	—	—	—	
図68	264	7	鉄鏃	5.9	—	—	—	2.2	0.6	0.6	3.7	0.5	0.45	—	—	—	
図68	265	7下	鉄鏃	6	—	—	—	1	0.45	0.45	5	0.45	0.45	—	—	—	
図68	266	32	鉄鏃	5.5	—	—	—	1.3	0.4	0.45	4.2	0.45	0.4	—	—	—	
図68	267	仮番号1　27	鉄鏃	6.2	—	—	—	0.85	0.75	0.5	5.35	0.6	0.4	—	—	—	
図68	268	13下	鉄鏃	5.2	—	—	—	1	0.5	0.4	4.2	0.4	0.35	—	—	—	
図68	269	仮番号31	鉄鏃	5.85	—	—	—	2.05	0.55	0.4	3.8	0.4	0.4	—	—	—	
図68	270	25-1	鉄鏃	5.4	—	—	—	1.3	0.65	0.35	4.2	0.6	0.3	—	—	—	
図68	271	仮番号15	鉄鏃	4.65	—	—	—	1.45	0.6	0.4	3.2	0.4	0.5	—	—	—	
図68	272	番外土器の下12	鉄鏃	7.4	—	—	—	6.4	0.4	0.4	1	0.4	0.3	—	—	—	
図68	273	13下	鉄鏃	8.8	—	—	—	5.1	0.5	0.4	3.7	0.4	0.3	—	—	—	
図68	274	仮番号15	鉄鏃	6.1	—	—	—	4.1	0.5	0.4	2	0.4	0.4	—	—	—	
図68	275	25及びＹ1下	鉄鏃	7.4	—	—	—	3.6	0.5	0.55	3.8	0.4	0.4	—	—	—	
図68	276	仮番号1　27	鉄鏃	8.2	—	—	—	2.5	0.5	0.4	5.7	0.45	0.45	—	—	—	
図68	277	22	鉄鏃	7.55	—	—	—	3.2	0.65	0.4	4.35	0.4	0.4	—	—	—	
図68	278	7下	鉄鏃	7.6	—	—	—	2.2	0.45	0.35	5.4	0.3	0.3	—	—	—	
図68	279	仮番号1　23ノ下	鉄鏃	8	—	—	—	3.55	0.65	0.6	4.45	0.4	0.45	—	—	—	
図68	280	11	鉄鏃	3.3	—	—	—	1.35	0.5	0.4	1.95	0.45	0.4	—	—	—	
図68	281	P4下	鉄鏃	4	—	—	—	1	—	—	3	0.45	0.35	—	—	—	
図68	282	P4下	鉄鏃	3.1	—	—	—	1.35	0.5	0.4	1.75	0.4	0.3	—	—	—	
図68	283	仮番号4	鉄鏃	2	—	—	—	—	—	—	2	0.35	0.4	—	—	—	
図68	284	22	鉄鏃	2.95	—	—	—	0.8	0.6	0.45	2.15	0.4	0.55	—	—	—	
図68	285	32	鉄鏃	2.75	—	—	—	0.75	0.6	0.4	2	0.35	0.35	—	—	—	
図68	286	32	鉄鏃	3.9	—	—	—	2.5	0.5	0.35	1.4	0.35	0.3	—	—	—	
図68	287	P4下	鉄鏃	10.1	—	—	—	4	0.6	0.4	6.1	0.4	0.35	—	—	—	
図68	288	19	鉄鏃	8.3	—	—	—	4.35	0.45	0.5	3.95	0.35	0.45	—	—	—	
図68	289	14	鉄鏃	8.35	—	—	—	4.95	0.58	0.4	3.4	0.4	0.35	—	—	—	
図68	290	仮番号31	鉄鏃	4.1	—	—	—	2.3	0.6	0.5	1.8	0.5	0.5	—	—	—	
図68	291	P4下	鉄鏃	4.8	—	—	—	1.9	0.5	0.35	2.9	0.4	0.32	—	—	—	
図68	292	18	鉄鏃	5.4	—	—	—	0.25	—	—	5.15	0.55	0.4	—	—	—	
図69	293	11	鉄鏃	6.9	4.55	—	0.25	—	—	—	2.35	0.45	0.4	—	—	—	
図69	294	11	鉄鏃	6.5	1.25	1	0.25	—	—	—	5.25	0.4	0.35	—	—	—	
図69	295	22ノ下	鉄鏃	7.1	4	1.2	0.2	—	—	—	3.1	0.5	0.5	—	—	—	
図69	296	22	鉄鏃	8.25	2.85	1.55	0.4	—	—	—	5.4	0.4	0.5	—	—	—	
図69	297	11下	鉄鏃	6.8	4.4	2.5	0.8	—	—	—	2.4	0.7	0.6	—	—	—	
図69	298	7下	鉄鏃	9.1	4.3	1.05	0.4	—	—	—	4.8	0.5	0.4	—	—	—	
図69	299	21	鉄鏃	12.15	5.1	1.95	0.45	4.3	0.8	0.5	2.75	0.45	0.3	—	—	—	
図69	300	番外土器の下1	鉄鏃	10.6	5.4	3.2	0.7	5.4	1.2	0.8	—	—	—	—	—	—	
図69	301	25-2	鉄鏃	6.8	1	1.7	—	3.6	0.9～1.1	0.4～0.5	2.2	0.5	0.35	—	—	—	
図69	302	18ノ下	鉄鏃	4.1	3	3.9	0.4	—	—	—	1.1	0.6	0.5	—	—	—	
図69	303	番号なしＢ国分鬼渓道遊離28 8/7	鉄鏃	5.6	—	2.5	0.15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図69	304	仮番号15	鉄鏃	4.25	4.25	2.9	0.35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図69	305	P4ノ下	鉄鏃	10.7	5.5	3.1	0.35	3.7	0.9	0.7	1.5	0.4	0.4	—	—	—	
図69	306	番号なしＢ　国分鬼渓道遊離28 8/7	鉄鏃	5	—	0.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
図69	307	18、18ノ下、19、19ノ下	鉄鏃	16.6	2.6	0.8	0.4	8.5	0.5	0.5	5.6	0.3	0.45	—	—	—	
図69			鉄鏃	9.55	—	—	—	9.55	0.5	0.3	—	—	—	—	—	—	
図69	308	18	鉄鏃	6.1	4.2	0.6	0.4	1.9	0.4	0.3	—	—	—	—	—	—	

表８　不明土器類観察表

図番号	挿図番号	ラベル・注記	器種	器高［cm］	口径（：復元径）［cm］	底部径（：復元径）［cm］	胴部最大幅［cm］	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	器面調整 外　面	器面調整 内　面	備考
図72	309		須恵器 蓋	3.25（残存高）	（10.8）			Hue5Y5/1灰	Hue10Y5/1灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	左回転
図72	310		須恵器 蓋	4.6	14.0			HueN6/ 灰	HueN7/ 灰白	0.5～3mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図72	311		須恵器 蓋	3.25（残存高）	（10.0）			HueN5/ 灰	HueN4/ 灰	0.5～3.5mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ 不定方向ナデ	左回転
図72	312		須恵器 蓋	5.0	15.1			HueN6/ 灰	Hue5Y6/ 灰	3mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図72	313		須恵器 蓋	2.4（残存高）	（13.5）			Hue5Y5/1灰	Hue5Y5/1灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図72	314		須恵器 蓋	2.6（残存高）	8.5			HueN6/ 灰	HueN6/ 灰	0.5mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転ナデ	左回転
図72	315		須恵器 蓋	2.3	11.0			HueN4/ 灰	HueN4/ 灰	0.5～3mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	左回転
図72	316		須恵器 蓋	2.4（残存高）	—			Hue2.5Y6/1黄灰	Hue2.5Y7/1灰白	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図72	317		須恵器 坏身	2.5（残存高）	（10.0）			HueN5/ 灰	HueN5/ 灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図72	318		陶質土器 蓋	3.4（残存高）				Hue7.5Y7/1灰白	Hue2.5Y5/1黄灰	非常に緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	表面光沢有り。 内面に赤色付着物。 半島系
図72	319		須恵器 坏身	3.1（残存高）	（8.6）			Hue7.5Y4/1灰	Hue7.5Y4/1灰	3～4mm 程度の砂粒を含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図72	320		須恵器 脚付壺脚部	3.4（残存高）		13		HueN6/ 灰	HueN6/ 灰	非常に緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	透孔有り。半島系か
図72	321		須恵器 脚付壺脚部	2.9（残存高）	（13.6）			HueN3/ 暗灰	Hue5Y7/1灰白	0.5mm 程度のきめ細かい砂粒を多く含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	透孔有り。半島系か
図72	322		須恵器 高坏	6.5（残存高）		8.5		Hue5Y7/2灰白	Hue5Y6/1灰	緻密	良好	回転横ナデ	回転横ナデ	
図72	323		須恵器 蓋	2.65（残存高）	8.7			HueN3/ 暗灰	HueN4/ 灰	緻密	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	つまみ欠損
図72	324		須恵器 杯身	3.6（残存高）	10.2			HueN8/ 灰白	Hue5RP7/1明紫灰	1mm 程度の砂粒を多く含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図72	325		土師器 高杯	7.9（残存高）	12.3			Hue2.5YR6/6橙	Hue2.5YR6/6橙	0.5mm 程度の白色砂粒を少し含む	良好	暗文状横ミガキ 接合部ナデ 縦ミガキ→沈線	暗文状のミガキ　ナデ	
図72	326		須恵器 杯蓋	1.2（残存高）	8.2			Hue5Y6/1灰	Hue5Y 5/1灰	1mm 程度の白色砂粒を少し含む	良好	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	
図72	327		陶質土器 長頸壺	5.0（残存高）			（20.0）	HueN7/ 灰白	HueN5/ 灰	0.5～2.5mm 程度の砂粒を含む	良好	回転横ナデ	回転横ナデ　頸部に絞り痕	外面に自然釉付着 半島系

表９　不明鉄器類観察表

図版番号	挿図番号	ラベルの注記	分類	全長／残存長(cm)	刃部			頭部			茎部			備考
					長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	
図73	328	ラベルなし		16.05	1.15	0.65	0.3	10.05	0.5	0.45	4.85	0.4	0.35	
図73	329	土器の下		7	1.5	0.7	0.2	5.5	0.51	0.3	—	—	—	
図73	330	P11～18群の下		3.2	1.3	0.75	0.6	1.9	0.5	0.5	—	—	—	
図73	331	土器の下		4.75	1.75	0.9	0.3	3	0.5	0.4	—	—	—	
図73	332	妙泉寺ラベルなし1		2.4	2.05	1.05	0.4	0.35	0.65	0.6	—	—	—	
図73	333	P4下		10	1.5	0.5	0.2	8.5	0.45	0.4	—	—	—	
図73	334			2.9	—	0.95	0.7	—	—	—	—	—	—	
図73	335	土器の下		8.3	2.2	0.7	0.3	6.1	0.4～0.5	0.5	—	—	—	
図73	336	土器の下		3.35	—	0.9	—	—	0.6	0.2	—	—	—	
図73	337	土器の下		5.5	1.5	0.7	0.25	4	0.5	0.4	—	—	—	
図73	338	土器の下		3.1	1.2	0.9	0.21	1.9	0.65	0.31	—	—	—	
図73	339	土器の下		4.2	2	0.6	0.2	2.2	0.5	0.3	—	—	—	
図73	340	6		2.6	2.3	1.1	0.2	—	—	—	—	—	—	
図73	341	土器の下		5.8	1.8	1.3	0.35	4	0.5	0.4	—	—	—	
図73	342	不明（注記なし）		3.7	0.9	0.9	0.4	2.8	0.5	0.5	—	—	—	
図73	343	不明（注記なし）		11.2	1.4	0.75	0.5	6.9	0.6	0.45	2.9	0.3～0.6	0.3	
図73	344	番外土器の下8		18.4	0.7	0.95	0.5	12.3	0.6	0.6	5.3	0.45	0.4	
図73	345	仮番号15		13.4	1.9	0.9	0.4	8.5	0.6	0.4	3.1	0.25	0.3	
図73	346			10.6	—	8.5	0.2	—	0.55	0.45	—	—	—	
図73	347	土器の下		10.6	1.85	0.7	0.3	8.75	0.5	0.4	—	—	—	
図73	348	不明（注記なし）		7.5	1.9	0.9	0.5	5.6	0.4～0.5	0.4	—	—	—	
図73	349	土器の下		6.3	1.7	0.8	0.3	4.6	0.5	0.35	—	—	—	
図73	350	番外土器の下2		5.9	—	—	—	5.9	0.65	0.6	—	—	—	
図73	351	土器の下		4.9	3.2	0.7	0.3	1.7	0.41	0.3	—	—	—	
図73	352	番外土器の下5		9.5	2.15	0.65	0.2	7.15	0.4	0.4	0.2	0.4	0.4	
図73	353	バンケ内		4.75	1.9	0.75	0.35	2.85	—		—	—	—	
図73	354	土器の下		4.2	2	0.6	0.3	2.2	0.5	0.3	—	—	—	
図73	355			3.8	—	0.7	0.3	—	—		—	—	—	
図73	356	妙泉寺ラベルなし1		3.6	2.95	0.9	0.45	0.65	0.5	0.3	—	—	—	
図73	357	妙泉寺ラベルなし1		3.2	1.35	0.85	0.25	1.85	0.6	0.2	—	—	—	
図73	358	妙泉寺ラベルなし1		3.4	2.2	0.9	0.3	1.2	0.6	0.3	—	—	—	
図73	359	妙泉寺ラベルなし1		2.5	—	0.65	0.25	—	0.55	0.3	—	—	—	
図74	360	土器の下		13	—	—	—	8.7	0.4	0.4	4.3	0.4	0.3	
図74	361	番外土器の下4		11.85	—	—	—	6.75	0.45	0.45	5.1	0.4	0.4	
図74	362	土器の下		9.7	—	—	—	3.8	0.4	0.3	5.9	0.35	0.35	
図74	363	32		9.75	—	—	—	4.65	0.5	0.4	5.1	0.4	0.4	
図74	364	番外土器の下2		10.4	—	—	—	4.35	0.55	0.65	6.05	0.45	0.5	
図74	365	妙泉寺ラベルなし1		10.3	—	—	—	6.2	0.5	0.45	4.1	0.4	0.4	
図74	366	妙泉寺ラベルなし1		8.75	—	—	—	7.4	0.5	0.5	1.35	0.35	0.4	
図74	367	22ノ下		9.4	—	—	—	4.4	0.3	0.3	5	0.4	0.3	
図74	368	土器の下		8.2	—	—	—	—	—	—	—	0.6	0.45	
図74	369	番外土器の下5		8.25	—	—	—	3.05	0.5	0.5	5.2	0.4	0.35	
図74	370			7.6	—	—	—	1.2	0.7	0.4	6.4	0.4	0.4	
図74	371			8.05	—	—	—	4.1	0.7	0.65	3.9	0.4	0.4	
図74	372	土器の下		8.5	—	—	—	5.2	0.5	0.5	3.3	0.4	0.4	
図74	373	番外土器の下10		7.3	—	—	—	5.5	0.55	0.5	1.8	0.5	0.45	
図74	374	土器の下		6.5	—	—	—	5.2	0.5	0.4	1.3	0.5	0.4	
図74	375	土器の下		6.85	—	—	—	5.1	0.5	0.4	1.75	0.45	0.4	
図74	376	9		6.5	—	—	—	3.1	0.5	0.5	3.4	0.41	0.4	
図74	377	不明（注記なし）		6.6	—	—	—	1.9	0.55	0.3	4.7	0.3	0.3	
図74	378	18		6.05	—	—	—	2.05	0.45	0.35	4	0.35	0.35	
図74	379	土器の下		6.1	—	—	—	1.1	0.55	0.35	5	0.45	0.4	
図74	380			5	—	—	—	3.4	0.5	0.5	1.2	0.4	0.45	
図74	381	妙泉寺ラベルなし1		4.3	—	—	—	2.9	0.6	0.45	1.4	0.55	0.4	
図74	382	妙泉寺ラベルなし1		5.45	—	—	—	1.25	0.45	0.35	4.2	0.4	0.3	
図74	383	土器の下		5	—	—	—	1.45	0.5	—	3.55	0.5	0.35	
図74	384	土器の下		5.4	—	—	—	0.8	0.5	—	4.6	0.45	0.35	
図74	385	妙泉寺ラベルなし1		5.1	—	—	—	3.3	0.55	0.4	1.8	0.35	—	
図74	386	土器の下		4.4	—	—	—	2.9	0.6	0.5	1.5	0.5	0.4	
図74	387	5		4.45	—	—	—	1.95	0.42	0.35	2.5	0.4	0.5	
図74	388			3.9	—	—	—	1.15	0.65	—	2.6	0.4	0.4	
図74	389	P4下		3.65	—	—	—	2	0.5	0.5	1.6	0.35	0.4	
図74	390	土器の下		3.65	—	—	—	1.55	0.65	0.5	2.1	0.45	0.4	
図75	391	妙泉寺ラベルなし1		14.5	9.3	2.8	0.3	—	—	—	6.2	0.4	0.5	
図75	392	不明（注記なし）		12.3	8.5	2.5	0.2	—	—	—	3.8	0.4	0.4	
図75	393	番外土器の下11		11.3	8.2	1.55	0.4	—	—	—	3.1	0.6	0.5	
図75	394			7.5	6.9	2.5	0.6	—	—	—	0.6	0.7	0.4	
図75	395	妙泉寺ラベルなし1		11.9	5.4	3.25	0.2	3.5	0.8	0.6	3	0.5	0.3	
図75	396	番外土器の下6		8.1	8.1	2.3	0.3	—	—	—		—	—	
図75	397			7.4	8.1	2.3	0.2	—	—	—	0.6	—	—	
図75	398	妙泉寺ラベルなし1		4	4	2.5	0.35	—	—	—	—	—	—	
図75	399	妙泉寺ラベルなし1		3.1	3.1	1.5	0.3	—	—	—	—	—	—	
図75	400	番外土器の下4		8.3	2.4	1.35	0.5	—	—	—	5.9	0.5	0.55	
図75	401			7.65	1.3	1.8	0.3	2.5	0.95	0.4	4	0.55	0.35	
図75	402			9	6.55	—	0.15	2.3	0.95	0.4	1.1	0.6	0.45	
図75	403	番外土器の下3		4.5	4.5	2.4	0.3	—	—	—	—	—	—	
図75	404	妙泉寺ラベルなし1		4.55	4.55	2.7	0.35	—	—	—	—	—	—	
図75	405			3.15	—	—	—	2	—	0.3	1.1	—	0.2	

第３章　東亞考古学会1953・1954年調査の意義

宮本一夫

第１節　東亞考古学会の原の辻遺跡発掘調査

東亞考古学会による壱岐原の辻遺跡の発掘調査は、1951（昭和26）年の第１次調査、1953（昭和28）年の第２次調査、1954（昭和29）年の第３・４次調査、1961（昭和36）年の第５次調査までの５回の調査が行われた（表10）。調査団長は一貫して京都大学人文科学研究の水野清一教授であり、調査員として藤田国雄、樋口隆康、岡崎敬、林巳奈夫、西谷（川端）眞治、高橋猪之介、金関恕、森貞次郎らが参加した。発掘調査は毎回夏休みの７～８月に行われている。これらの調査の契機は、1948（昭和23）年の東亞考古学会が対馬を調査（水野・樋口・岡崎1953）した帰途に、２・３日間での壱岐島調査が行われたことにあった。1951年には九学会対馬調査にあたって、東亞考古学会は壱岐の考古学的調査を担当した。その際、壱岐の全島調査とカラカミ遺跡、さらに原の辻遺跡の三つが調査対象としてあがっていた。その結果、まずは原の辻の発掘調査が選ばれたのであった（水野・岡崎1954）。

1951年の第１次調査は、原の辻遺跡の主体をなす丘の東北端にトレンチを設定した（図76）。この調査では、原の辻上層式土器という土器型式が層位的に認められるという調査成果が生まれた（水野・岡崎1954）。ここは後に環濠が発見されるところであり、同じ地点を1961年の第４次調査で再調査することになる。1953年の第２次調査では、第１から第４トレンチを原の辻環濠集落の中心部部分に配置している（図76）。ここでは住居址などの発見がなされている。また、原の辻環濠集落の南端に位置する原ノ久保Ａ区墓域近くでは、調査時に第５地点と称して甕棺墓が発掘されている。この年、原の辻遺跡発掘調査班とは別に壱岐全島調査班が組織された。全島調査班では壱岐の古墳に注目し、そのため妙泉寺古墳群で１号墳と７号墳の発掘調査、さらに鬼の窟古墳での発掘調査が実施された。1954年には、農地区画整理と水利事業に伴い、工事現場から銅剣２点、銅矛１点が発見されたところ

表10　東亞考古学会の壱岐島調査

年度	遺跡名	調査区	調査期間	団長	参加者
1951（昭和26）	原の辻第１次調査		7.24～8.7	水野清一	金関丈夫、藤田国雄、岡崎敬、高橋猪之介、西谷眞治、森貞次郎ほか
1952（昭和27）	カラカミ遺跡	第１トレンチ 第２トレンチ	7.25～8.11	水野清一	藤田国雄、岡崎敬、高橋猪之介、金関恕、金関丈夫、森貞次郎
	一般調査		7.25～8.10		樋口隆康、林巳奈夫、西谷眞治ほか
1953（昭和28）	原の辻第２次調査	第１トレンチ 第２トレンチ 第３トレンチ 第４トレンチ 第５地点（甕棺出土）	7.24～8.12	水野清一	有光教一、岡崎敬、楢崎彰一、藤田国雄、金崎丈夫、森貞次郎、高橋猪之介ほか
	一般調査	妙泉寺古墳群 鬼の窟古墳	7.26～8.10		樋口隆康、林巳奈夫、西谷眞治
1954（昭和29）	原の辻第３次調査	閨繰遺跡	3.22～3.26 4.11～4.20	水野清一	西谷眞治、金関恕、Kidder
	原の辻第４次調査	第Ⅰトレンチ 第Ⅱトレンチ 第Ⅲトレンチ 第Ⅳトレンチ 銅剣・銅矛出土地（推定）	7.18～8.18		藤田国雄、岡崎敬、高橋猪之介、金関恕ほか
1961（昭和36）	原の辻第５次調査	第１・４トレンチ 第５トレンチ	7.22～8.11	水野清一	岡崎敬、潮見浩、三木文雄、藤田国雄、高橋猪之介、秋山進午、西谷正

から、同年３月に緊急に西谷眞治が原の辻遺跡を訪れた。青銅器の発見地点は現在で言う石田地区の墓地群に伴うものであった。この時には、別に石棺墓と甕棺墓が発見されていた閏繰遺跡で緊急調査がなされた。同年４月には調査体制を整え、第３次調査として、閏繰遺跡の石棺墓と甕棺墓が発掘調査された。また、同年８月の原の辻第４次調査では、原の辻環濠集落の南部部分に第Ⅰトレンチ～第Ⅳトレンチの四つのトレンチが東西方向にほぼ直線上に配置された（図76）。この第４次調査までで原の辻遺跡のほぼ全体を部分的に調査したことになる。当時は、環濠集落の認識もなく、大量の弥生土器出土土ともに弥生時代の住居址などが検出されていた。その後、岡崎敬が1960年に九州大学文学部助教授として赴任したこととも関係するのか、1961年になり原の辻遺跡での最後の調査となる第５次調査が実施されている。調査地点は、大量の土器が出た1951年の第１次調査地点を再調査することにし、ロの字形をなす第１～４トレンチと、別に第５トレンチが配置された（図76）。ここを再度発掘したのは、1951年の調査地点で原の辻上層式土器という型式が層位的に設定されたことによるもの

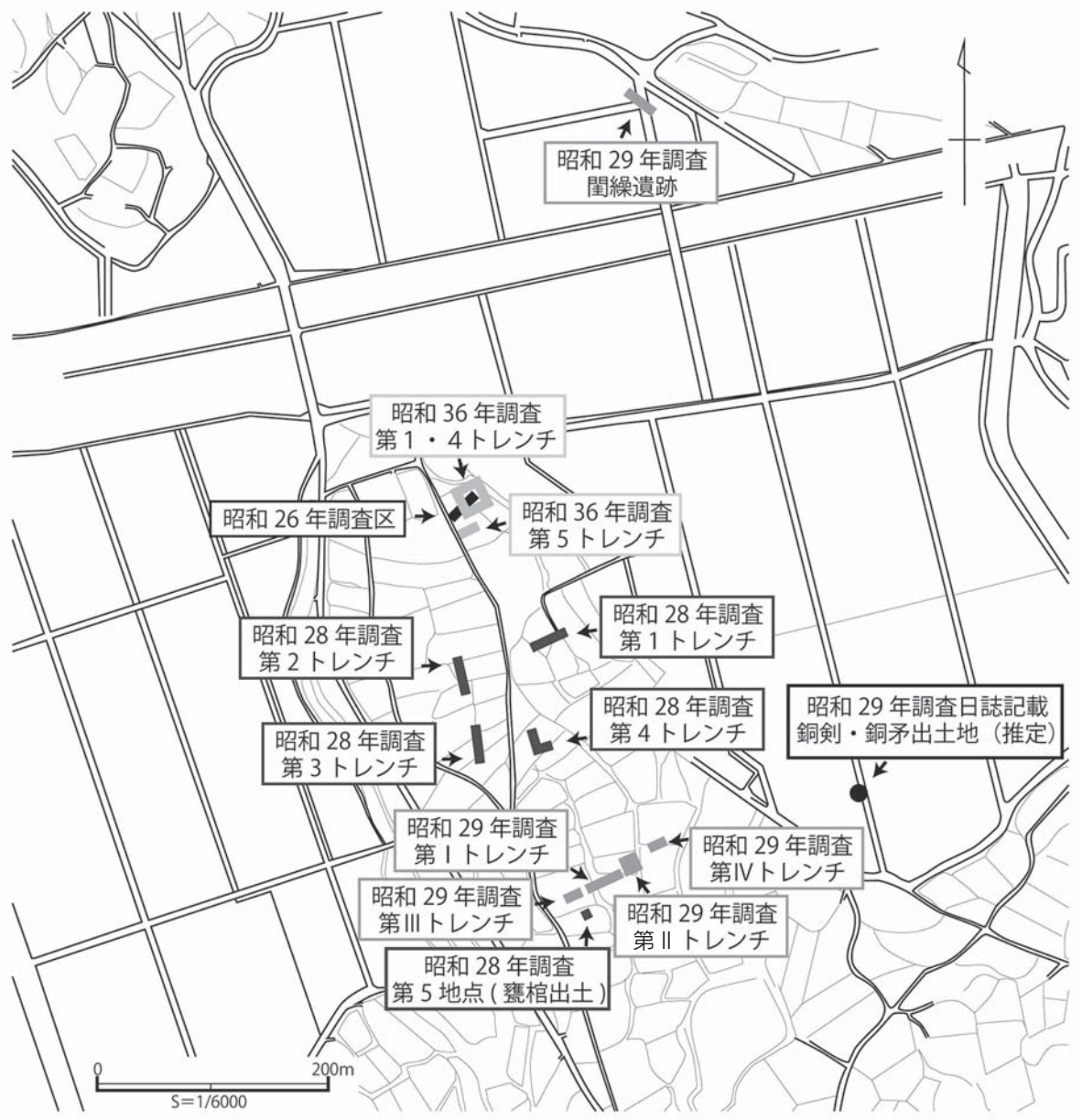


図76　東亜考古学会による原の辻遺跡の調査地点

であり、その再検証の目的があったのではないかと想像する。現在からみると、この成果は環濠部分での分層による成果であったと考えられるが、当時は環濠の存在も明らかではなかった。結局この原の辻第５次発掘が、東亞考古学会の発掘調査としては最後のものになる。なお、1961年の原の辻第５次調査では、当時学生であった秋山進午（大手前大学名誉教授）、西谷正（九州大学名誉教授）も参加している。

第２節　原の辻閏繰遺跡の調査成果と意義

原の辻閏繰遺跡では、６基の列状配置の石棺墓と16基の小児用甕棺墓が発見された。甕棺墓は大きく２群に分布上分かれるが、弥生前期末から中期前半のものであり、２群の甕棺墓群内で継起的に埋葬が行われたものである。成人墓葬である石棺墓は、４号石棺墓と５号石棺墓でそれぞれ１点の碧玉製管玉が出土したに過ぎず、年代は不明である。しかし、隣接する小児用の甕棺墓と同時期とすれば、弥生時代前期末から中期前半のものである。原の辻遺跡はほぼ弥生前期末頃から遺跡の使用が開始されるが、閏繰遺跡は墓地群として原の辻遺跡内では、石田大原地区墓域とともに最古のものである。

原の辻遺跡は、図77にみられるように環濠集落に沿って９地点で墓域が見つかっている。閏繰遺跡もその一つの墓域として認定することができるが、1954年調査区と1995年調査区ではかなり距離があり、別の墓域とすべきかもしれない。それが正しいとすれば、原の辻遺跡環濠集落に沿って10地点の墓域が存在することになる。そして、閏繰遺跡1954年調査区は年代的に前期末に始まる墓域としては最も古いものであり、石田大原地区とともに原の辻遺跡の始まりの墓域として認めることができる。但し、石田大原地区では細形銅剣・銅矛や多紐細文鏡が出土しており、墓域間での格差が認められる。それぞれが氏族墓地を形成している可能性がある。第１章でも述べたように、1995年の長崎県教育庁による発掘地点では、石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓と甕棺墓が出土しているが、弥生中期後半を主体とし、閏繰遺跡内でも墓域が移動していることが考えられる。

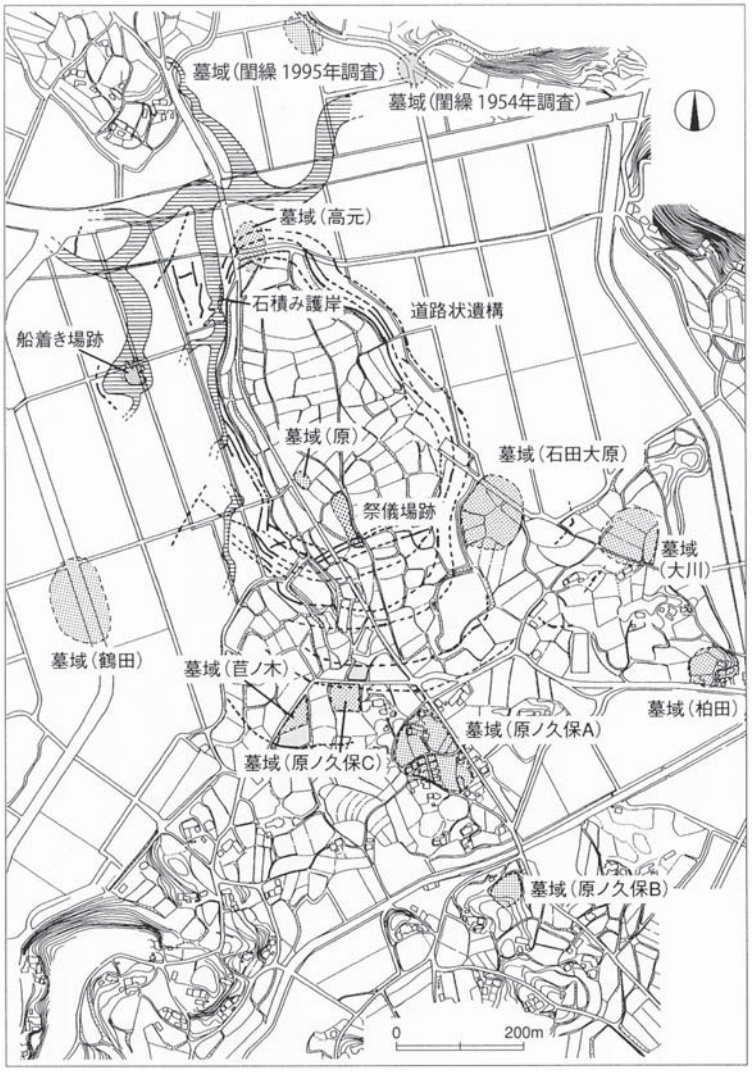
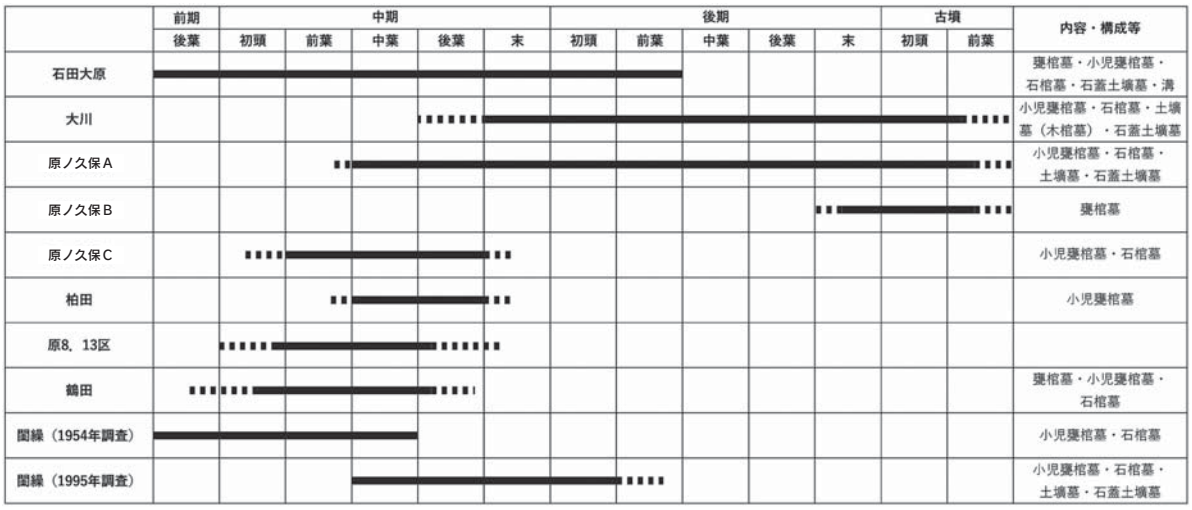


図77　原の辻遺跡概要図（宮崎2008を改変）

原の辻遺跡に存在する10地点の墓域（図77）は、それぞれが氏族

表11　原の辻遺跡における墓域の消長表（長崎県教育委員会2005を改変）



墓地を構成していた可能性があり、墓葬内容の差違とともに墓域ごとに存続期間の差違が存在している（表11）。弥生前期末に始まる石田大原地区と閏繰1954年調査区が、弥生中期前葉には原ノ久保Ｃ区、原８・13区、鶴田地区が加わり、合計五つの墓域に拡大する（表11）。弥生中期中葉には、閏繰1954年調査区が衰退するが、原ノ久保Ａ区、柏田、閏繰1995年墓区が加わり、合計七つの墓域に拡大する。しかし、弥生後期後半には大川と原ノ久保Ａ区の二つの墓域に収斂している（表11）。銅剣・銅矛あるいは多鈕細文鏡が出土した石田大原地区の墓域は、原の辻遺跡内で最も経済的に豊かな氏族墓地群ということができるが、弥生後期前葉には衰退している。原の辻遺跡では、福岡平野の須玖岡本遺跡や糸島地域の三雲南小路遺跡のような大型墳丘墓は存在せず、等質的な部族社会の様相を呈している。

第３節　妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳の発掘調査の成果と意義

1953（昭和28）年の第２次原の辻遺跡調査に際し、壱岐の全島調査が行われ、妙泉寺古墳群１号墳と７号墳、さらに鬼の窟古墳の発掘調査が行われた。これらの調査に参加したのは樋口隆康、林巳奈夫、西谷（川端）眞治らであった。1952年の東亜考古学会による壱岐カラカミ遺跡の調査の際に、樋口隆康、林巳奈夫、西谷眞治は壱岐全島一般調査で笹塚をはじめとして全島の古墳調査を既に行っていた。1953年の一般調査では、その延長として古墳の発掘調査を実施したものと思われる。しかし、発掘後は整理調査や報告書の刊行もされることなく、その内容は忘れ去られていた。その後、妙泉寺古墳群は長崎県教育委員会によって調査され（長崎県教育委員会2000）、鬼の窟古墳は芦辺町教委育委員会によって調査された（芦辺町教育委員会1990）。残念ながら両調査の報告の際には、東亜考古学会の調査成果は利用することができなかった。この度、遅まきながら、妙泉寺１号墳・７号墳と鬼の窟古墳の遺物整理調査を行い、その成果を公開することにより、これらの古墳の性格をより正確に把握することができた。ここでは、個々の古墳の内容を簡単にまとめておきたい。

妙泉寺１号墳は、墳丘径23m、墳丘高5.2mをなす円墳であり、玄室長3.4m、玄室幅２m、羨道長1.3mの単室両袖型横穴式石室をなす。石室への初葬は、小田編年・牛頸編年のⅢA 期の６世紀中葉前後であり、双六Ⅰ段階（小田・下原2006）の６世紀第３四半期に相当しよう。墳丘盛土中から発見された須恵器には小田編年・牛頸編年のⅢB 期が多く含まれており、６世紀後葉まで円丘部頂上付近

での須恵器供献儀礼が行われていた可能性が高い。

妙泉寺７号墳は、墳丘径16m 前後、墳丘高4.6mをなす円墳であり、玄室長2.1m、玄室幅2.1mの全長8.1mである複室両袖型横穴式石室からなる。初葬は小田編年・牛頸編年ⅣA 期の６世紀末であり、７世紀初頭から７世紀前半にかけて追送が行われ、８世紀代にも須恵器供献が行われていた。

鬼の窟古墳は、墳丘径45m、墳丘高13m をなす円墳、玄室長3.2m、玄室幅３mの全長16.5mをなす複室両袖型横穴式石室からなる。初葬が小田・牛頸編年ⅢB ～ⅣA 期の６世紀後葉から末に行われ、追葬が７世紀代を通じて継続していた。飛鳥Ⅱ～Ⅳ期の畿内系土師器も出土しているが、これらは追送に伴うものであろう。また、新羅土器が出土しているが、これらも追葬時のものである可能性が高い。

新羅土器としては、東亜考古学会調査では器蓋２点（図78-194・199）と瓶形土器１点（同206・211・212）が出土している。206、211、212の新羅土器は胎土や色調が同じであり、高台をもつ同一個体の瓶形土器である。瓶形土器は芦辺町教育委員会調査時にも瓶形土器１点（図70-18）が出土していたが（芦辺町教育委員会1990）、本報告書のものと同一個体である。それは、三角集線文が左側に１条の基準線を引いた後に４条の沈線を斜めに引かれるものであり、その下位に３条の沈線文がめぐり、さらにその下位にスタンプ手法による二重円文が施されるものである。また、もう１点の器蓋の破片（図78-17）は、右側に１条の基準線を引き４条の沈線文を引く三角集線文であり、東亜考古

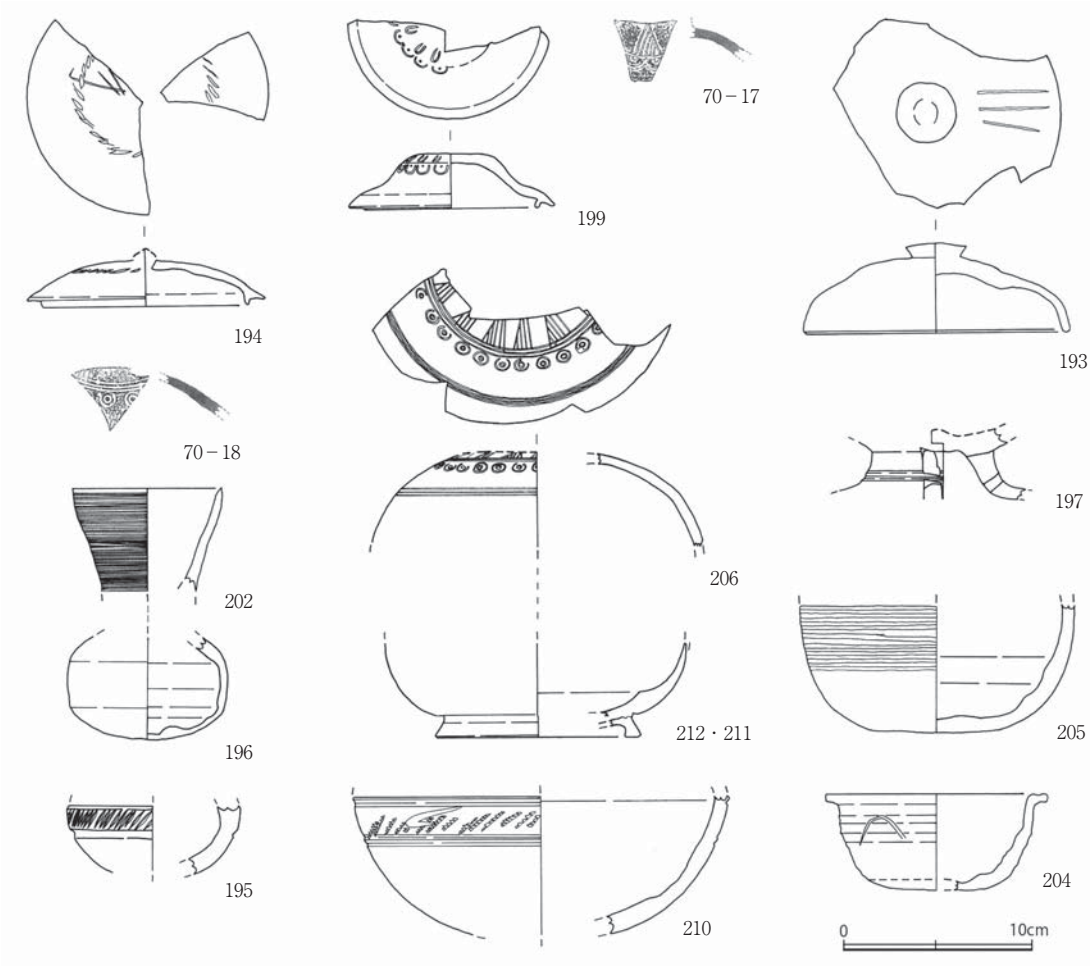


図78　鬼の窟古墳出土新羅土器・新羅系土器（縮尺1/4）

表12　壱岐所在古墳の変遷（小田・下原2006を改変）

古墳名		墳丘		550	600			650		700	
					I	II	III	IV古 IV新	V	VI	VII
首長墳	対馬塚古墳	前後	65		●	○	○	○	○	○	△
	双六古墳	前後	90		●	○	○	○	○	○	
	笹塚古墳	円	66			●	○	○	○	○	
	兵瀬古墳	円	34			←- - -	○		○		
	鬼の窟古墳	円	45			●	○	○	○	○	
	掛木古墳	円	23			●	○		○		
群集墳	カジヤバ古墳	円	11			●	○		○	○	○
	鬼屋窪古墳	?	?						●		○
	百田頭2号墳	円	17				●		○	○	
	百田頭3号墳	円	12		●	○	○	○			
	百田頭4号墳	円	12		●		○		○		
	百田頭5号墳	円	15					●	○		○
	百田頭6号墳	円	17			●			○	○	
	百田頭7号墳	円	17		●	○	○	○	○	○	○
	釜蓋2号墳	円	15			●	○	○	○	○	
	釜蓋5号墳	円	15			●		○	○		○
	釜蓋6号墳	円	17						●	○	○
	妙泉寺1号墳	円	10		●	○					
	妙泉寺7号墳	円	8				●		○		△
	山ノ神古墳	円	12		●	○	○	○	○		△
	山ノ神5号墳	円	16		●	○			○	○	○

●は初葬、○は追葬、△は後の祭祀（石室内から出土したものは追葬と考えた）
破線矢印は石室構造などから推定、「前後」は前方後円墳、「円」は円墳

学会出土の器蓋（図78-199）とは異なっている。したがって、鬼の窟古墳には器蓋３点と瓶形土器１点が出土したことになる。さらに高坏脚部１点（同197）とそれに伴うと思われる蓋１点（同193）、盒子１点（同205）も新羅土器である。図78の202と196は同一個体の可能性が高く、長頸壺であろう。195と210は壺であり、これらも新羅系土器である。また鉢１点（同204）も新羅系土器であろう。図64の198は、新羅土器の瓶形土器の口縁端部と考えられる。図64の200、201、203の破片も新羅系土器であろう。

これら新羅土器の器蓋と瓶形土器は、文様の特徴などから、洪潽植によれば、７世紀の第１四半期の遅い段階から第四半期の早い段階にあたるとする（洪潽植2006）。これら新羅土器は前室部分で集中的に出土しているところからも、追葬時に供献されたものと考えられる。そのほかの新羅土器あるいは新羅系土器としたものもほぼ同じ時期であろう。

以上の発掘結果を壱岐の他の古墳群と比較してみよう。壱岐の後期古墳の発掘調査は近年進んでおり、双六古墳や対馬塚などの前方後円墳の発掘調査も行われてきた。こうした発掘調査に基づき、壱岐の古墳の変遷が示されている（小田・下原2006）。この変遷表にさらに東亞考古学会の調査成果を加えたものが表12である。前方後円墳の首長墓である双六古墳や対馬塚古墳が国分地区に６世紀中葉に始まる。同じ段階に、芦辺地区では妙泉寺古墳１号墳に始まる妙泉寺古墳群といった群集墳が造営され始める。妙泉寺１号墳や７号墳はそれぞれ金銅製馬具・金銅製耳環や刀剣類・馬具・金銅製耳環を持つように、国分地区の前方後円墳より下位の有力者であることを示している。すなわち、妙泉寺古墳群は芦辺地区の有力氏族の墓域であるということが言えよう。こうした６世紀中葉に始まる壱岐の前方後円墳の造墓の契機は、527～528年の筑紫磐井の乱後にみられるヤマトの地方支配の拡大と関

係している。532年には筑紫に那津官家というヤマトの屯倉が作られ、福岡平野はヤマトの大陸交渉の拠点と化していく。同時に、地方豪族を国造として認定し、ヤマトの支配構造に編入していくのである。壱岐の６世紀中葉の対馬塚古墳や双六古墳の造墓は、国分地区の首長層を壱岐の国造としてヤマトが認定したことを意味しているといえよう。国分地区の首長層は６世紀後葉以降にはヤマトの政治的な規制から前方後円墳に代えて円墳を造墓せざるを得なかったが、石室構造は単室両袖型石室から複室形両袖石室へ変化するなど北部九州の在来の墓室伝統を導入していた。そして、副葬品の豪華さからは国分地区の円墳の被葬者が、引き続き壱岐の国造層であることを示している。そうした国造墓や妙泉寺古墳群のような配下の地方氏族墓は、７世紀代になっても追葬が行われ、８世紀になっても須恵器供献祭祀が行われている。そして７世紀を中心に畿内系土師器が出土するように、ヤマトとの直接的な関係とともに、新羅との関係が新羅土器などの存在によって認められる。洪潽植の壱岐出土の新羅土器の年代観からすれば、610年の新羅の対日派使の派遣以降に新羅と倭との関係が本格化し（洪潽植2006）、その仲介を壱岐の国造たちが努めていたことを示していよう。新羅土器の出土が、対馬塚古墳、双六古墳、笹塚古墳、鬼の窟古墳など国分地区の首長墳に限られていることも、そのことを示している。さらに新羅土器の器蓋や瓶形土器は新羅の王京の慶州産と考えられ（洪潽植2006）、新羅と倭との外交ルートに壱岐の国造が仲介していた可能性があろう。

第４節　東亜考古学会の壱岐島調査の意義

1951（昭和26）年に始まる東亜考古学会による壱岐島の調査は、第１次～第５次まで行われた原の辻遺跡と1952年に行われたカラカミ遺跡が中心となっていた。どちらも弥生時代の拠点集落であり、発掘当時は分からなかったがどちらも弥生時代の環濠集落をなす。東亜考古学会が対馬・壱岐・唐津を調査対象地としたのは、これらの地域が日本列島内で大陸に最も近接しており、大陸文化との対外交流を示す歴史的な景観をもっている地域であるからである。もともと東亜考古学会は、遼東から旧満州さらに華北への調査対象地域を広げ、日本文化の原点をなす大陸文化の解明にあたっていた（宮本2017）。戦後、大陸での考古学調査が不可能になった東亜考古学会では、大陸に近接する対馬・壱岐・唐津に調査地を変更せざるを得なかった。その中で、カラカミ遺跡の調査では楽浪土器や三韓土器など大陸の土器そのものが出土し（宮本編2008・2009・2013）、原の辻遺跡の調査では銅剣・銅矛など朝鮮半島青銅器文化との関係を示す遺物や粘土帯土器など朝鮮半島初期鉄器時代遺物が出土している。大陸との対外交渉を示す遺跡であったのであり、その意味では東亜考古学会の調査は、目的にかなったものであった。また、今回報告を行った1953（昭和28）年調査の鬼の窟古墳からも新羅土器が出土している。発掘当時は気づかれていなかったが、これも７世紀の対外交渉を示す貴重な発見であり、東亜考古学会の本筋にかなった調査であった。しかしながら、それらどれもが発掘後整理調査もされることなく、発掘成果が公開されていなかったことがむしろ問題であった。

弥生時代の始まりは、朝鮮半島の無文土器文化と北部九州の刻目凸帯文土器文化との接触に始まっている。その段階の文化伝播を示す支石墓は、これまでのところ対馬・壱岐では発見されていない。壱岐で最も古い段階の墓葬は、小場遺跡の弥生前期の板付Ⅱb式段階の箱式石棺墓である。これも1952（昭和27）年の東亜考古学会によるカラカミ遺跡の調査の際に並行して行われた全島調査で、森貞次郎によって発見されたものであった（宮本編2009）。この後、弥生前期末から多重環濠集落の原の辻遺跡が始まる。今回報告した1954（昭和29）年の第３次原の辻遺跡調査の閏繰遺跡は、原の辻遺跡が始まる段階の墓域であり、注目される。1954年地点は弥生前期末～中期前半の石棺墓と小児甕棺

墓の墓域であり、弥生中期後半の閨繰遺跡の集団墓は、1995年の長崎県教育庁の調査地点へ移動している。

原の辻遺跡の中期前半には朝鮮半島初期鉄器時代の粘土帯土器が環濠集落の北西外側の不條地区に集中しており、そこに渡来系の人々が住んでいた可能性がある（宮崎2008）。弥生時代中期後半にはその付近の不條地区で船着き場跡が発見されており、将にその地点が原の辻環濠集落の海外への窓口であったのである。そして、原の辻遺跡を中継交易拠点として、勒島など朝鮮半島南部との交易が営まれていたのである（白井2001）。

一方、1952年に発掘されたカラカミ遺跡は、その後の九州大学考古学研究室の再調査や壱岐市教育委員会の史跡範囲確認調査により、弥生中期後葉から弥生後期までに限られる環濠集落であるとともに、鉄器生産とその流通に携わる長距離交易拠点であることが明らかとなった（宮本編2013・宮本2016）。しかも、カラカミ遺跡は、楽浪郡を含む朝鮮半島と伊都地域（伊都国）を結ぶ、あるいは遠賀川以東地域とを結ぶ長距離交易の中継拠点であった（宮本2016）。一方で、原の辻遺跡は、朝鮮半島南部や楽浪郡と福岡平野を結ぶ交易拠点であった。いわば弥生時代後半期の北部九州は異なった地域交易ネットワークが併存していたのである（宮本2016）。こうした交易ネットワークの覇権闘争が２世紀後半の「倭国の大乱」に相当し、それを掌握したのがヤマトの卑弥呼ということになるであろう。この段階で福岡平野は長距離交易の中継基地となる。これは久住猛雄が言う「博多湾貿易」に相当する（久住2007）。しかも原の辻遺跡は古墳時代前期においても継続し、朝鮮半島南部から壱岐原の辻遺跡、福岡平野西新遺跡・博多遺跡群、ヤマトという長距離交易のネットワークが再編成されたのである。

４世紀前葉の楽浪郡・帯方郡の崩壊は、対中国や対朝鮮半島交易を大きく転換させ、鉄素材を中心とする金官加耶とヤマトとの直接交易が開始される。この交易路の中間点で航海の安全を祈願したのが沖ノ島祭祀の始まりである（宮本2013）。こうした情況が再び転換するのが、古墳時代後期の筑紫磐井の乱以後のヤマトの地方支配に始まる。ヤマトは再び那津官家を博多湾岸におくことにより、対外交渉・交易の拠点を形成することになる。この過程で再び注目されたのが壱岐であった。ヤマトが福岡平野あるいは遠賀川流域と壱岐を介した朝鮮半島南部の関係を再編成したのである。このため、壱岐の国分地域の首長は壱岐の国造として対外交易や交渉にあたったのである。７世紀前葉には、倭と新羅との使節による本格的な対外交渉が始まるが、その交渉を行ったのが壱岐の国造と福岡平野の筑紫大宰であり、これらの地域を使節が経由しヤマトへ向かったのであろう。したがって、それらの地域に７世紀前葉の新羅土器が出土するのである。一方、弥生時代に壱岐カラカミ遺跡を通じ対外交易を果たした糸島地域は、６世紀から７世紀にかけては、筑紫肥君（火君）一族が、対百済外交にあたっている。日本書紀によれば、筑紫肥君が537年に百済に皇子を千名の兵を率いて送り届けている。また、７世紀初頭の601年には征新羅将軍として来目皇子が嶋に１年間逗留したことが日本書紀に記載されている。その逗留地が糸島地域の元岡・桑原遺跡第18次調査地点にあたる可能性が想定されている（福岡市教育委員会2010）。糸島地域は一貫して百済との関係が重視されたのではないだろうか。

このように、壱岐島における東亜考古学会の調査は単に壱岐という地域社会の先史時代から古代を明らかにするだけでなく、列島の同時代の対外交流史を明らかにした調査であったのである。

参考文献

芦辺町教育委員会1990『鬼の窟古墳』（芦辺町文化財調査報告書第４集）
壱岐市教育委員会2008『壱岐の古墳―壱岐島を代表する大型古墳―』
小田富士雄・下原幸裕2006「須恵器－双六古墳から壱岐島の須恵器へ－」『双六古墳』（壱岐市文化財調査報告書第７集）、57-69頁
久住猛雄2007「博多湾貿易の成立と解体」『考古学研究』第53巻第４号、20-36頁
洪潽植2006「壱岐の新羅土器」『双六古墳』（壱岐市文化財調査報告書第７集）、70-81頁
白井克也2001「勒島貿易と原の辻貿易」『弥生時代の交易』埋蔵文化財研究会
長崎県教育委員会2000『県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅲ』（長崎県文化財調査報告書第156集）
長崎県教育委員会2002『閨繰遺跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第17集
長崎県教育委員会2005『原の辻遺跡　総集編Ⅰ』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集
福岡市教育委員会2010『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告　元岡・桑原遺跡群16－第18次調査の報告２－』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1102集）
水野清一・岡崎敬1954「壱岐原の辻弥生式遺蹟調査概報」『対馬の自然と文化』古今書院、295-309頁
水野清一・樋口隆康・岡崎敬1953『対馬－玄海における絶島、対馬の考古学的調査』（『東方考古学叢刊』乙種第６冊）東亜考古学会
宮崎貴夫2008『原の辻遺跡』（『日本の遺跡』32）、同成社
宮本一夫2013「環境の変遷と遺跡からみた福岡の歴史」『新修福岡市史　特別編　自然と遺跡からみた福岡の歴史』福岡市、405-436頁
宮本一夫2016「弥生時代北部九州の鍛冶と交易―カラカミ遺跡の事例を中心に―」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室50周年記念論文集・文集』広島大学大学院文革研究科考古学研究室、213-230頁
宮本一夫2017「日本人研究者による遼東半島先史調査と現在－東亞考古学会調査と日本学術振興会調査」『中国考古学』第17号、7-20頁
宮本一夫編2008『壱岐カラカミ遺跡Ⅰ―カラカミ遺跡東亞考古学会第２地点の発掘調査―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
宮本一夫編2009『壱岐カラカミ遺跡Ⅱ―カラカミ遺跡東亞考古学会第１地点の発掘調査―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
宮本一夫編2011『壱岐カラカミ遺跡Ⅲ―カラカミ遺跡第１地点の発掘調査（2005～2008年）―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
宮本一夫編2013『壱岐カラカミ遺跡Ⅳ―カラカミ遺跡第５～７地点の発掘調査（1977・2011年）―』九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室

図　　版

1　閨繰遺跡全景（南から）

2　４号甕棺墓

3　３号甕棺墓

4　９～11号甕棺墓

図版2

1　9～13号甕棺墓

2　6号石棺墓

1　6号石棺墓

2　5号石棺墓

図版4

1　５号石棺墓と８号甕棺墓

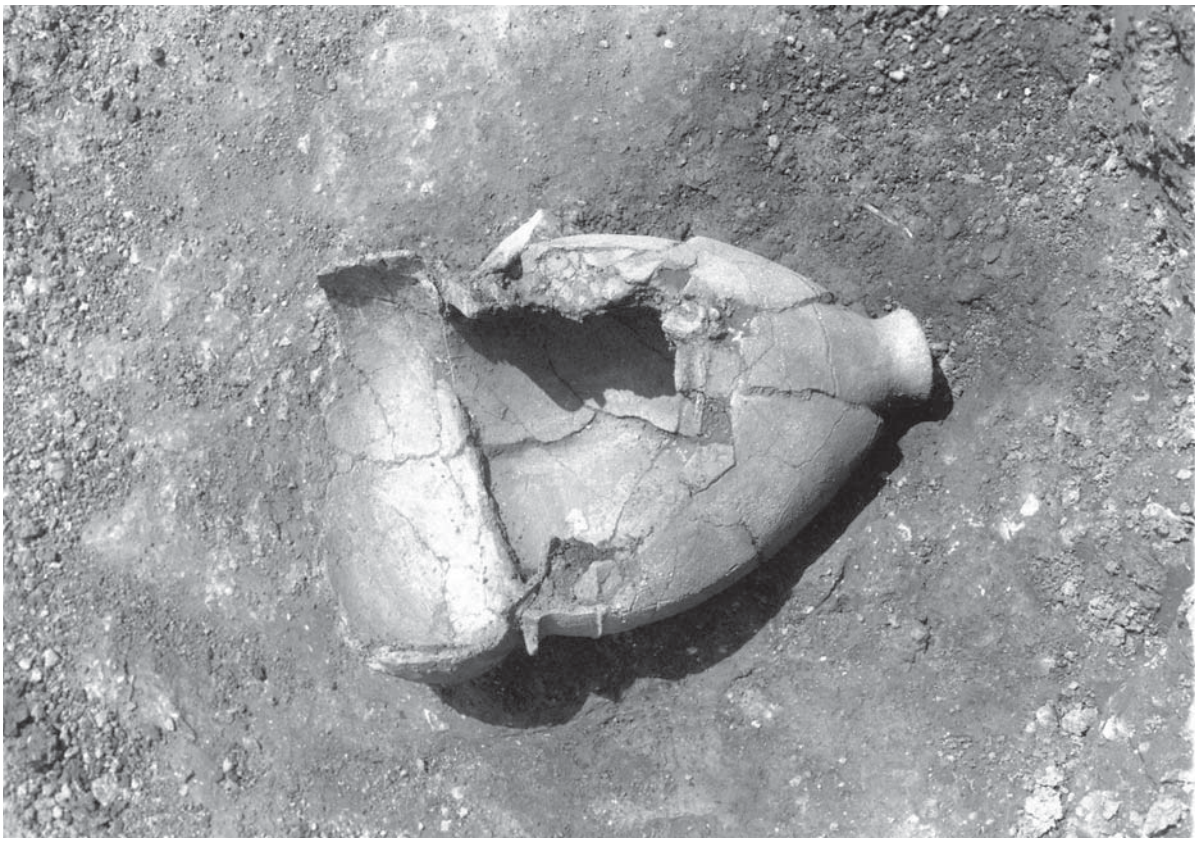
2　４号石棺墓と６号甕棺墓

1　４号・５号石棺墓

2　11号甕棺墓

図版6

1　２号甕棺墓

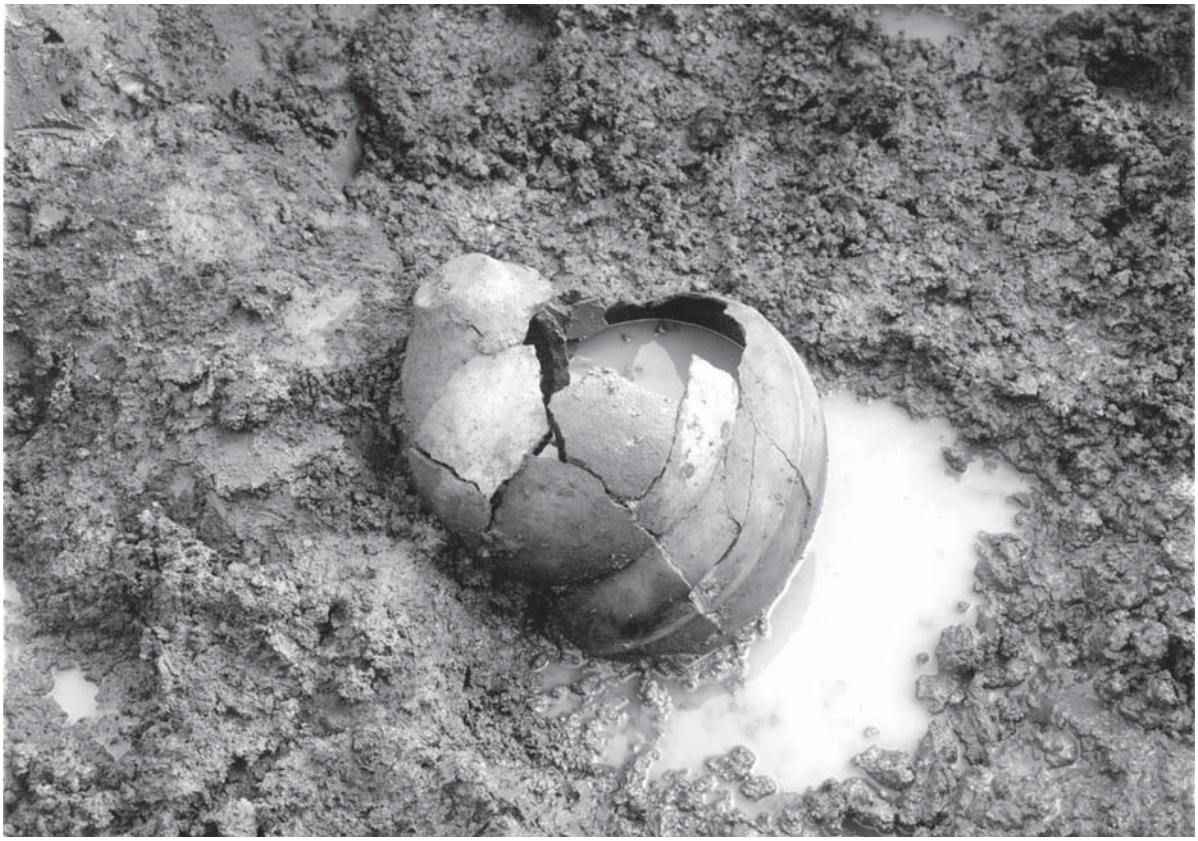


2　16号甕棺墓

1　13号甕棺墓

2　4号甕棺墓

図版8



1　７号甕棺墓

2　閨繰遺跡遠景（南西から）

出土甕棺①

図版10

31

41

34

36

37

39

38

39

出土甕棺②

出土甕棺③

1　妙泉寺古墳群遠景（東から・2014年）

2　妙泉寺古墳群近景（東から・2014年）

1　妙泉寺１号墳（西から・2014年）

2　妙泉寺７号墳（南から・2014年）

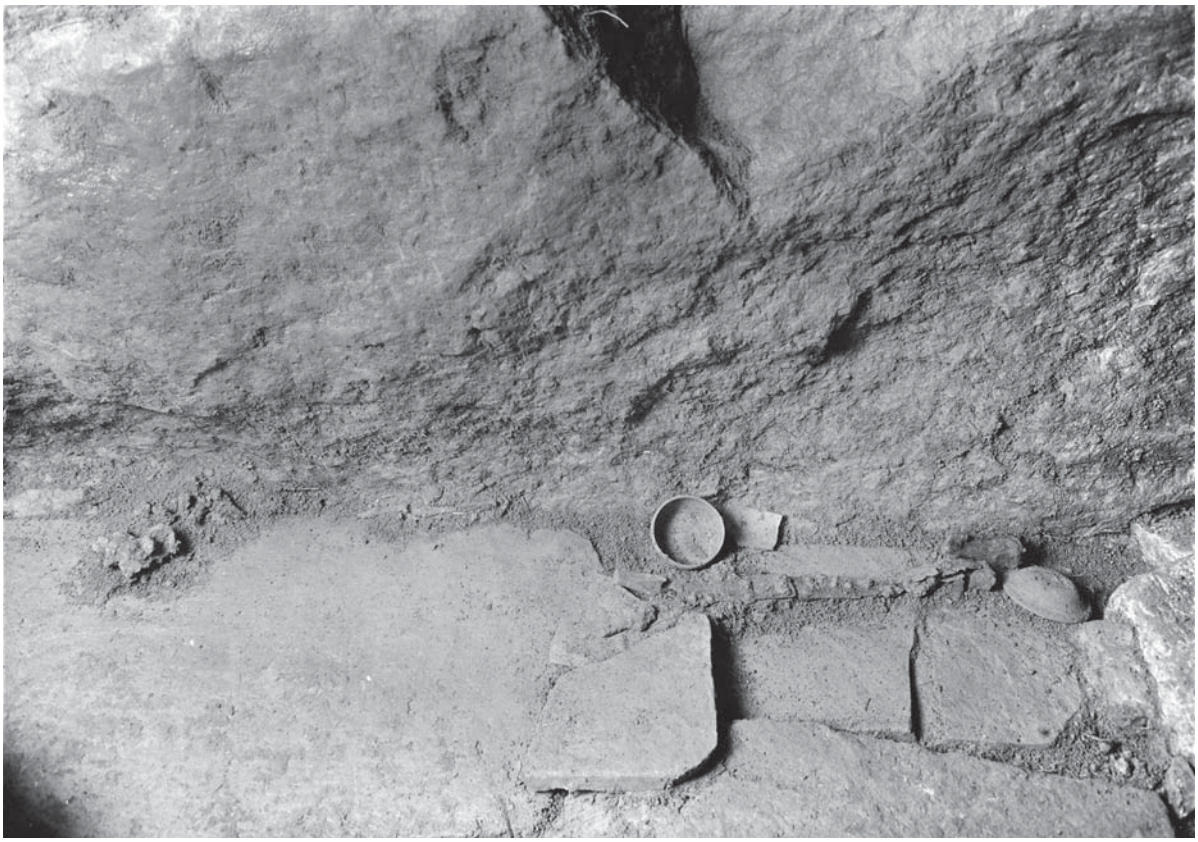
1　妙泉寺１号墳墓道（西から・1953年）

2　妙泉寺１号墳墓道・羨道（西から・1953年）

1　妙泉寺１号墳羨道付近（東から・1953年）

2　妙泉寺１号墳玄室奥壁付近（西から・1953年）

1　妙泉寺７号墳羨道付近遺物出土状況（南から・1953年）

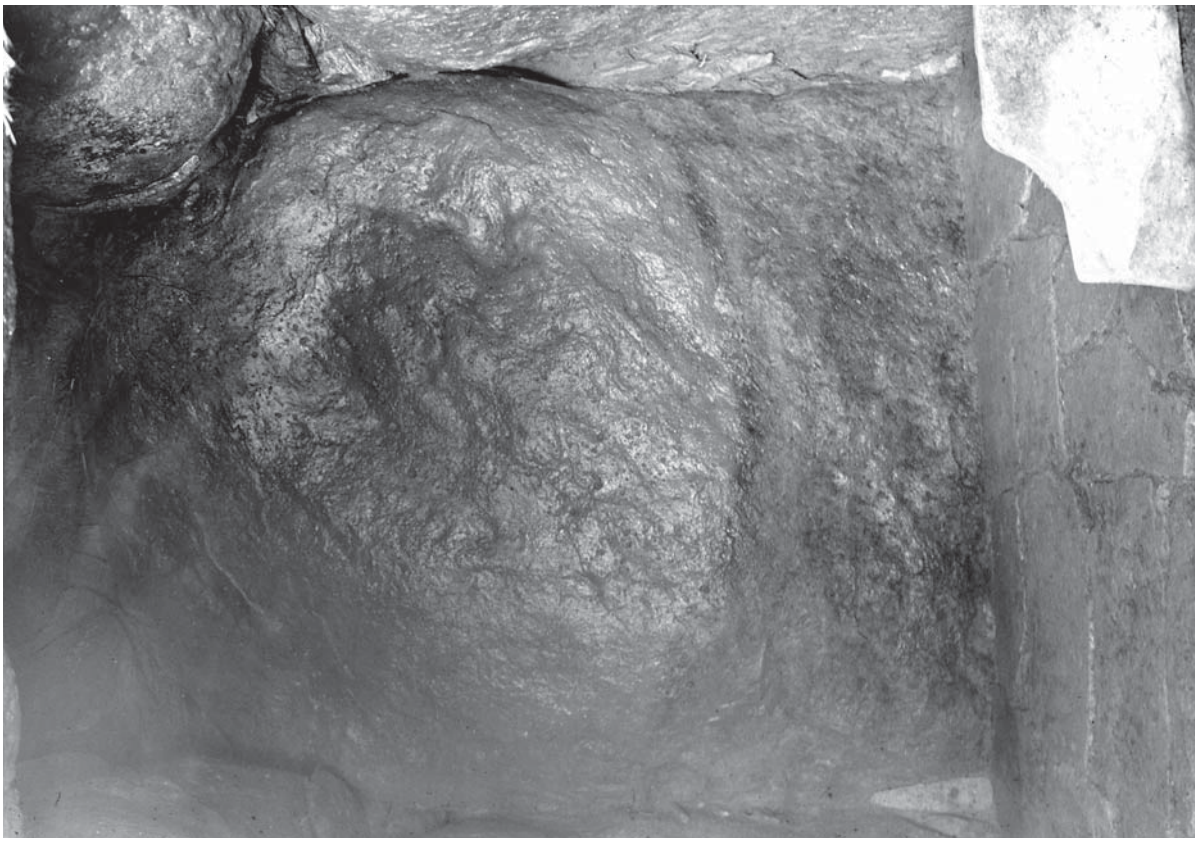


2　妙泉寺７号墳前室東壁・南寄り（上層）での遺物出土状況（西から・1953年）

1　妙泉寺７号墳前室閉塞部付近・復元前（南から・1953年）

2　妙泉寺７号墳前室閉塞部付近・復元後（南から・1953年８月２日）

1　妙泉寺７号墳玄室床面・仕切石（南から・1953年）



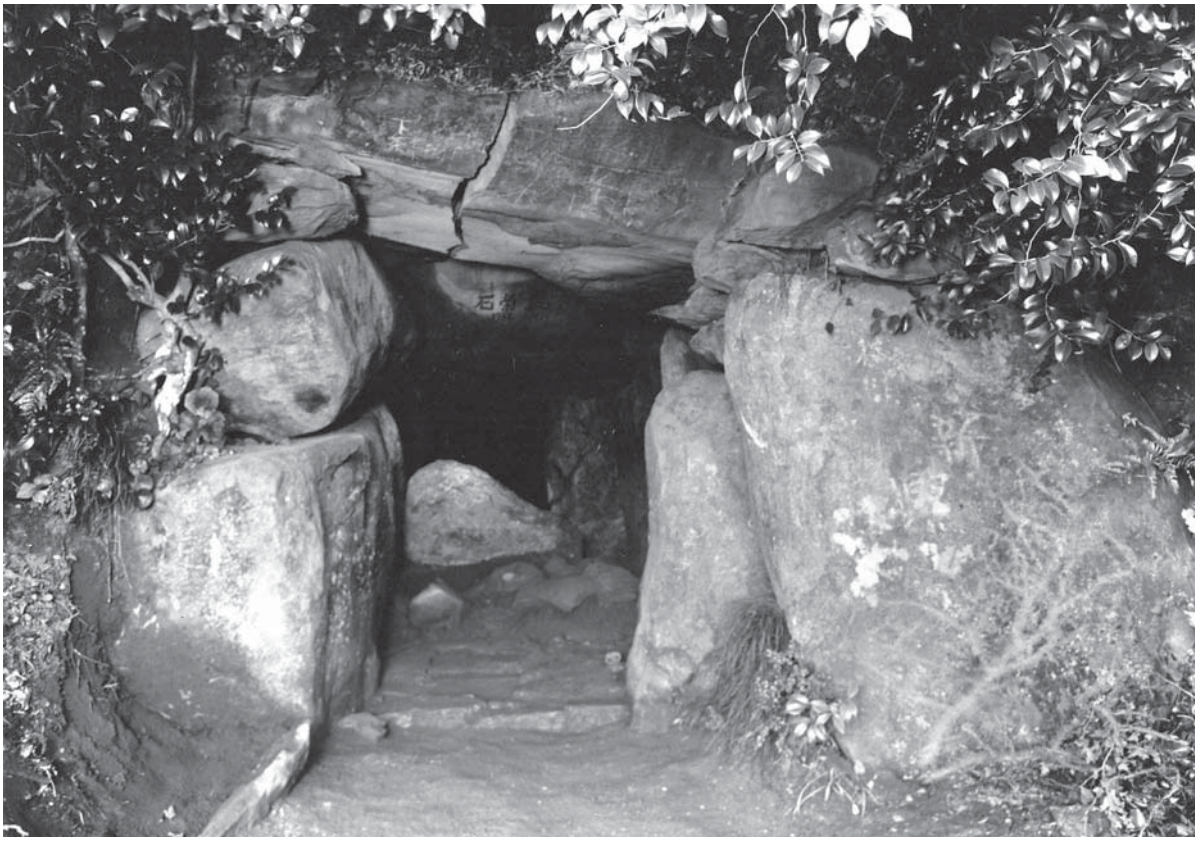
2　妙泉寺７号墳奥壁・床面付近（南から・1953年）

1　妙泉寺７号墳玄室から前室・羨道方向を見る（北から・1953年）

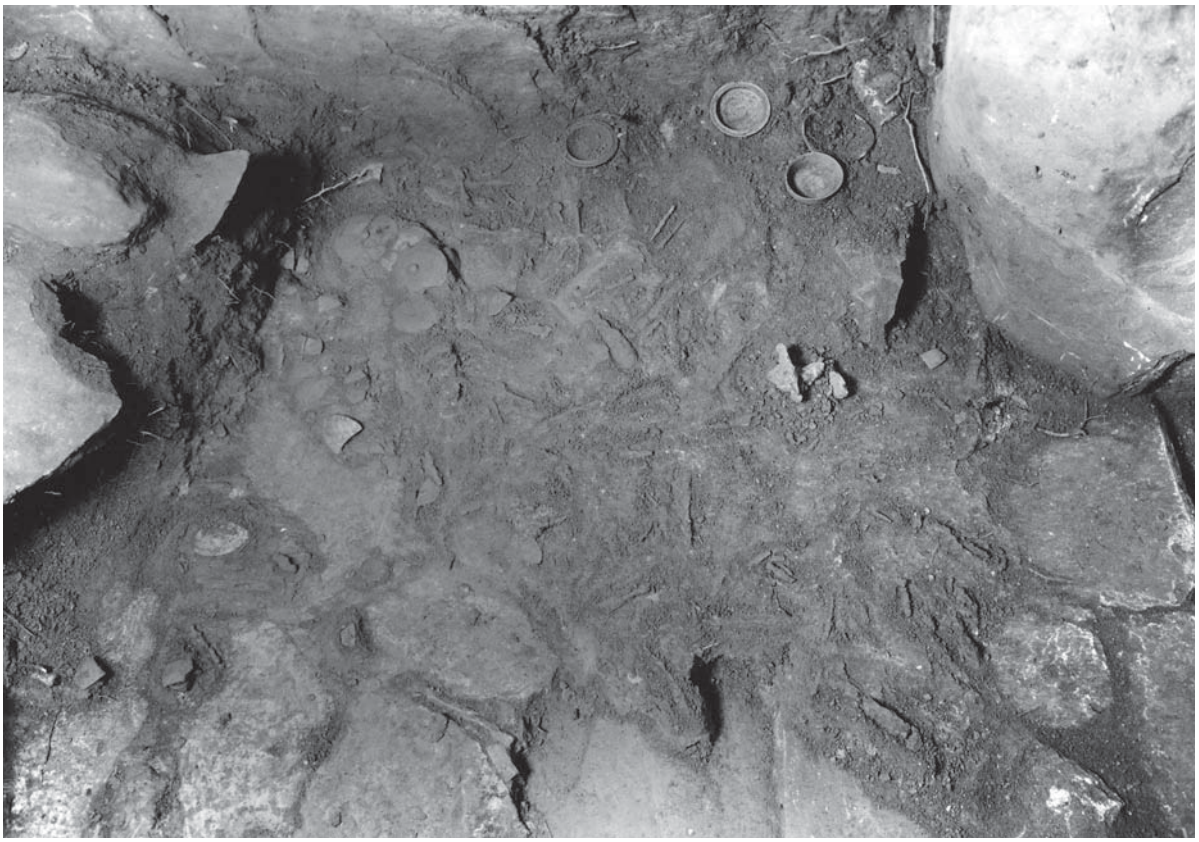
2　妙泉寺７号墳前室床面（北から・2014年）

1　鬼の窟古墳（南から・2006年）

2　鬼の窟古墳羨道・閉塞石付近（南から・2004年）



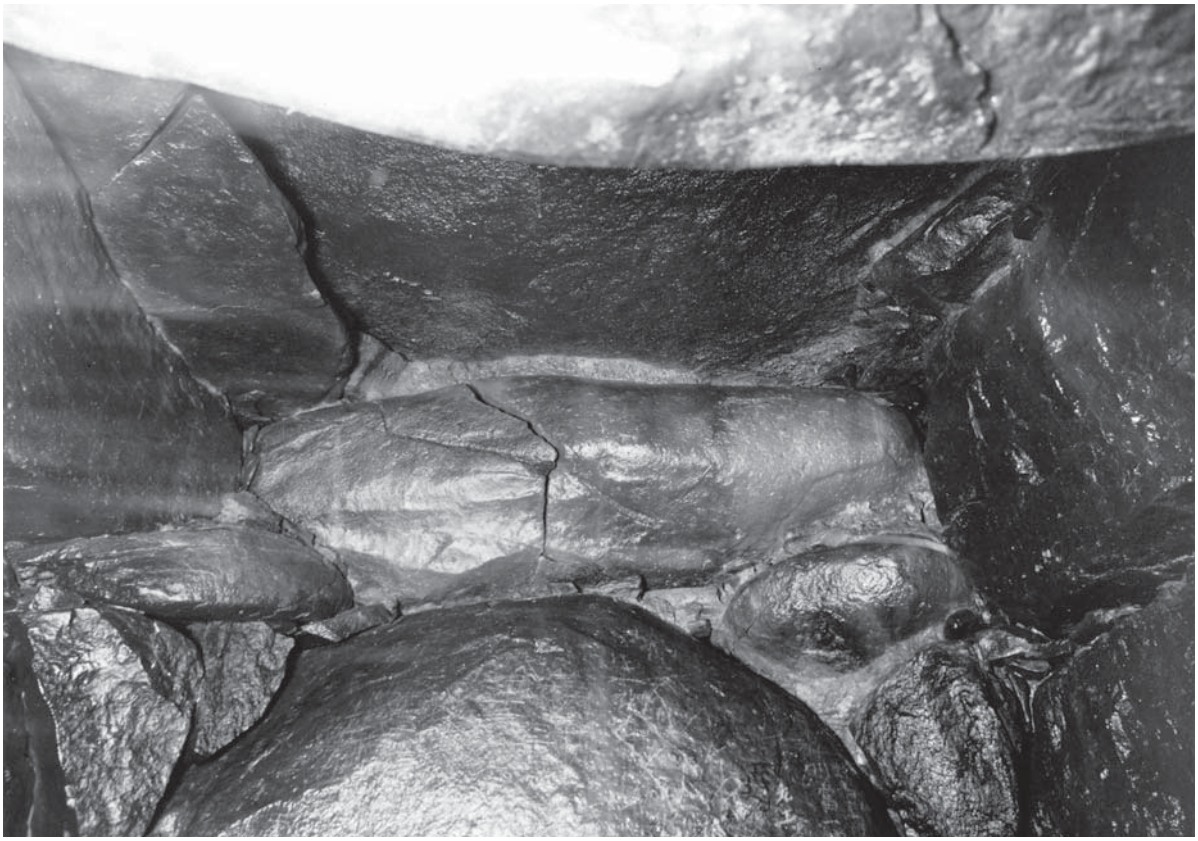
1　鬼の窟古墳羨道・閉塞部付近（南から・1953年）



2　鬼の窟古墳羨道北西付近遺物出土状況（東から・1953年）

1　鬼の窟古墳羨道床面の状況（南から・1953年）

2　鬼の窟古墳中室床面・玄室方向（南から・1953年）



1　鬼の窟古墳玄室奥壁上部（西から・1953年）

2　鬼の窟古墳玄室奥壁付近（南から・2015年）

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

妙泉寺１号墳出土須恵器①

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

妙泉寺１号墳出土須恵器②

62

63

64

65

66

67

68

69

妙泉寺１号墳出土須恵器③

70

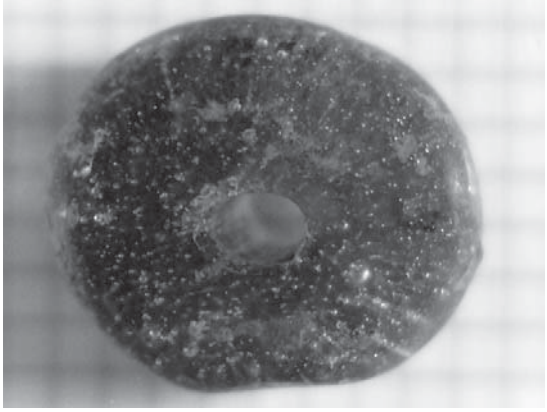
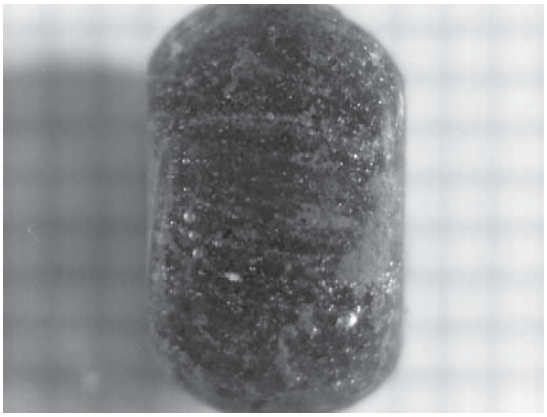
71

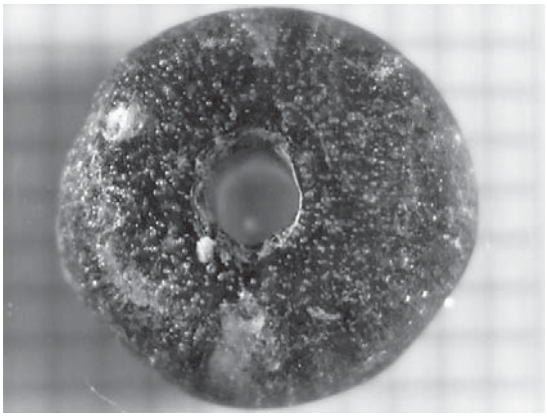
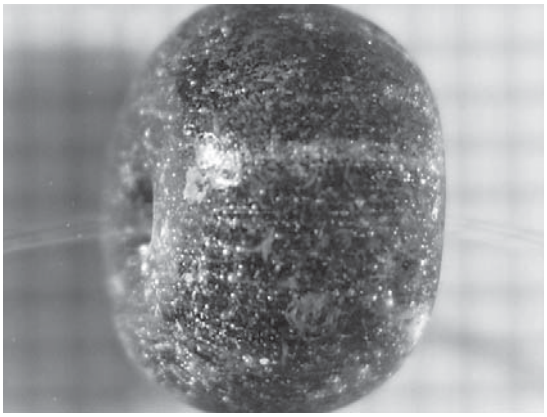
72

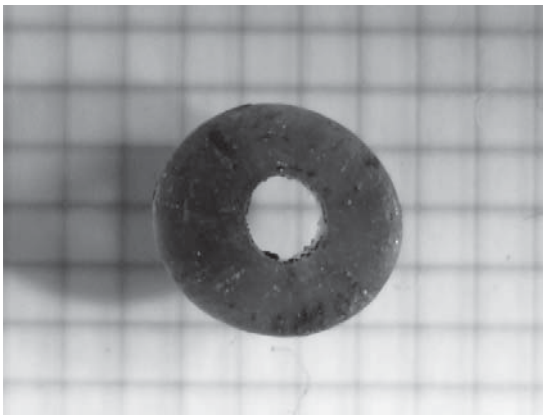
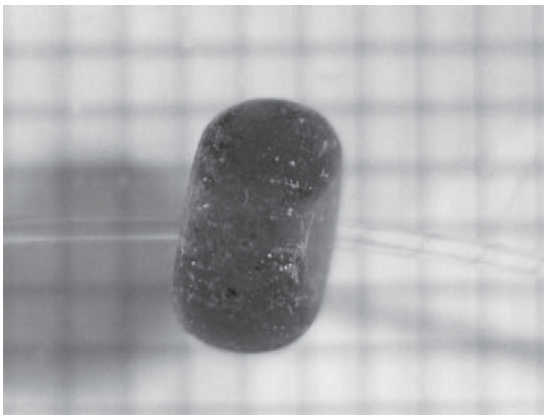
73 74 75 76

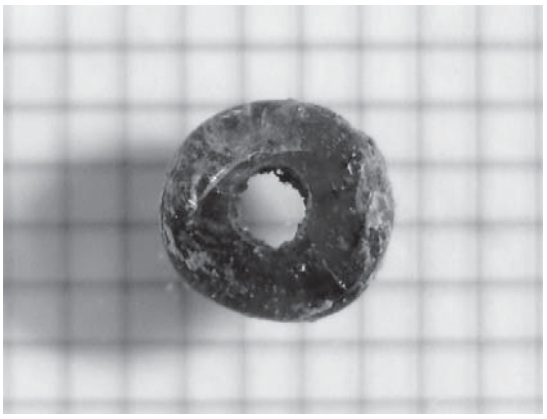
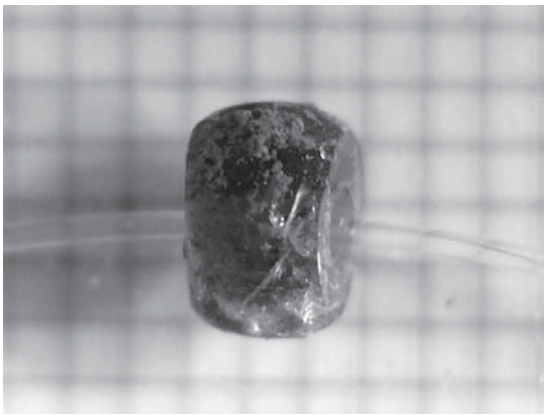
妙泉寺１号墳出土遺物

図版28



73



74



75



76

妙泉寺１号墳出土ガラス小玉

77

78

79

80

81

82

83

84

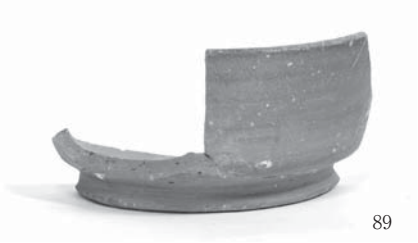
85

86

87

88

妙泉寺７号墳出土須恵器


89

90

91

92

93

94

95

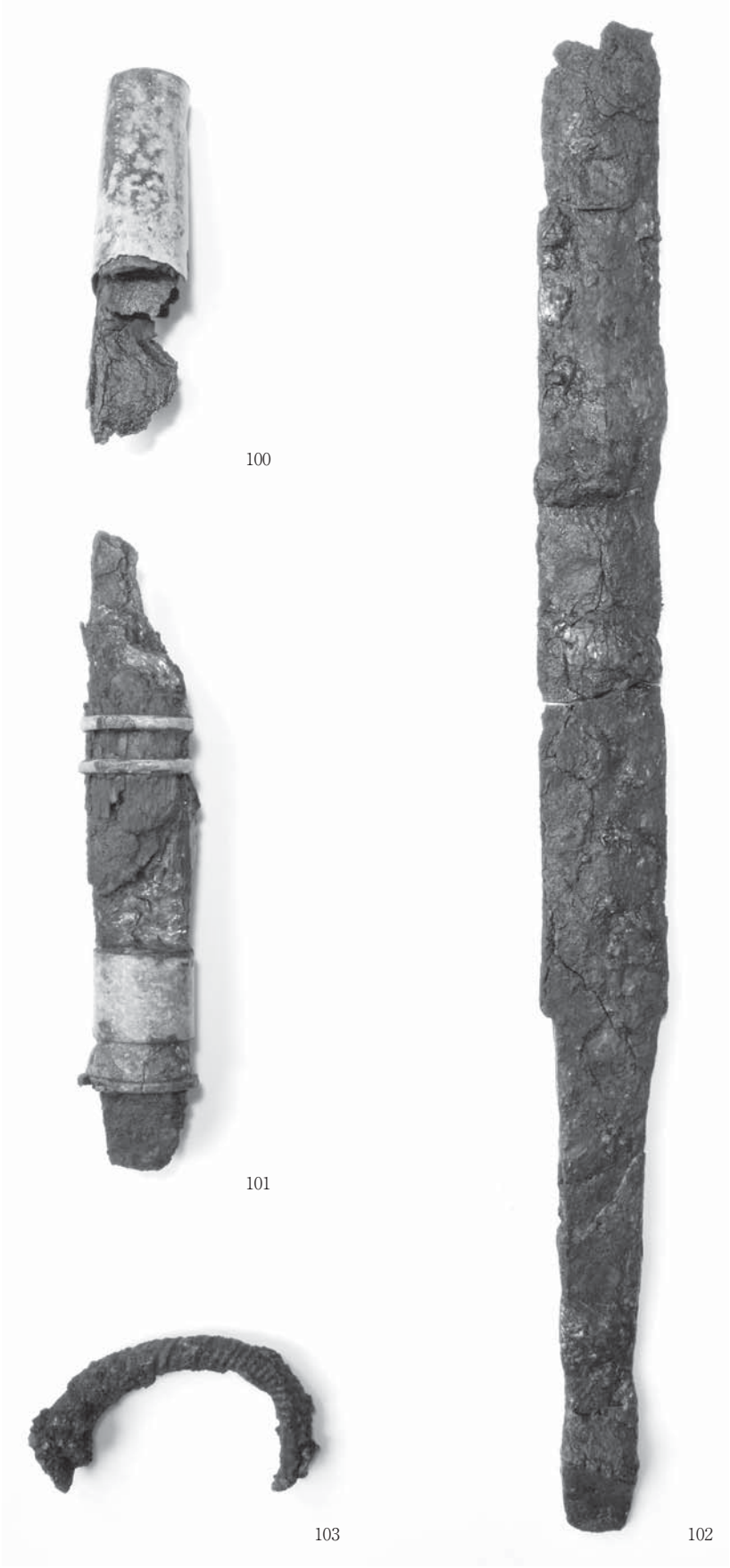
96

97

98

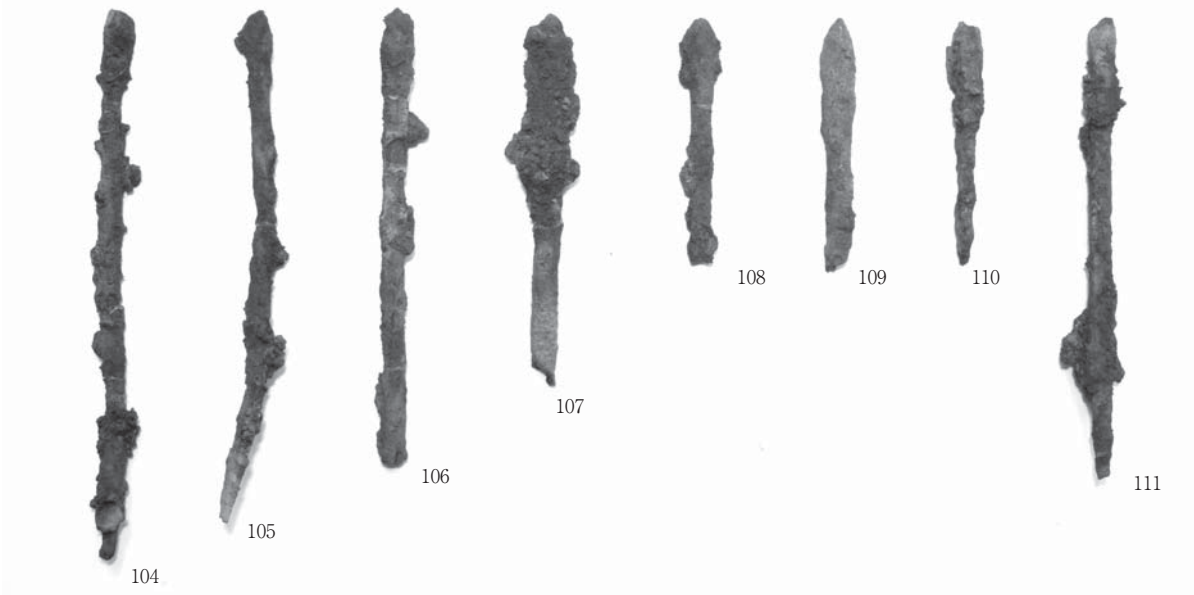
99

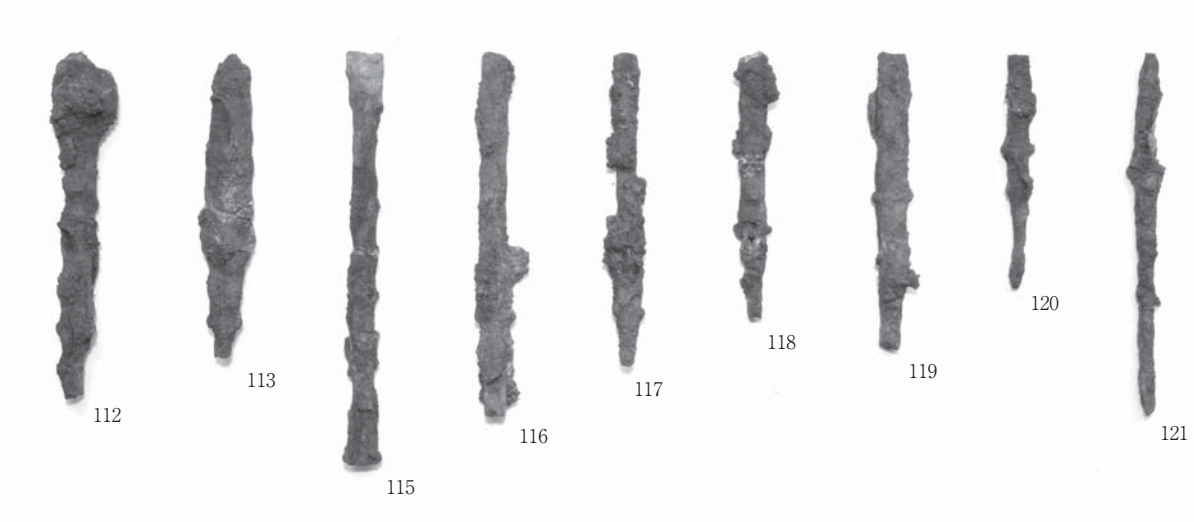
妙泉寺７号墳出土遺物

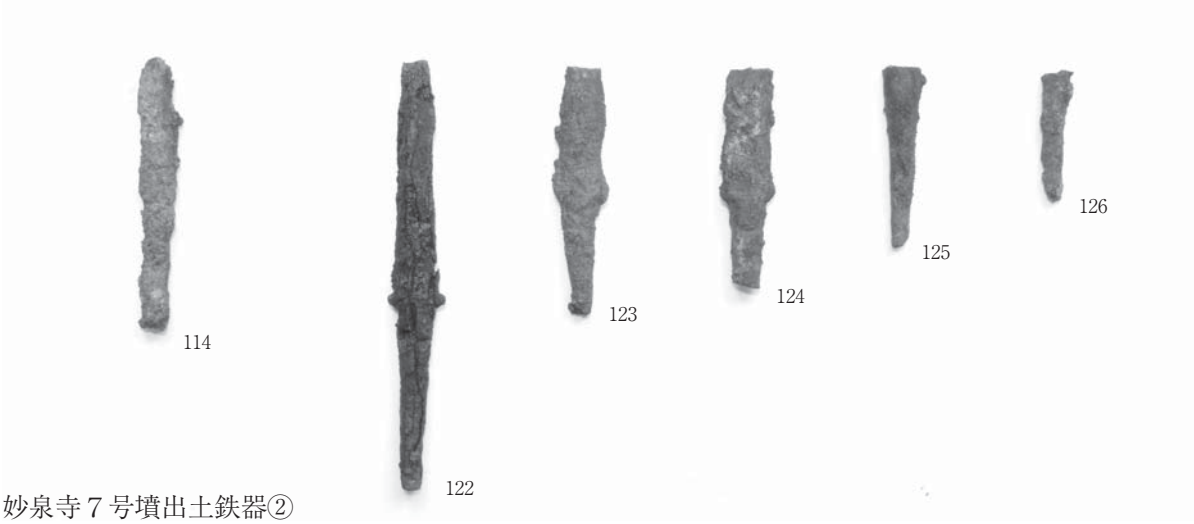


妙泉寺７号墳出土鉄器①

図版32

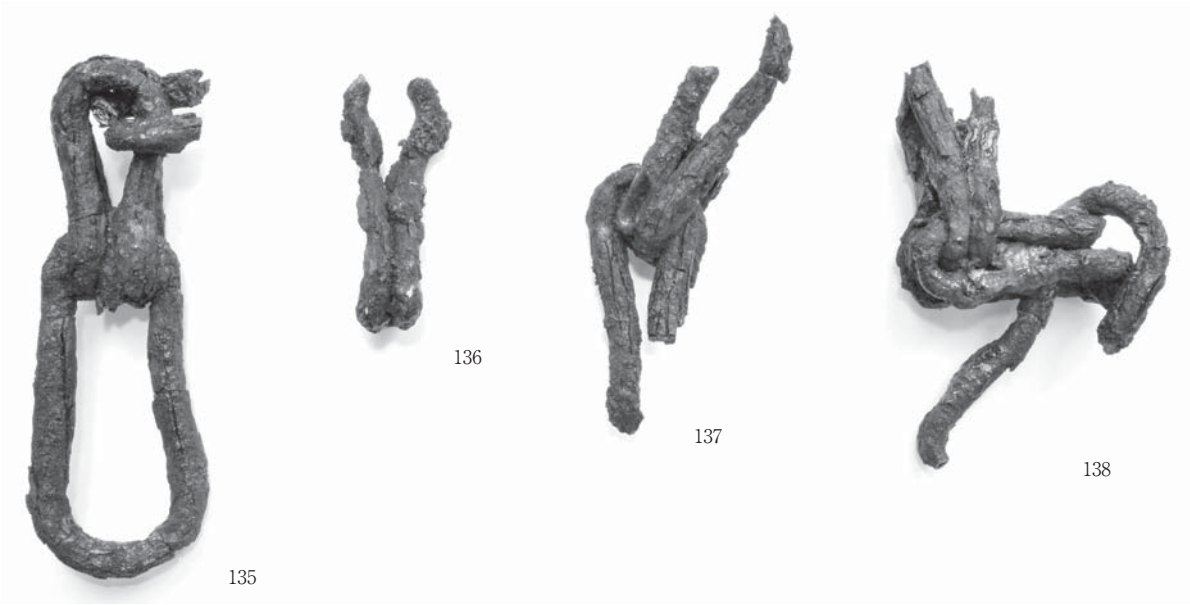


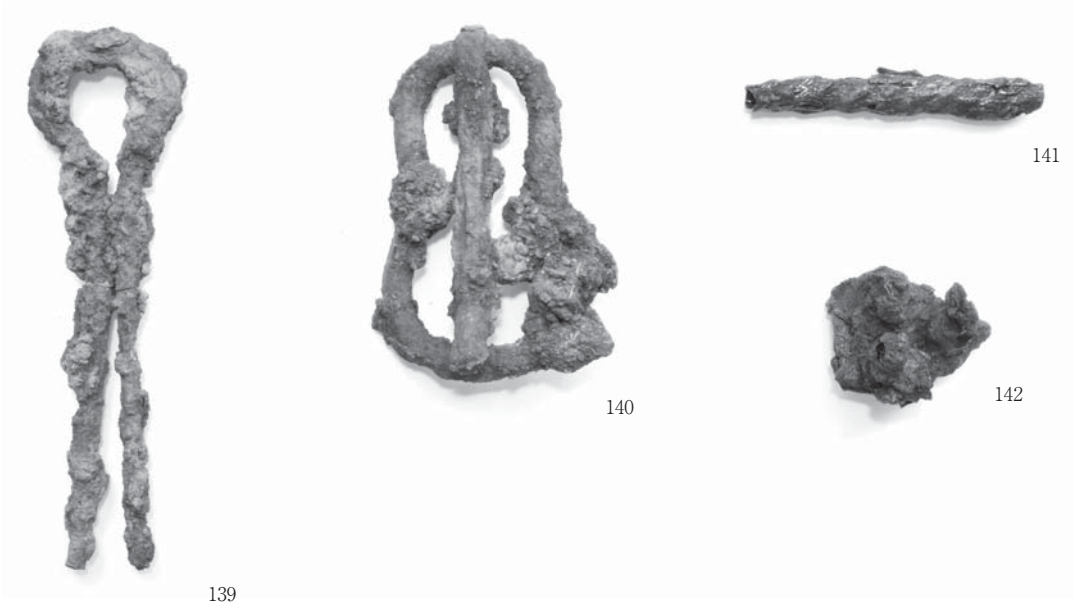




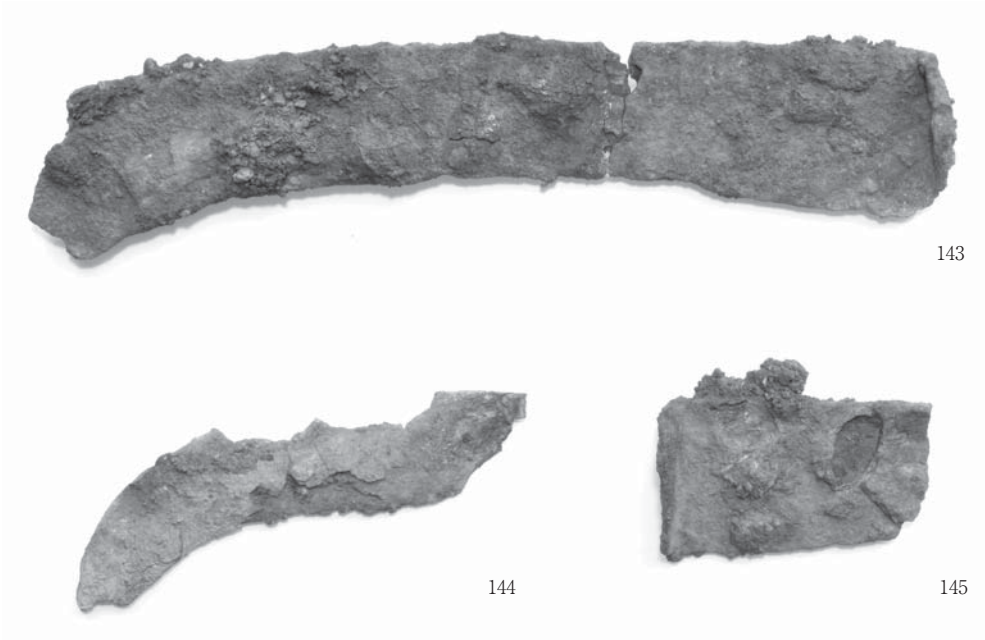
妙泉寺７号墳出土鉄器②

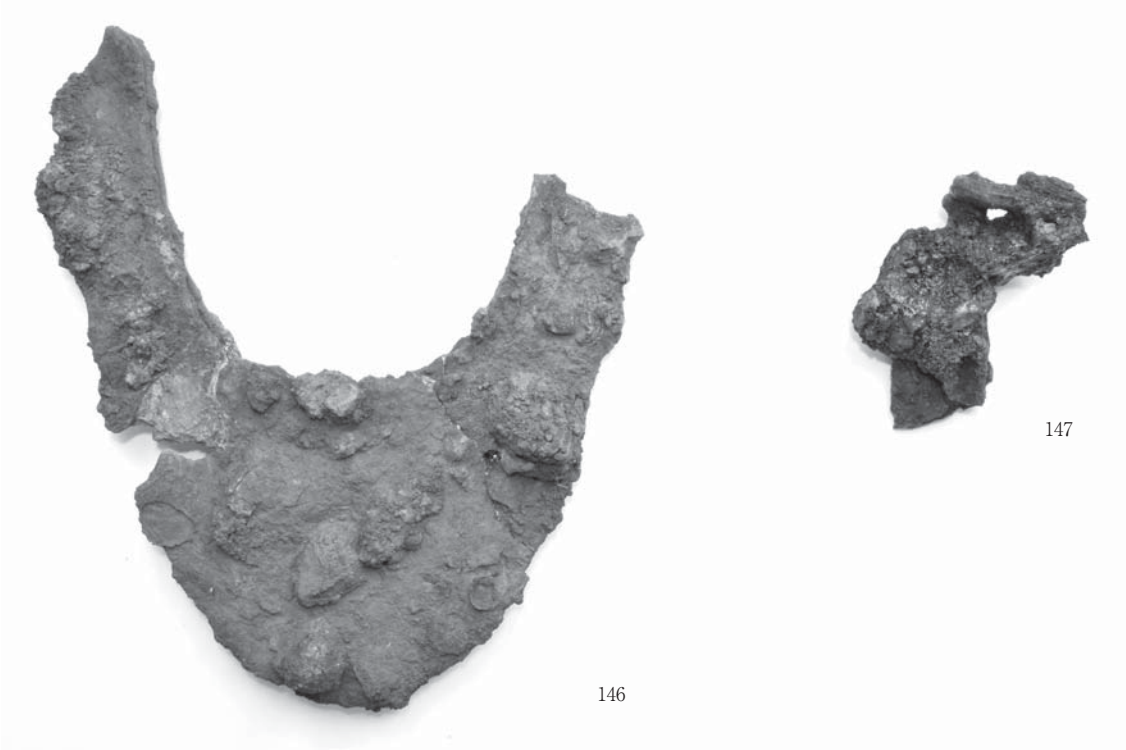
妙泉寺７号墳出土鉄器③



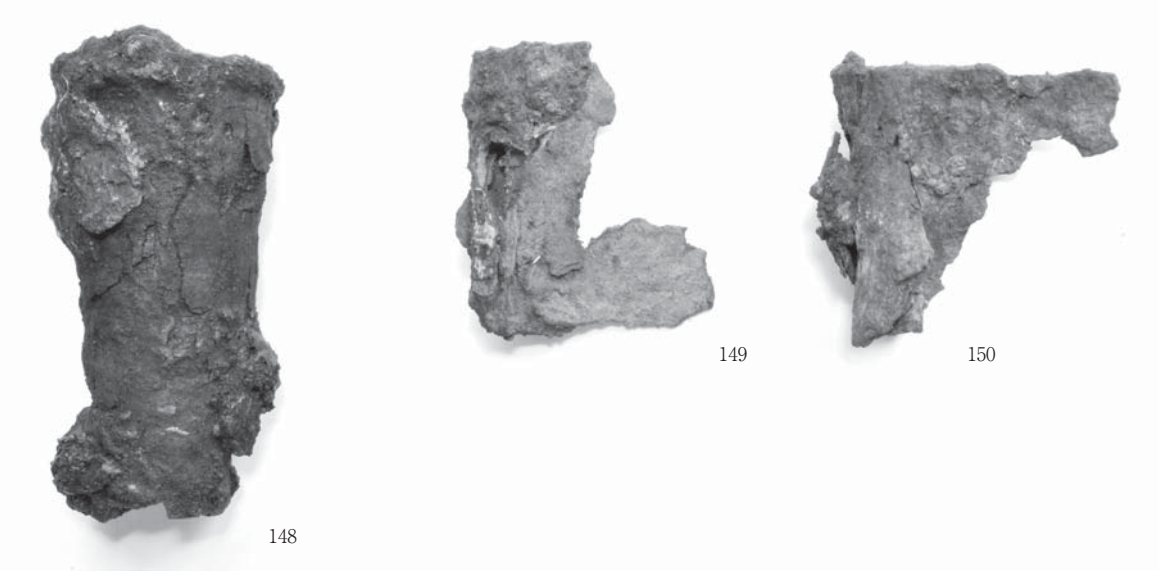


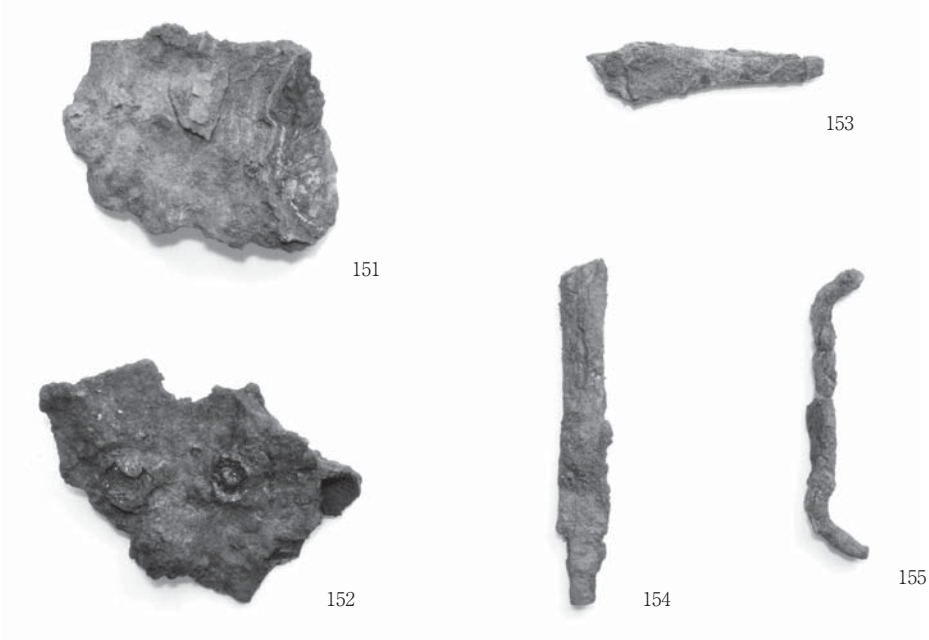
妙泉寺７号墳出土鉄器④





妙泉寺７号墳出土鉄器⑤





妙泉寺７号墳出土鉄器⑥

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

鬼の窟古墳出土須恵器①

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

鬼の窟古墳出土須恵器②

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

鬼の窟古墳出土須恵器③

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

鬼の窟古墳出土須恵器④

204

205

206

207

208

209

210

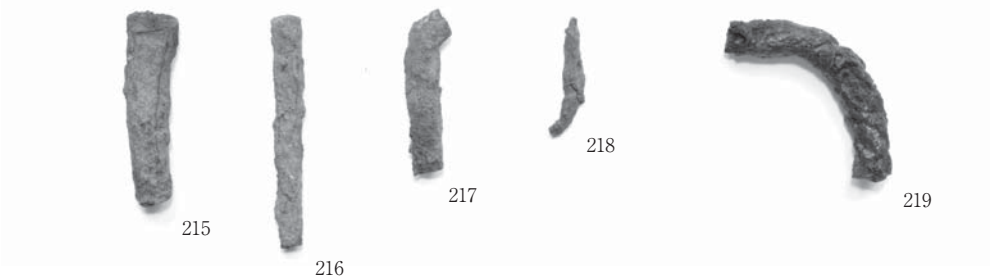
211

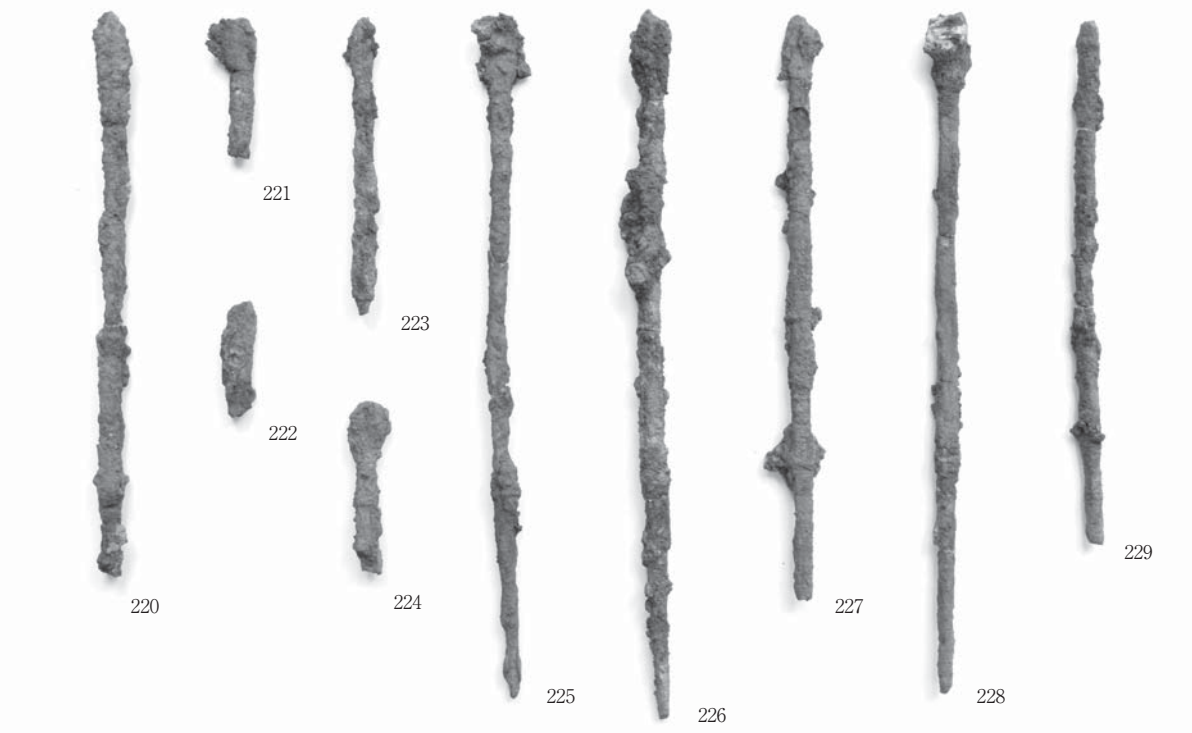
212

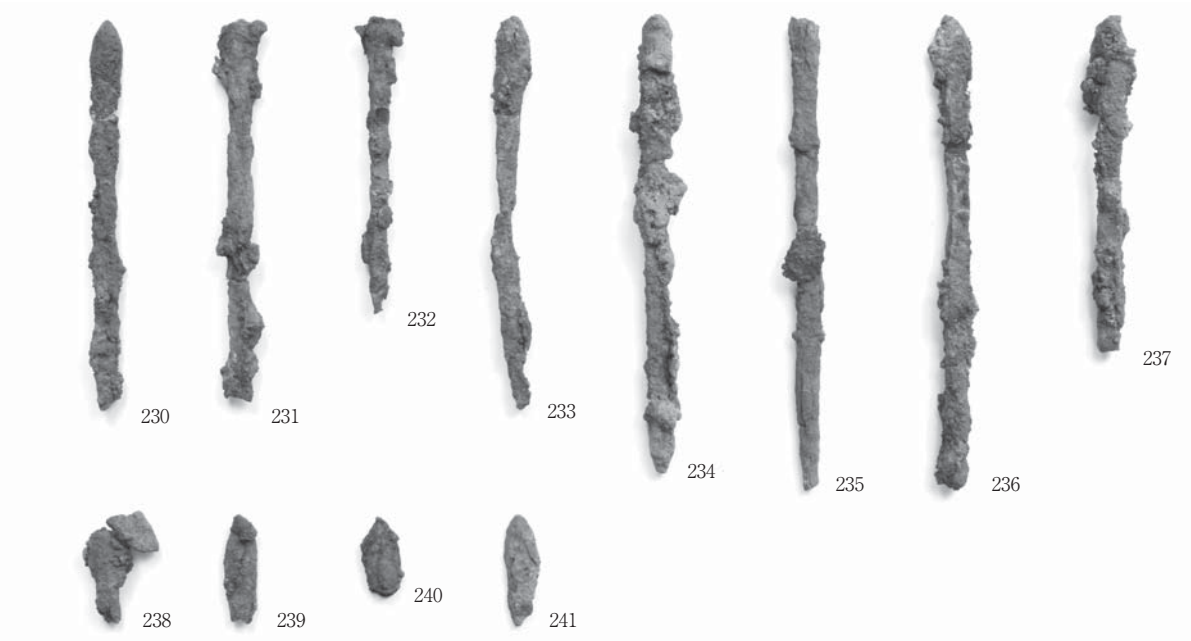
213

214

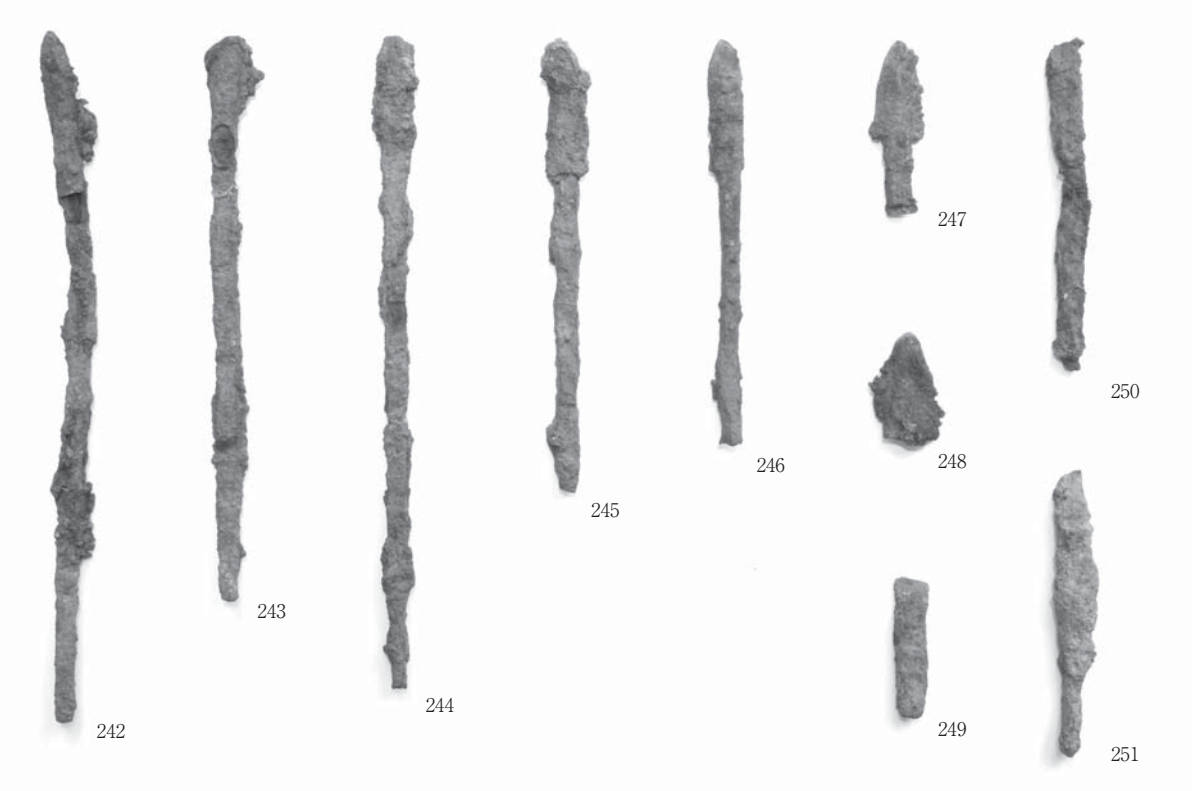
鬼の窟古墳出土遺物

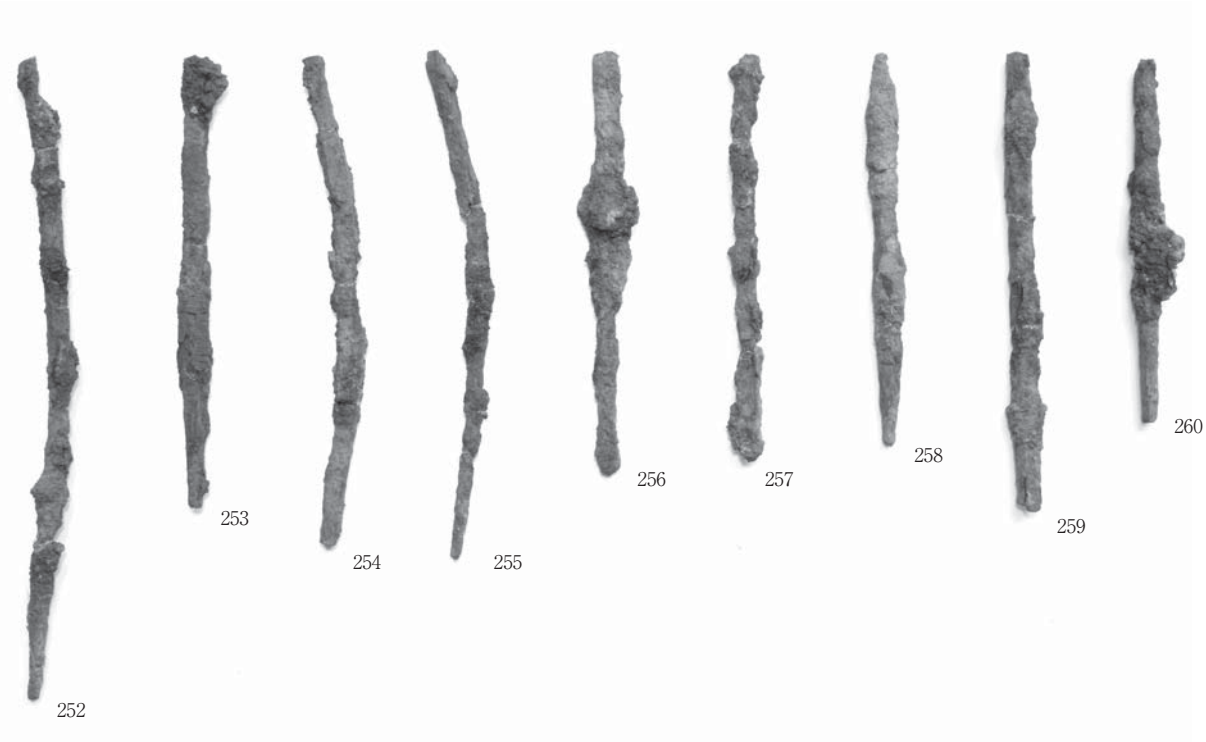

215
216
217
218
219


220
221
222
223
224
225
226
227
228
229

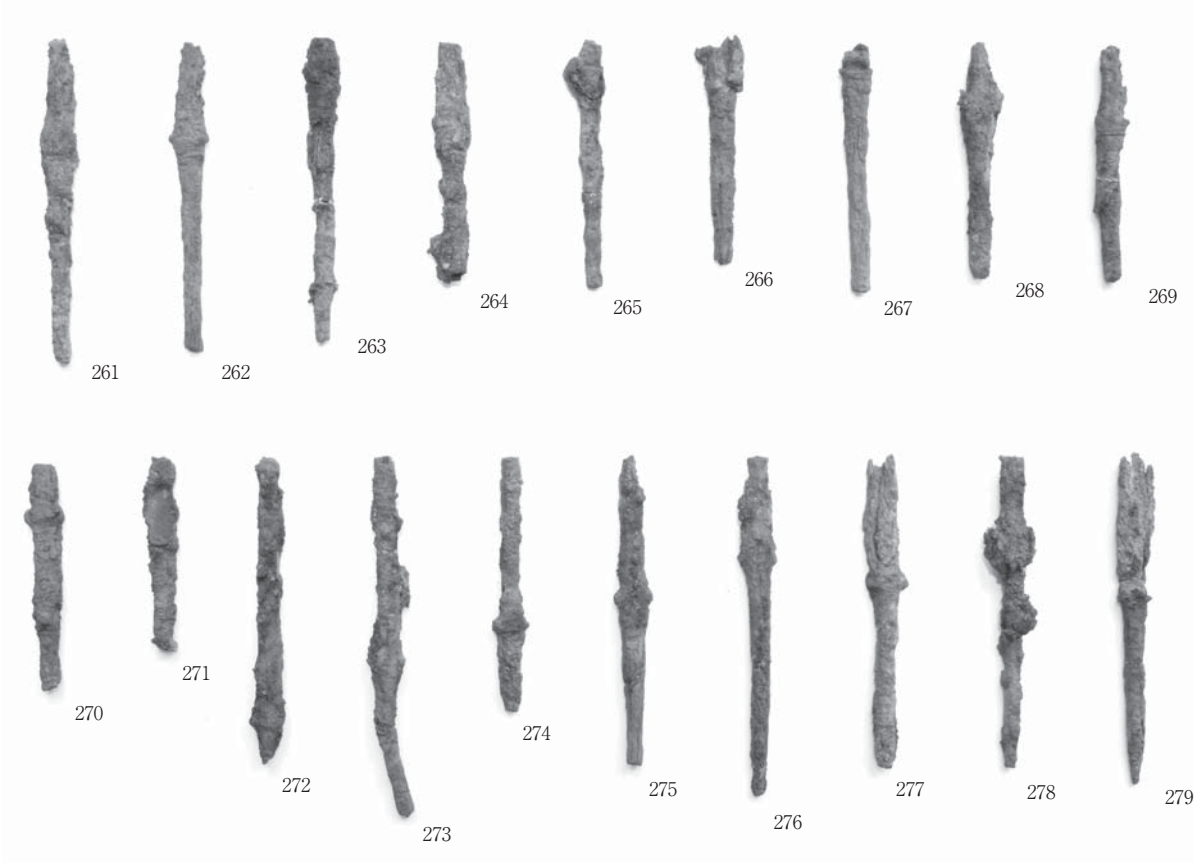

230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241

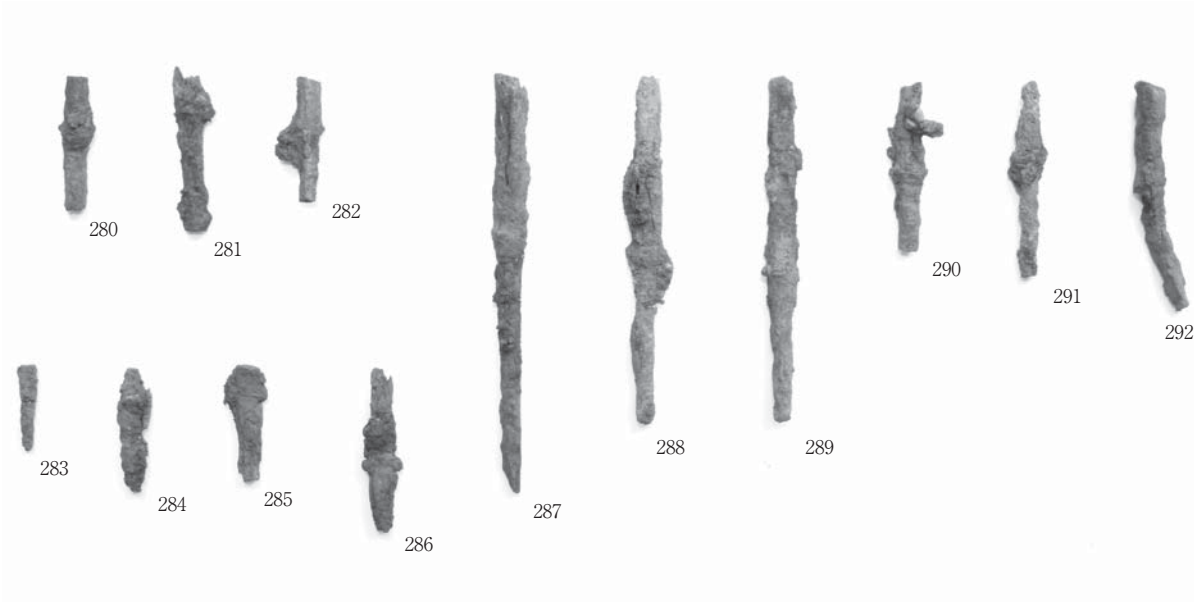
鬼の窟古墳出土鉄器①


242
243
244
245
246
247
248
249
250
251

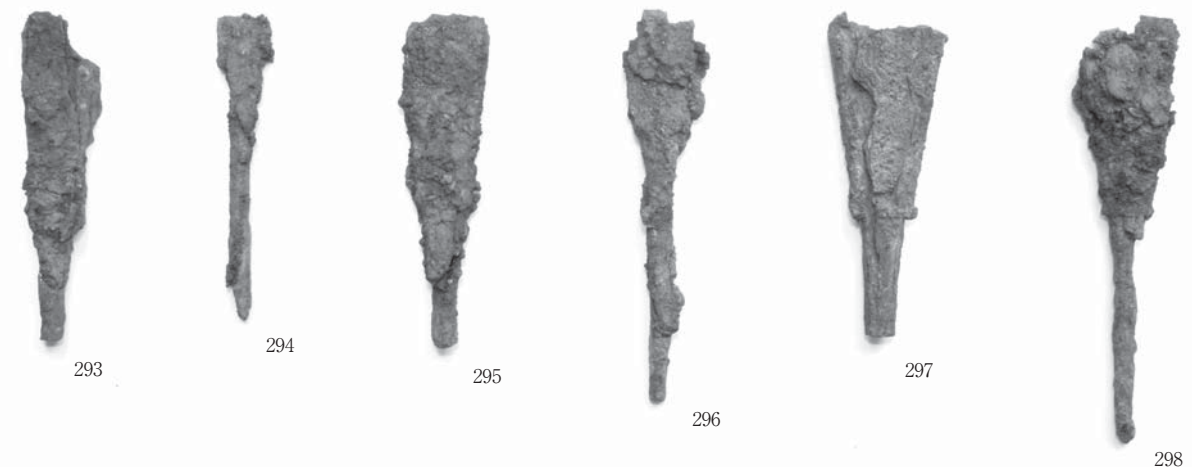

252
253
254
255
256
257
258
259
260

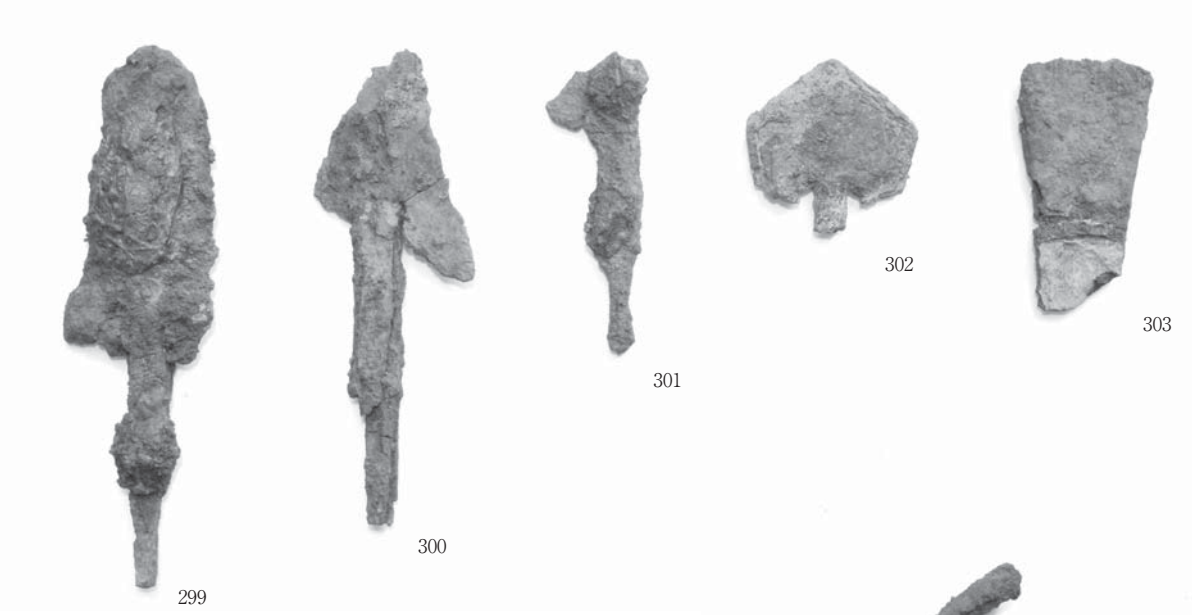
鬼の窟古墳出土鉄器②

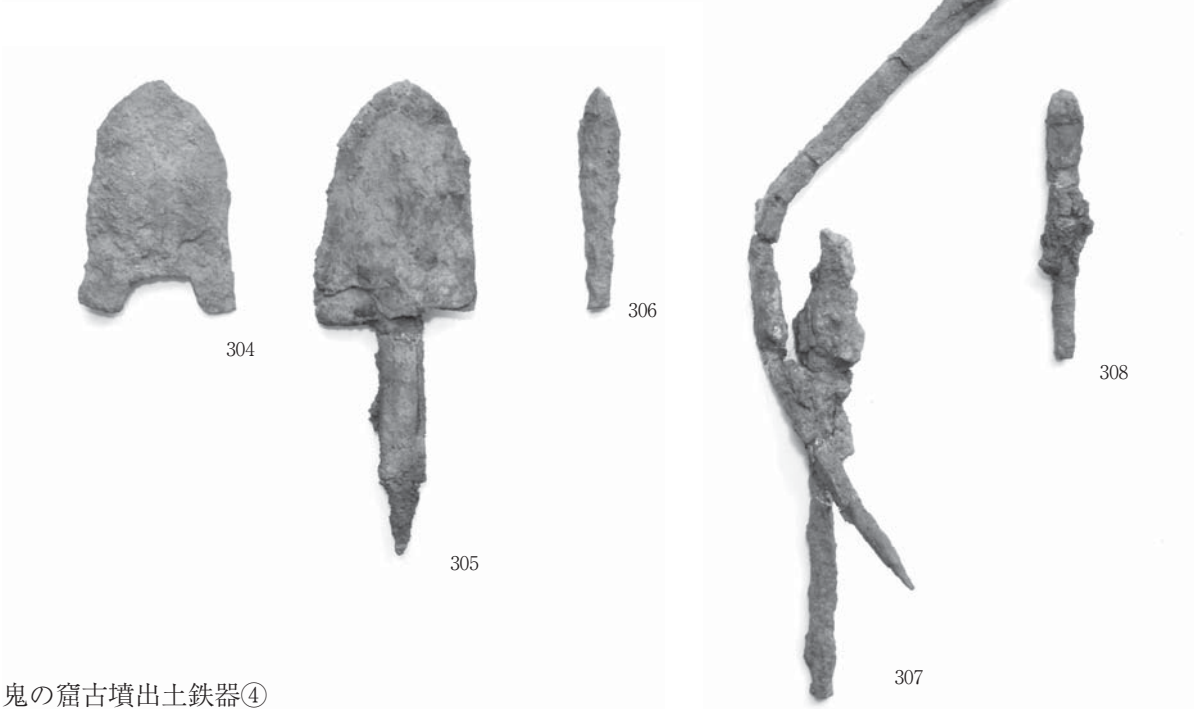

261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279


280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292

鬼の窟古墳出土鉄器③







鬼の窟古墳出土鉄器④

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

不明土器類①

319

320

321

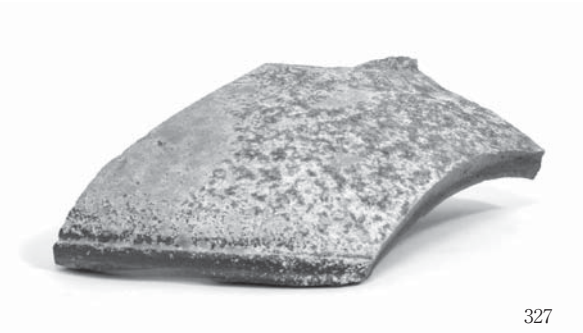
322

323

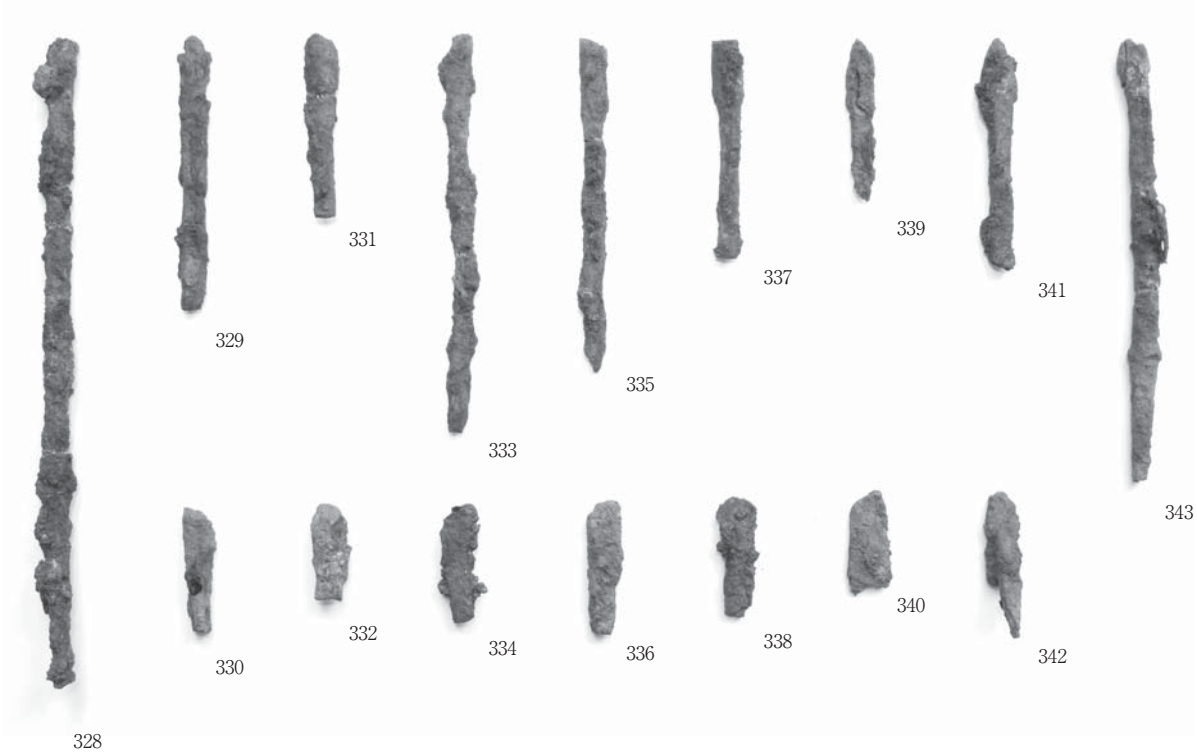
324

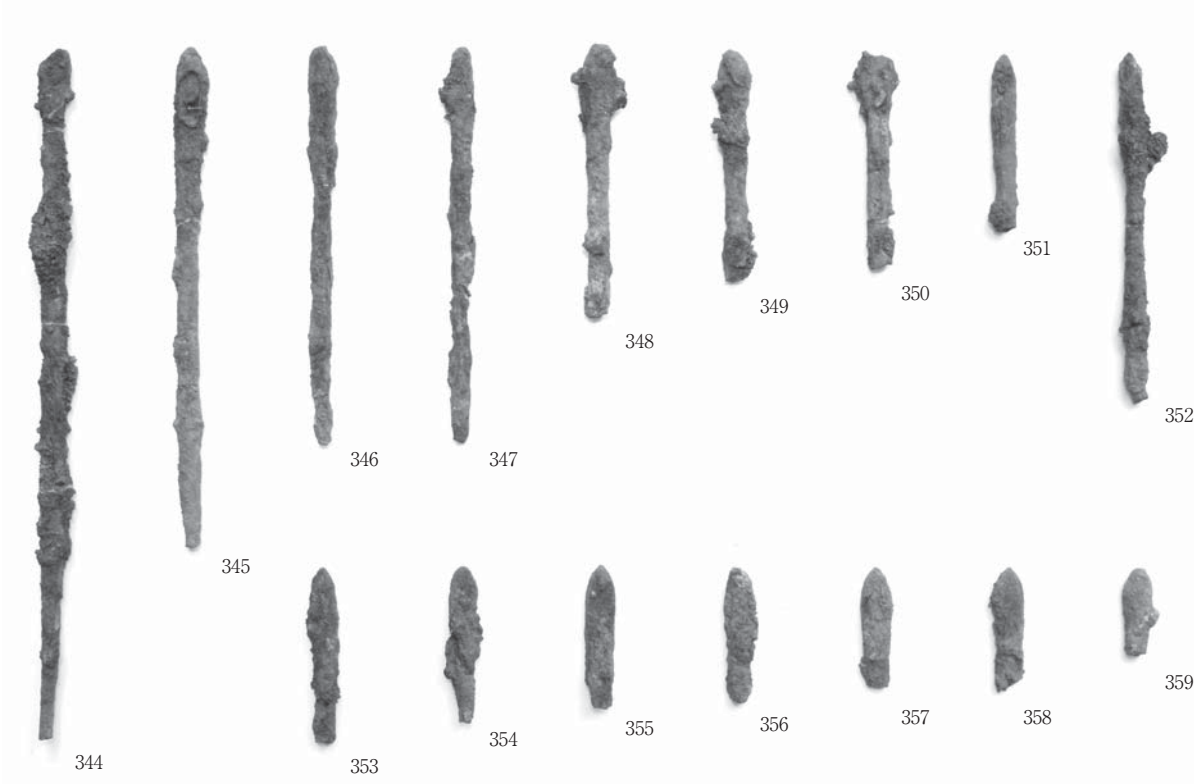
325

326

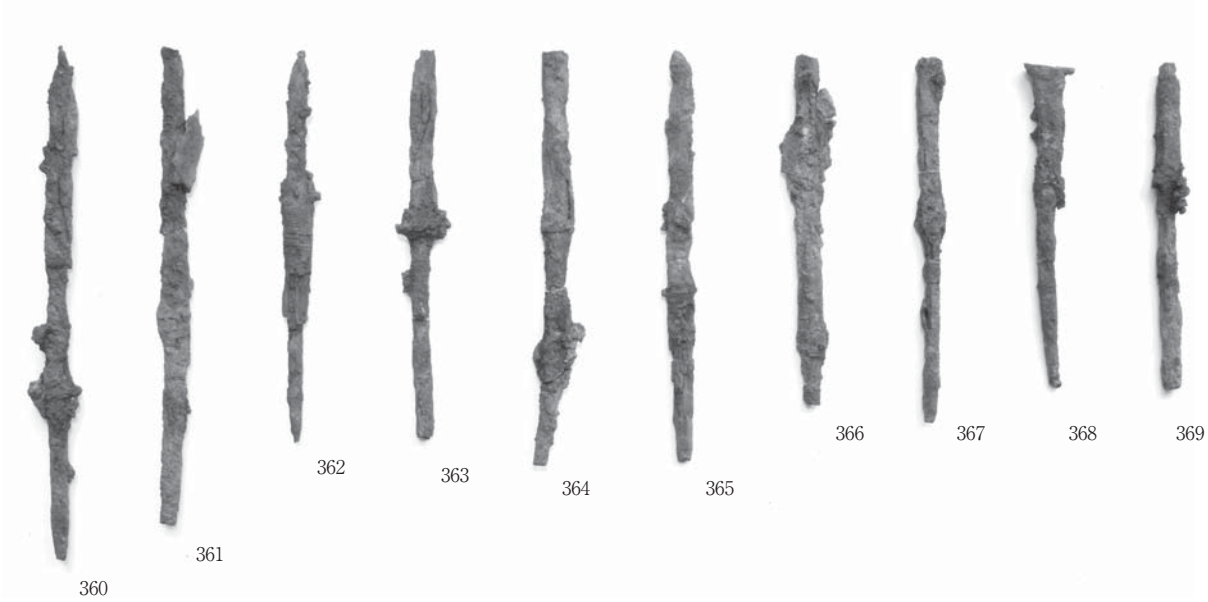

327

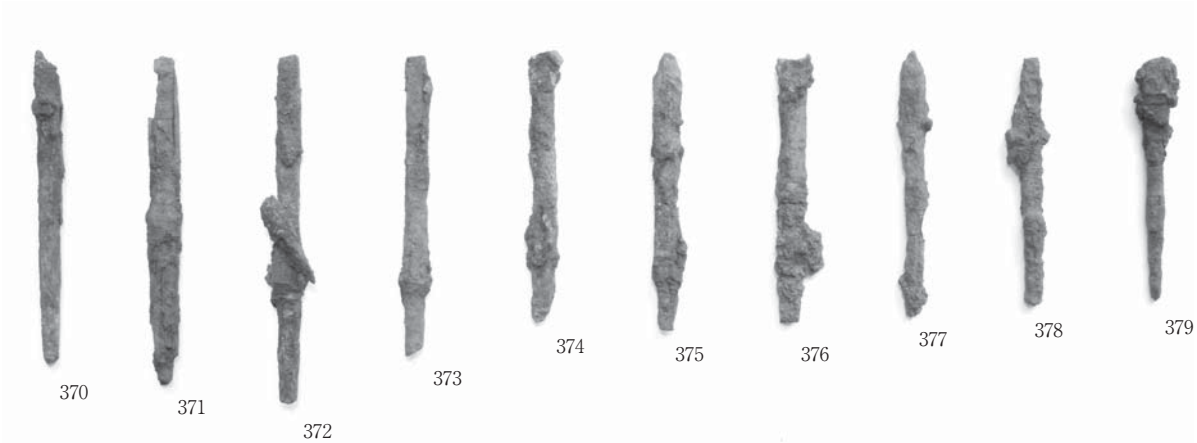
不明土器類②

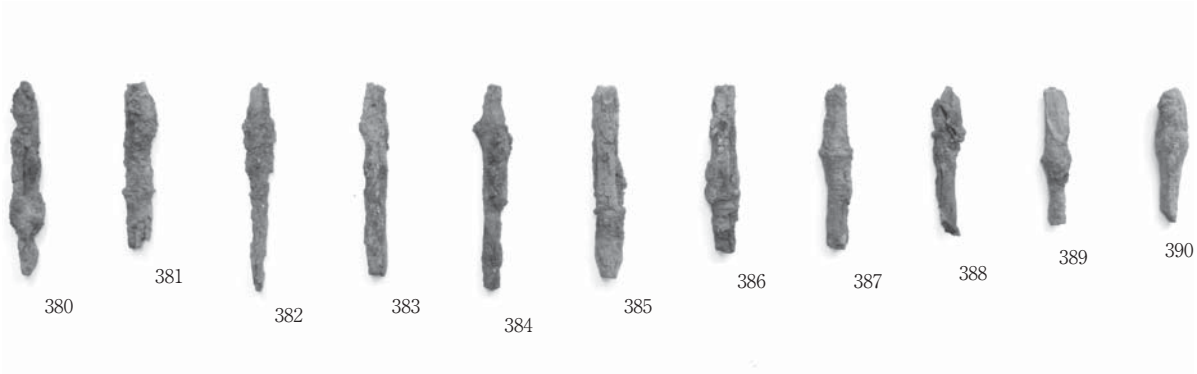

328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343


344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359

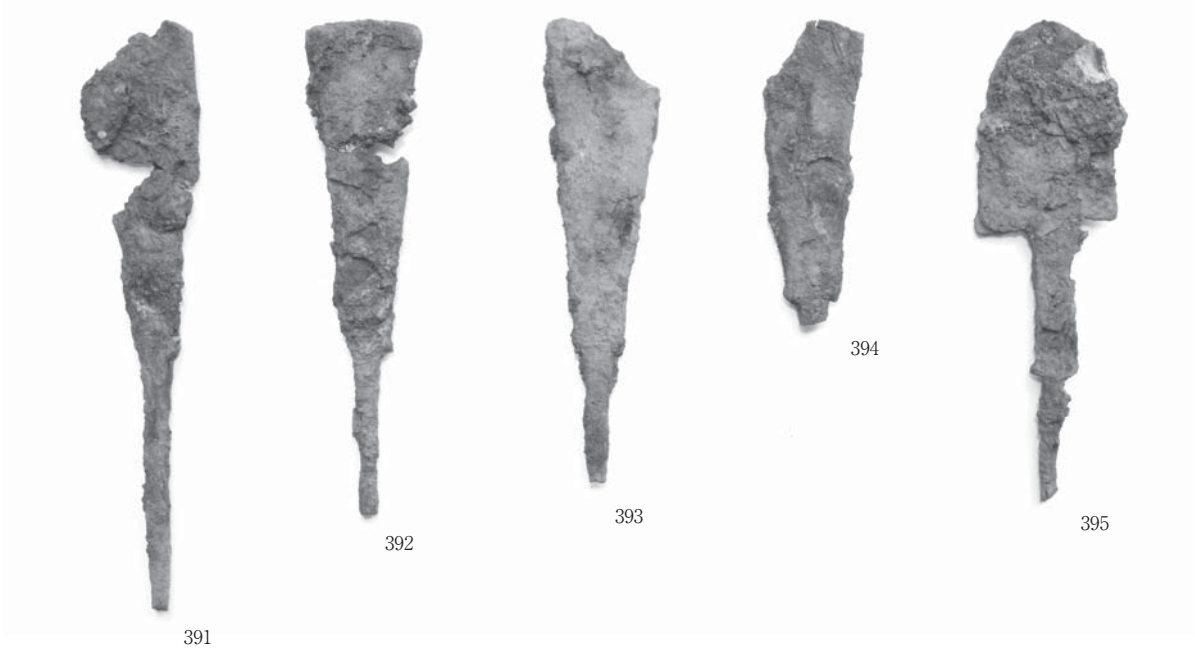
不明鉄器①

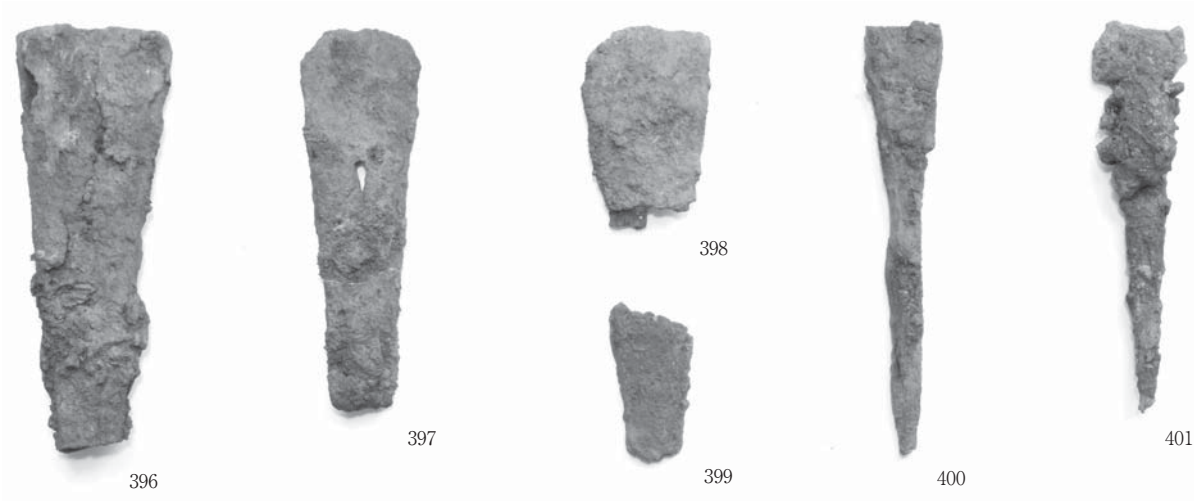

360
361
362
363
364
365
366
367
368
369


370
371
372
373
374
375
376
377
378
379


380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390

不明鉄器②





不明鉄器③

報　告　書　抄　録

ふりがな	いきはるのつじみやくりいせき・みょうせんじこふん・おにのいわやこふん
書　　名	壱岐原の辻閏繰遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳
報 告 書	東亞考古学会壱岐原の辻遺跡報告書
巻　　次	Ⅰ
編集者名	宮本一夫
編集機関	九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
所 在 地	〒812－8581　福岡市東区箱崎６－19－１　　TEL092－642－2389
発行年月日	西暦2018年３月23日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
閏繰遺跡（みやくりいせき）	長崎県（ながさきけん） 壱岐市（いきし） 芦辺町（あしべちょう） 深江鶴亀触（ふかえつるきふれ）	42210		33° 45′ 46″	129°45′13″	1959.3.24 ～3.26 1959.4.11 ～4.20		学術調査
妙泉寺（みょうせんじ） １号墳（ごうふん）	長崎県（ながさきけん） 壱岐市（いきし） 芦辺町（あしべちょう） 中野郷東触（なかのごうひがしふれ）	42210		33° 79′ 13″	129°73′98″	1953.7.24 ～ 1953.8.4		学術調査
妙泉寺（みょうせんじ） ７号墳（ごうふん）	長崎県（ながさきけん） 壱岐市（いきし） 芦辺町（あしべちょう） 中野郷東触（なかのごうひがしふれ）	42210		33° 79′ 15″	129°74′06″	1953.7.26 ～ 1953.8.4		学術調査
鬼の窟古墳（おにのいわやこふん）	長崎県（ながさきけん） 壱岐市（いきし） 芦辺町（あしべちょう） 国分本村触（こくぶんほんむらふれ）	42210		33° 80′ 12″	129°71′28″	1953.8.2 ～ 1953.8.15		学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
閏繰遺跡（みやくりいせき）	墳墓（ふんぼ）	弥生時代	石棺墓・甕棺墓	弥生土器・甕棺・碧玉製管玉	
妙泉寺（みょうせんじ） １号墳（ごうふん）	古墳（こふん）	古墳時代	円墳	須恵器・土師器・ガラス小玉・金銅製耳環等（県報）・現物不明遺物（金銅製馬具類）	
妙泉寺（みょうせんじ） ７号墳（ごうふん）	古墳（こふん）	古墳時代	円墳	須恵器・土師器・鉄器類（刀剣類、鏃類、馬具類、農工具類）・現物不明遺物（金銅製耳環５点、緑色ガラス玉）	
鬼の窟古墳（おにのいわやこふん）	古墳（こふん）	古墳時代	円墳	須恵器・土師器（畿内系土師器含む）・新羅土器・鉄器類（鏃類）・現物不明遺物（「鉄製鏡板」、「鉄地鍍金の鍔金具らしきもの」	

壱岐原の辻閏繰遺跡・妙泉寺古墳群・鬼の窟古墳

－東亞考古学会壱岐原の辻遺跡調査報告書Ⅰ－

編　　者　宮本一夫
発　行　日　2018年３月23日
発　行　者　福岡市東区箱崎６－19－１
　　九州大学大学院人文科学研究院考古学研究室
印　刷　所　福岡市南区向野１丁目19番１号
　　九州コンピュータ印刷